

京都国立博物館構内発掘調査報告書

- 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 -

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

京都国立博物館構内発掘調査報告書

- 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 -

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



3-2区方広寺南面石基（西南西から）



1 3-1区方広寺南門（北から）



2 3-1区鑄造遺構 土坑3-200（東から）



1 4-10区第1面（北東から）



2 4-10区第3面（東北東から）



1 桐文軒丸瓦・軒平瓦



2 4-10区方広寺整地層出土土器

序 文

本報告書は、京都市東山区茶屋町に所在する京都国立博物館における整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査、試掘調査、立会調査の調査報告書であります。

この調査地は、平安時代後期の法住寺殿跡、鎌倉時代の六波羅政庁跡、桃山時代以降の方広寺跡などの遺跡推定地にあっており、それぞれの遺跡が残されていることが推定されました。

そのため、京都市文化財保護課との協議を経て、京都国立博物館から館構内の埋蔵文化財調査の実施を財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託されました。

当研究所では、平成5年度に第1次の調査を実施し、以来、平成19年度まで14箇年9次にわたる調査を実施してきました。1次から8次までの調査内容と成果については、その都度に調査概要を刊行しています。

これまで実施した調査では、平安時代から近代までの遺構を検出、あわせて弥生時代から近代までの遺物が大量に出土するなど、大きな成果をあげています。本報告書は、この調査の全容について報告するもので、本報告書の作成において、遺構の調査資料の集約と検討、遺物の整理と分類にもとづいて原稿を分担執筆しています。

本報告の内容についてご意見、ご批判をいただけますようお願い申し上げます。

当遺跡の調査に際して、京都国立博物館の厚い協力をたまわりました、また京都市をはじめ関係諸機関のご支援を頂きましたことをここに記し、厚く感謝の意を表しますとともにお礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡
- 2 調査所在地 京都市東山区茶屋町5 2 7番地
- 3 委 託 者 独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館
- 4 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 5 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
1次調査から5次調査は日本測地系(改正前)の座標値を世界測地系に変換した。
- 6 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 7 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点(一級基準点)を使用した。
- 8 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 9 調査区番号 通し番号を付し、調査次数を前に付けた。例えば3次調査1区は3 - 1区とする。
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類・調査次数を前に付けた。例えば3次調査で検出した石塁1は石塁3 - 1とする。
- 11 遺物番号 土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 13 遺物復元 村上 勉・出水みゆきが担当した。
- 14 基準点測量 宮原健吾が担当した。
- 15 本書作成 網 伸也・田中利津子・山本雅和(執筆の分担は目次に記した)
- 16 編集・調整 児玉光世・山口 眞
- 17 調査・遺物整理にあたっては下記の方々から種々のご教示をいただいた。

五十川伸矢、内田俊秀、馬田綾子、尾野善裕、木立雅朗、久保智康、高橋昌明、難波洋三、西山良平、橋本清一、早川泰弘、宮川禎一、村上恭一郎、森 郁夫、吉田澪代(敬称略 50音順)

目 次

第1章 調査の経緯	(山本)	1
1 調査に至る経緯		1
2 調査の経過		2
3 整理・報告書作成の経過		5
第2章 遺 跡	(山本)	6
1 遺跡の位置と環境		6
2 周辺の調査		8
第3章 遺 構		13
1 1次調査	(山本)	13
(1) 調査の概要		13
(2) 1 - 1区の調査		13
(3) 1 - 2区の調査		17
(4) 1 - 3区の調査		22
2 2次調査	(山本)	23
(1) 調査の概要		23
(2) 2 - 1区・2 - 2区の調査		24
3 3次調査	(山本)	24
(1) 調査の概要		24
(2) 3 - 1区・3 - 2区の調査		24
(3) 3 - 3区の調査		43
(4) 3 - 4区の調査		45
(5) 3 - 5区の調査		50
(6) 3 - 6区の調査		51
(7) 3 - 7区の調査		51
(8) 3 - 8区の調査		56
4 4次調査	(山本)	60
(1) 調査の概要		60
(2) 4 - 1区～4 - 3区の調査		62
(3) 4 - 9区の調査		63
(4) 4 - 10区の調査		65
5 5次調査	(山本)	78
(1) 調査の概要		78

(2) 5 - 1区 ~ 5 - 4区の調査	78
6 6次調査	(網) 81
(1) 調査の概要	81
(2) 6 - 1区 ~ 6 - 25区の調査	81
7 7次調査	(網) 83
(1) 調査の概要	83
(2) 7 - 1区 ~ 7 - 10区の調査	83
8 8次調査	(網) 84
(1) 調査の概要	84
(2) 8 - 1区 ~ 8 - 3区の調査	84
9 9次調査	(網) 85
(1) 調査の概要	85
(2) 9 - 1区の調査	85
(3) 9 - 2区の調査	86
(4) 9 - 3区の調査	89
(5) 9 - 4区の調査	89
(6) 9 - 5区の調査	89
第4章 遺物	93
1 遺物の概要	(山本) 93
2 土器類	(山本) 94
(1) 弥生時代から古墳時代	94
(2) 平安時代	95
(3) 鎌倉時代から室町時代	96
(4) 桃山時代から江戸時代	101
3 瓦類	103
(1) 平安時代から鎌倉時代	(網) 103
(2) 桃山時代から江戸時代	(田中) 105
4 土製品	(山本) 116
5 石製品	(山本) 117
6 金属製品	(山本) 120
(1) 銅製品	120
(2) 鉄製品	121
(3) 金属滓	121
7 木製品	(田中) 123
8 その他の出土遺物	(山本) 127

第5章 ま と め	128
1 遺構の変遷	(山本) 128
(1) 弥生時代から奈良時代	128
(2) 平安時代	128
(3) 鎌倉時代から室町時代	129
(4) 桃山時代から江戸時代前期	131
2 大仏瓦について	(田中) 132

図 版 目 次

巻頭図版 1 遺構	3 - 2 区方広寺南面石罫 (西南西から)
巻頭図版 2 遺構	1 3 - 1 区方広寺南門 (北から) 2 3 - 1 区方広寺回廊・南門 (北東から)
巻頭図版 3 遺構	1 3 - 1 区鑄造遺構 土坑3-200 (東から) 2 4 - 10区第1面 (北東から)
巻頭図版 4 遺物	1 桐文軒丸瓦・軒平瓦 2 4 - 10区方広寺整地層出土土器
図版 1 遺跡	1 調査地遠望 (西から) 2 調査地遠望 (南から)
図版 2 遺構	1 1 - 1 区第1面 (桃山時代から江戸時代 北から) 2 1 - 1 区第1面 (鎌倉時代から室町時代 東から)
図版 3 遺構	1 1 - 1 区第2面 (東から) 2 1 - 1 区土坑1-250 (北から)
図版 4 遺構	1 1 - 2 区第1面 (桃山時代から江戸時代 北西から) 2 1 - 2 区築地1-1・溝1-7 (南東から) 3 1 - 2 区第1面 (鎌倉時代から室町時代 北西から)
図版 5 遺構	1 1 - 2 区第2面 (北東から) 2 1 - 3 区第2面 (西から)
図版 6 遺構	1 3 - 1 区第1面 (北東から) 2 3 - 1 区方広寺南門・回廊 (北西から) 3 3 - 1 区柱穴3-17断面 (南東から)
図版 7 遺構	1 3 - 1 区路面3-1・溝3-100 (北西から) 2 3 - 1 区溝3-111 (東から)

- 3 3 - 1 区溝3-100 (東から)
- 図版 8 遺構 1 3 - 1 区土坑3-200 (東から)
 2 3 - 1 区土坑3-200・石垣3-1 (西から)
 3 3 - 1 区土坑3-200北東隅 (北東から)
 4 3 - 1 区土坑3-200遺物出土状況 (西から)
- 図版 9 遺構 1 3 - 2 区第 1 面 (東南東から)
 2 3 - 2 区石罫3-1と瓦・石敷 (南西から)
- 図版10 遺構 1 3 - 2 区石罫3-1断割断面 (南東から)
 2 3 - 2 区石罫3-1裏込 (西から)
 3 3 - 2 区溝3-100細部 (刻印)
 4 3 - 2 区石罫3-1細部 (石割痕)
- 図版11 遺構 1 3 - 3 区第 1 面 (北から)
 2 3 - 4 区第 1 面 (東から)
- 図版12 遺構 1 3 - 4 区第 2 面 (北東から)
 2 3 - 4 区路面3-3 (北から)
- 図版13 遺構 1 3 - 4 区井戸3-204 (南から)
 2 3 - 4 区土坑3-219 (北東から)
 3 3 - 4 区南東部第 3 面 (北西から)
- 図版14 遺構 1 3 - 5 区第 1 面 (北から)
 2 3 - 6 区第 1 面 (西から)
 3 3 - 7 区西部第 1 面 (東から)
 4 3 - 7 区東部第 1 面 (西から)
- 図版15 遺構 1 3 - 8 区北部第 1 面 (北から)
 2 3 - 8 区中央部第 1 面 (西から)
 3 3 - 8 区南部第 1 面 (北東から)
 4 3 - 8 区溝3-13遺物出土状況 (北から)
 5 3 - 8 区土坑3-46 (北から)
- 図版16 遺構 1 4 - 2 区 (東から)
 2 4 - 2 区遺物出土状況 (南東から)
 3 4 - 3 区 (南東から)
 4 4 - 1 区 (北東から)
 5 4 - 1 区石組4-1 (南東から)
- 図版17 遺構 1 4 - 9 区北部第 1 面 (北から)
 2 4 - 9 区建物4-1 (北から)
 3 4 - 9 区南部第 1 面 (北から)

- 図版18 遺構 1 4 - 10区路面4-1 (北から)
2 4 - 10区落込斜面 (北から)
- 図版19 遺構 1 4 - 10区第2面 (北東から)
2 4 - 10区溝4-102 (北から)
3 4 - 10区路面4-3暗渠 (北から)
- 図版20 遺構 1 4 - 10区第4面 (東から)
2 4 - 10区井戸4-250 (北東から)
3 4 - 10区溝4-252・溝4-273 (北から)
- 図版21 遺構 1 5 - 1区～5 - 4区第1面 (北から)
2 5 - 3区瓦窯5-1 (西から)
3 5 - 3区東壁 (北東から)
- 図版22 遺構 1 2 - 1区 (南から)
2 2 - 2区 (東から)
3 6 - 8区北壁 (南から)
4 6 - 16区西壁 (北東から)
5 6 - 14区東壁 (西から)
6 7 - 3区東壁 (西から)
7 7 - 8区 (東から)
8 8 - 1区東壁 (西から)
- 図版23 遺構 1 9 - 1区第1面 (東から)
2 9 - 3区第1面 (北西から)
3 9 - 2区第1面 (北西から)
- 図版24 遺構 1 9 - 4区第1面 (南西から)
2 9 - 5区第1面 (北西から)
- 図版25 遺物 土器類実測図 (1)
- 図版26 遺物 土器類実測図 (2)
- 図版27 遺物 土器類実測図 (3)
- 図版28 遺物 土器類実測図 (4)
- 図版29 遺物 土器類実測図 (5)
- 図版30 遺物 土器類実測図 (6)
- 図版31 遺物 土器類実測図 (7)
- 図版32 遺物 土器類実測図 (8)
- 図版33 遺物 土器類実測図 (9)
- 図版34 遺物 土器類実測図 (10)
- 図版35 遺物 土器類実測図 (11)

- 図版36 遺物 瓦類拓影・実測図(1)
- 図版37 遺物 瓦類拓影・実測図(2)
- 図版38 遺物 瓦類拓影・実測図(3)
- 図版39 遺物 瓦類拓影・実測図(4)
- 図版40 遺物 瓦類拓影・実測図(5)
- 図版41 遺物 瓦類拓影・実測図(6)
- 図版42 遺物 瓦類拓影・実測図(7)
- 図版43 遺物 瓦類拓影・実測図(8)
- 図版44 遺物 瓦類拓影・実測図(9)
- 図版45 遺物 瓦類拓影・実測図(10)
- 図版46 遺物 瓦類拓影・実測図(11)
- 図版47 遺物 瓦類拓影・実測図(12)
- 図版48 遺物 瓦刻印拓影(1)
- 図版49 遺物 瓦刻印拓影(2)
- 図版50 遺物 土製品画像・実測図(1)
- 図版51 遺物 土製品画像・実測図(2)
- 図版52 遺物 土製品画像・実測図(3)
- 図版53 遺物 土製品画像・実測図(4)
- 図版54 遺物 土製品画像・実測図(5)
- 図版55 遺物 土製品画像・実測図(6)
- 図版56 遺物 土製品画像・実測図(7)
- 図版57 遺物 土製品画像・実測図(8)
- 図版58 遺物 石製品画像・実測図(1)
- 図版59 遺物 石製品画像・実測図(2)
- 図版60 遺物 石製品画像・実測図(3)
- 図版61 遺物 石製品画像・実測図(4)
- 図版62 遺物 石製品画像・実測図(5)
- 図版63 遺物 石製品画像・実測図(6)
- 図版64 遺物 木製品実測図(1)
- 図版65 遺物 木製品実測図(2)
- 図版66 遺物 木製品実測図(3)
- 図版67 遺物 木製品実測図(4)
- 図版68 遺物 木製品実測図(5)
- 図版69 遺物 土器類(1)
- 図版70 遺物 土器類(2)

- 図版71 遺物 土器類 (3)
- 図版72 遺物 土器類 (4)
- 図版73 遺物 瓦類 (1)
- 図版74 遺物 瓦類 (2)
- 図版75 遺物 瓦類 (3)
- 図版76 遺物 瓦類 (4)
- 図版77 遺物 瓦類 (5)
- 図版78 遺物 瓦類 (6)
- 図版79 遺物 瓦類 (7)
- 図版80 遺物 瓦刻印
- 図版81 遺物 1 瓦ヘラ記号
2 土製品 (1)
- 図版82 遺物 1 土製品 (2)・金属滓
2 石製品
- 図版83 遺物 銅製品・鉄製品
- 図版84 遺物 木製品 (1)
- 図版85 遺物 木製品 (2)
- 図版86 遺物 木製品 (3)
- 図版87 遺物 木製品 (4)
- 図版88 遺物 木製品 (5)

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	1
図 2	調査区配置図 (1 : 2,500)	2
図 3	1 - 1 区・1 - 2 区調査前 (北から)	3
図 4	1 - 1 区作業状況 (東から)	3
図 5	3 - 1 区・3 - 2 区調査前 (東から)	3
図 6	3 - 1 区現地説明会 (西から)	3
図 7	3 - 3 区・3 - 8 区調査前 (南南東から)	3
図 8	3 - 7 区調査前 (東から)	3
図 9	4 - 10 区調査前 (東から)	3
図 10	4 - 10 区作業状況 (北西から)	3

図11	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	9
図12	新館周辺遺構概要図 (1 : 600)	12
図13	1 - 1 区西壁断面図 (1 : 50)	14
図14	1 - 1 区第 1 面平面図 (桃山時代から江戸時代 1 : 100)	15
図15	1 - 1 区第 1 面平面図 (鎌倉時代から室町時代 1 : 100)	15
図16	1 - 1 区第 2 面平面図 (1 : 100)	16
図17	土坑1-250実測図 (1 : 40)	17
図18	1 - 2 区東壁断面図 (1 : 50)	18
図19	1 - 2 区第 1 面平面図 (桃山時代から江戸時代 1 : 100)	19
図20	1 - 2 区第 1 面平面図 (鎌倉時代から室町時代 1 : 100)	19
図21	築地1-1実測図 (1 : 50)	20
図22	1 - 2 区第 2 面平面図 (1 : 100)	21
図23	1 - 3 区東壁断面図 (1 : 50)	22
図24	1 - 3 区第 1 面・第 2 面平面図 (1 : 100)	22
図25	2 - 1 区・2 - 2 区柱状断面図 (1 : 40)	23
図26	3 - 2 区西壁断面図 (1 : 50)	25
図27	3 - 1 区・3 - 2 区第 1 面平面図 1 (1 : 200)	26
図28	3 - 1 区・3 - 2 区第 1 面平面図 2 (1 : 200)	27
図29	南門平面図 (1 : 100)	29
図30	柱穴3-17・柱穴3-20断面図 (1 : 50)	29
図31	回廊平面図 (1 : 100)	30
図32	柱穴3-5・柱穴3-6断面図 (1 : 50)	30
図33	溝3-111断面図 (1 : 50)	30
図34	溝3-100実測図 1 (1 : 50)	31
図35	溝3-100実測図 2 (1 : 50)	32
図36	溝3-100実測図 3 (1 : 50)	33
図37	土坑3-200・石垣3-1実測図 (1 : 50)	34
図38	石塁3-1実測図 1 (1 : 50)	37
図39	石塁3-1実測図 2 (1 : 50)	38
図40	石塁3-1実測図 3 (1 : 50)	39
図41	石塁3-1実測図 4 (1 : 50)	40
図42	石塁3-1実測図 5 (1 : 50)	41
図43	柱穴列3-1実測図 (1 : 50)	42
図44	建物3-1実測図 (1 : 50)	43
図45	3 - 3 区西壁断面図 (1 : 50)	44

図46	3 - 3 区第 1 面平面図 (1 : 100)	45
図47	3 - 4 区断面図 (1 : 50)	46
図48	3 - 4 区第 1 面平面図 (1 : 100)	47
図49	3 - 4 区第 2 面平面図 (1 : 100)	47
図50	土坑3-219実測図 (1 : 20)	48
図51	井戸3-204実測図 (1 : 40)	48
図52	3 - 4 区第 3 面平面図 (1 : 100)	49
図53	3 - 5 区西壁断面図 (1 : 50)	50
図54	3 - 5 区第 1 面平面図 (1 : 100)	51
図55	3 - 6 区北壁断面図 (1 : 50)	52
図56	3 - 6 区第 1 面平面図 (1 : 100)	52
図57	3 - 7 区北壁断面図 1 (1 : 50)	53
図58	3 - 7 区北壁断面図 2 (1 : 50)	54
図59	3 - 7 区第 1 面平面図 (1 : 200)	55
図60	3 - 8 区断面図 (1 : 50)	57
図61	3 - 8 区第 1 面平面図 (1 : 100)	58
図62	3 - 8 区第 2 面平面図 (1 : 100)	59
図63	4 - 1 区西壁断面図 (1 : 50)	61
図64	4 - 1 区平面図 (1 : 100)	62
図65	4 - 2 区西壁・4 - 3 区南壁断面図 (1 : 50)	63
図66	4 - 9 区南壁断面図 (1 : 50)	64
図67	4 - 9 区第 1 面平面図 (1 : 200)	64
図68	建物4-1実測図 (1 : 50)	65
図69	4 - 10区北壁断面図 1 (1 : 50)	67
図70	4 - 10区北壁断面図 2 (1 : 50)	68
図71	4 - 10区北壁断面図 3 (1 : 50)	69
図72	4 - 10区北壁断面図 4 (1 : 50)	70
図73	4 - 10区第 1 面平面図 (1 : 200)	71
図74	4 - 10区第 2 面平面図 (1 : 200)	72
図75	4 - 10区第 3 面平面図 (1 : 200)	74
図76	4 - 10区第 4 面平面図 (1 : 200)	76
図77	井戸4-250実測図 (1 : 40)	77
図78	5 - 1 区東壁断面図 (1 : 50)	79
図79	5 - 1 区 ~ 5 - 4 区平面図 (1 : 200)	80
図80	瓦窯5-1実測図 (1 : 50)	81

図81	6次調査柱状断面図1～16(1:40)	82
図82	7次調査柱状断面図1～4(1:40)	83
図83	8次調査柱状断面図1・2(1:40)	84
図84	9-1区西壁断面図(1:50)	85
図85	9-1区第1面実測図(1:100)	86
図86	9-2区第1面実測図(1:100)	87
図87	溝9-2断面図(1:20)	88
図88	9-3区第1面実測図(1:50)	88
図89	9-4区第1面実測図(1:50)	90
図90	9-5区断面図(1:50)	90
図91	9-5区第1面平面図(1:100)	91
図92	柱穴9-20・柱穴9-21断面図(1:50)	92
図93	石製品実測図(1:4)	118
図94	銅製品実測図(1:2)	120
図95	鉄製品実測図(1:2)	122
図96	方広寺遺構復元図(1:2,000)	130

表 目 次

表1	遺構概要表	13
表2	遺物概要表	93
表3	瓦一覧表	113
表4	方広寺刻印瓦一覧表1	114
表5	方広寺刻印瓦一覧表2	115

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

本報告書は、京都市東山区茶屋町527番地に所在する現独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館（以下、京都国立博物館とする）整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査・試掘調査・立会調査の調査報告書である（図1）。

京都国立博物館の敷地は、平安時代後期の法住寺殿跡や鎌倉時代の六波羅政庁跡など、以前より埋蔵文化財包蔵地として知られており、地下には各時代の遺跡が残っていることが推測されていた。平成5年度より、断続的に博物館構内での各種整備工事が計画され、京都市文化財保護課との協議を経て、京都国立博物館から調査の実施が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託された。特に第3・4次調査に際しては、調査面積が広く重要な遺

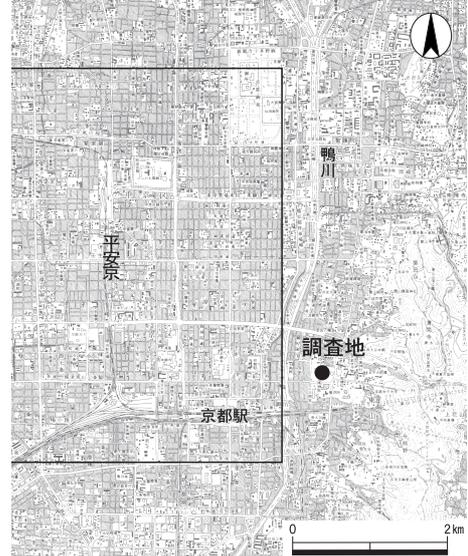


図1 調査地位置図

構・遺物の発見が予期されたため、現京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課・京都国立博物館・京都市埋蔵文化財研究所の三者で京都国立博物館構内遺跡調査会が組織され、調査の基本方針についての検討がなされた。調査委員会の構成は以下のとおり。

京都国立博物館構内遺跡調査会（所属は当時）

委員長 中川久定（京都国立博物館 館長）

委員 梶川敏夫（京都市文化市民局埋蔵文化財調査センター 副所長）

鈴木久男（財団法人京都市埋蔵文化財研究所 調査課長）

磯部 勝（財団法人京都市埋蔵文化財研究所 調査課 第5係長）

平尾政幸（財団法人京都市埋蔵文化財研究所 調査課 第5係 主任）

大島有史（京都国立博物館 次長）

難波洋三（京都国立博物館 学芸課 考古室長）

宮川禎一（京都国立博物館 学芸課 考古室 研究員）

尾野善裕（京都国立博物館 学芸課 考古室（併任）研究員）

2 調査の経過

本報告書では、平成5年度から平成18年度までに実施した1次調査から9次調査までの調査成果を掲載する（図2）。なお、1次調査から8次調査までについては、これまでに調査概要を報告している。

1次調査(図3・4)

調査期間 1994年2月～4月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：磯部勝、調査担当者：鈴木廣司・山本雅和・布川豊治

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

博物館西門施設建設に伴う事前調査として、敷地西部で実施した発掘調査である。大和大路通から西門との間の前庭部に2箇所(1-1区・1-2区)、西塀に接した部分に1箇所(1-3区)の調査区を設定した¹⁾。調査面積は約191m²である。

2次調査

調査期間 1997年3月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：磯部勝、調査担当者：小森俊寛

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年

遺跡の状況を確認するために実施した試掘調査である。敷地南西部に1箇所(2-1区)、敷地北西部の新館南東側に1箇所(2-2区)の調査区を設定した。調査面積は約25m²である。

3次調査(図5～8)

調査期間 1998年6月～1999年3月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：磯部勝・本弥八郎、調査担当者：田中利津子・近藤知子・大立目一

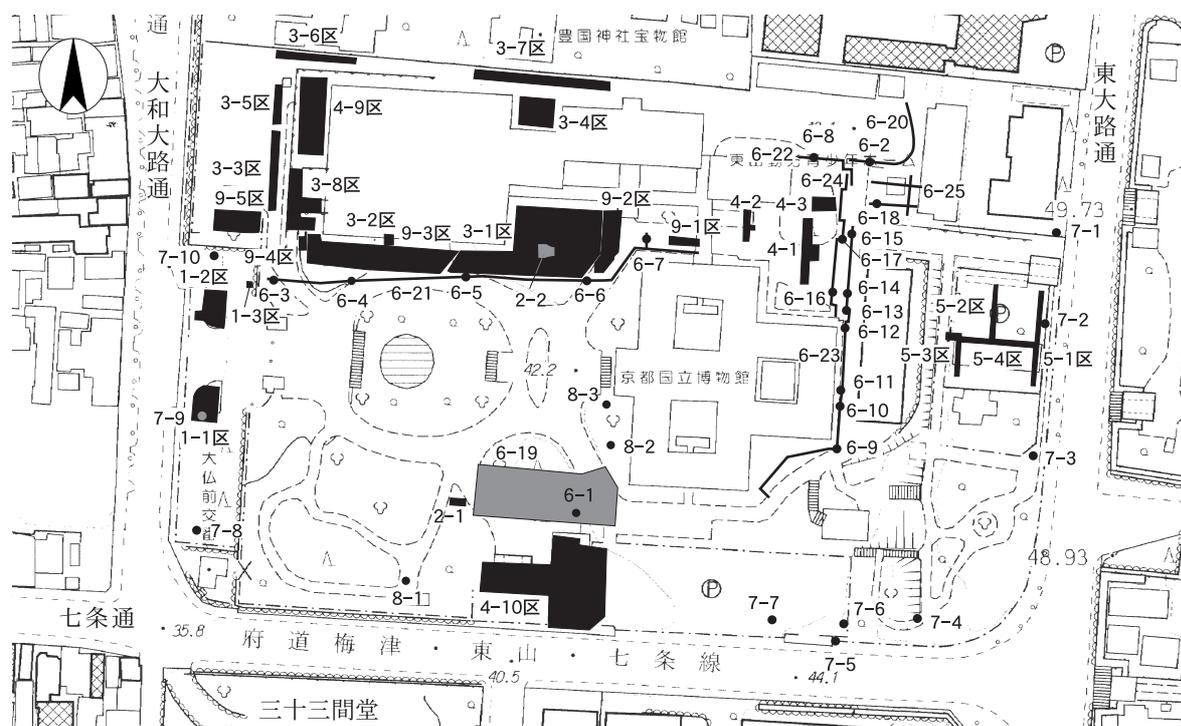


図2 調査区配置図(1:2,500)



図3 1 - 1区・1 - 2区調査前（北から）



図4 1 - 1区作業状況（東から）



図5 3 - 1区・3 - 2区調査前（東から）



図6 3 - 1区現地説明会（西から）



図7 3 - 3区・3 - 8区調査前（南南東から）



図8 3 - 7区調査前（東から）



図9 4 - 10区調査前（東から）



図10 4 - 10区作業状況（北西から）

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年

新館(平常展示館)建替え工事に伴う事前調査として、敷地北西部で実施した発掘調査である。新館南側に2箇所(3-1区・3-2区)、西側に3箇所(3-3区・3-5区・3-8区)、新館北側に3箇所(3-4区・3-6区・3-7区)の調査区を設定した。調査面積は約1567㎡である。

4次調査(図9・10)

調査期間 1999年7月～2000年3月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：本弥八郎、調査担当者：田中利津子・近藤知子・大立目一

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年

敷地北東部で実施した試掘調査、新館(平常展示館)建替え、ならびに博物館南門施設建設工事に伴う事前調査として、敷地北西部・南部で実施した発掘調査である。試掘調査は本館北東側に3箇所(4-1区～4-3区)の調査区を設定した。発掘調査は新館北西側(4-9区)に1箇所、南門の部分に1箇所(4-10区)の調査区を設定した²⁾。調査面積は約1,025㎡である。

5次調査

調査期間 2000年9月～10月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：本弥八郎、調査担当者：田中利津子・近藤知子

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年

遺跡の状況を確認するために実施した発掘調査である。敷地東部にほぼ連続する4箇所の調査区を設定した(5-1区～5-4区)。調査面積は約185㎡である。

6次調査

調査期間 2001年12月～2002年3月

調査体制 調査課長：鈴木久男、調査係長：本弥八郎、調査担当者：田中利津子・平方幸雄・上田栄治

調査概要 「六波羅政庁跡」『平成13年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年

埋設管設置工事に伴う立会調査である。敷地各所で25箇所に分けて遺跡の確認を行った(6-1区～6-25区³⁾)。

7次調査

調査期間 2003年9月

調査体制 調査課長：鈴木久男、担当係長：本弥八郎、調査担当者：田中利津子・西村洋子

調査概要 「六波羅政庁跡1」『平成15年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年

赤外線監視装置増設工事に伴う立会調査である。東堀・南堀・西堀に沿った10箇所（7 - 1区～7 - 10区）で遺跡の確認を行った。

8次調査

調査期間 2003年11月～12月

調査体制 調査課長：鈴木久男、担当係長：本弥八郎、調査担当者：田中利津子・西村洋子・清藤玲子

調査概要 「六波羅政庁跡2」『平成15年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年

施設整備工事に伴う立会調査である。南門西側の1箇所（8 - 1区）、本館西側の2箇所（8 - 2区・8 - 3区）で遺跡の確認を行った。

9次調査

調査期間 2008年2月～3月

調査体制 調査課長：吉崎伸、担当係長：辻純一、調査担当者：網伸也

敷地中央部から北西部で実施した確認調査である。本館北西側に2箇所（9 - 1区・9 - 2区）、新館南西側に3箇所（9 - 3区～9 - 5区）の調査区を設定した。調査面積は約290㎡である。

3 整理・報告書作成の経過

9次にわたる調査では、平安時代から明治時代の遺構を検出するとともに、弥生時代から明治時代に属する遺物が出土し、多大の成果を上げることができた。このことから、このたび全体にわたる調査報告書を作成することとなった。

それぞれの調査終了後、調査担当者により作成図面・出土遺物の内容点検などの基礎的な整理作業を行った。特に3次調査・4次調査では多量の遺物が出土したため、田中利津子・近藤知子・大立目一が中心となり、調査報告書の作成にそなえて遺物整理をすすめた。

本報告書の作成にあたっては、それぞれの調査での作成図面・出土遺物・作成資料を集約したのち、これらに基づき実測図図版・写真図版を構成し、原稿を執筆した。作成期間・作業体制は以下のとおりである。

作成期間 2008年10月～2009年3月

作業体制 調査課長：吉崎伸、担当係長：前田義明、作成担当者：網伸也・田中利津子・山本雅和

註

- 1) 本報告書の1 - 1区・1 - 2区は、それぞれ調査概要での南区・北区にあたる。
- 2) 本報告書の4 - 1区～4 - 3区は、それぞれ調査概要での試掘1区～試掘3区にあたる。また、4 - 9区・4 - 10区は調査概要での調査区名を踏襲したため、4 - 4区～4 - 8区は欠番となる。
- 3) 本報告書の6 - 19区～6 - 25区は、それぞれ調査概要でのA区～G区にあたる。

第2章 遺 跡

1 遺跡の位置と環境

調査地の地理的・歴史的状況について概観する¹⁾。

調査地の立地 調査地は京都盆地東側を画する東山丘陵の西側裾部斜面に立地する。調査地より西側約400mには鴨川が流れており、ここから東を臨むと登り勾配の斜面に続いて阿弥陀ヶ峰などの山々が間近に迫る状況を実感できる。また、調査地より南側約400m以南には、かつて大きな池があったことが明らかとなっている²⁾。

調査地が所在する京都国立博物館は、東側を東大路通、南側を七条通、西側を大和大路通に囲まれ、北側は豊国神社に接している。敷地内の現在の標高は東大路通付近では約49m、大和大路付近では約37mで、おおまかには北東から南西に向かって傾斜している。ただし、東大路に近接する区域には西方向への急な斜面があり、段差を形成している部分がある。また、本館付近はほぼ平坦であるが、新館南側から南西方向への勾配も大きい。一方、新館から豊国神社へは平坦面が連続する。このような状況から旧地形は大規模な改変を受けていることが推測できる。

また、調査地西側の大和大路通・本町通（伏見街道）は京都と奈良を結ぶ主要街路である。調査地南側の七条通は平安京の条坊街路である七条大路の東延長部分（七条大路末）にあたり、さらに東へは渋谷越え（汁谷越え・久々目路）・醍醐路（滑石越）によって山科を経て東海道・東山道へと繋がる。このように調査地は平安時代以降、交通の要所であったと捉えることができる。

平安時代 調査地周辺において平安遷都をさかのぼる時代の遺跡の痕跡についてはほとんど明らかとなっていない。

調査地周辺の歴史的状況がうかがえるようになるのは、永延2年（988）の藤原為光による法住寺の建立の記録が初見である。本堂は釈迦堂で東西には法華三昧堂・常行三昧堂を備えた寺院であったが、長元5年（1032）に焼亡する。

法住寺の跡地には平安時代後期になって後白河法皇により御所が造営される。法住寺殿である。法住寺殿の御所には七条大路末を挟んで南殿と北殿があり、調査地は北殿の推定地にあたる。また、西には蓮華王院、池の南西には最勝光院が建立され、池の南東には新熊野神社が勧請された。広義の法住寺殿はこれらの施設のすべてを含む。寿永2年（1183）年、法住寺殿は源義仲に襲撃され炎上するが、建久2年（1191）には源頼朝により再建される。現在京都を代表する観光寺院の一つである蓮華王院三十三間堂は、創建時の諸堂が建長元年（1249）の火災で焼失したあと文永3年（1266）に再建されたものであるが、長大な建物・本尊の千手観音座像や両側に列ぶ千体千手観音像から法住寺殿の盛期を偲ぶことができる。

鎌倉時代 「六波羅」は広くは鴨川東岸の五条大路末（現在の松原通）から七条大路末の間の区域を指す。地名の由来にはいくつもの説があるが、その一つでは応和3年（963）に空也が開いた西光寺を改名した六波羅蜜寺が語源といわれている。平安時代後期には六波羅蜜寺周辺に平氏

の拠点である六波羅邸が営まれた。平氏滅亡ののち、跡地には源氏の六波羅邸が新造され、源頼朝が上洛の時などに利用した。承久3年(1221) 承久の乱に勝利した鎌倉幕府は、改めて六波羅の地に政庁を設けた。いわゆる六波羅探題である。六波羅政庁には北方(北殿)と南方(南殿)があり、京都周辺の治安維持や西国での訴訟にあたった。ともに大和大路に面して、北方は五条大路末から六条坊門小路末(現在の五条通)までの間、南方は六条坊門小路末から六条大路末(現在の正面通)までの間に主要施設があったと考証されている。六波羅政庁は、南北朝動乱期の元弘3年(1333) 足利高氏(尊氏)の攻撃によって焼亡した。調査地は六波羅政庁推定地南端にあたる。その後、室町時代の調査地周辺では蓮華王院が維持されていたことは確実であるが、詳しい状況については明らかではない。

桃山時代 天正14年(1586) 豊臣秀吉は、永禄10年(1567)に焼け落ちた奈良の東大寺大仏に匹敵する大仏を京都に建立することを思い立ち、蓮華王院北側に方広寺を造営した。大仏は高さ六丈三尺(約19m)の木製金漆塗座像と伝えられる。大仏が安置された大仏殿は西向きに建てられ、高さ約49m、桁行約88m、梁間約54mの巨大な建物であった。また、方広寺は西方向へ傾斜する斜面に立地することから、境内の平坦面を確保するために大規模な土地造成が行われた。現在、大仏殿前面にあたる大和大路東側に残る巨大な石塁はこの造成にともない構築されたものである。石塁は屈曲して北面でも高さを減じながら東へと続く。石塁の状況から境内は南北約260m、東西210m以上に復元できる。さらに周辺には妙法院・祥雲寺・養源院などの寺院が建ち並んだ。

ところが、開眼供養直前の文禄4年(1596)に慶長大地震が起こる。大仏殿・中門などの建物は無事であったが、大仏は損壊し、周囲の築地も倒壊した。そこで秀吉は慶長2年(1597)に信濃国善光寺の阿弥陀如来を大仏殿に安置するが、翌年には秀吉の病状の悪化によって信濃へ返却し、秀吉自身も死去する。

その後、慶長4年(1599)に豊臣秀頼は金銅仏に改めて大仏の再建に着手するが、慶長7年(1602) 大仏殿内部で鑄造中の大仏より出火し、大仏殿もろとも焼失する。にもかかわらず、秀頼は慶長13年(1608)に再び大仏および大仏殿の建立・造営を再開、慶長17年(1612)に竣工する。また、秀吉の死後、方広寺東側に隣接して造営が開始された秀吉を祭神とする豊国社の整備も進められた。秀頼による造営・整備は秀吉の段階を上回るどころが多く、大仏殿周囲の築地は築地回廊に改められ、蓮華王院などの周辺寺院までもも取り込む規模となった。現在、蓮華王院南側に残る南大門や太閤塀はこの時に築造されたものである。最盛期の方広寺・豊国社の状況は慶長9年(1604)に秀吉の七回忌に催された豊国臨時祭を描いた『豊国祭礼図屏風』に活写されている。

慶長19年(1614)年になり、ようやく大仏の開眼供養を執り行うこととなったが、またもその直前、この年に鑄造された巨大な梵鐘の銘文をめぐる徳川家康が言いかがりをつけた方広寺「国家安康」鐘銘事件が起こり供養は延期され、やがて大阪冬の陣・夏の陣にいたる。

江戸時代 豊臣氏滅亡後、豊国社をはじめとする方広寺周辺の豊臣秀吉を顕彰する施設は次々

と破却されたが、大仏殿は東山山麓にそびえ立ち、その偉容は各種の『洛中洛外図』に描かれた。しかしながら、寛文2年(1662)の地震で破損したことを契機として江戸幕府により大仏は銅銭に鑄潰され、また、寛政10年(1798)の落雷により大仏殿および楼門・回廊などの伽藍も焼失した。調査地は方広寺境内の南部にあたる。

明治時代 方広寺境内の大部分は収公されるが、明治8年(1875)に中央部に豊国社が再建される。また、南部は皇室の宝物を安置した恭明宮にあてられ、明治30年(1897)に京都国立博物館の前身である帝国京都博物館の開館式が挙行される。

2 周辺の調査

調査地は『京都市遺跡地図台帳』では、法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡として周知されている³⁾。調査地周辺では、これまでに多数の発掘調査・立会調査が行われているが、ここでは主要な調査の概要を記す(図11)。

調査地北東側の妙法院前側町の共同住宅建設工事に伴う発掘調査(図11-1)では、平安時代末期の井戸、室町時代の整地層、江戸時代の溝・井戸・土坑などを検出した。平安時代の井戸は方形縦板横棧組の大規模な遺構である。出土遺物には平安時代末期の土器類・瓦・木製品、室町時代の土器類・瓦などがある。なお、攪乱坑から五三桐文軒丸瓦が出土している⁴⁾。

調査地北側の公園整備に伴う試掘調査(図11-2)では、方広寺の大仏の台座、大仏殿基壇・礎石据付穴などを検出した。方広寺の遺構の確認を目的とした調査であり、下層遺構の調査は実施していない。大仏の台座は縁辺部に大きさ20~100cmの自然石を並べており、一辺約14mの8角形に復元できる。内側には拳大の礫・土を盛り上げる。また、周辺から多量の埴が出土しており、台座上面は埴敷であったと推定できる。基壇は南面の地覆石・羽目石・階段の耳石の一部を確認した。表面を丁寧に調整した花崗岩の切石を据え付ける。基壇上面は正方形の花崗岩による四半敷で、表面が赤く変色したり剥離している石材があることから火災の痕跡が明瞭である。地覆石据付面から基壇上面までの高さは約1.8mである。礎石据付穴は径約4~5mの不正円形の掘形に拳大の礫を詰め、最上部には礎石を支えるために大きさ約70~100cmの自然石を据える。柱間は約8mある。出土遺物には方広寺の土器類・瓦・埴・鉄製品などがある。大部分を瓦類が占めており、焼けた瓦が多い。慶長7年(1602)・寛政10年(1798)の2度の焼失を示す資料である。鉄製品には銚がある。長さ(渡り)27cm・幅(爪)9cmもある大型のもので大仏殿に使用されたと推定できる⁵⁾。

調査地北側の豊国神社敷地内の発掘調査(図11-3)では、室町時代の遺物包含層・土坑、大仏殿の基壇などを検出した。室町時代の遺構は下層遺構確認のための断割部分で検出した。方広寺の基壇は著しく削平されていたが、西面の地覆石抜取穴を検出したことで、大仏殿の西端を確定することができた。出土遺物には平安時代の土器類、鎌倉時代の土器類、室町時代の土器類・瓦・石製品、桃山時代から江戸時代の土器類・瓦・金属製品、明治時代の土器類・土製品などがある。桃山時代から江戸時代の瓦は大仏殿に用いた大型瓦である。明治時代の土製品には多量の

土人形のほかトチン・サヤ鉢などの窯道具がある。⁶⁾

調査地西側の七条通大和大路北西側の発掘調査(図11-4)では、古墳時代の土坑、平安時代後期の井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代の建物・塀・溝・井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。建物は東面する門で塀はこれに取り付くものである。出土遺物には古墳時代の土器類、平安時代の土器類・瓦、鎌倉時代の土器類・瓦・石製品、室町時代の土器類などがある。瓦は法住寺殿の時期にあたる平安時代後期のものが多くを占め、鎌倉時代以降のものは少ない。⁷⁾

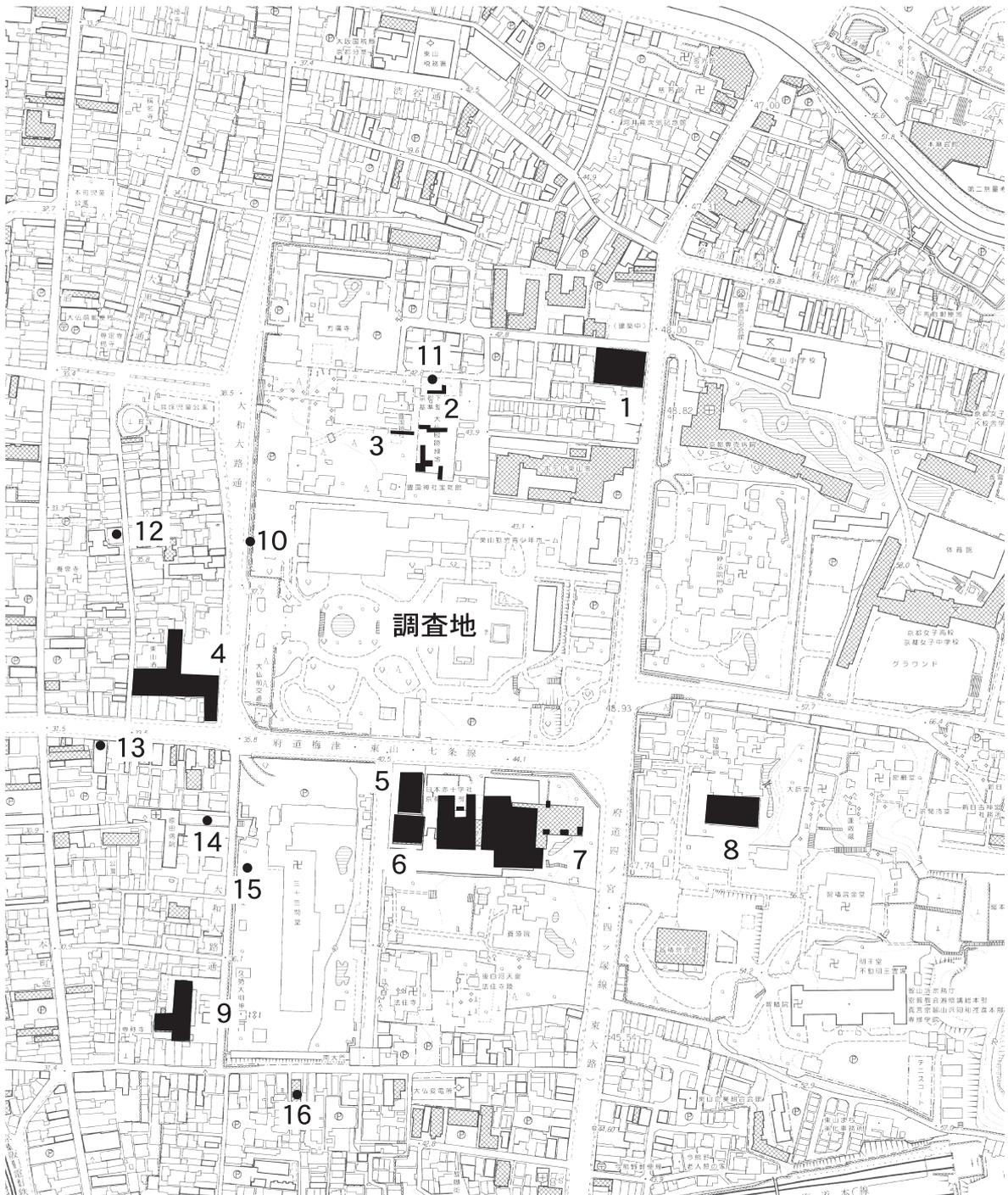


図11 周辺調査位置図(1:5,000)

七条通を隔てた調査地南側の日本赤十字社血液センター建設工事に伴う発掘調査（図11 - 5）では、江戸時代の建物・井戸、時期不詳の瓦敷・池・柱穴などを検出した。出土遺物には平安時代後期の瓦、室町時代以降の瓦、江戸時代の土器類・金属製品などがある。⁸⁾

さらに南隣で実施した発掘調査（図11 - 6）では、江戸時代の建物・石敷・柵・溝・土坑・柱穴・竈、室町時代後期から江戸時代の建物・井戸・竈・池などを検出した。室町時代前期よりも古い遺構を検出していないことから、室町時代後期に大規模な整地が行われたと推定できる。出土遺物には平安時代後期の土器類・瓦、江戸時代の土器類・瓦・石製品がある。江戸時代の遺物が大半を占める。⁹⁾

調査地南側の七条通東大路南西側のホテル建設工事に伴う発掘調査（図11 - 7）では、平安時代後期の溝・土坑、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸、桃山時代の溝・礎敷・製鉄炉、江戸時代の堀・溝・柱穴・池などを検出した。平安時代の土坑の一つからは甲冑・武具・馬具が一括して出土した。桃山時代の製鉄炉は平面形は南北約2.3m・東西1m以上の長方形で、残存高は約0.7mある。炉壁は大型の瓦を積み重ねて構築する。出土遺物には平安時代後期の土器類・瓦・石製品・金属製品・木製品、鎌倉時代の土器類・瓦・土製品・石製品・木製品、室町時代の土器類・金属製品、桃山時代の土器類・瓦・土製品・金属製品、江戸時代の瓦などがある。平安時代後期の甲冑・武具・馬具は当時の兵装を考察するための重要な資料である。また、石製品は建物基壇に使用された石材の可能性が推定されている。桃山時代の製鉄炉からはフイゴの羽口・鉄滓・大量の炭が出土した。¹⁰⁾

調査地南東側の智積院講堂建設工事に伴う発掘調査（図11 - 8）では、桃山時代の建物・溝・土坑、江戸時代前期の建物・溝・地鎮遺構などを検出した。なお、下層遺構の調査は実施していない。地鎮遺構は密教法具である輪宝・楸を組み合わせて埋納する。調査地は豊臣秀吉が夭折した長子鶴松の菩提を弔うために建立した祥雲寺（祥雲禅寺）跡にあり、検出した建物は祥雲寺客殿および焼失後に再建された智積院方丈殿にあたる。出土遺物には桃山時代の土器類、江戸時代前期の土器類・金属製品などがある。¹¹⁾

調査地南東側の七軒町の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図11 - 9）では、平安時代後期の建物・溝・街路などを検出した。建物は3棟あり周囲には自然石を並べる雨落溝がめぐる。街路は蓮華王院寺域を東西に2分する位置で南北方向に延び、路面は地山上に灰色砂土を敷き固める。出土遺物には弥生土器、平安時代の土器類・瓦・木製品などがある。¹²⁾

調査地西側の方広寺石塁修復工事に伴う調査（図11 - 10）では、断面の観察から石塁の構築方法が明らかとなった。石塁内側の土壇は地山の白褐色粘土の上に黒色粘土・拳大の礫・黄褐色土を版築して堅く積み上げる。石塁は扁平な石材を立て、土壇との間に裏込として大きさ約20～50cmの石を基底部に置き、その上に大小の礫を充填する。裏込には大量の石仏・石塔などの石造物が使用された。出土遺物には桃山時代の土器類・瓦・石造物などがある。これらは石塁の裏込から出土しており、少なくとも豊臣秀吉による造営以前に属する。¹³⁾

調査地北側の公園で実施した立会調査（図11 - 11）では、方広寺の大仏殿礎石据付穴を2基検

出した。¹⁴⁾

調査地西側の塗師屋町で実施した立会調査（図11 - 12）では、平安時代後期から鎌倉時代前期の東西方向の溝を検出した。¹⁵⁾

調査地南西側の本町六丁目で実施した立会調査（図11 - 13）では、平安時代後期の東西方向の溝、室町時代の東西方向の溝・柱穴を検出した。¹⁶⁾

調査地南西側の北斗町で実施した立会調査（図11 - 14）では、平安時代後期の南北方向の街路を検出した。¹⁷⁾ 図11 - 9の調査で検出した街路の延長にあたる。

調査地南西側の蓮華王院境内で実施した試掘調査（図11 - 15）では、平安時代後期の地業、桃山時代の南北方向の築地・溝を検出した。¹⁸⁾ 桃山時代の遺構は太閤堀の西堀・内溝と推定できる。

調査地南側の新瓦町西組で実施した立会調査（図11 - 16）では、平安時代中期の南北方向の溝、平安時代後期から鎌倉時代の東西方向の溝を検出した。¹⁹⁾

註

- 1) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968～1976年。『京都市の地名』平凡社、1979年。『豊臣秀吉と京都』文理閣、2001年。『院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣、2006年。
- 2) 現地地形から南北約300m・東西250mの規模であったと推定されている。1983年に実施された池田町の大谷中学校・高等学校敷地内の発掘調査で平安時代の汀を検出した。『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会、1984年。
- 3) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年。
- 4) 「六波羅政庁跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 5) 「方広寺大仏殿跡」『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2003年。
- 6) 「方広寺大仏殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2003年。
- 7) 「六波羅政庁跡」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 8) 「法住寺殿跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、1966年。
- 9) 「法住寺殿跡」『昭和51年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2008年。
- 10) 『法住寺殿跡 平安京跡研究調査報告第13輯』（財）古代学協会、1984年。
- 11) 『智積院境内祥雲寺客殿跡の発掘調査』真言宗智山派総本山智積院、1995年。
- 12) 「法住寺殿跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1985年。
- 13) 『史跡方広寺石壘修復工事報告書』京都国立博物館、1987年。
- 14) 「法住寺殿跡、六波羅政庁跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局、2003年。
- 15) 「法住寺殿跡・六波羅政庁跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局、1998年。
- 16) 「法住寺殿跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局、1992年。
- 17) 「法住寺殿跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局、1988年。
- 18) 「法住寺殿跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1999年。
- 19) 「法住寺殿跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局、1999年。

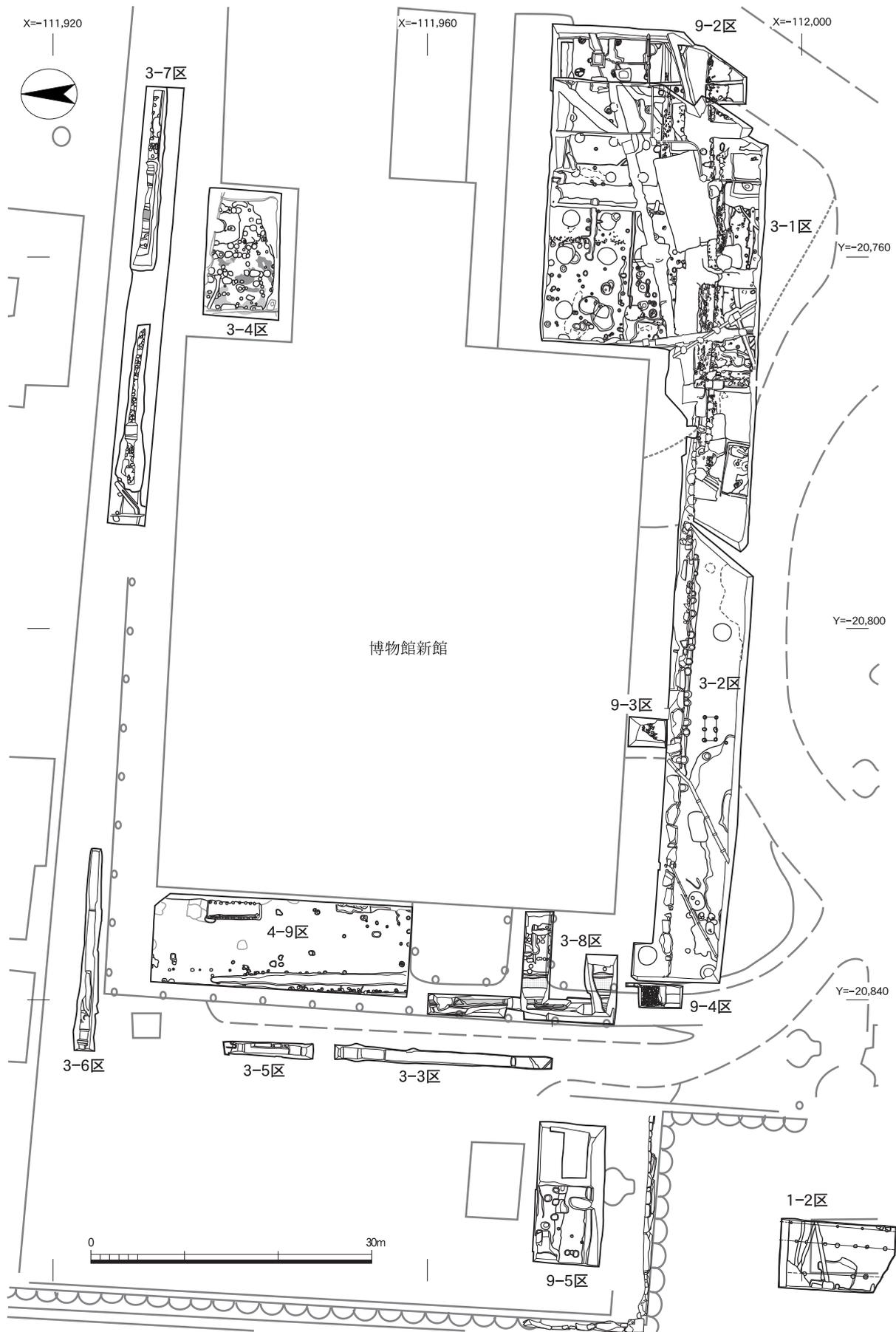


图12 新館周辺遺構概要図(1:600)

第3章 遺 構

本報告書に掲載する調査地点は京都国立博物館敷地の全域に分布する。以下では調査回数に基づき節を分け、調査の概要を記したのち各調査区の層序および遺跡を理解する上で重要と判断した遺構を検出面ごとに報告する¹⁾。なお、検出遺構および出土遺物の時期の判定は平安京・京都期～勅期の編年案に準拠する²⁾。

1 1次調査

(1) 調査の概要

1 - 1区は大和大路通から西門との間の前庭部南側、1 - 2区は前庭部北側に設定し³⁾、敷地西部における各時代の遺跡の状況を明らかにすることを目的とした。また、1 - 3区は西堀に接する部分に設定した。

調査は各調査区とも2面に分けて行い、平安時代後期から江戸時代前期の遺構・遺物包含層を確認した。1 - 1区・1 - 2区は遺構密度が高く重複が多かったため、各遺構面では前後する時期の遺構を検出することもあった。また、1 - 3区では国指定重要文化財の博物館西堀基底部を検出しており、ここに合わせて報告する。

(2) 1 - 1区の調査

層序(図13)

調査区周辺は北東から南西に向けて傾斜しており、地表面は東側の西門付近と西側の大和大路通付近では東側が高く約1.0mの高低差がある。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	路面3-3、溝3-149・溝3-299・溝4-276・溝4-325、井戸1-150・井戸1-200、埋納遺構3-1、土坑3-61・土坑4-326	
鎌倉時代 ～室町時代	路面3-3・路面3-4、建物4-1、溝3-13・溝3-15・溝3-36・溝3-120・溝3-149・溝3-305・溝4-1・溝4-146・溝4-162・溝4-249・溝4-252・溝4-273・溝4-281、堀状遺構4-145、井戸4-250・井戸9-10、土坑1-77・土坑1-80・土坑1-105・土坑1-111・土坑1-112・土坑1-250・土坑3-46・土坑3-163・土坑3-179・土坑3-203・土坑3-219・土坑4-314・土坑4-316、落込3-1	
桃山時代 ～江戸時代前期	方広寺南門・回廊、石塁3-1、石垣3-1、路面3-1・路面3-2・路面4-1・路面4-2・路面4-3、築地1-1、建物3-1、柱穴列1-2・柱穴列1-3・柱穴列3-1、溝3-1・溝1-7・溝3-111・溝4-2・溝4-102・溝4-124・溝4-249・溝9-2、溝状遺構9-3、土坑1-1・土坑1-9・土坑1-15・土坑3-200、柱穴9-20・柱穴9-21	
江戸時代中期 以降	溝3-100、瓦窯5-1	

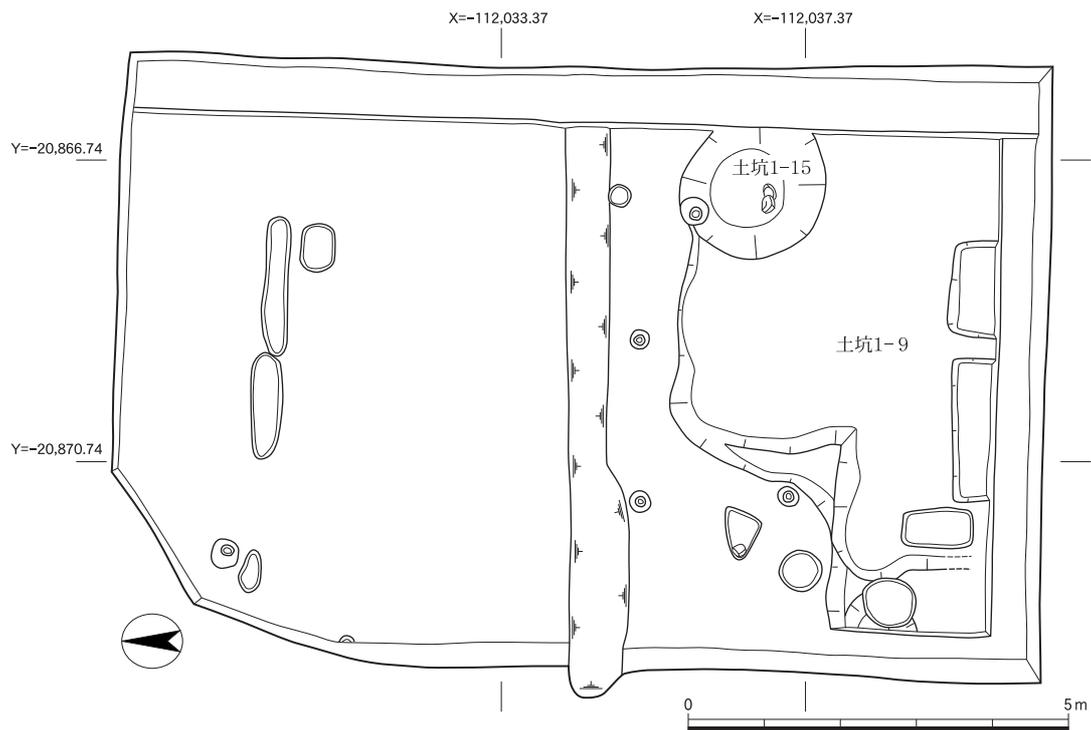


図14 1 - 1区第1面平面図（桃山時代から江戸時代 1 : 100）

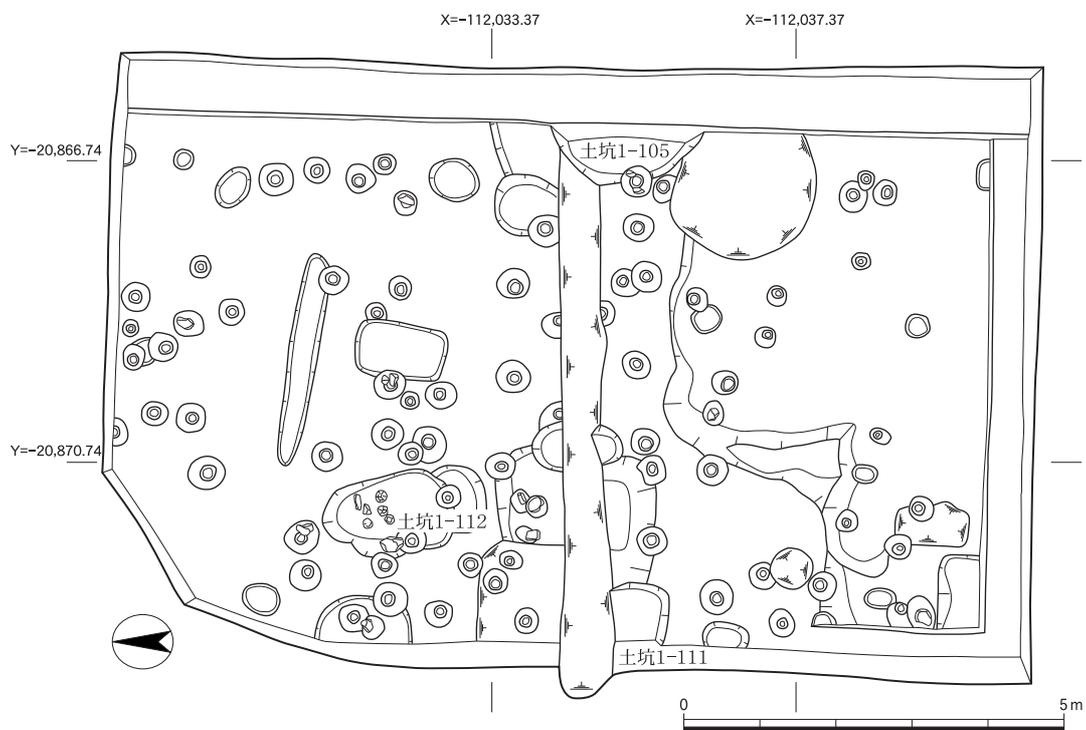


図15 1 - 1区第1面平面図（鎌倉時代から室町時代 1 : 100）

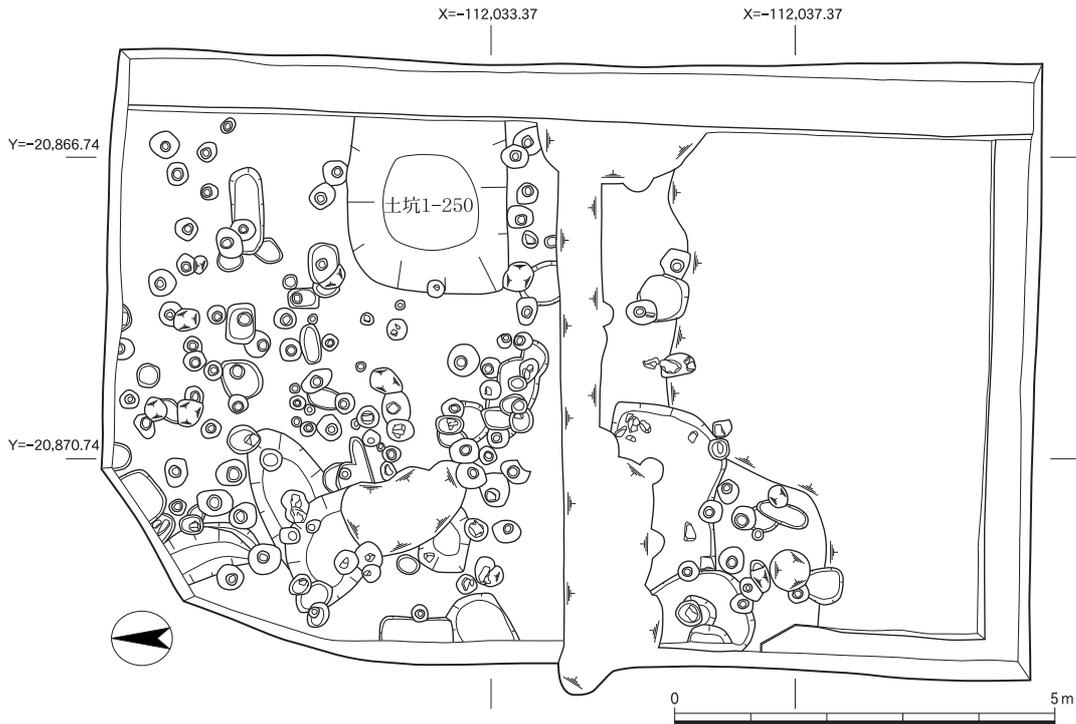


図16 1 - 1区第2面平面図(1:100)

第1面の検出遺構(鎌倉時代から室町時代 図版1-2、図15)

溝・土坑・柱穴を検出した。

土坑1-105 東部中央壁際で検出したため、東側は調査区外になる。検出した部分は、南北2.0m以上、東西0.8m以上の半円形で、深さは0.8m以上である。埋土は黒褐色泥砂などで、 期の遺物が出土した。壁際のため底部を確認していないが、井戸である可能性がある。

土坑1-111 西部中央壁際で検出したため、西側は調査区外になる。北側は攪乱されているが、平面形は南北0.8m以上、東西0.9m以上の長方形に復元できる。深さは約0.5mである。埋土は黒褐色泥砂などで焼土・炭を含む。 期～ 期の土器類と共に金属滓・鞆羽口が出土した。

土坑1-112 北西部で検出した。平面形は南北約1.7m、東西約1.0mの長円形である。深さは約0.4mである。埋土は暗褐色泥砂で、 期の遺物が出土した。北寄り4枚の完形の土師器皿が出土していることから、墓壇の可能性はある。

柱穴群 調査区全域で多数の柱穴を検出した。平面形は多くが円形で掘立柱と礎石を用いるものが混在する。掘立柱では掘形は径約0.3~0.6m、深さ約0.1~0.3mである。柱あたりは径約0.1~0.2mで、底部に石を据えるものがある。礎石を用いる柱穴は浅く掘り下げた掘形の底面に大きさ約10~40cmの石を平坦な面を上にして据える。建物としてのまとまりは不明であるが、ある程度南北方向・東西方向に並ぶ状況が看取できる。

第2面の検出遺構(図版3-1、図16)

北部から中央部で土坑・柱穴を検出した。南部は土坑1-9により削平を受けたため遺構がほとんどない。

土坑1-250(図版3-2、図17) 東部中央壁際で検出したため、東側は調査区外になる。平面形は南北約2.1m、東西2.3m以上の隅丸方形で、深さは約0.6mである。埋土は黒褐色泥砂などで、中位に大きさ約10~30cmの石を多量に含む。

期~期の遺物が出土した。ただし、混入の可能性があるが大型瓦が出土していること、および土坑1-15とは南北に並び形状が類似することから両者は一連の遺構である可能性がある。

柱穴群 北部から中央部で多数の柱穴を検出した。平面形は多くが円形で掘立柱と礎石を用いるものが混在する。掘立柱では掘形は径約0.2~0.5m、深さ約0.1~0.3mである。柱あたりは径約0.1~0.2mで、底部に石を据えるものがある。礎石を用いる柱穴は浅く掘り下げた掘形の底面に大きさ約10~40cmの石を平坦な面を上にして据える。建物としてのまとまりは不明である。

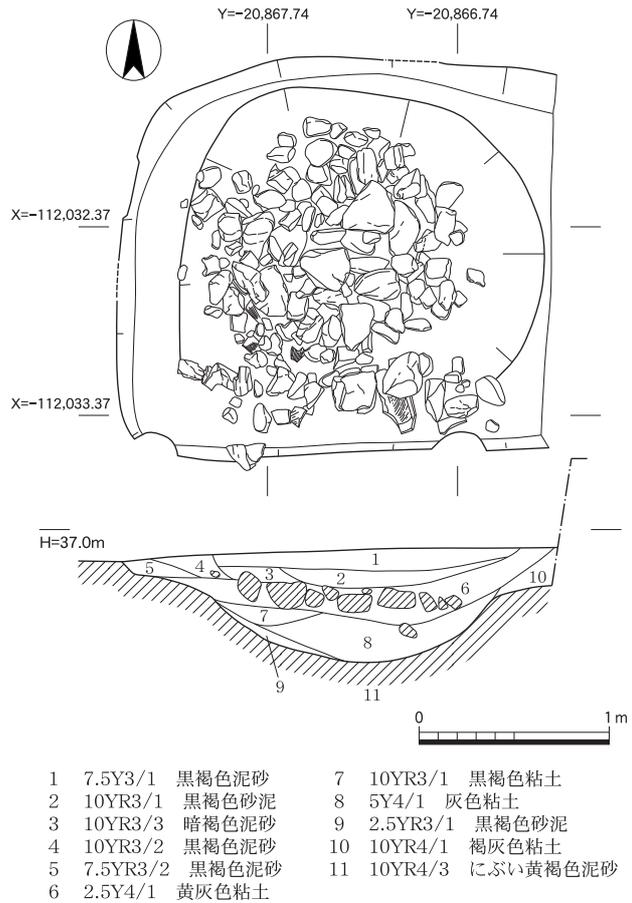


図17 土坑1-250実測図(1:40)

(3) 1-2区の調査

層序(図18)

北東から南西に向けて傾斜する状況は1-1区と同様で、地表面は1-2区南端は1-1区北端より約0.3m高い。

厚さ約0.3~0.4mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、順に厚さ約0.1~0.2mの方広寺造営に伴う整地層である褐色砂泥、厚さ約0.1mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒褐色砂泥、平安時代後期の包含層である厚さ約0.1~0.2mの黒褐色砂泥がある。褐色砂泥は1-1区明黄褐色泥砂、黒褐色砂泥は1-1区灰黄褐色泥砂に対応する。平安時代後期の黒褐色砂泥の下層は地山の褐色粘質土などになる。地山検出面の標高は37.2~37.3mである。

調査では褐色砂泥下面を第1面、黒褐色砂泥下面を第2面としてそれぞれ遺構検出を行った。第1面では桃山時代から江戸時代の遺構と鎌倉時代から室町時代の遺構が混在していたため2段階に分けて遺構掘削を行った。第2面では平安時代後期の遺構を検出した。

第1面の検出遺構(桃山時代から江戸時代 図版4-1、図19)

土坑・柱穴などを検出した。埋設管などに攪乱されている部分があるが、遺存状況は良好である。

柱穴列1-1 東部壁沿いで検出した南北方向の柱穴列である。北側・南側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は4基であるが、攪乱部分に1基を復元できる。検出長は約10.2mで、北側で約5度東へ振る方位をとる。掘形は径約0.2m、深さ約0.1mで、柱あたりはない。ただし、この遺構は褐色砂泥上面で成立していた可能性が高いことから深さは0.3m以上に復元できる。柱穴の間隔は約2.6mである。埋土は黒褐色砂泥で、出土遺物が少なく時期の確定は難しい。

柱穴列1-2 中央部で検出した南北方向の柱穴列である。北側・南側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は7基である。検出長は約9.5mで、北側で約5度東へ振る方位をとる。掘形は径約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.3mで、柱あたりは径約0.2mである。柱穴の間隔は1間ごとに約1.3mと約2.0mである。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥で、大型瓦を含む 期の遺物が出土した。

柱穴列1-3 西部で検出した南北方向の柱穴列である。北側・南側とも調査区外に延びる。攪乱のため検出した柱穴は3基である。検出長は約6.5mで、北側で約5度東へ振る方位をとる。掘形は径約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.3mで、柱あたりは径約0.2mである。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥で、大型瓦を含む 期の遺物が出土した。柱穴列1-2と柱穴列1-3は約3.2～3.3mの間隔でほぼ並行するので、南北方向の細長い建物の可能性が高い。

第1面の検出遺構（鎌倉時代から室町時代 図版4-3、図20）

調査区全域で築地・溝・土坑・柱穴などを検出した。

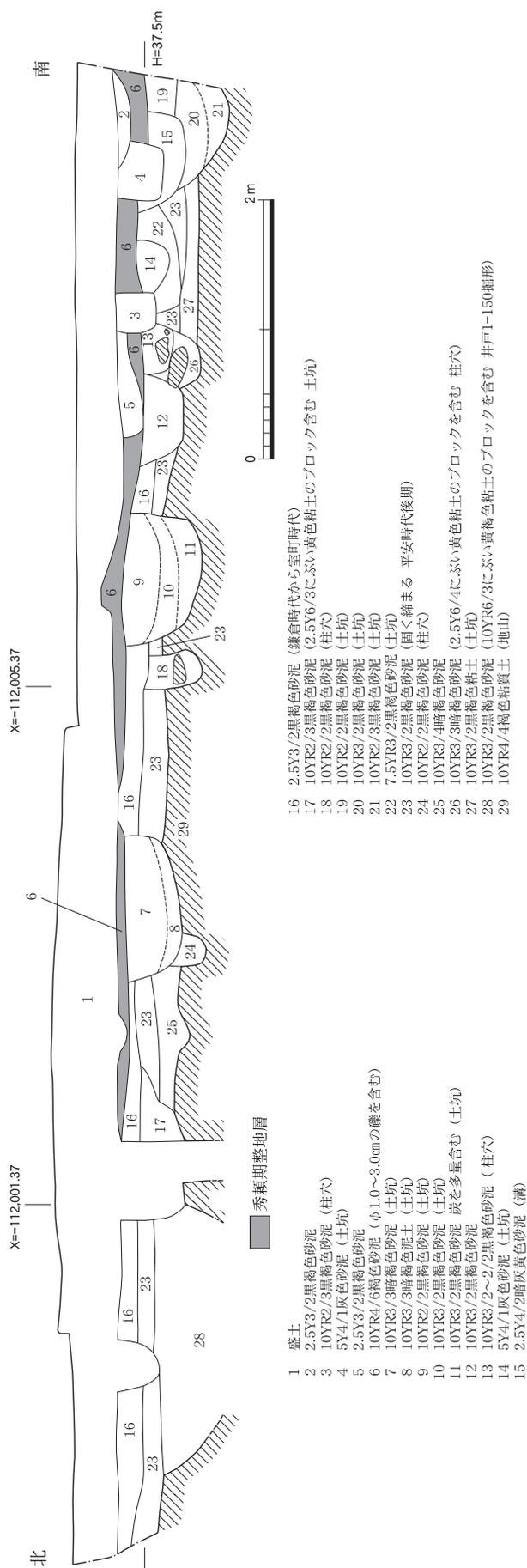


図18 1-2区東壁断面図(1:50)

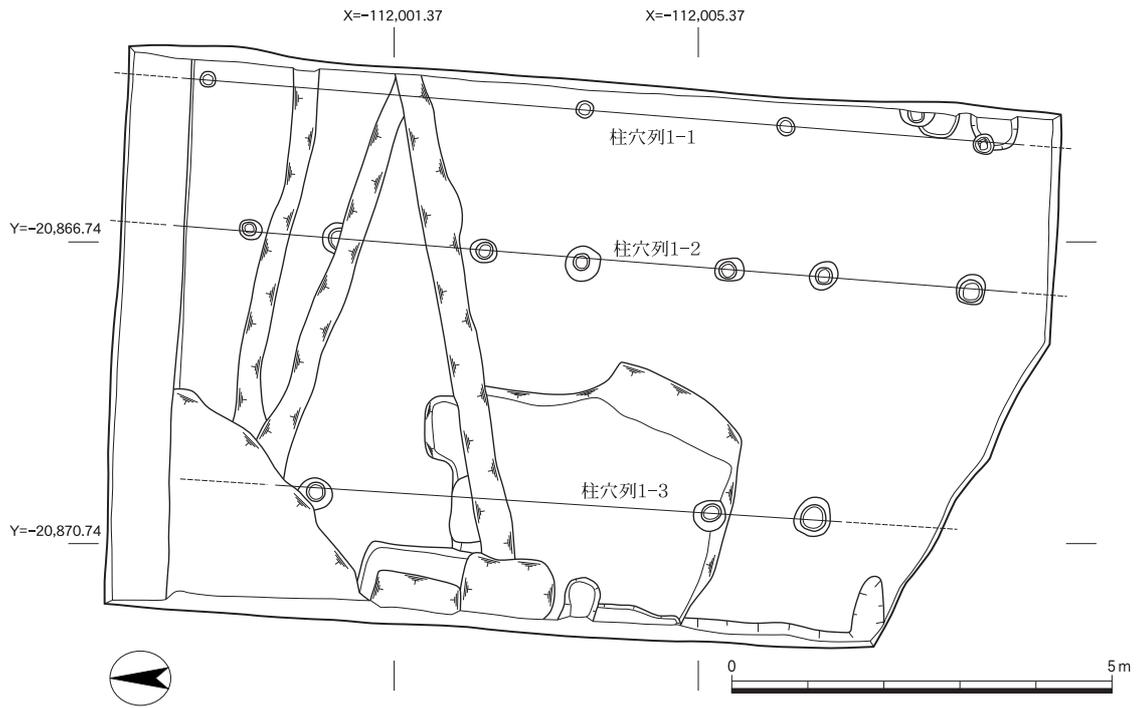


図19 1 - 2区第1面平面図（桃山時代から江戸時代 1 : 100）

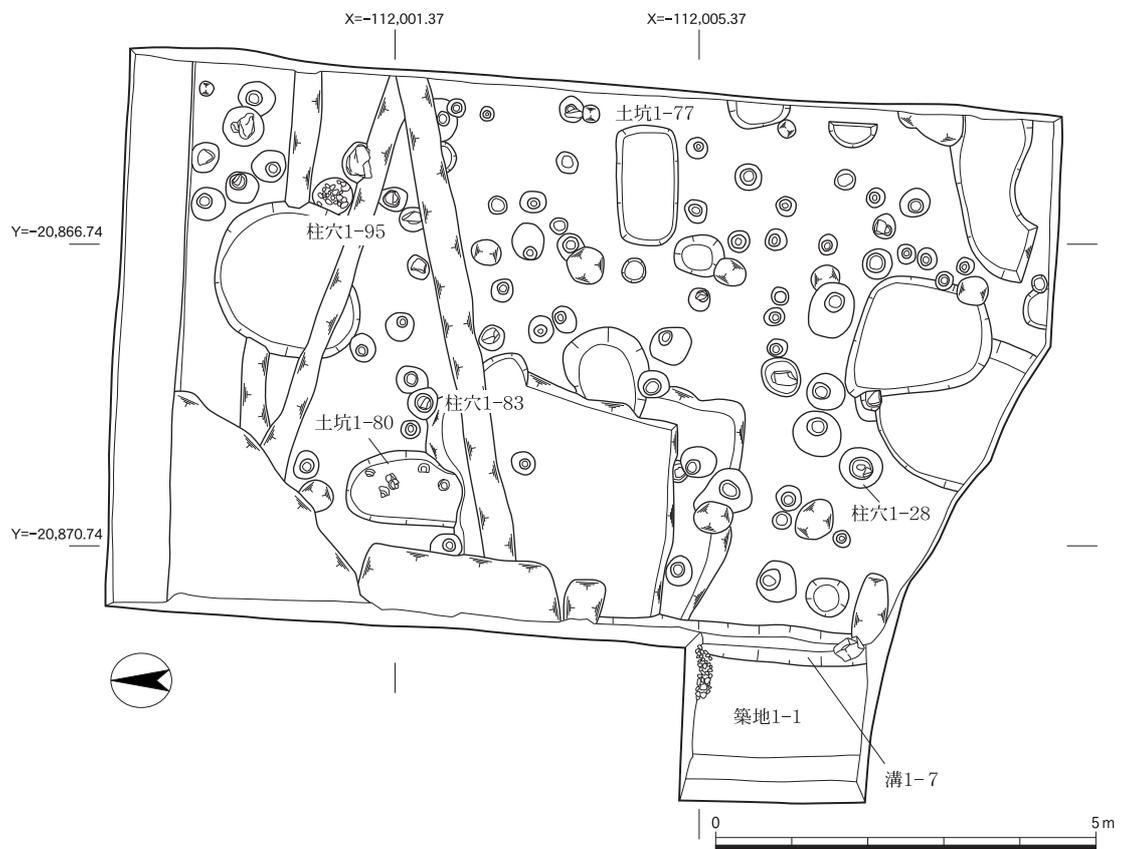


図20 1 - 2区第1面平面図（鎌倉時代から室町時代 1 : 100）

築地1-1 (図版4-2、図21) 西側拡張部分で検出した南北方向の築地である⁴⁾。北側・南側とも調査区外に延びる。検出長は約2.2m、幅は1.2m以上である。地山の上に褐色粘質土などを0.5m以上積み上げるが、ほとんどは基礎部分にあたり築地として地表にあったのは最上部の褐色砂泥にすぎない。なお、版築の痕跡は認めていない。築地1-1は博物館敷地内に一部保存されている方広寺の築地の南延長線上に位置する。

溝1-7 (図版4-2、図21) 西部壁際・西拡張部分で検出した。築地1-1に東接する南北方向の内溝である。北側・南側とも調査区外に延びる。北側で約4度東へ振る方位をとる。方位は柱穴列1-1～柱穴列1-3とほぼ共通する。断面形はU字形で、検出長は約3.5m、幅約0.5m、深さ約0.4mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は黒褐色砂泥・褐色砂泥で、大型の瓦を含む 期～劬期の遺物が出土した。

土坑1-77 東部中央で検出した。平面形は南北約0.8m、東西約1.6mの隅丸長方形である。

深さは約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥などで、 期の遺物が出土した。

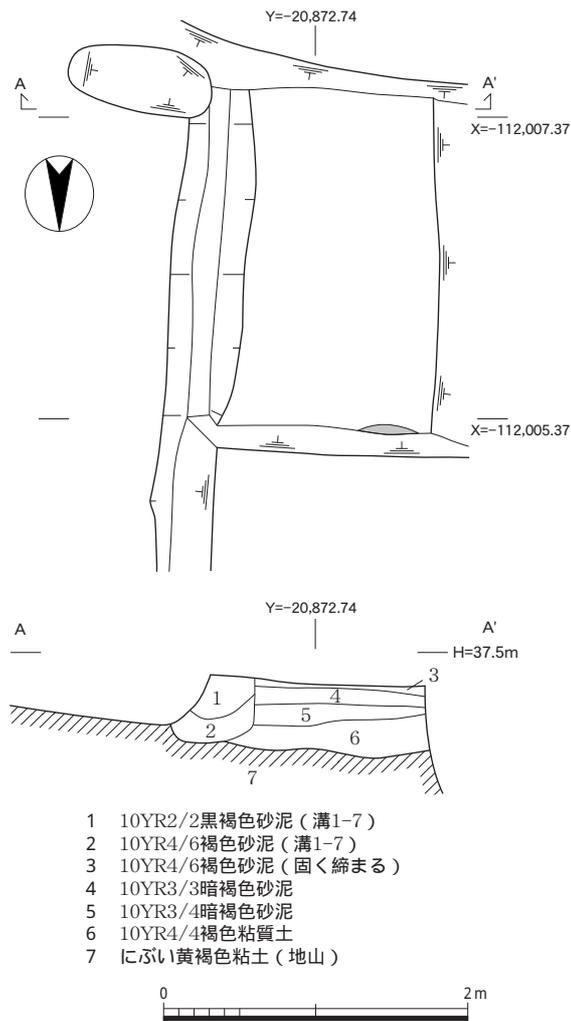
土坑1-80 北西部で検出した。南側を攪乱されているが、平面形は南北1.5m以上、東西約1.0mの楕円形に復元できる。深さは約0.3mである。埋土は暗褐色砂泥などで、多量の土師器皿を中心とする 期の遺物が出土した。

土坑1-77は形状から、また、土坑1-80は土師器皿がまとまって出土したことから、1-1区土坑1-112と同じく墓墳の可能性はある。

柱穴群 調査区全域で多数の柱穴を検出した。平面形は多くが円形で掘立柱と礎石を用いるものが混在する。掘立柱では掘形は径約0.3～0.6m、深さ約0.1～0.3mである。柱あたりは径約0.1～0.2mで、底部に石を据えるものがある。礎石を用いる柱穴は浅く掘り下げた掘形の底面に大きさ約10～40cmの石を平坦な面を上にして据える。柱穴1-83・柱穴1-95は大きさ2～10cmの礫を詰める。柱穴が集中する部分があるが、建物としてのまとまりは不明である。

第2面の検出遺構 (図版5-1、図22)

調査区の全域で溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。鎌倉時代から室町時代に比べて遺構密度は低い。



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥 (溝1-7)
- 2 10YR4/6褐色砂泥 (溝1-7)
- 3 10YR4/6褐色砂泥 (固く締まる)
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥
- 5 10YR3/4暗褐色砂泥
- 6 10YR4/4褐色粘質土
- 7 にぶい黄褐色粘土 (地山)

図21 築地1-1実測図 (1:50)

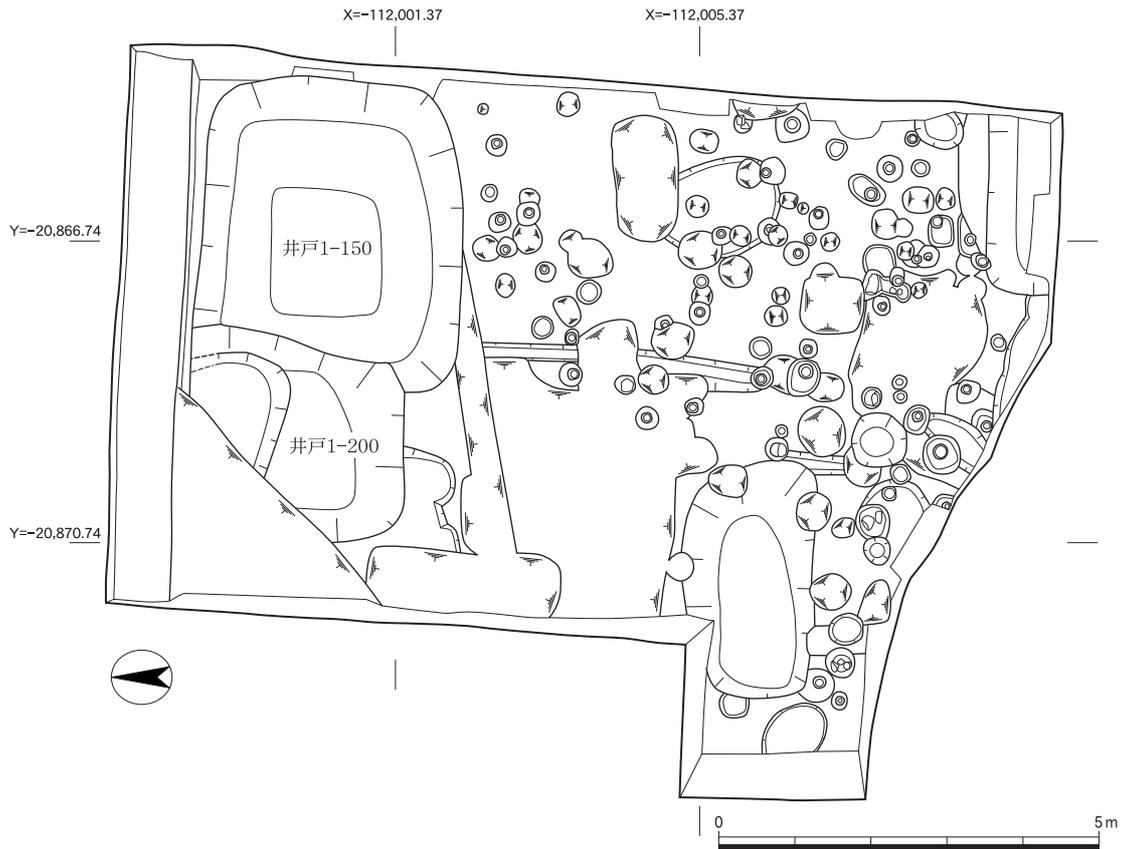


図22 1 - 2区第2面平面図(1:100)

井戸1-150 北部で検出した大型の木組の井戸である。西側は井戸1-200に接するが、断面観察および出土遺物から井戸1-150の方が新しいことがわかる。掘形は南北約3.5m、東西約4.0mの隅丸方形で、深さは3.1m以上である。遺構掘削中に地下水が湧き出したので底部を確認していないが、ほぼ完掘できたと考えている。井戸枠は掘形の中央西寄りで一辺約1.5mの方形に縦板を組む。井戸枠内の底部付近には厚さ約30~40cmで拳大の石を詰める。地下水が湧き出したのはこの上面である。埋土は掘形が地山土であるにぶい黄褐色粘土のブロックを含む黒褐色砂泥、井戸枠内が灰色粘土で、掘形から 期新段階、井戸枠内から 期の遺物が出土した。

井戸1-200 北西部で検出した大型の井戸である。北西部は攪乱されているが、掘形は南北約3.0m、東西2.4m以上の隅丸方形に復元できる。深さは2.3m以上である。遺構掘削中に地下水が湧き出したので底部を確認していない。井戸枠は遺存していないため正確な構造は不明だが、掘形と埋土の状況から一辺約0.8mの方形木枠であったと推定できる。埋土は掘形が地山土であるにぶい黄褐色粘土のブロックを含む黒褐色砂泥・オリーブ黒色粘土などで、 期の遺物が出土した。

柱穴群 平面形は多くが円形で掘立柱と礎石を用いるものが混在する。掘立柱では掘形は径約0.2~0.5m、深さ約0.1~0.3mである。柱あたりは径約0.1~0.15mで、底部に石を据えるものがある。礎石を用いる柱穴は浅く掘り下げた掘形の底面に大きさ約10~30cmの石を平坦な面を上にして据える。柱穴は鎌倉時代から室町時代に比べると全体的に小さい。建物としてのまとまりは不明である。

なお、平安時代後期の包含層より弥生時代後期から平安時代前期の土器が出土したが、これらにともなう遺構は確認していない。

(4) 1 - 3 区の調査

層序 (図23)

西堀の基礎である厚さ約0.2mのにぶい黄褐色砂礫の下層は、順に厚さ約0.2mの灰黄褐色砂泥、厚さ約0.05~0.1mの黄褐色泥砂、厚さ約0.15mの黒褐色砂泥、厚さ約0.15mの黒褐色粘質土が堆積する。黄褐色泥砂は方広寺造営に伴う整地層であるが、他の層は出土遺物が少なく時期の確定は難しい。この下層は地山の灰黄褐色粘土になる。地山検出面の標高は37.6mである。

調査では灰黄褐色砂泥下面を第1面、地山検出面を第2面としてそれぞれ遺構検出を行った。第1面では桃山時代から江戸時代の遺構を検出した。第2面は出土遺物が少なく時期の確定は難しい。1 - 1区・1 - 2区の調査成果からみて平安時代後期から室町時代に属すると推定できる。

第1面の検出遺構 (図24)

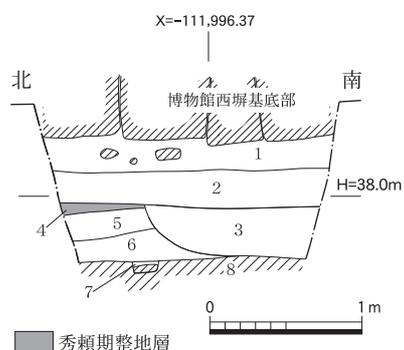
土坑を検出した。

土坑1-1 南東隅部で検出したため、東側・南側は調査区外になる。南北0.5m以上、東西0.4m以上で、深さは約0.3mである。埋土は暗オリーブ灰色粘質土で、大型の丸瓦がほぼ完形で出土した。 期以降に属する。

第2面の検出遺構 (図版5 - 2、図24)

柱穴を検出した。

柱穴1-3 東壁際で検出した。径約0.15m、深さ約0.1



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 3 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土 (土坑1-1)
- 4 10YR5/6黄褐色砂泥
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥
- 6 10YR2/1黒褐色粘質土
- 7 10YR2/2黒褐色砂泥粘質 (柱穴1-3)
- 8 10YR5/2灰黄褐色粘土 (地山)

図23 1 - 3区東壁断面図 (1 : 50)

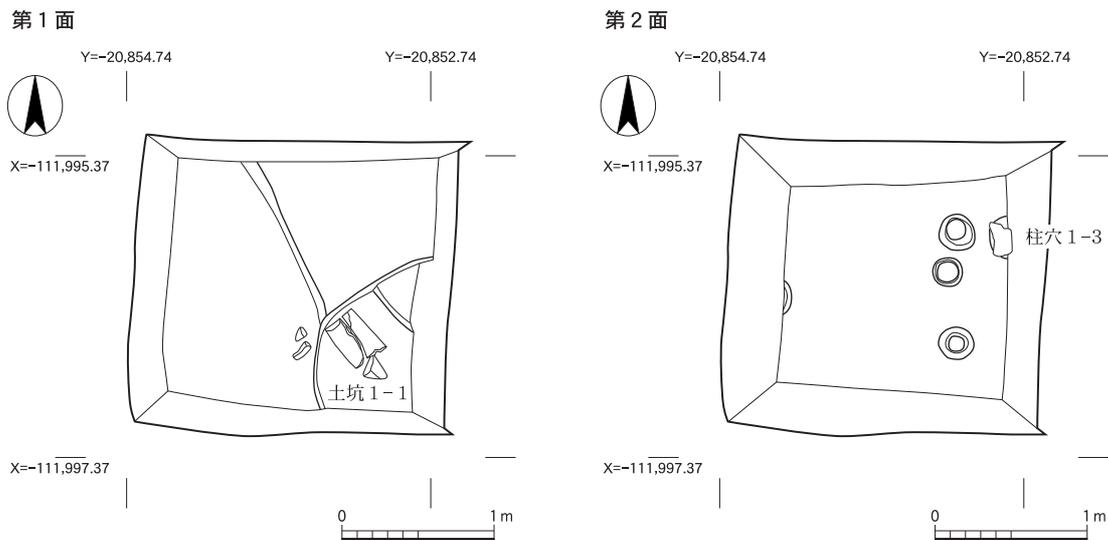


図24 1 - 3区第1面・第2面平面図 (1 : 100)

mである。底部に大きさ約15cmの石を平坦な面を上にして据える。埋土は黒褐色砂泥である。

柱穴群 東部を中心に柱穴を検出した。いずれも掘形は径約0.2m、深さ約0.1～0.2mで、柱あたりは径約0.1～0.15mである。調査区が狭いためまともは不明である。

博物館西塀 調査区東壁で博物館西塀基底部の石積みを検出した。厚さ約0.2mのにびい黄褐色砂礫上面に最下段の石材を並べる。基底部は約0.2mの深さで埋置するのみで、掘形や堅牢な整地層はない。石材は大きさ約40～50cmの花崗岩で、相互に接する部分を直線的に整え密着させて積み上げ、上部に煉瓦塀を造る。地表に露出する石材の前面は、表面を丁寧に加工して稜は丸みをもつ仕上げとなっている。一方、最下段地中部分の調整は表面を粗く仕上げただけである。このことから石材の加工は、最下段を埋置して安定させたのち、地表に露出する部分を丁寧に調整したことが判明した。

2 2次調査

(1) 調査の概要

2-1区は南門北西側、2-2区は新館南東角付近に設定した。遺跡の状況を確認するために実施した試掘調査であるので、断面観察を中心とした。

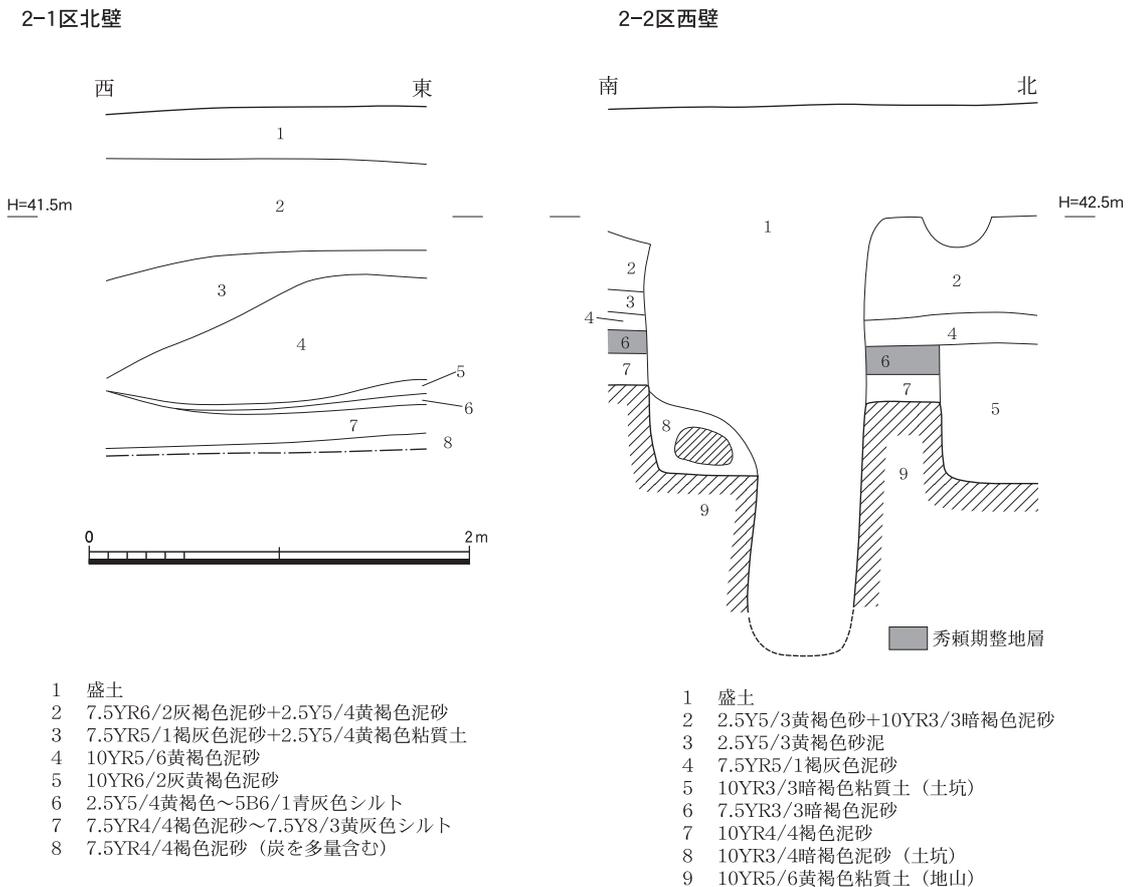


図25 2-1区・2-2区柱状断面図(1:40)

(2) 2 - 1区・2 - 2区の調査

2 - 1区(図版22 - 1、図25) 厚さ約1.5～1.6mにおよぶ盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、順に厚さ約0.05～0.1mの灰黄褐色泥砂、厚さ約0.1mの黄褐色～青灰色シルトがある。期頃の包含層と推定する。

この下層にはシルト質の褐色泥砂～黄灰色シルトなどがある。鉄滓・炭を含むことから土坑の埋土の可能性がある。小破片のため時期の確定は難しいが、室町時代の遺物が少量出土した。

なお、掘削を地表下約1.8mにとどめたため、これより下層の状況については地山を含めて確認していない。

2 - 2区(図版22 - 2、図25) 厚さ約0.8mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は厚さ約0.1～0.15mの褐灰色泥砂がある。褐灰色泥砂は耕作土の可能性があり、江戸時代以降の遺物が出土した。また、鎌倉時代の遺物の混入もみられた。下面で大型の土坑を検出したが、3 - 1区の調査でこの遺構は方広寺南門の礎石据付穴の一つ(柱穴3-17)であることが判明した。

褐灰色泥砂の下層には順に厚さ約0.15mの暗褐色泥砂、厚さ約0.15mの褐色泥砂がある。暗褐色泥砂は3 - 1区の調査成果から豊臣秀頼期の整地層にあたることが判明した。

下層は地山の黄褐色粘質土である。地山検出面の標高は41.5mである。

3 3次調査

(1) 調査の概要

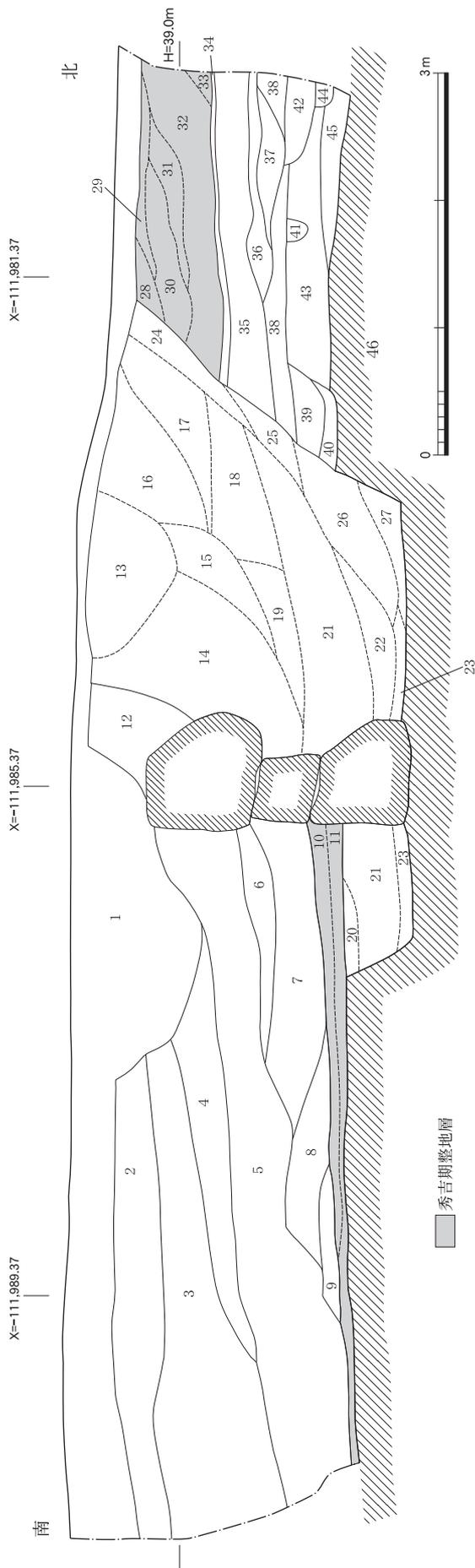
3 - 1区・3 - 2区は新館南側に設定し、主に方広寺石塁および関連施設の調査を目的とした。3 - 3区・3 - 5区は旧休憩所⁵⁾東側に南北方向に細長い形、3 - 6区・3 - 7区は新館北側に東西方向に細長い形で設定し、それぞれ石塁上部の遺跡の状況を明らかにすることを目的とした。また、3 - 4区は新館北東側の事務棟玄関脇、3 - 8区は新館西側のドライエリア南部分に設定し、遺構検出を目指した。

3 - 1・3 - 2区では「国指定史跡方広寺石塁」の延長にあたる方広寺南面の石塁をはじめ方広寺に関連する多くの遺構を検出した。これらの遺構は現地で全面保存されることとなったため調査終了後は土嚢で上面を保護したのち埋め戻した。このため下層遺構の調査は実施していない。

3 - 4区・3 - 7区では平安時代後期から江戸時代前期の遺構・遺物包含層を確認した。なお、3 - 4区では3面に分けて調査を実施した。これら以外の調査区では方広寺造営に伴う整地層、鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物包含層を確認した。

(2) 3 - 1区・3 - 2区の調査

3 - 1区・3 - 2区は東西に並び、連続する遺構が多いのでまとめて報告する。調査は3 - 2区、3 - 1区の順で行った。



- | | |
|---|---|
| <p>1 盛土</p> <p>2 10YR4/4褐色砂泥+10YR6/6明黄褐色砂泥</p> <p>3 10YR4/6褐色砂泥+10YR6/6明黄褐色砂泥 (φ2~10cmの礫を少量含む)</p> <p>4 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥+10YR6/6明黄褐色砂泥</p> <p>5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (φ1~10cmの礫を中量含む)</p> <p>6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (φ2~10cmの礫・瓦を多量含む)</p> <p>7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (φ2~20cmの礫を多量含む)</p> <p>8 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (φ2~15cmの礫を少量含む)</p> <p>9 2.5Y5/2暗灰黄色微砂~細砂</p> <p>10 10YR5/6黄褐色泥砂 (固く締まる φ2~5cmの礫を少量含む)</p> <p>11 10YR4/1褐灰色砂泥 (やや粘質で固く締まる粗砂を少量含む)</p> <p>12 10YR7/4にぶい黄橙色砂泥 (φ10~30cmの礫を多量含む)</p> <p>13 小礫 (φ5~10cm)</p> <p>14 大礫 (φ10~30cm)</p> <p>15 小礫 (φ5~10cm)</p> <p>16 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (10YR6/6明黄褐色微砂のブロック・φ2~10cmの礫を中量含む)</p> <p>17 10YR5/2灰黄褐色砂泥 固く締まる (10YR6/1褐灰色微砂ブロックを含む)</p> <p>18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ10~30cmの礫を多量含む)</p> <p>19 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 (φ5~10cmの礫を多量含む)</p> <p>20 10YR3/2黒褐色粘質土 (φ3~10cmの礫を多量含む)</p> <p>21 10YR3/4暗褐色粘土 (φ10~30cmの礫を多量含む)</p> <p>22 10YR3/1黒褐色粘質土 (φ10~40cmの礫を多量含む)</p> <p>23 10YR3/1暗褐色泥土 (10YR6/6明黄褐色粘質土のブロックを少量含む)</p> | <p>24 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (固く締まる)</p> <p>25 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (固く締まる)</p> <p>26 10YR3/2黒褐色砂泥 (やや粘質)</p> <p>27 10YR3/1黒褐色砂泥</p> <p>28 10YR5/2灰黄褐色砂泥</p> <p>29 10YR7/6明黄褐色微砂</p> <p>30 10YR4/2灰黄褐色砂泥</p> <p>31 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥</p> <p>32 10YR5/1灰褐色砂泥 (固く締まる)</p> <p>33 10YR4/2灰黄褐色砂泥+10YR6/1褐灰色微砂</p> <p>34 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (固く締まる)</p> <p>35 10YR4/2灰黄褐色砂泥</p> <p>36 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~10cmの礫を多量含む)</p> <p>37 10YR2/3里褐色砂泥</p> <p>38 10YR3/2黒褐色砂泥 (やや粘質)</p> <p>39 10YR3/2里褐色砂泥 (締めりわるい)</p> <p>40 10YR4/1褐灰色砂泥</p> <p>41 10YR3/2黒褐色砂泥</p> <p>42 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑)</p> <p>43 2.5Y5/2暗灰黄色微砂</p> <p>44 10YR3/3暗褐色砂泥</p> <p>45 7.5GY7/1明緑灰色微砂</p> <p>46 7.5GY7/1明緑灰色粘質土 (φ0.5~3cmの礫を少量含む 地山)</p> |
|---|---|

図26 3 - 2区西壁断面図 (1 : 50)



Y=-20,790.74

X=-111,983.37

X=-111,993.37

Y=-20,800.74

Y=-20,810.74

Y=-20,820.74

Y=-20,830.74

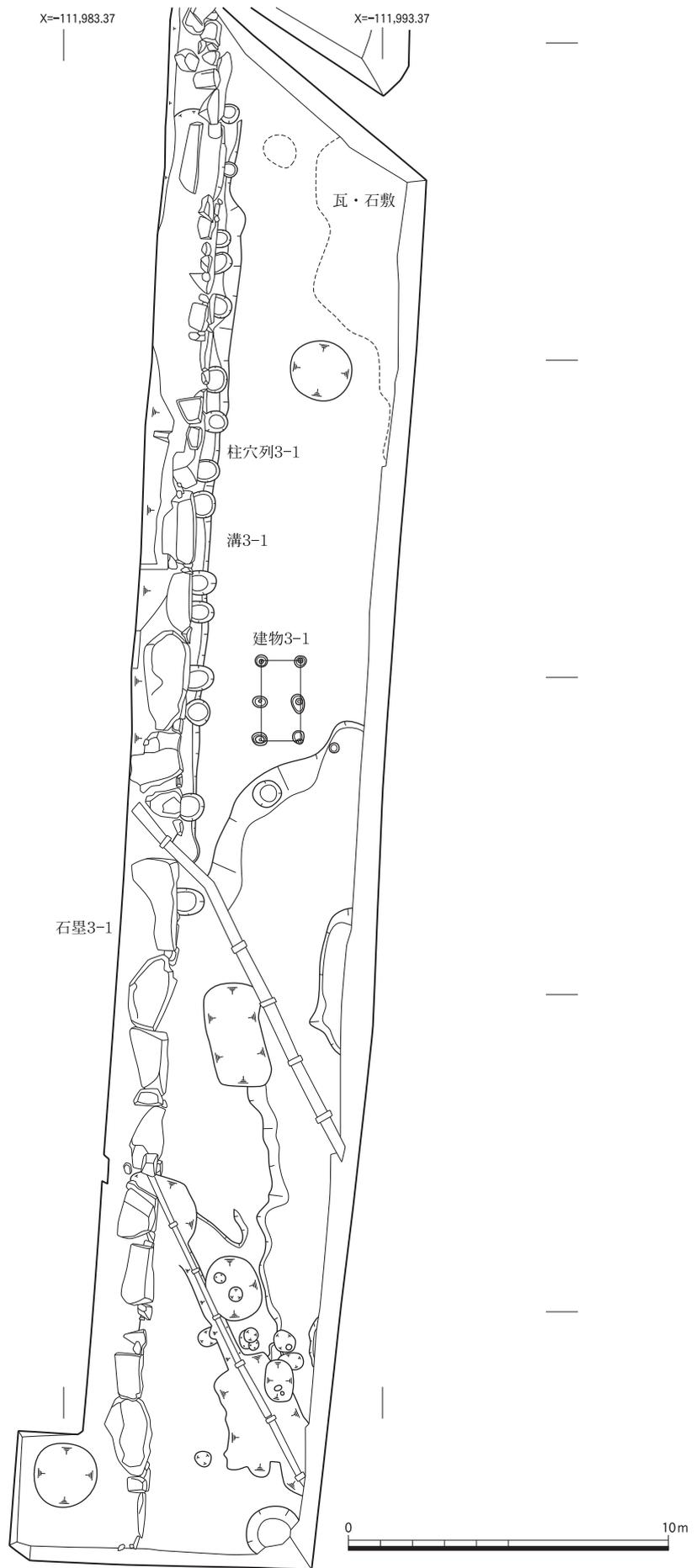


图27 3-1区·3-2区第1面平面图1 (1:200)

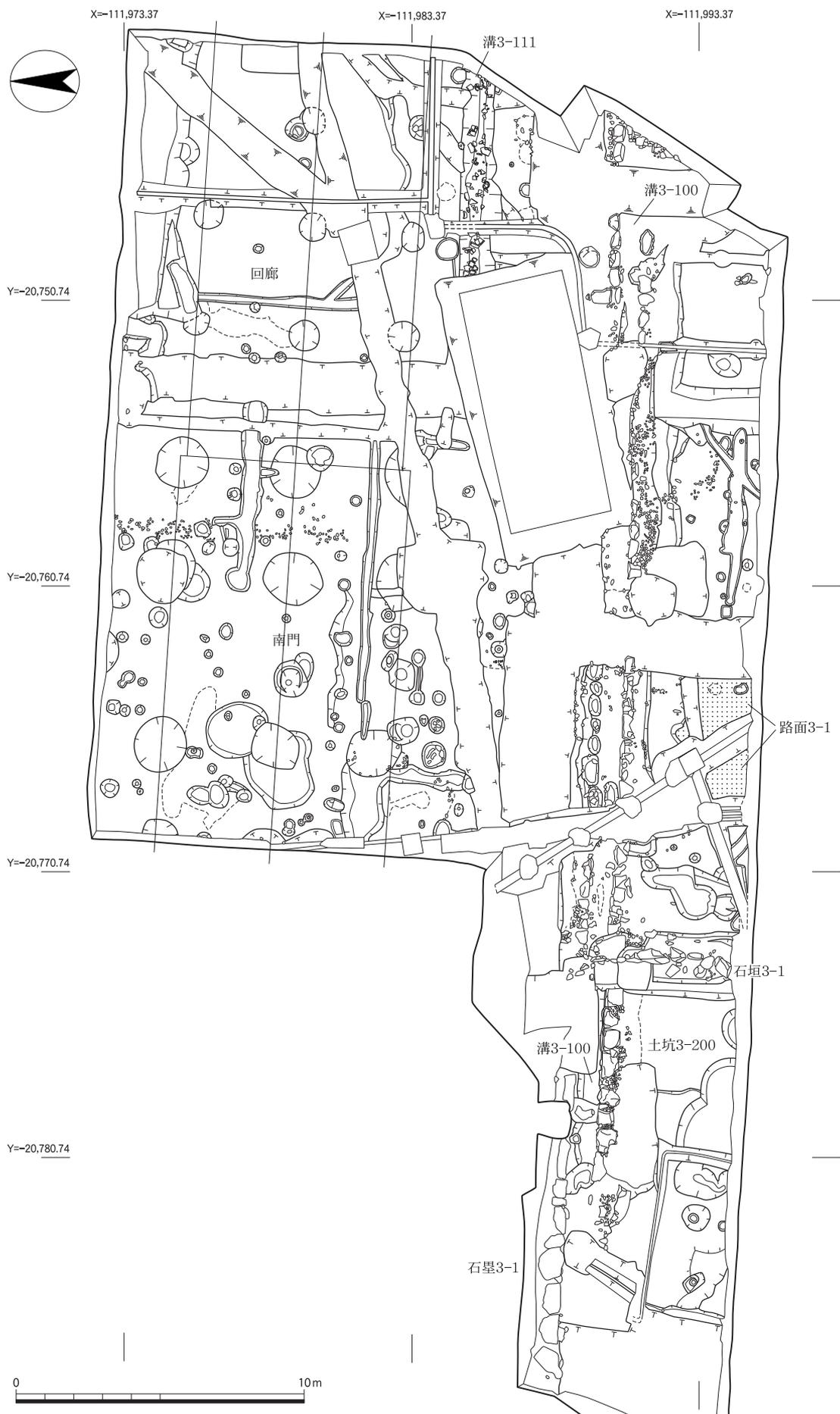


图28 3-1区·3-2区第1面平面图2 (1:200)

層序（図版10 - 1、図26）

調査区周辺は西に向けて傾斜しているが、近代以降に大規模な盛土が行われている。盛土は場所により状況が異なっており、3 - 1区北部では新館建設時の盛土が厚さ約0.2～0.4m、近代の盛土が厚さ約0.9～1.0mで、下面が方広寺の遺構検出面となる。3 - 1区南部では新館建設時の盛土が厚さ約0.6～1.0m、江戸時代の盛土が厚さ約0.2～0.4mで、下面が遺構検出面となる。2区では新館建設時の盛土が厚さ約0.7～2.5m、近代の盛土が厚さ約0.9～1.0mで、下層は方広寺造営時を含む桃山時代から江戸時代の整地層が約0.4～1.7mの厚さで堆積する。地山の明緑灰色粘質土は地表面から約2.4～2.7mの深さで確認した。地山検出面の標高は37.6～38.1mである。

調査では桃山時代から江戸時代の方広寺の遺構面で遺構検出を行った。断割部分を除き、下層遺構の調査は実施していない。

第1面の検出遺構（巻頭図版1～3、図版6 - 1・9 - 1、図27・28）

方広寺の南門・回廊・石塁をはじめ、路面・溝・石垣・鑄造遺構・建物・土坑・柱穴などを検出した。

南門（巻頭図版2、図版6 - 2・3、図29・30） 3 - 1区北部で検出した。西端は調査区外になるが、桁行3間、梁間2間に並ぶ10基の礎石据付穴を確認した。礎石はすべて残っていない。礎石据付穴の配置から門扉の付く中央柱列の前後にそれぞれ4本の柱をもつ八脚門に復元できる。柱間の規模は礎石据付穴の心心で、桁行中央一間約6.0m（20尺）、東西各一間約3.8m（12.5～13尺）、梁間一間約4.0m（13～13.5尺）となる。礎石据付穴の平面形は径約1.8mの円形で、深さは約1.0mである。柱列は西側で約3度北へ振る方位をとる。柱穴3-17・柱穴3-20では攪乱により断面を観察できた。埋土は灰黄褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、拳大の礫と粘土を3回に分けて詰めている。期の遺物が出土しており、ほとんどが大型瓦である。

回廊（巻頭図版2 - 2、図版6 - 2、図31・32） 3 - 1区北東部の南門東側で、3列に東西方向に並ぶ8基の礎石据付穴を検出した。東側は調査区外へ延びる。礎石はすべて残っていない。礎石据付穴の配置から南門に取り付く複廊に復元できる。柱間の規模は礎石据付穴の心心で、桁行・梁間とも約3.75m（12.5尺）となる。礎石据付穴の平面形は径約0.9mの円形で、深さは約0.5mである。柱列は西側で約3度北へ振る方位をとる。柱穴3-5・柱穴3-6では攪乱により断面を観察することができた。埋土は灰黄褐色砂泥・明黄褐色砂泥などで、拳大の礫を含む。期の遺物が出土しており、ほとんどが大型瓦である。

溝3-111（図版7 - 2、図33） 3 - 1区南東部で検出した東西方向の溝である。回廊の南側に並行しているので雨落溝と推定できる。東側・西側とも調査区外へ延びる。西側で約3度北へ振る方位をとる。断面形はU字形で、検出長は約7.1m、幅約1.4m、深さ約0.35mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は褐色砂泥などで、多量の大型瓦が出土した。

路面3-1（図版7 - 1） 3 - 1区南部で検出した。攪乱されている部分が多いため本来の形状は不明であるが、南北2.5m以上、東西4.2m以上の範囲に広がり、小石や砂を敷き詰める。南門正面に位置し、また、4次調査で検出した路面4-1の北延長に位置するので、方広寺南門への通路

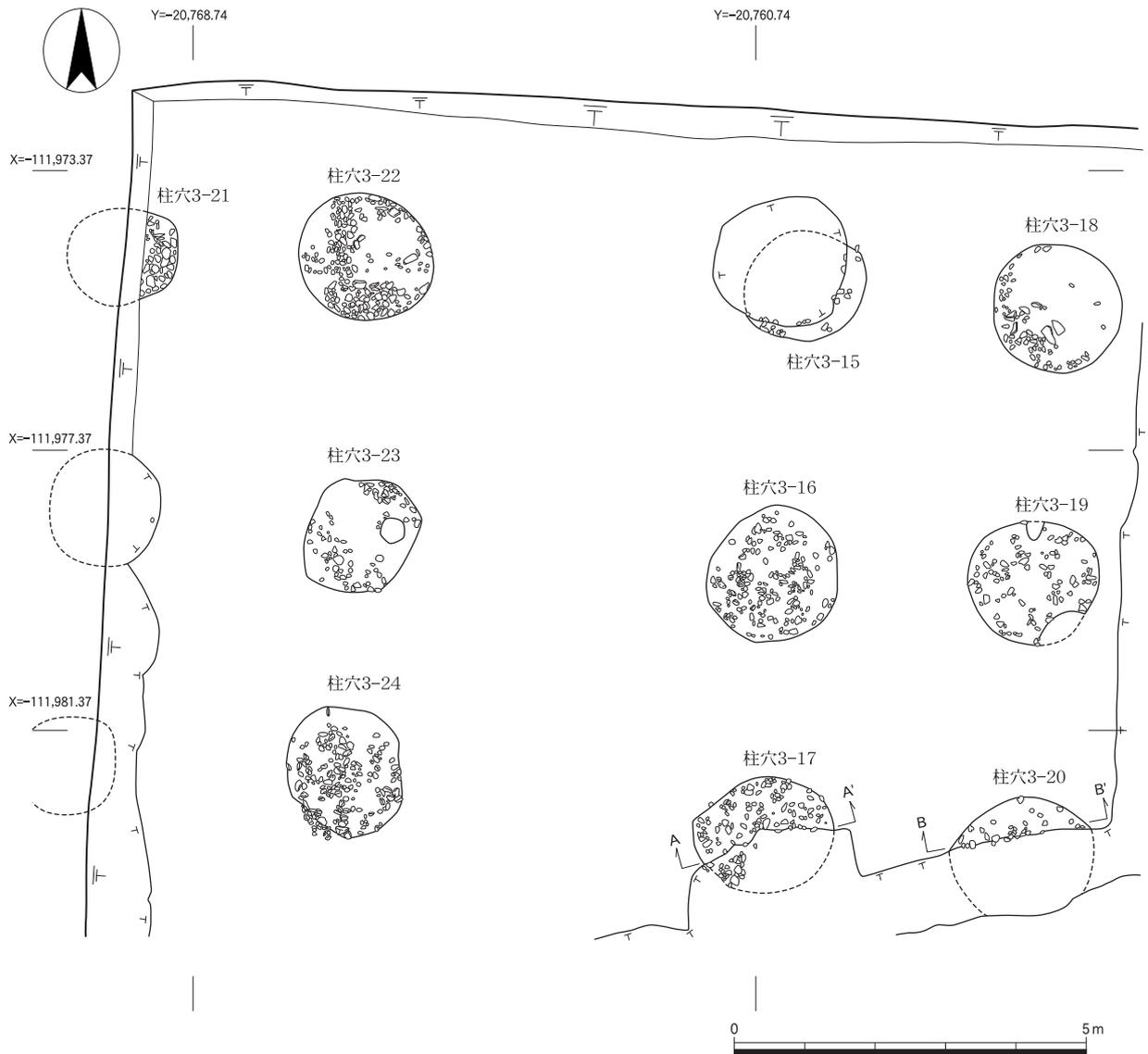


図29 南門平面図(1:100)

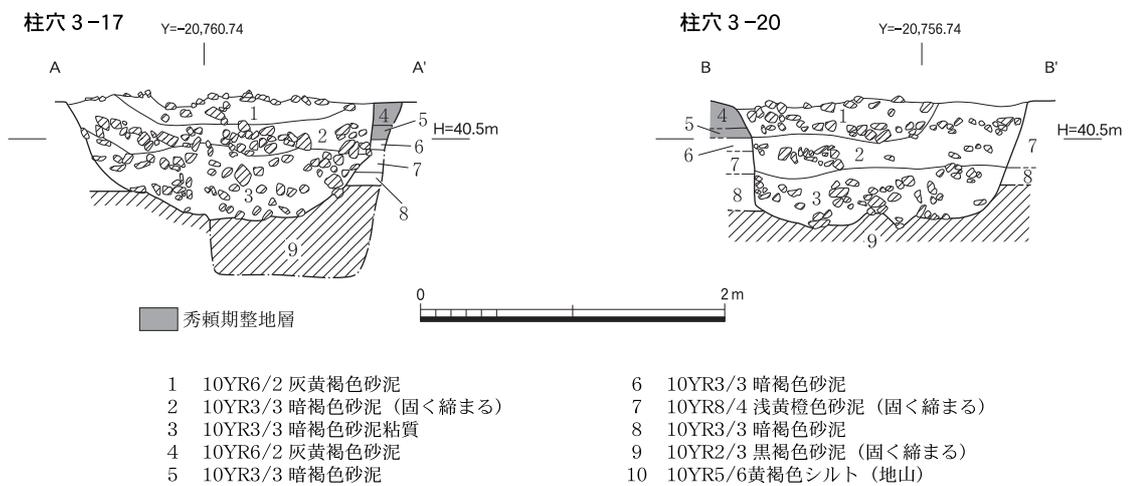


図30 柱穴3-17・柱穴3-20断面図(1:50)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 | 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 (固く締まる) | 7 10YR8/4 浅黄褐色砂泥 (固く締まる) |
| 3 10YR3/3 暗褐色砂泥粘質 | 8 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 | 9 10YR2/3 黒褐色砂泥 (固く締まる) |
| 5 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 10 10YR5/6黄褐色シルト (地山) |

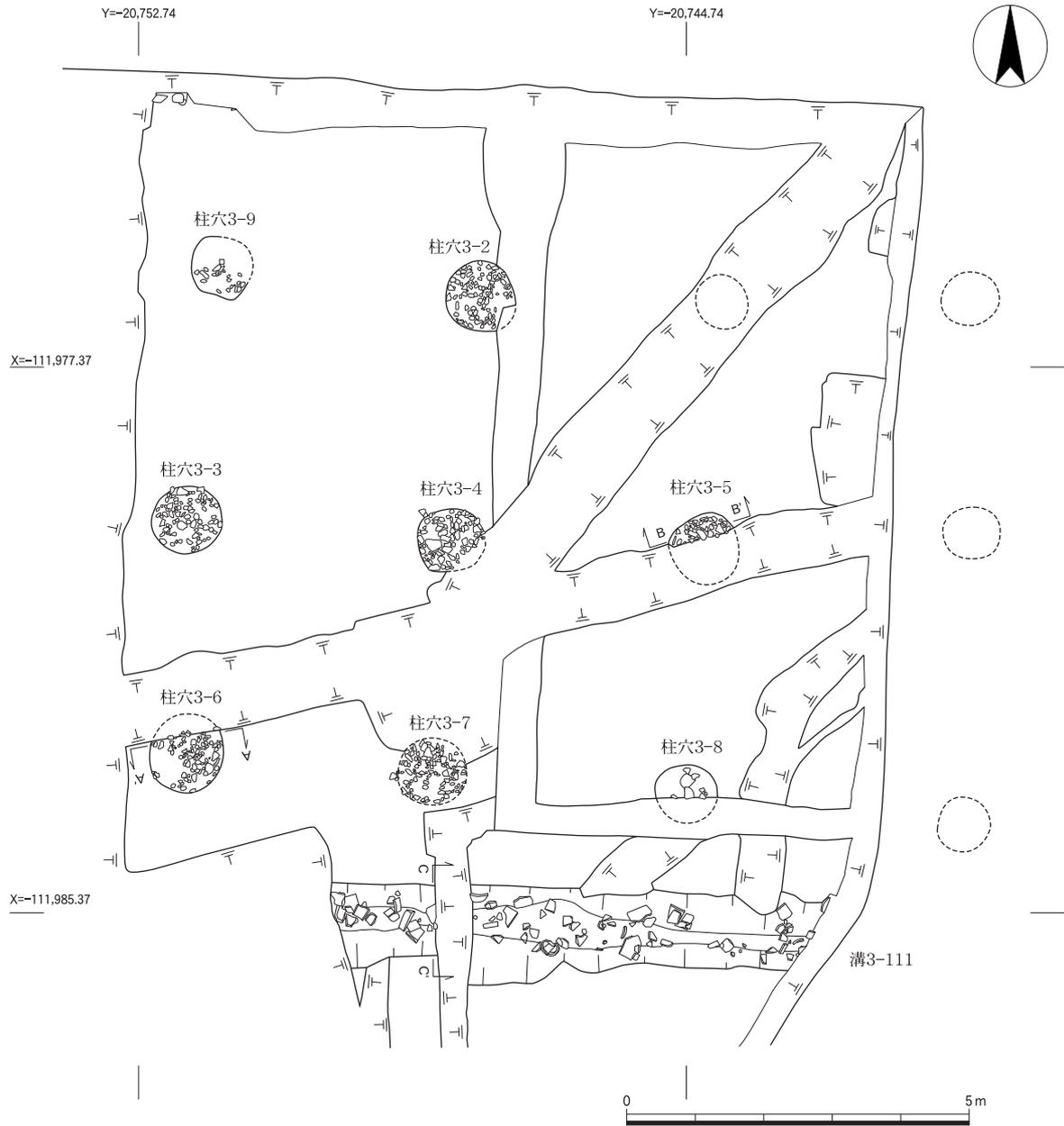
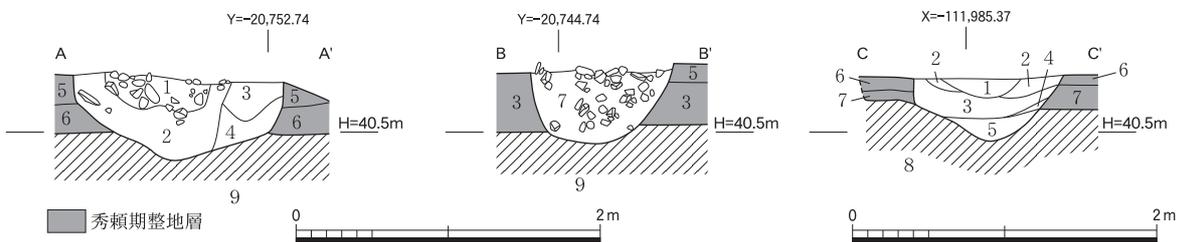


図31 回廊平面図 (1 : 100)



- 1 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 (φ10~20cmの礫を多量含む)
- 2 10YR7/6 明褐色砂泥 (φ4~5cmの礫をわずかに含む)
- 3 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 (固く締まる)
- 4 7.5YR6/8 橙色砂泥
- 5 10YR7/6 明黄褐色砂泥
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 7 10YR7/6 明黄褐色砂泥 (φ5~15cmの礫を多量含む)
- 8 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥
- 9 10YR5/6 黄褐色シルト (地山)

図32 柱穴3-5・柱穴3-6断面図 (1 : 50)

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (φ2~3cmの礫を少量含む)
- 2 10YR8/6 黄橙色粗砂
- 3 7.5YR4/4 褐色砂泥 (瓦を多量含む)
- 4 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 5 7.5YR5/8 明褐色粗砂
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 7 7.5YR3/3 暗褐色砂泥
- 8 10YR5/6 黄褐色シルト

図33 溝3-111断面図 (1 : 50)

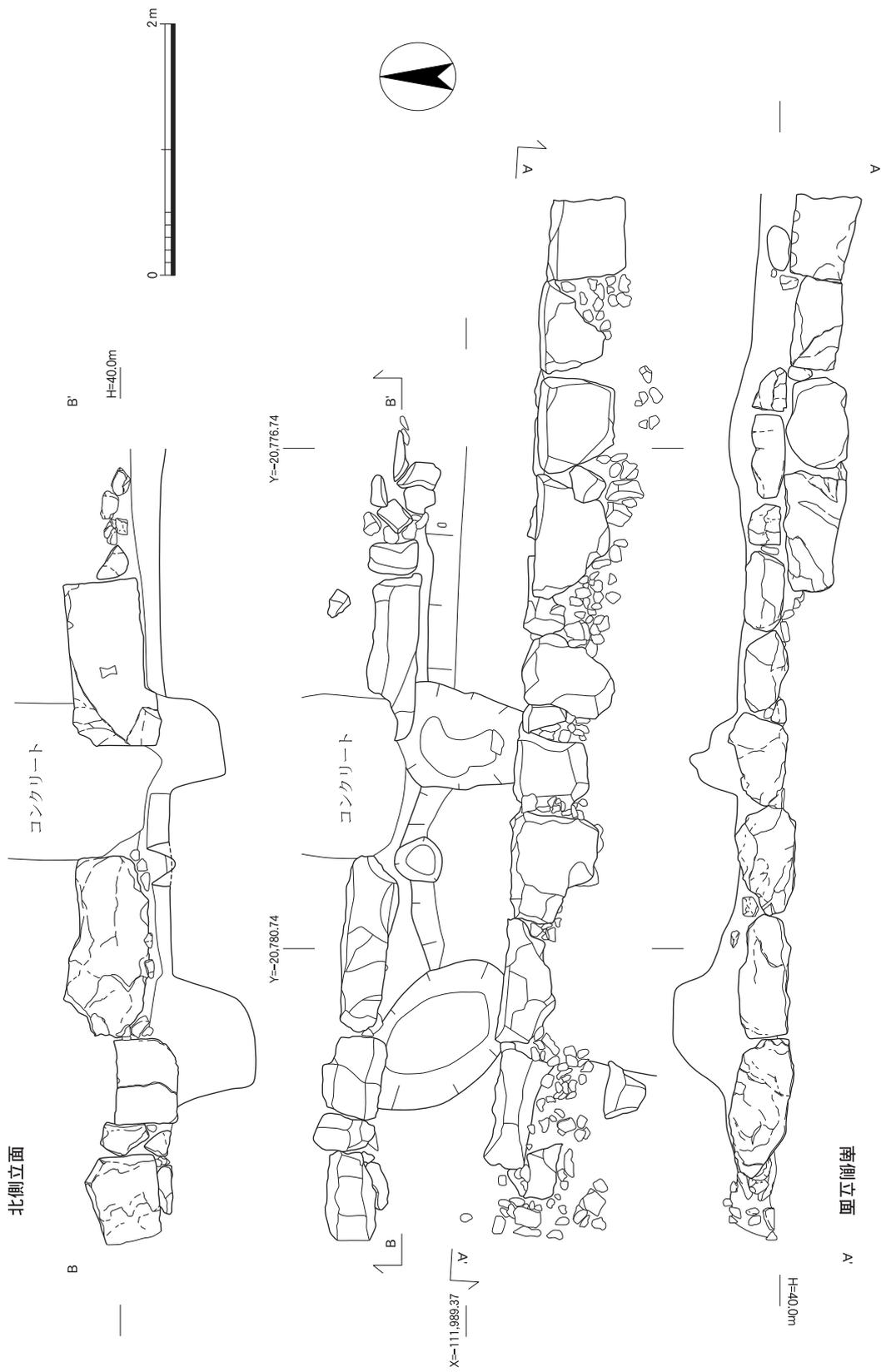


図34 溝3-100実測図1 (1 : 50)

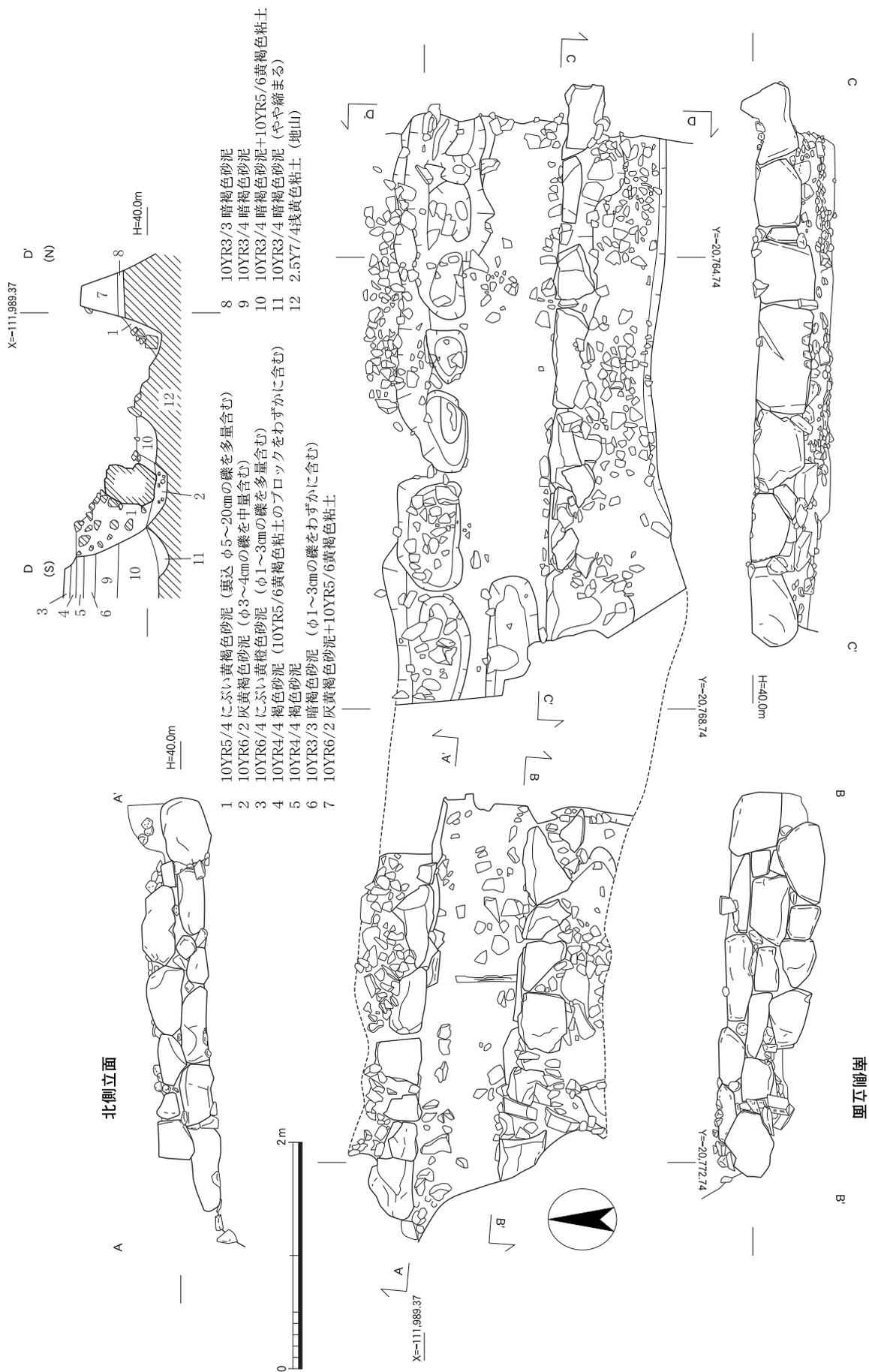


図35 溝3-100実測図2 (1 : 50)

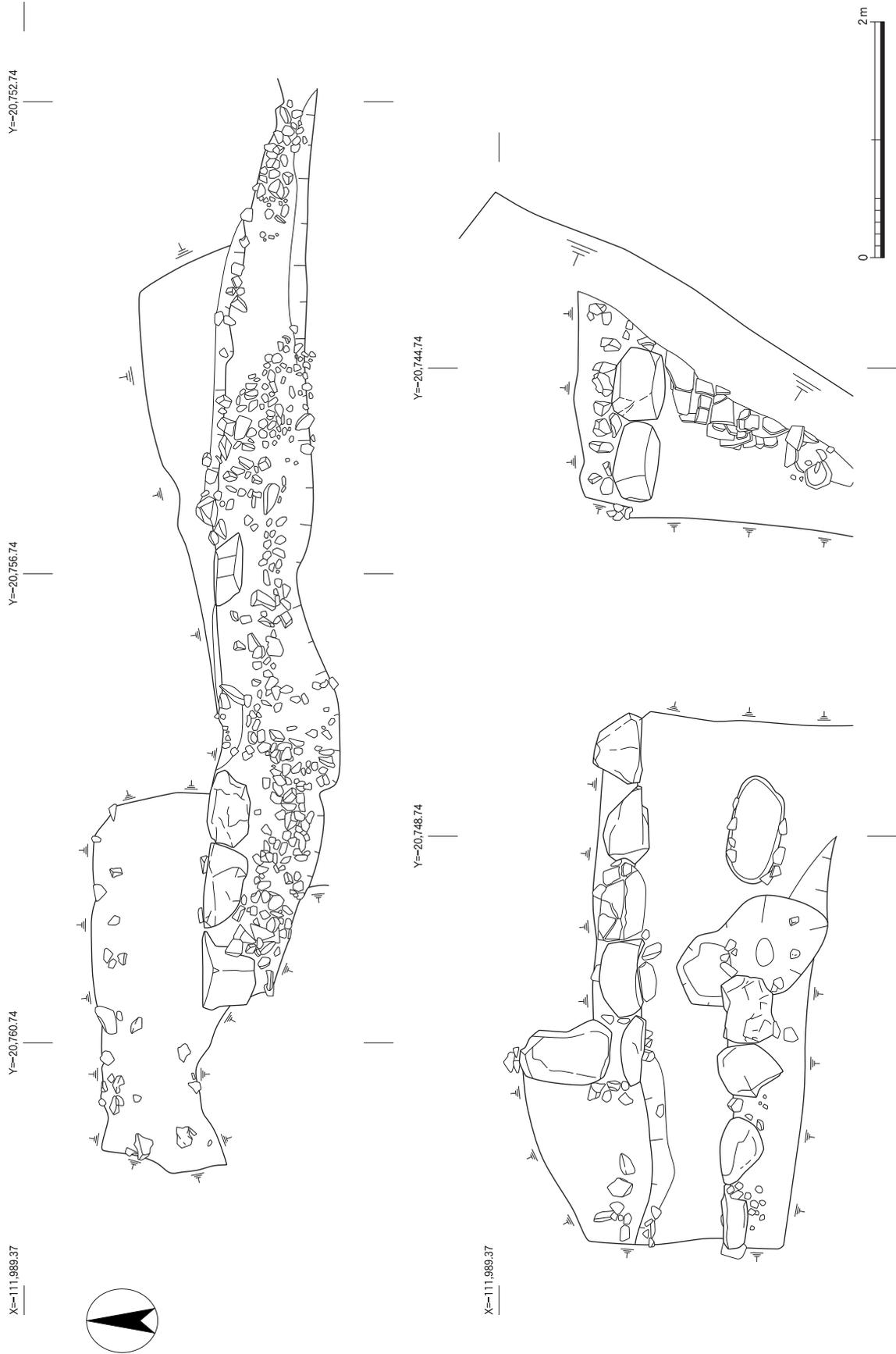


图36 溝3-100実測図3 (1 : 50)

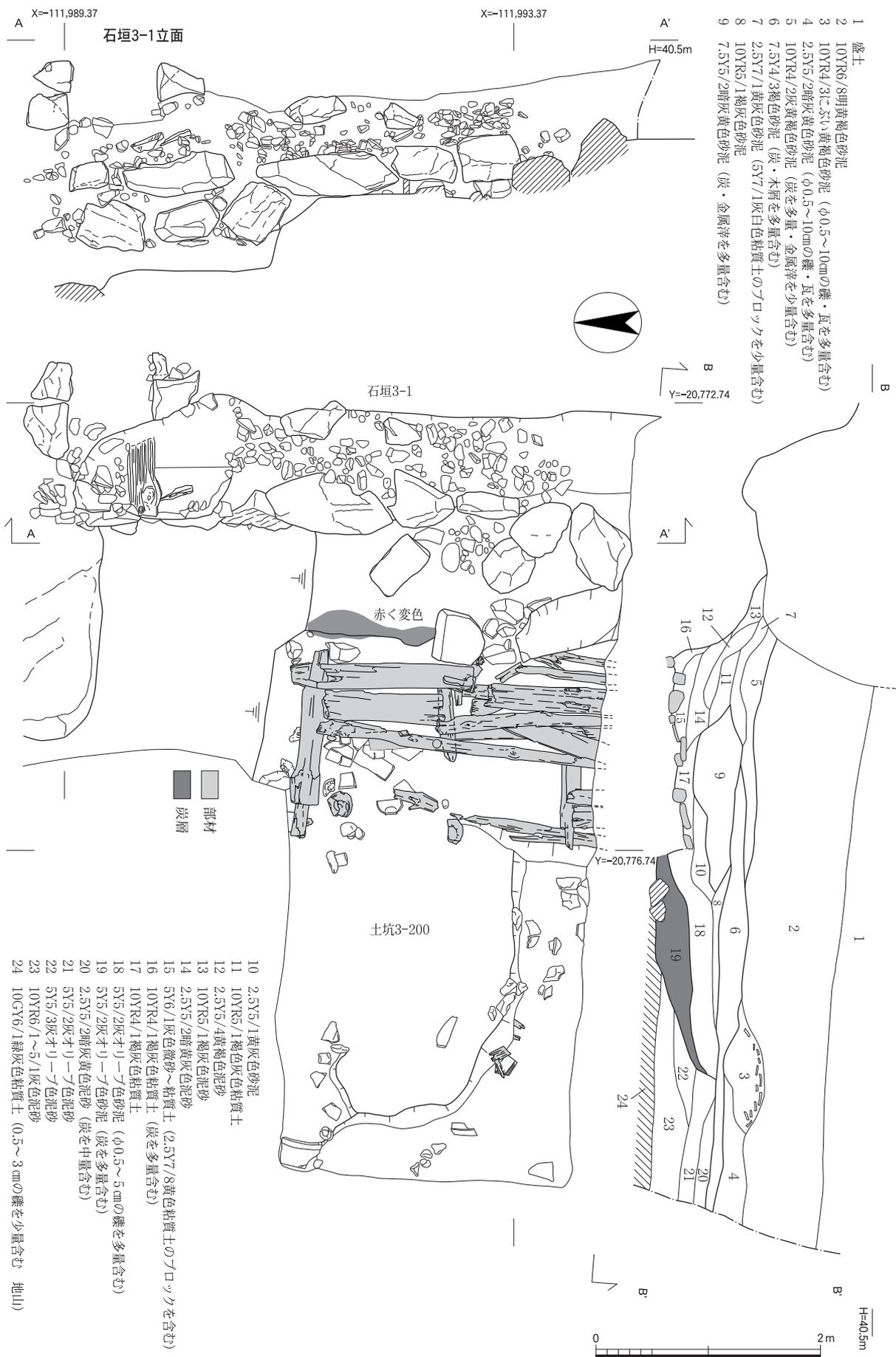


図37 土坑3-200・石垣3-1実測図 (1 : 50)

と推定できる。

溝3-100（図版7-3、図34~36） 3-1区南部・3-2区南東部で検出した東西方向の石組溝である。後述する石罫3-1の東延長に位置する。西側は石罫3-1に接する部分で溝3-1につながり、東側は調査区外へ延びる。西側で約3度北へ振る方位をとる。断面形はコ字形で、検出長は約37.0m、幅約0.8mである。深さは約0.5~0.8mで、底部は西に向けて傾斜するため西側ほど深くなる。西端では長さ0.7m以上、幅約0.3mの板を底に据える。排水の誘導に使用された可能性がある。石組は抜き取られた部分があるが、北面・南面の両側で地山を布掘りして小礫を多く含む灰黄褐色砂泥を敷いたのち、大きさ約30~90cmの石を1段から3段ほど垂直に積み上げる。石材の中には石罫3-1の石材を転用したものが含まれる。埋土は裏込となる掘形がにぶい黄褐色砂泥で、溝内が黒褐色砂泥などである。掘形からは 期~劬期の遺物とともに石仏・石塔・墓標などの石造物が多く出土した。溝内からも 期~劬期の遺物が出土した。

石垣3-1（図版8-2、図37） 3-1区西部で検出した西面する南北方向の石垣である。北側は石罫3-1に接し、南側は調査区外へ延びる。検出長は約4.9m、残存高は約1.0mである。大きさ約50~100cmの石材を2段以上積み上げ、隙間には拳大の礫を詰める。南門の西端を南に延長した位置にあたり、ここを段差として東側が2m以上高くなる。裏込の埋土は礫を含む灰褐色砂泥などで、 期の遺物が出土した。

土坑3-200（巻頭図版3-1、図版8、図37） 3-1区西部、石垣3-1の西側に接する位置で検出した。溝3-100に伴う 期~劬期の整地層の下面、石垣3-1下部を埋め立てた整地層の上面で、南北2.8m以上、東西約1.8mの方形の範囲に組まれた部材を認めた。南側は調査区外になるため遺構全体の規模は不明であるが、埋土の状況や断面観察から東西は4m程度であったと推定できる。部材には東西方向の3本の角材と、さらにこの上に並べた南北方向の数本の材がある。東西方向の部材は約1mの等間隔で平行に並び、直径約20cmの太い杭の上に桝で組み合わせて固定する。東西方向の部材の検出長は約1.8mであるが、西端部には桝があることから、さらに西側に部材がつながると推定できる。南北方向の部材は形状や長さが不均一な板材または角材で、一部には転用材を含むようである。南北方向の部材は東西方向の部材の上に乗せ渡したり桝で組み合わせたりしたのち、さらに数箇所を銅釘で固定する。部材の樹種はマツ・ヒノキ・スギである。部材の下部には部分的に平瓦を敷き、下層には細かい木炭を詰める。炭を多量に含む灰オリーブ色砂泥は部材よりもさらに西に広がる。礫や遺物を含まないことから防湿のための工夫と考えられる。また、部材の上部には炭・焼土・金属滓を大量に含む埋土が堆積する。

これらのことから土坑3-200は鑄造に関係する遺構と判断でき、規模と形状から大型鑄造品の鑄型を設置する定盤の基礎部分に相当する可能性が高い。定盤は遺存していないが、部材の構造は東大寺戒壇院出土の梵鐘鑄造遺構⁶⁾と類似する。鑄造工程では設置した鑄型へ溶金を流し込む際に石垣3-1の段差を活用した可能性がある。また、土坑3-200の周囲の地表面は西に向けて緩やかに傾斜しており、鑄造時に排出する炭や灰を掻き出すのに適していたと考えられる。

埋土からは多量の鞆羽口と金属滓のほか数本の鉄釘・銅釘が 期遺物とともに出土した。しか

し、そのほかの鋳型や溶解炉の炉壁などの鋳造に係る遺物は確認していない。石垣3-1よりも新しいことから豊臣秀頼の時期の遺構であることがわかる。

石罫3-1（巻頭図版1、図版9-2・10、図38～42）3-1区西部から3-2区西端までにかけて検出した。方広寺南面の石罫で、西側は調査区外へ延び現存する石罫につながる。西側で約3度北へ振る方位をとる。検出長は約65.0mである。上部は石材が撤去されているが、巨石をほぼ垂直に積み上げており、1段目あるいは2段目までが遺存している状況から本来の高さは2.5m以上であったと推定できる。1段目の石材は隙間を埋めるものを除くと20石あり、大きさは幅約180～270cm、高さ50～160cm、厚さ60～150cmである。また、2段目の石材は幅約50～100cm、高さ約40～70cmで、1段目より小振りとなる。石材の種類はほとんどが石英班岩・花崗閃緑岩・黒雲母花崗岩で、他にチャート・フォルンフェルス・珪岩などがある。1段目の石材には石割痕が残るものが多く、長さ約3～7cm、幅約5～14cm、深さ約2～9cmの楔の痕が連続する。また、表面を調整している石材や刻印をもつ石材がある。刻印は白形で溝3-100に転用された石材で確認した。

3-2区西端では南北方向に断割を入れ、石罫の構築方法を観察した（図26）。遺存状態は非常に良い。最初に1段目の石材を据えるために地山を幅約3.4m、深さ約0.4～0.5mに布掘りし、石罫裏側に土盛りする。次に布掘りの底部に大きさ約15～25cmの根石を敷き、1段目の石材を据えたのち石材と土盛りの間に土を充填する。さらにその上から小礫を入れ、石材裏側には大礫を詰める。小礫と大礫の層は石のみで埋土は含まない。裏込からは礫とともに石塔・石仏などが多数出土した。また、2区西端からは錫杖が出土した。

また、3-2区南東部で石罫構築後の湧水のため石罫南側の当時の地表面が湿地状となった状況を認めた。南東部では礫や瓦を敷き詰めて整地を行っている。

溝3-1 3-2区北部で検出した東西方向の溝である。石罫3-1に並行して裾に接する。東側は溝3-100につながり、西側は2区中央付近で不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、検出長は約38.0m、幅約0.5～1.0m、深さ約0.2mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土に炭を含み、期の遺物とともに多量の大型瓦が出土した。

柱穴列3-1（図43） 溝3-1の下層で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は14基で、いずれも石罫3-1の裾に接する。検出長は約25.0mである。掘形は径約0.5～0.8m、深さ約0.2～0.5mで、明瞭な柱あたりはない。柱穴の間隔は不揃いで、約1.0～2.0mの間隔で2～3基がまとまって並ぶ。埋土には大きさ約10～25cmの礫を含み、大型瓦が出土した。

建物3-1（図44） 3-2区中央で検出した桁行2間、梁間1間の小規模な掘立柱建物である。柱間はすべて約1.2mである。掘形は径約0.3～0.5m、深さ約0.3mで、柱あたりは径約0.2mである。出土遺物はない。

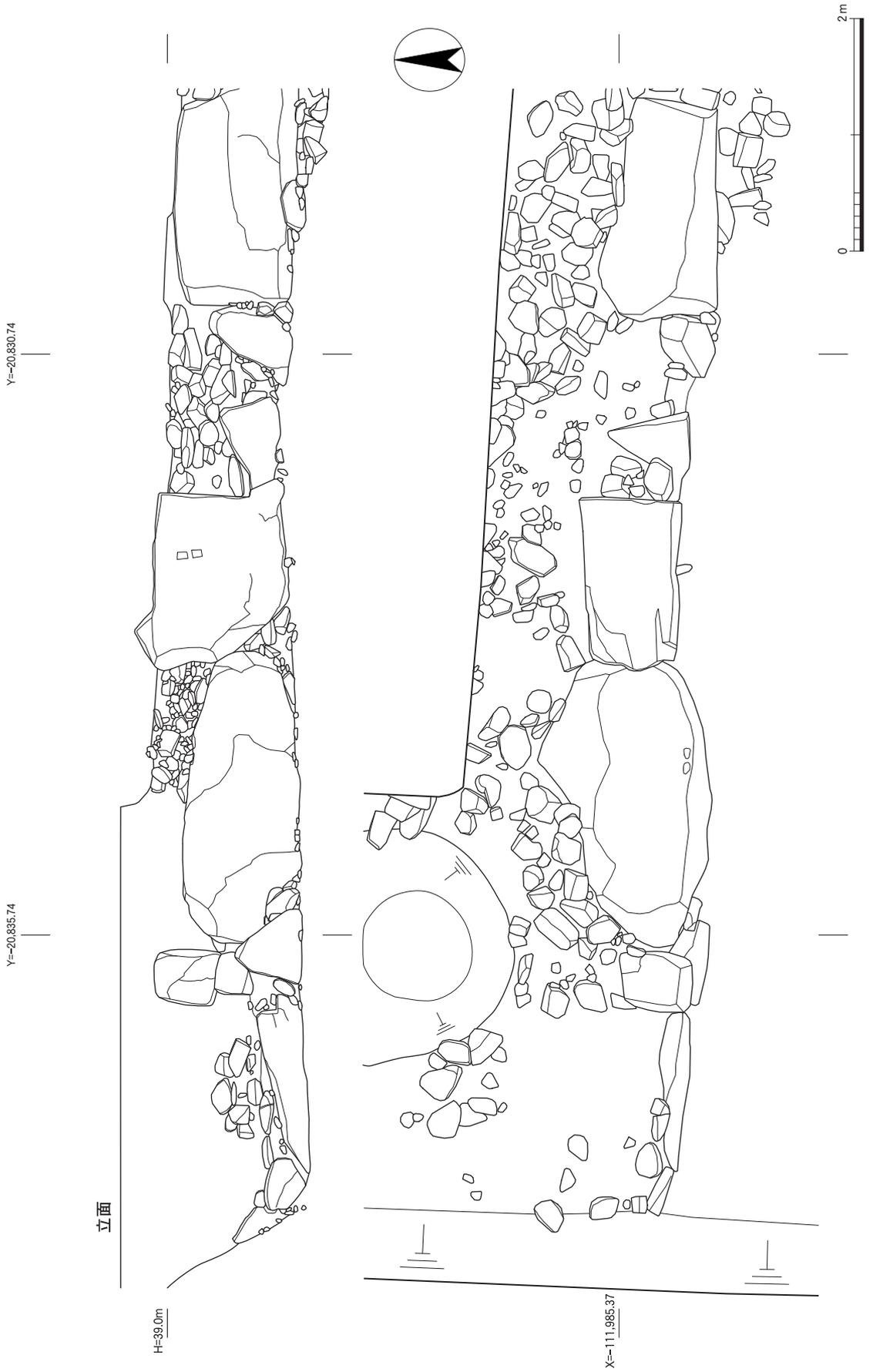


图38 石墓3-1实测图1 (1 : 50)

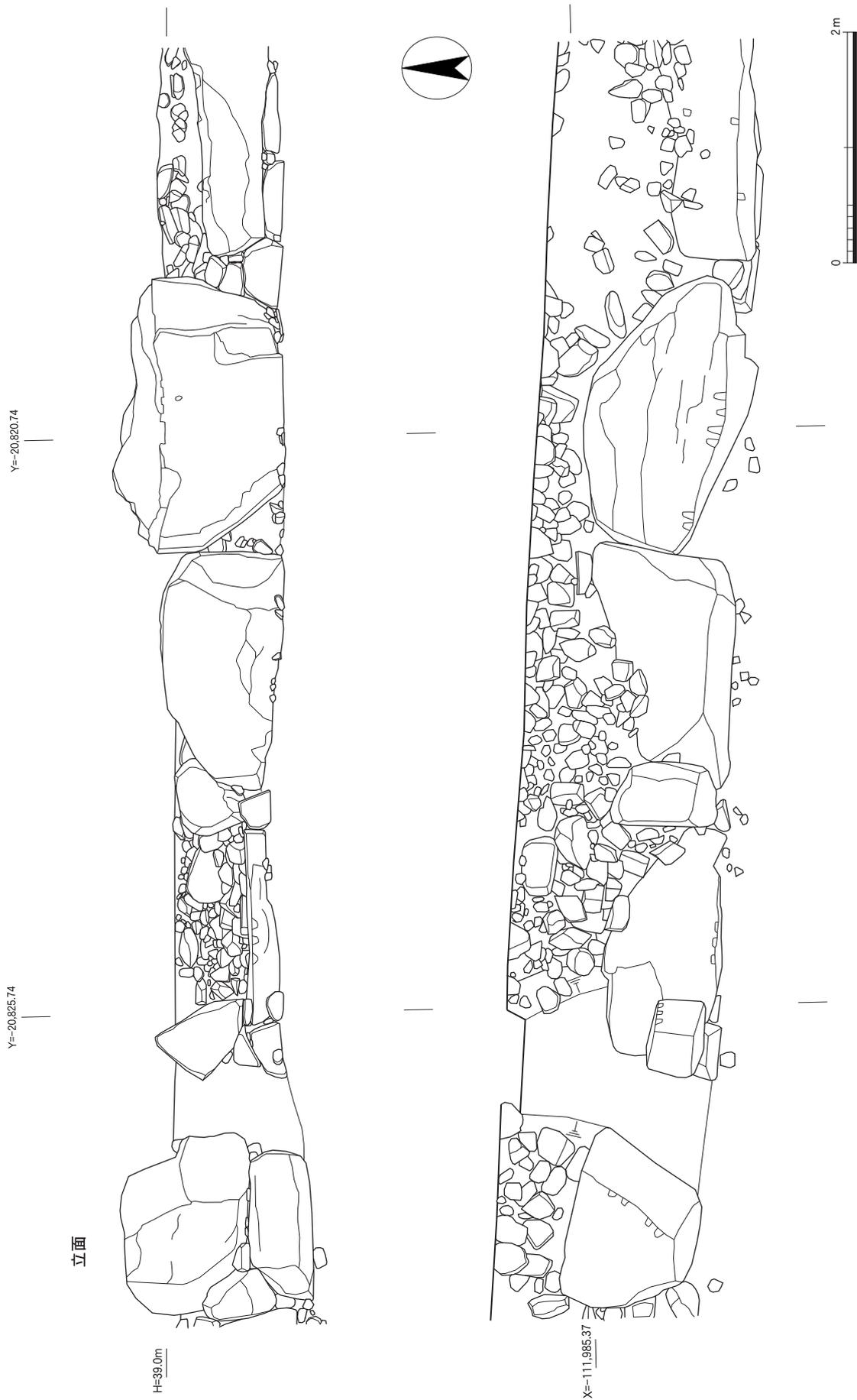


图39 石墓3-1实测图2 (1 : 50)



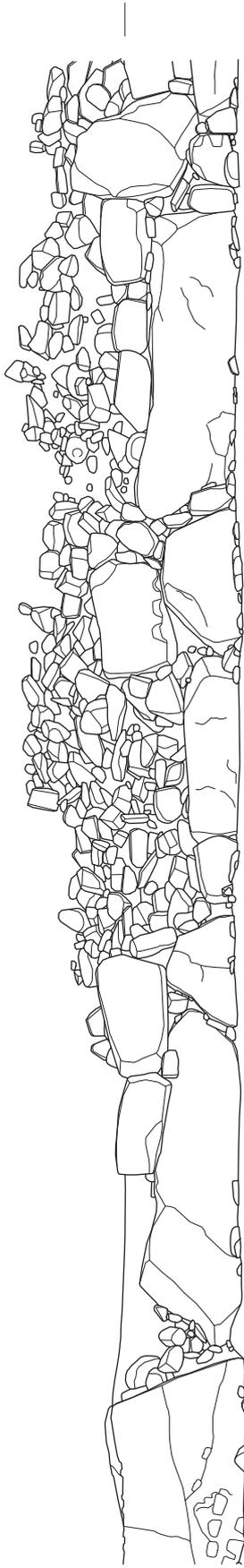
图40 石墓3-1实测图3 (1 : 50)

Y=-20,805.74

Y=-20,800.74

Y=-20,795.74

立面



H=39.0m

X=-111,985.37

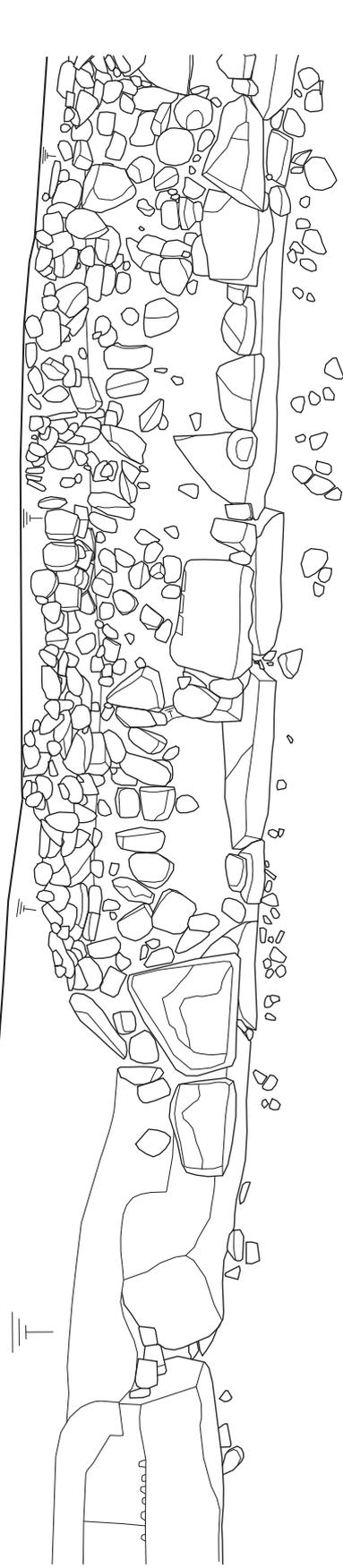


图41 石罍3-1実測图4 (1 : 50)

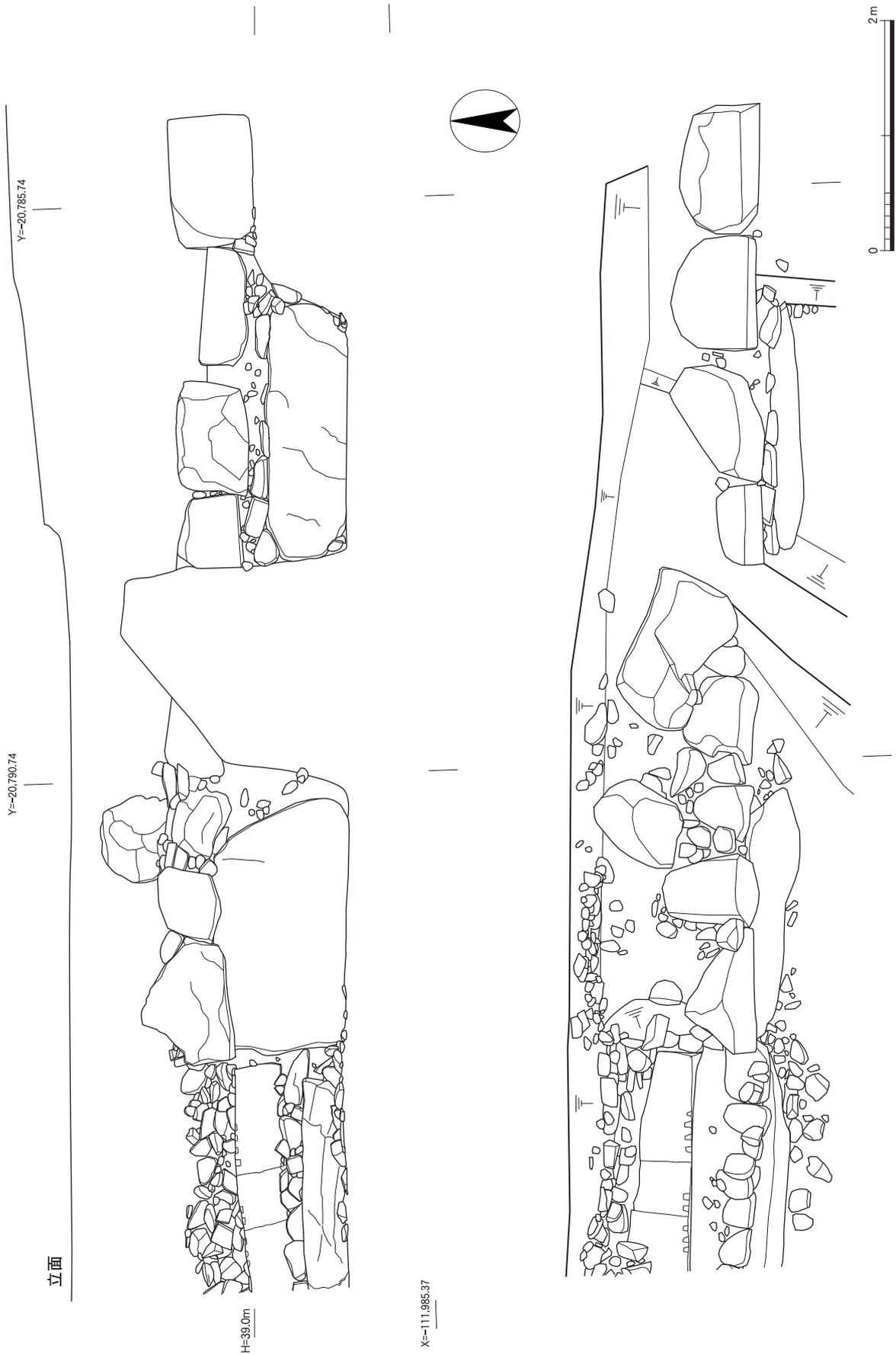


图42 石罟3-1实测图5 (1 : 50)



图43 柱穴列3-1实测图 (1 : 50)

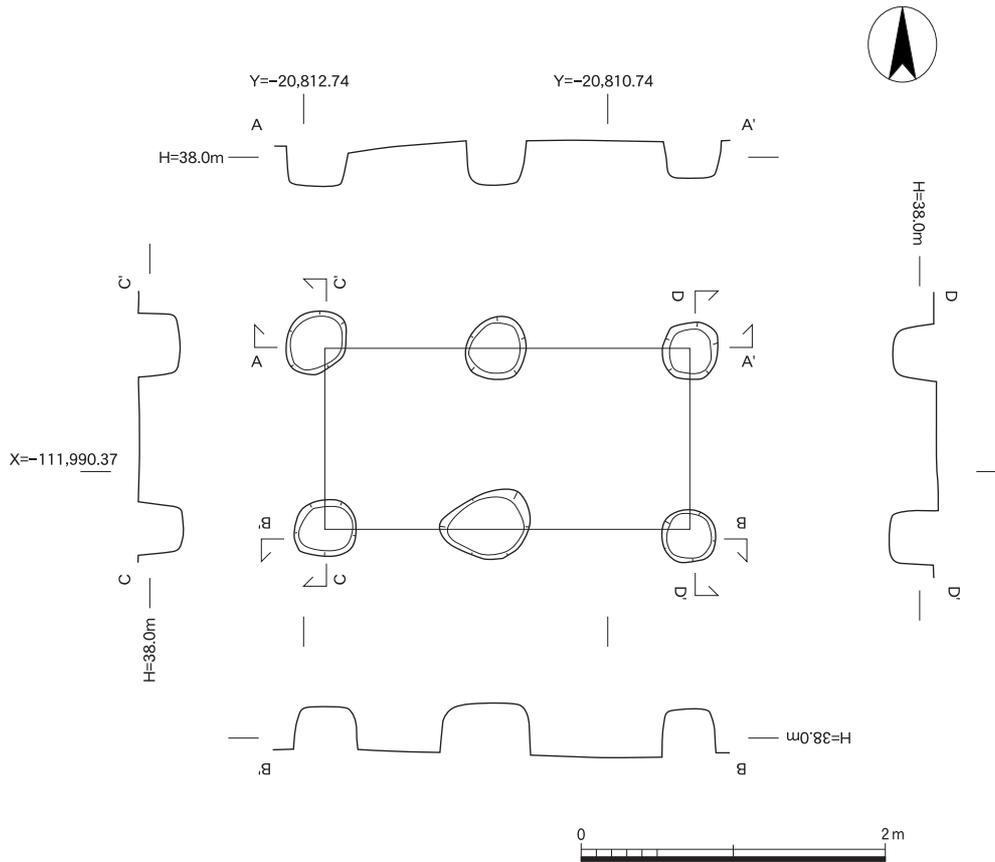


図44 建物3-1実測図（1：50）

（3）3 - 3 区の調査

層序（図45）

調査区周辺は北から南に向けて傾斜しており、調査区北端の地表面は南端より約0.7m高い。

厚さ約0.5～0.6mの新館建設時の盛土・厚さ約0.3～0.5mの近代の盛土の下は、順に厚さ約0.1～0.5mの方広寺造営に伴う整地層である黄褐色粘質土など、厚さ約0.2～0.5mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒褐色砂泥がある。地山の褐灰色粘土は地表下約3.2mで確認したが、調査区中央部付近から南に向けて落ち込んでおり、黒褐色砂泥との間には2m以上の厚さでオリーブ黒色粘質土・黒色泥土などが堆積する。これらは締まりがわるい土層で遺物は出土していない。地山検出面の標高は37.4～37.9mである。

調査では方広寺造営に伴う整地層上面では遺構を認めなかったため、この下面を第1面として遺構検出を行った。鎌倉時代から室町時代に属するが、遺構数は少ない。

第1面の検出遺構（図版11 - 1、図46）

溝などを検出した。溝は2条とも東西方向の溝で、調査区外へ延びる。細長い調査区と直交していたため底部を確認することができなかった。詳細は不明である。ほかには顕著な遺構はない。

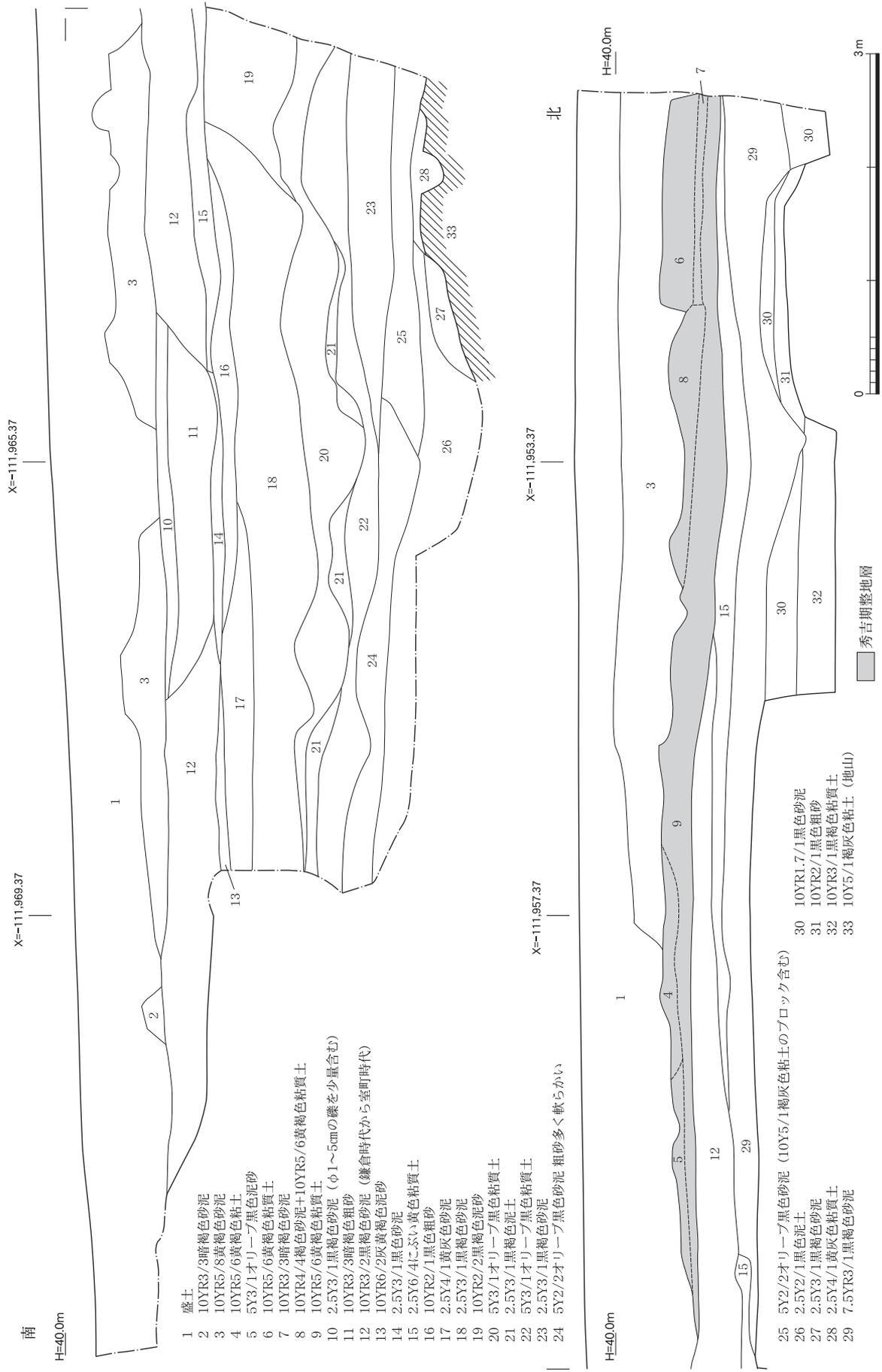


図45 3-3区西壁断面図(1:50)

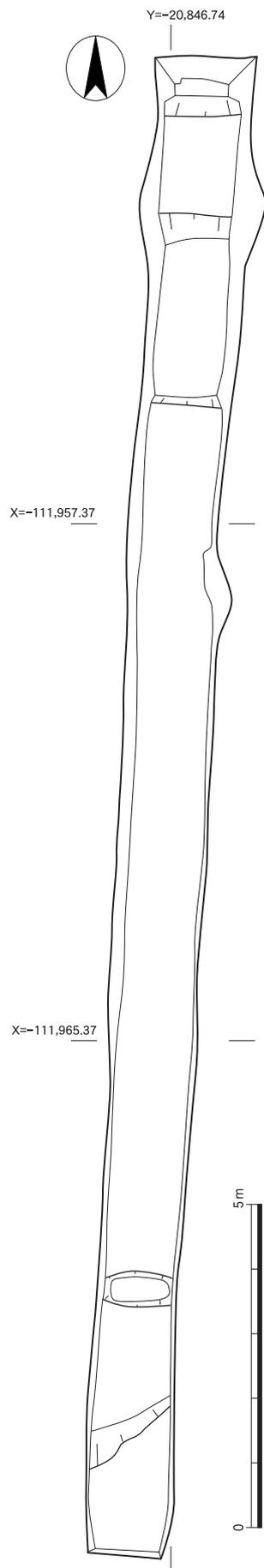


図46 3 - 3区第1面平面図
(1 : 100)

(4) 3 - 4区の調査

層序 (図47)

調査区周辺はほぼ平坦である。

厚さ約0.7mの新館建設時の盛土の下は、順に厚さ約0.6~0.7mの方広寺造営に伴う整地層、厚さ約0.1~0.2mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒褐色砂泥がある。この下層は地山の黄褐色粘質土などである。地山検出面の標高は40.5mである。方広寺造営に伴う整地層はにぶい赤褐色砂・オリーブ黒色粗砂などを次々と積み上げた状況にある。期の土器類とともに多量の焼土・銅滓などが出土した。大仏の鑄造および大仏殿造営と同時に周辺の整地が行われたことがわかる。確実に豊臣秀頼の時期の整地層である。

調査では方広寺造営に伴う整地層上面を第1面、下面を第2面、黒褐色砂泥下面を第3面として、それぞれ遺構検出を行った。第1面では桃山時代から江戸時代の遺構、第2面では鎌倉時代から室町時代の遺構、第3面では平安時代後期から鎌倉時代の遺構を検出した。

なお、図47はX=-111,941.37ラインに設定したセクションの断面図である。

第1面の検出遺構 (図版11 - 2、図48)

路面・溝・土坑・柱穴などを検出した。

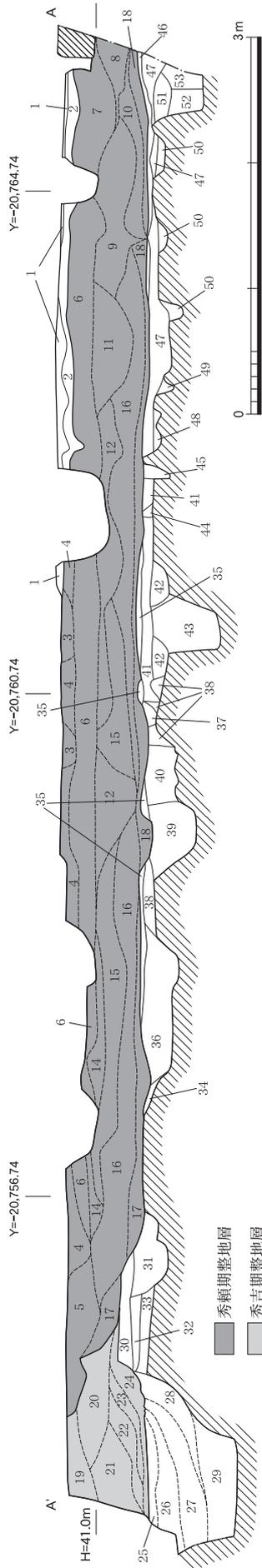
路面3-2 西部で検出した。本来の形状は不明であるが、南北7.3m以上、東西6.0m以上の範囲に広がる。上面が削平されたためか遺存部分は断片的であるが、砂質の整地土を叩き締めた上面に小石や砂で舗装する。3 - 1区で検出した路面3-1の北延長に位置することから方広寺境内の通路と推定できる。検出高は路面3-1よりも約0.5m高い。

第2面の検出遺構 (図版12・13 - 1・2、図49)

路面・溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。

溝3-120 中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区外へ延びる。北側で2~3度東へ振る方位をとる。断面形は浅いU字形で、検出長は約6.8m、幅約1.7~2.0m、深さ約0.2~0.3mである。底部はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂泥などで、期の遺物が出土した。

溝3-305 東壁際で検出した南北方向の溝である。北側・南側と



- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂 (固く締まる φ0.2~1cmの礫を多量含む 路面3-2)
- 2 10YR4/4褐色砂泥 (固く締まる路面の整地土)
- 3 10YR3/4暗褐色砂泥+2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 4 10YR3/3暗褐色粗砂 (銅滓を少量・焼土を多量含む)
- 5 10YR4/4褐色砂泥 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 6 10YR3/3暗褐色粗砂 (φ0.5~2cmの礫・銅滓を多量含む)
- 7 5YR5/4にぶい赤褐色砂 (炭を多量・焼土を少量含む)
- 8 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 (銅滓を多量・炭を少量含む)
- 10 7.5YR3/4暗褐色砂泥+10YR3/2黒褐色砂泥 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 11 10YR3/3暗褐色砂泥 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 12 10YR3/4暗褐色粗砂+粗砂 (銅滓・焼土を少量含む)
- 13 7.5YR4/3褐色粗砂 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 14 10YR4/4褐色粗砂
- 15 7.5YR4/4褐色粗砂 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 16 7.5YR4/3褐色粗砂 (銅滓・炭・焼土を少量含む)
- 17 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 18 2.5Y3/1黒褐色粘質土+2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂
- 19 7.5YR3/4暗褐色砂泥+10YR4/4褐色砂泥
- 20 10YR3/3暗褐色粗砂 (φ0.5~2cmの礫を少量含む)
- 21 7.5YR4/4褐色砂泥 φ5cmの礫をわずかに含む)
- 22 7.5YR4/3褐色粘質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (固く締まる)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む)
- 24 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を少量含む)
- 25 7.5YR6/1褐色砂泥 (溝3-305)
- 26 10YR7/3にぶい黄褐色粘土 (溝3-305)
- 27 10YR4/1褐色粘土 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む 溝3-305)

- 28 10YR7/3にぶい黄褐色粘土 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む 溝3-305)
- 29 2.5Y4/1黄灰色砂泥 (溝3-305)
- 30 7.5YR5/2灰褐色砂泥 (φ3~28cmの礫を多量含む 路面3-3)
- 31 7.5YR3/1黒褐色砂泥 (溝3-299)
- 32 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
- 33 5Y灰オリーブ粗砂
- 34 10YR2/3黒褐色砂泥
- 35 7.5YR4/4褐色砂泥
- 36 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (溝3-120)
- 37 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 38 7.5YR3/1黒褐色砂泥 (焼土を少量含む)
- 39 7.5Y3/2黒褐色粘質土 (溝3-149)
- 40 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑)
- 41 10YR2/2黒褐色砂泥 (鎌倉時代から室町時代)
- 42 10YR3/1黒褐色砂泥
- 43 10YR2/2黒褐色砂泥 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む 土坑)
- 44 2.5Y4/3オリーブ褐色砂
- 45 10YR3/2黒褐色粘質土 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む 土坑)
- 46 10YR3/2黒褐色砂泥+5YR4/4にぶい赤褐色粗砂
- 47 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 48 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む 土坑)
- 49 10YR3/1黒褐色砂泥 (土坑)
- 50 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑)
- 51 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を少量含む 土坑)
- 52 10YR2/2黒褐色砂泥 (土坑)
- 53 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (土坑)
- 54 2.5Y5/3黄褐色粘質土 (地山)

図47 3 - 4区断面図 (1 : 50)

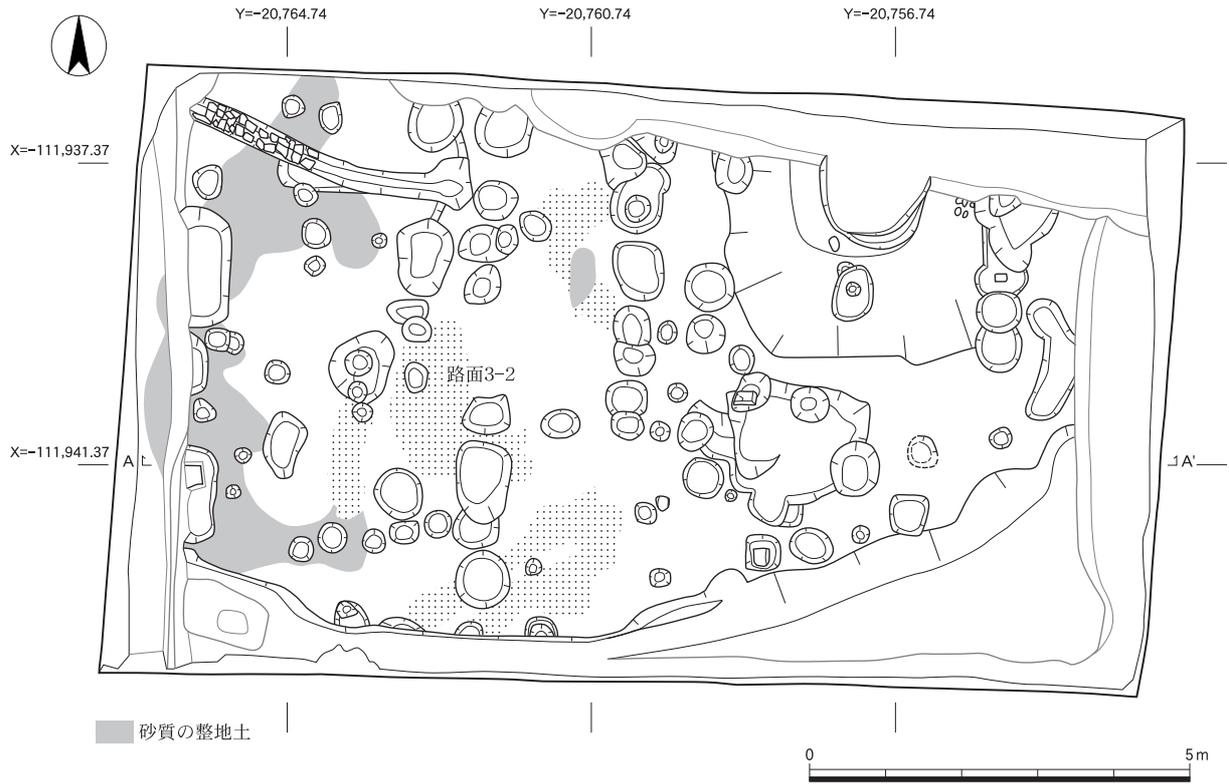


図48 3 - 4区第1面平面図(1 : 100)

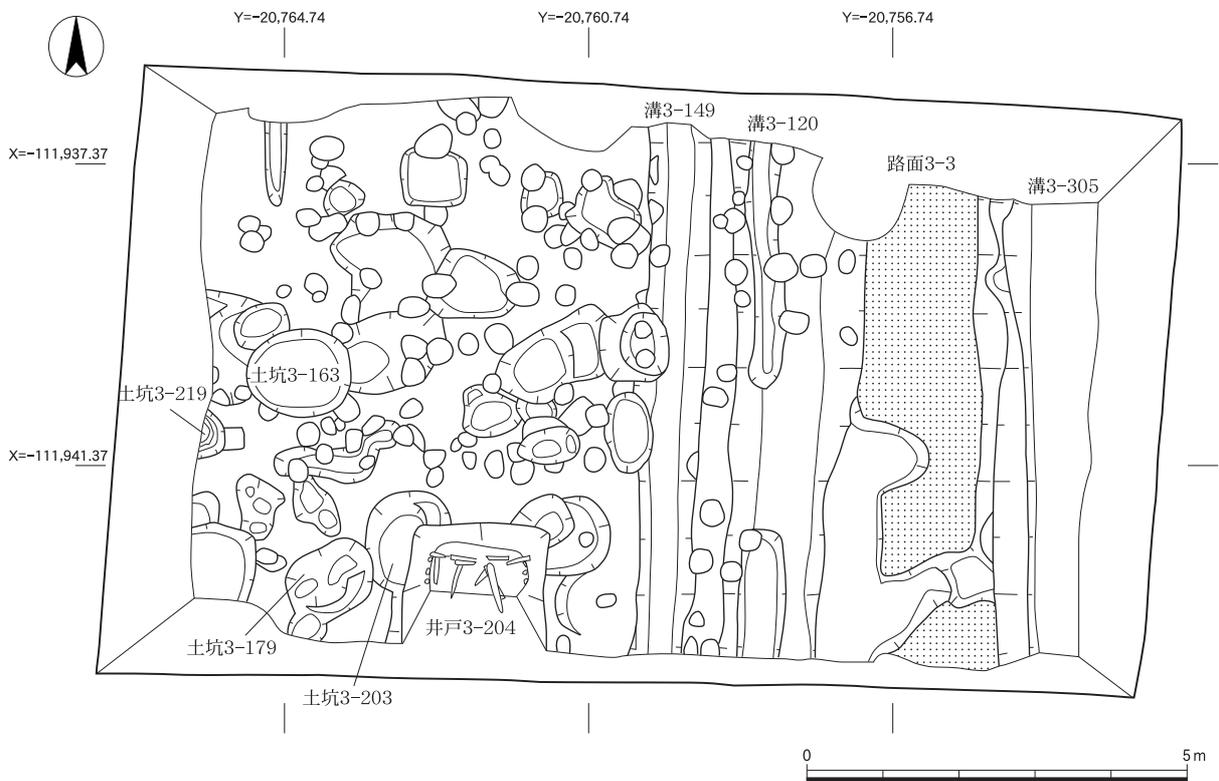
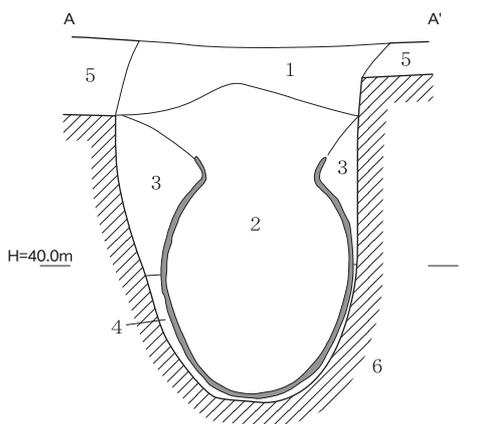
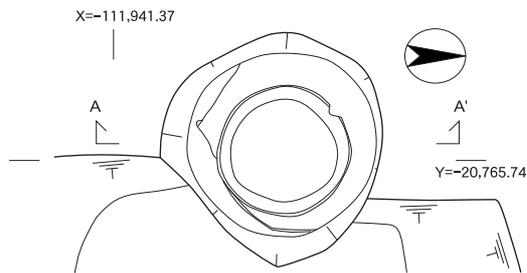
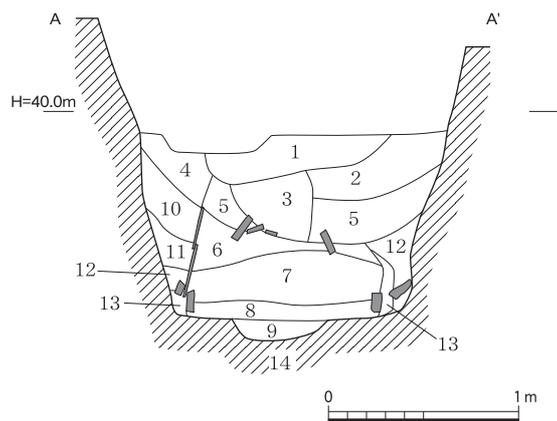
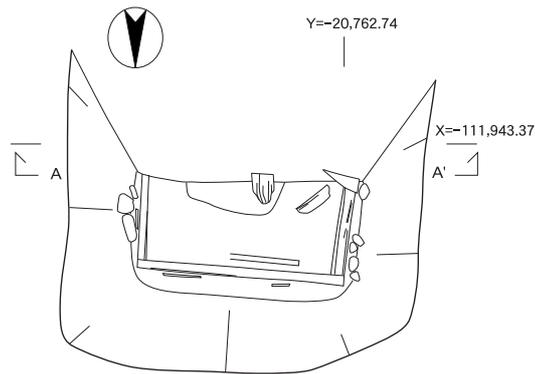


図49 3 - 4区第2面平面図(1 : 100)



- 1 7.5YR5/1 褐灰色砂泥
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 3 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 4 5Y5/1 灰色砂泥
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 6 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 (地山)

図50 土坑3-219実測図 (1 : 20)



- 1 N3/暗灰色砂泥
- 2 N3/暗灰色泥土
- 3 N3/暗灰色粘土
- 4 2.5Y7/2 灰黄色砂泥
- 5 10YR3/1 黒褐色泥土 (腐植土)
- 6 N3/暗灰色粘土
- 7 10GY6/1 緑灰色粘土 (腐植土の互層)
- 8 10YR3/2 黒褐色泥砂 (最下層にφ2~3cmの礫敷き)
- 9 10YR3/2 黒褐色泥土 (腐植土)
- 10 N3/暗灰色粘土
- 11 10YR8/6 黄橙色砂泥
- 12 10YR3/2 黒褐色泥土
- 13 10YR3/2 黒褐色粘土 (φ10~15cm礫を多量含む)
- 14 10GY6/1 緑灰色砂泥 (地山)

図51 井戸3-204実測図 (1 : 40)

も調査区外へ延び、東肩も調査区外になる。断面形は逆台形で、検出長は約6.1m、幅1.5m以上、深さ約0.7mである。底部はほぼ平坦である。埋土は褐灰色粘土などで、期中段階の遺物が出土した。

土坑3-219 (図版13 - 2、図50) 西壁際で検出した。西側は調査区外になるが、掘形の平面形は径約0.6mの円形に復元できる。深さは約0.8~0.9mである。中央に須恵器甕を正位置の状態で据え付ける。甕の内部からは顕著な遺物は出土していない。埋土は褐灰色砂泥などで、期の遺物が出土した。

土坑3-179 南西部で検出した。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mのいびつな楕円形で、深さは約0.2mである。埋土は灰黄色粘土で、期の遺物がまとめて出土した。

土坑3-163 西部で検出した。平面形は南北約1.2m、東西約1.4mの楕円形で、深さは約0.1mである。埋土は灰褐色砂泥で、期~期の遺物がまとめて出土した。

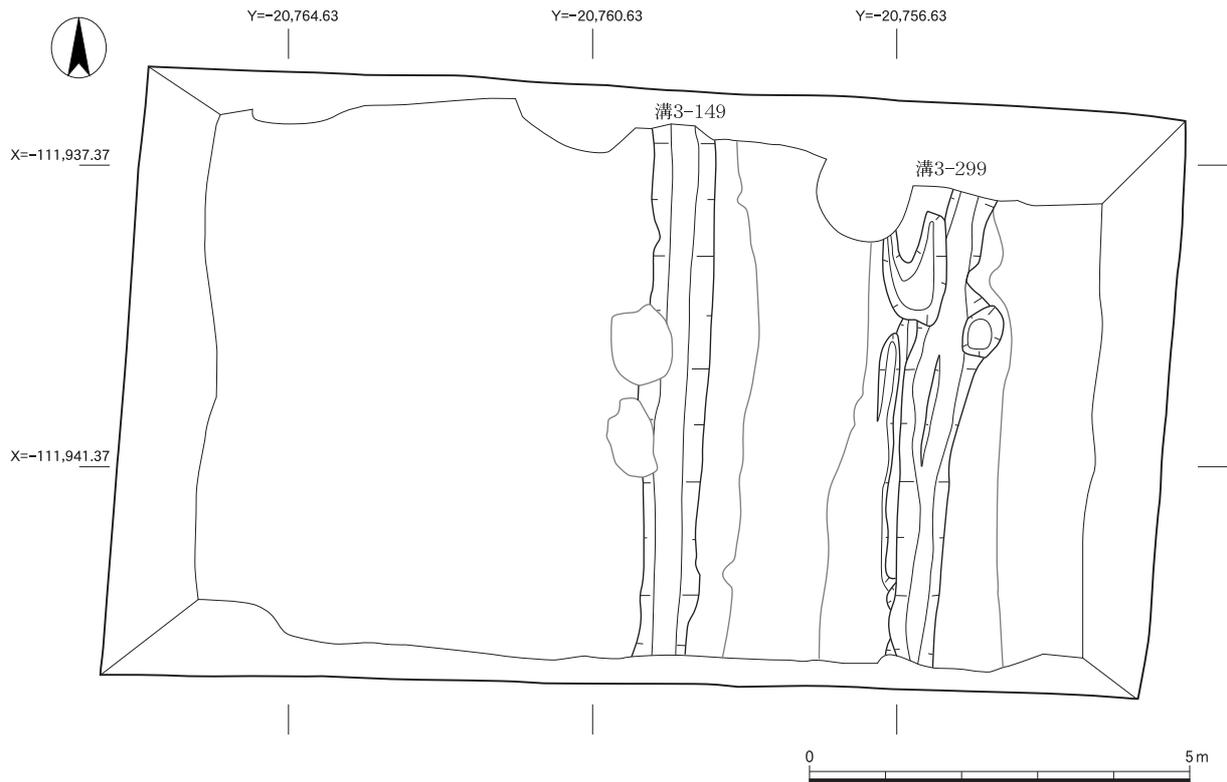


図52 3 - 4区第3面平面図(1:100)

土坑3-203 南西部で検出した。南東側を井戸3-204に攪乱されているが、平面形は南北約1.4m、東西約1.1mの楕円形に復元できる。深さは約0.4mである。埋土は暗褐色砂泥で、期の遺物がまとまって出土した。

井戸3-204(図版13-1、図51) 調査区南壁際で検出した木組の井戸である。南側は調査区外になるが、掘形は南北1.5m以上、東西約1.9mの方形に復元できる。深さは約1.6mである。井戸枠は南側は調査区外になるが、北辺の状況から一辺約1.0mの方形に縦板を組むと推定できる。埋土は掘形が黄橙色砂泥など、井戸枠内が緑灰色粘土などで、掘形からは期、井戸枠内からは期の遺物が出土した。

路面3-3 東部で検出した南北方向の路面である。北側・南側とも調査区外へ延び、東側を溝3-305、西側を溝3-120に攪乱されている。検出長は約6.3mで、幅は1.3m以上である。大きさは約1cmの小礫を敷き詰める。厚さは20cmである。2面の路面を認めた。

溝3-149 中央部で検出した南北方向の溝である。路面3-3西側に伴う側溝と推定できる。北側・南側とも調査区外へ延びる。北側で2~3度東へ振る方位をとる。断面形はU字形で、検出長は約7.0m、幅約0.6~0.8m、深さ約0.25mである。底部はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土などで、上層から期、下層から期の遺物が出土した。

柱穴群 中央部から西部で多数の柱穴を検出した。平面形は多くが円形で、掘形は径約0.3~0.6m、深さ約0.1~0.3mである。柱あたりは径約0.1~0.2mで、底部に石を据えるものがある。建物としてのまとまりは不明である。

第3面の検出遺構(図版13-3、図52)溝を検出した。

溝3-299 東部で検出した南北方向の溝である。路面3-3の直下に位置する。北側・南側とも調査区外へ延びる。北側で約5度東へ振る方位をとる。断面形はU字形で、検出長は約6.2mで幅約0.7~0.8m、深さ約0.35mである。底部はわずかに南に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥で、期の遺物がまとまって出土した。

(5) 3-5区の調査

層序(図53)

調査区周辺は北から南に向けてわずかに傾斜しており、調査区北端の地表面は南端より約0.1m高い。

厚さ約0.3mの新館建設時の盛土・厚さ約0.2~0.4mの近代の盛土の下は、順に厚さ約0.1~0.5mの方広寺造営に伴う整地層である明黄褐色砂泥など、厚さ約0.5~0.9mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒褐色砂泥などがある。これより下層は崩壊などの危険があったことから掘り下げを止めたため、地山は確認していない。

調査では方広寺造営に伴う整地層上面では遺構を認めなかったため、この下面を第1面として遺構検出を行った。鎌倉時代から室町時代に属するが、遺構数は少ない。

第1面の検出遺構(図版14-1、図54)

土坑・柱穴などを検出した。調査区が狭いため詳細は不明である。

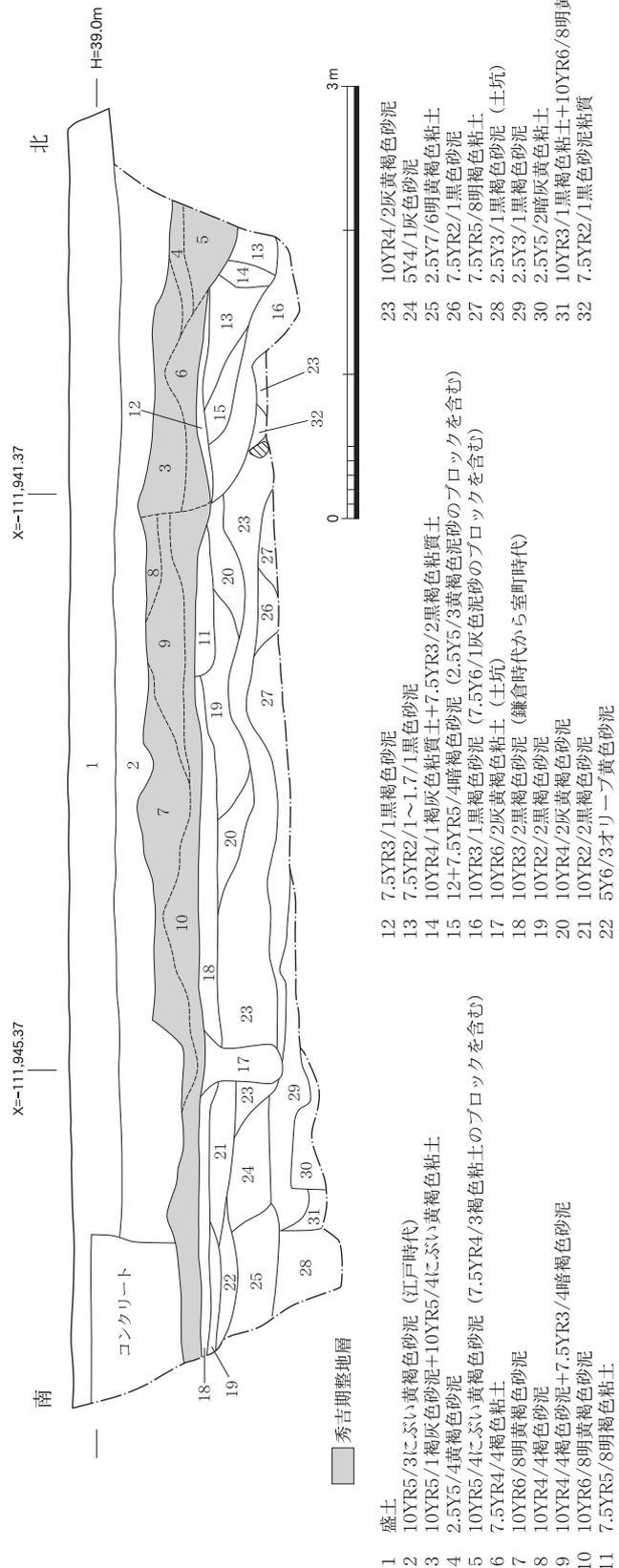


図53 3-5区西壁断面図(1:50)

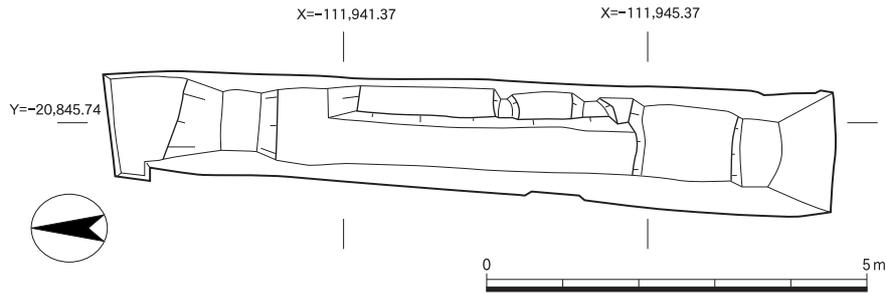


図54 3 - 5 区第 1 面平面図 (1 : 100)

(6) 3 - 6 区の調査

層序 (図55)

調査区周辺は東から西に向けてわずかに傾斜しており、調査区東端の地表面は西端より約0.2m高い。

調査区東部から中央部全面と西部南側は新館建設時の工事により攪乱されている。層序は西部北側では、厚さ約0.4～0.5mの新館建設時の盛土の下は、順に厚さ約0.2mの江戸時代の包含層であるにぶい黄褐色砂泥、厚さ0.05～0.1mの方広寺造営に伴う整地層であるにぶい褐色砂泥、厚さ約0.3～1.0mの鎌倉時代から室町時代の包含層である褐色砂泥などがある。これより下層は崩壊などの危険があったことから掘り下げを止めたため、地山は確認していない。他の調査区と比較して方広寺造営に伴う整地層が薄いことが指摘できる。

調査では方広寺造営に伴う整地層上面では遺構を認めなかったため、この下面を第1面として遺構検出を行った。

第1面の検出遺構 (図版14 - 2、図56)

明確な遺構は検出できなかった。

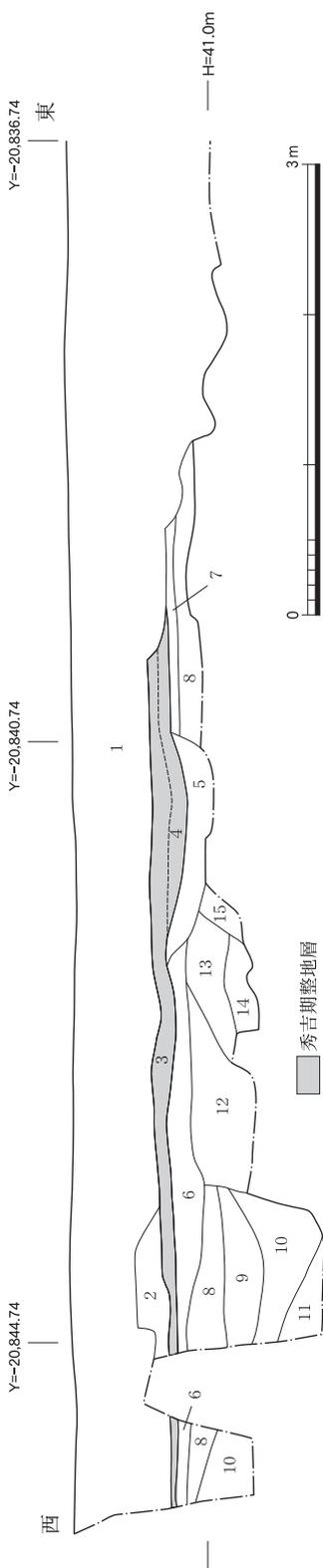
(7) 3 - 7 区の調査

層序 (図57・58)

調査区周辺はほぼ平坦である。7区は中央部を埋設管と新館建設時の工事により攪乱されているため、東部と西部に分けて調査を行った。

西部では厚さ約0.8～0.9mの新館建設時の盛土の下は、順に厚さ約0.1～0.2mの江戸時代の包含層である褐色砂泥など、厚さ約0.7～0.8mの方広寺造営に伴う整地層である黄褐色粘質土、厚さ約0.3～0.4mの鎌倉時代から室町時代の包含層である褐灰色砂泥などがある。この下層は地山のにぶい黄色粘質土である。地山は地表下約1.2～2.2mで確認した。西に向けて傾斜する。

東部では厚さ約0.7～0.8mの新館建設時の盛土の下は、順に厚さ約0.1～0.5mの方広寺造営に伴う整地層である褐色微砂など、厚さ約0.1～0.2mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒色砂泥などがある。この下層は地山のにぶい黄褐色粘質土などである。方広寺造営に伴う整地層は



- 9 7.5YR3/3暗褐色砂泥
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
- 12 2.5Y7/6明黄褐色砂泥
- 13 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 14 10YR4/6褐色砂泥
- 15 10YR7/6明黄褐色砂泥

- 1 盛土
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 3 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥
- 4 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 6 10YR4/4褐色砂泥 (鎌倉時代から室町時代)
- 7 10YR4/1褐色砂泥
- 8 7.5YR4/3褐色砂泥

■ 秀吉期整地層

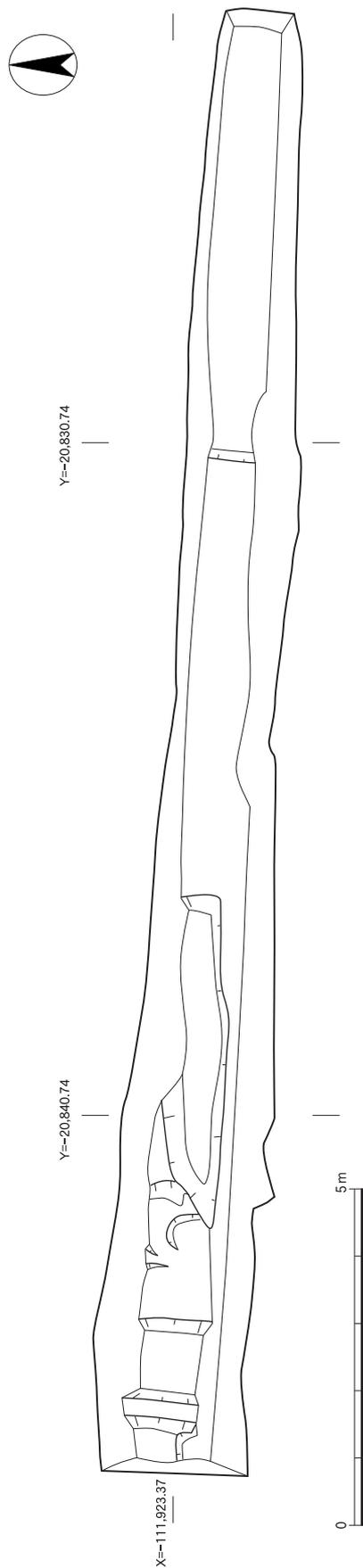
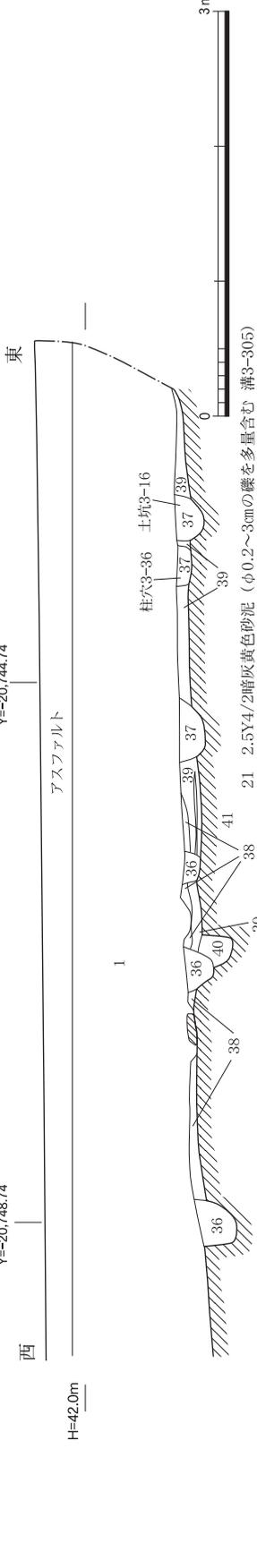
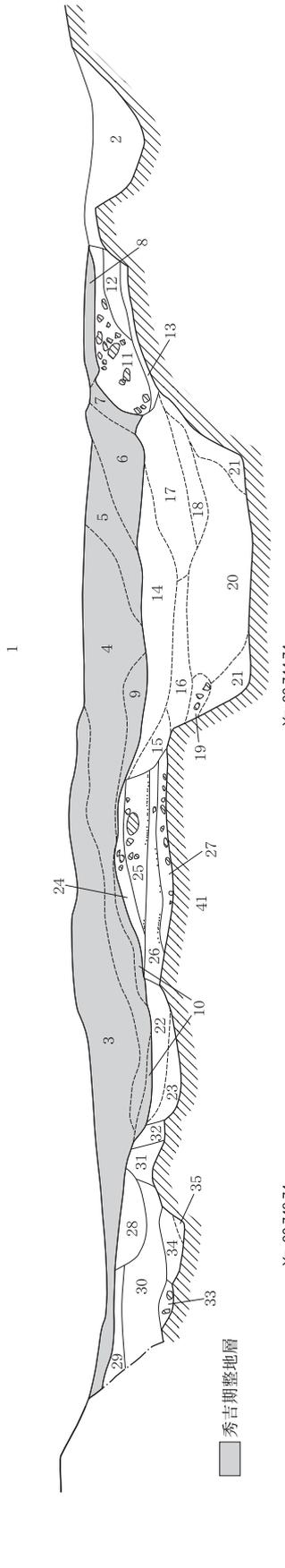
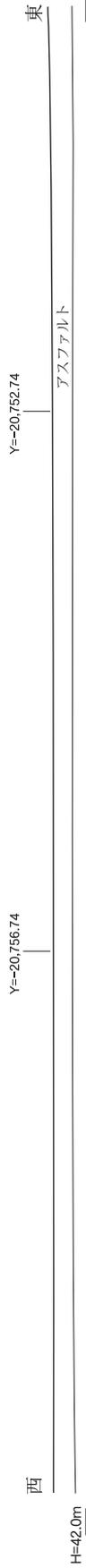


図55 3 - 6区北壁断面図 (1 : 50)

図56 3 - 6区第1面平面図 (1 : 100)



- 1 盛土
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ1~10cmの礫を少量含む)
- 3 10YR4/6褐色微砂+10YR3/4暗褐色砂泥 (φ2~5cmの礫を少量含む)
- 4 10YR2/3黒褐色砂泥+7.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR4/4褐色微砂+7.5YR3/3暗褐色砂泥 (φ0.2~3cmの礫を少量含む)
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥
- 7 10YR5/6黄褐色砂泥 (φ0.2~2cmの礫を少量含む)
- 8 10YR4/4褐色砂泥 (φ0.5~5cmの礫を少量含む)
- 9 10YR3/3暗褐色砂泥 (固く縮まる)
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥 (固く縮まる)
- 11 10YR3/3暗褐色砂泥 (φ1~3cmの礫を少量含む)
- 12 7.5YR4/4褐色砂泥
- 13 10YR4/4褐色砂泥+7.5YR5/8明褐色砂泥
- 14 10YR3/1黒褐色砂泥+10YR2/3黒褐色砂泥 (溝3-305)
- 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥+10YR5/6黄褐色粘質土 (φ1~4cmの礫を少量含む 溝3-305)
- 16 10YR3/2黒褐色砂泥+2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 (溝3-305)
- 17 2.5Y4/2暗灰黄褐色砂泥+7.5YR5/6明褐色砂泥 (溝3-305)
- 18 2.5Y4/2暗灰黄褐色砂泥 (φ1~3cmの礫を少量含む 溝3-305)
- 19 10YR3/2黒褐色砂泥+2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 (φ3~6cmの礫を少量含む 溝3-305)
- 20 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土 (溝3-305)
- 21 2.5Y4/2暗灰黄褐色砂泥 (φ0.2~3cmの礫を少量含む 溝3-305)
- 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝3-120)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~5cmの礫を少量含む 溝3-120)
- 24 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ3~6cmの礫を少量含む 路面3-3)
- 25 7.5Y3/2黒褐色砂泥 (φ10~15cmの礫を少量含む 路面3-3)
- 26 7.5Y3/2黒褐色砂泥+10YR2/3黒褐色砂泥
- 27 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ3~5cmの礫を少量含む)
- 28 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑)
- 29 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 30 10YR2/3黒褐色砂泥粘質土 (φ0.5~1cmの礫を少量含む)
- 31 10YR3/4暗褐色砂泥
- 32 10YR3/4暗褐色砂泥 (φ3~5cmの礫を少量含む)
- 33 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ5~7cmの礫を少量含む)
- 34 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を少量含む 溝3-149)
- 35 2.5Y6/4にぶい黄褐色粘土 (φ1~5cmの礫を少量含む 溝3-149)
- 36 10YR3/3暗褐色砂泥 (柱穴)
- 37 10YR3/2黒褐色砂泥粘質土 (柱穴)
- 38 10YR2/3黒褐色砂泥 (固く縮まる)
- 39 7.5YR2/1黒褐色砂泥 (鎌倉時代から室町時代)
- 40 7.5YR3/2黒褐色砂泥 (柱穴)
- 41 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 (地山)

図58 3 - 7区北壁断面図2 (1:50)

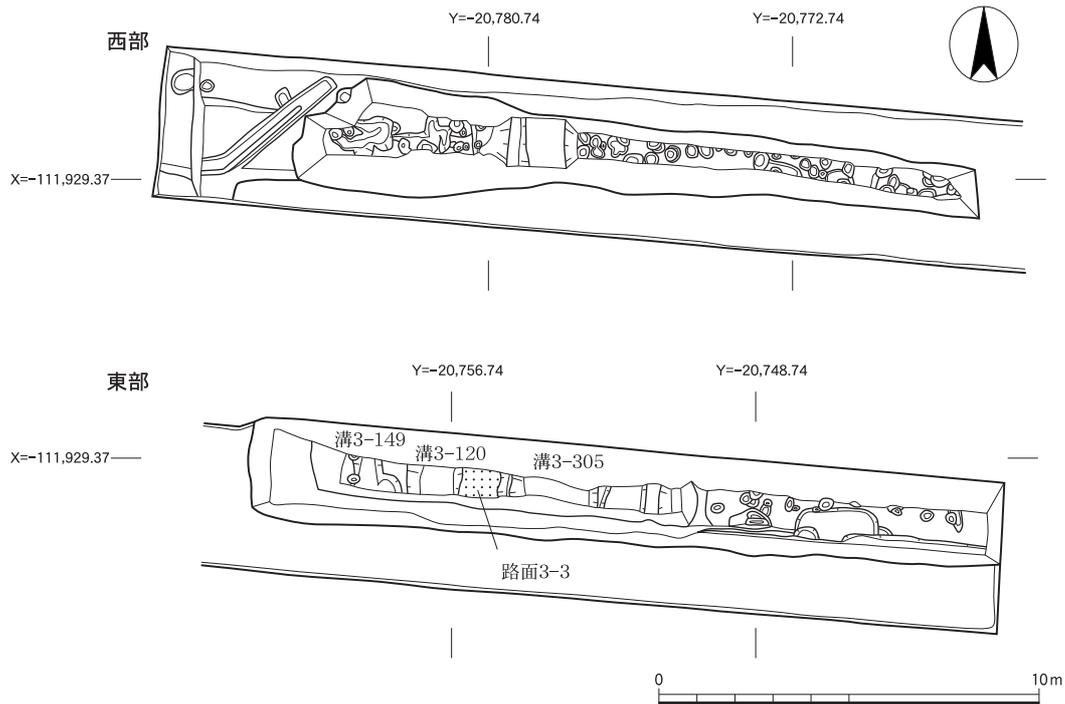


図59 3 - 7区第1面平面図(1 : 200)

東から西へ次々と積み上げた状況にある。地山は地表下約1.2～1.9mで確認した。西に向けて傾斜する。また、東側は上面が削平されているため地山直上0.05mで新館建設時の盛土となる。地山検出面の標高は40.3～41.2mである。

調査では東部・西部とも方広寺造営に伴う整地層上面では遺構を認めなかったため、この下面を第1面として遺構検出を行った。平安時代後期から室町時代に属する。

第1面の検出遺構(図版14 - 3・4、図59)

西部では土坑・柱穴などを検出した。

柱穴群 多数の柱穴を検出した。平面形は多くが円形で、掘形は径約0.3～0.6m、深さ約0.1～0.3mである。柱あたりは径約0.1～0.2mで、底部に石を据えるものがある。調査区が狭いこともあり、建物としてのまとまりは不明である。

東部では路面・溝・土坑・柱穴などを検出した。3 - 4区検出遺構の北延長部にあたるものがある。ただし、溝3-299の延長部は確認していない。

溝3-120 南北方向の溝である。断面形は浅いU字形で、幅約1.4m、深さ約0.2mである。埋土は灰黄褐色砂泥などで、期の遺物が出土した。

溝3-305 南北方向の溝である。断面形は逆台形で、幅約2.5m、深さ約0.8mである。埋土は暗オリーブ褐色粘土などで、期の遺物が出土した。

路面3-3 南北方向の路面である。路面は2面が確認でき、上面は幅約1.5m、厚さ約10cm、下面は幅約0.8、厚さ約1cmで、小礫を敷き詰める。

溝3-149 南北方向の溝である。断面形はU字形で、幅約0.7m、深さ約0.1mである。埋土は灰黄褐色泥砂などで、期の遺物が出土した。

(8) 3 - 8 区の調査

層序 (図60)

調査区周辺は南から北に向けて傾斜しており、調査区南端の地表面は北端より約0.5m高い。調査区の形状は変則的で、南北方向の細長い調査区東側の2箇所に張り出しがある形なので、南側の張り出し周辺部分を南部、北側の張り出し周辺部分を中央部、北側の南北方向に細長い部分を北部とする。

厚さ約0.4～0.5mの新館建設時の盛土の下は、順に厚さ約0.2～0.7mの方広寺造営に伴う整地層である浅黄色砂泥など、厚さ約0.4～1.2mの鎌倉時代から室町時代の包含層である黒褐色砂泥・暗褐色砂泥などがある。北部では方広寺造営に伴う整地層は削平されている。暗褐色砂泥の下層は地山の褐灰色粘土である。地山は地表下約1.2mで確認した。地山検出面の標高は37.0～37.8mである。

調査では方広寺造営に伴う整地層上面で顕著な遺構を認めなかったため、この下面を第1面として、また、中央部・南部では鎌倉時代から室町時代の包含層下面を第2面としてそれぞれ遺構検出を行った。第1面では鎌倉時代から室町時代の遺構、第2面では平安時代の遺構を検出した。

なお、図60は中央部北壁と中央部南壁西端の断面図である。

第1面の検出遺構 (図版15 - 1～3、図61)

落込・路面・溝・土坑・柱穴などを検出した。

落込3-1 北部・中央部・南部の西壁際で検出した。平面図では明瞭ではないが、中央部南壁断面図で形状がよくわかる。南北方向の肩口から西へ向かって急激に落ち込み、調査区西端では地山を約0.8m掘り込んだ状態で南へ続いて調査区外へ広がる。検出長は南北16.0m以上で、深さは1.1m以上である。埋土は褐灰色砂泥などの厚さ約0.6～0.8mの湿地状堆積の上層を大きさ約20cmの石を含むオリーブ黒色砂泥で埋め立てる。埋め立ては2段階で行われ、厚さ約0.3mになる。期の遺物が出土した。

なお、落込3-1上層の方広寺造営に伴う整地層である浅黄色砂泥からは 期とともに 期の遺物が出土した。落込3-1の湿地状堆積をさらに整備したものと考えられ、豊臣秀吉による方広寺の造営に伴う整地層と推定できる。

路面3-4 中央部・南部で検出した南北方向の路面である。北側・南側とも調査区外へ延びる。幅は中央部で約1.0～1.1m、南部で約1.3～1.4mである。大きさ約1cmの小礫を敷き詰める。厚さは20cmである。中央部では3面の路面を認めた。また、路面東側では約0.4～0.5mの幅で轍とみられる凹みを検出した。

溝3-13 北部から中央部にかけて検出した南北方向の溝である。路面3-4西側に伴う側溝と推定できる。北側・南側とも調査区外へ延びる。断面形はU字形で、検出長は約19.1m、幅約0.6～0.8m、深さ約0.15～0.4mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は黄灰色粘土などで、 期古段階～中段階の遺物が出土した。

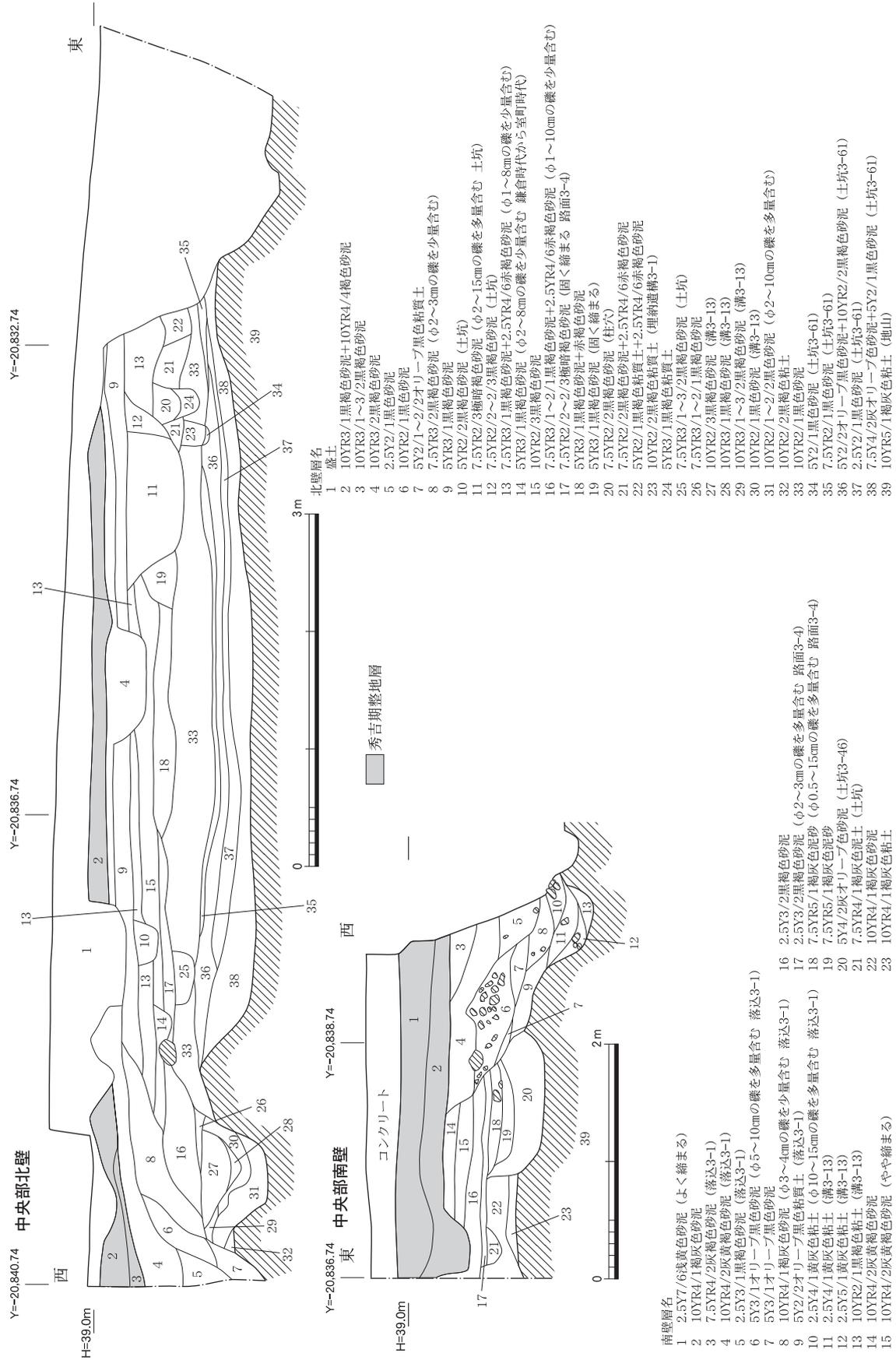


図60 3 - 8区断面図 (1 : 50)

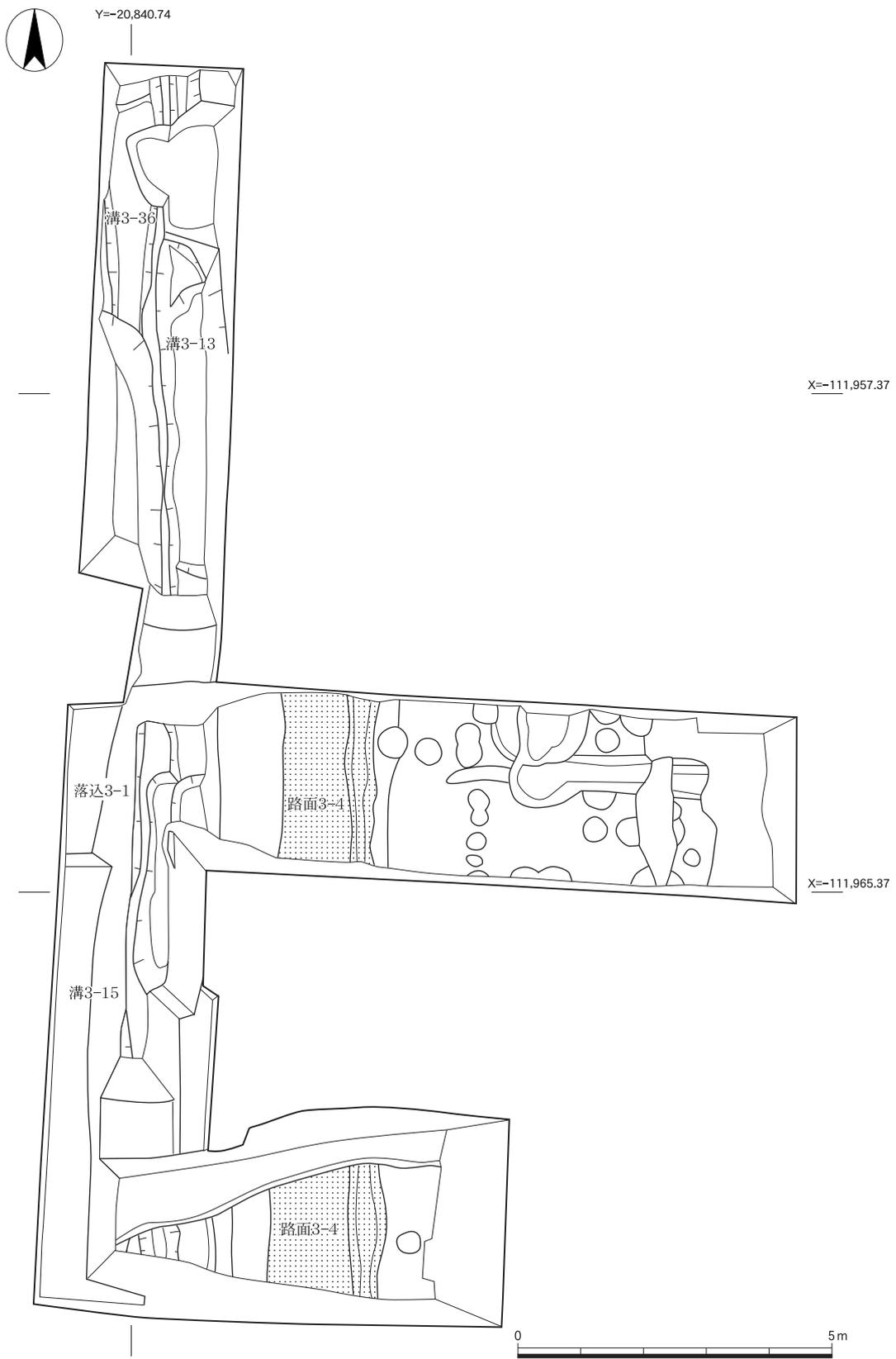


图61 3 - 8区第1面平面图(1 : 100)

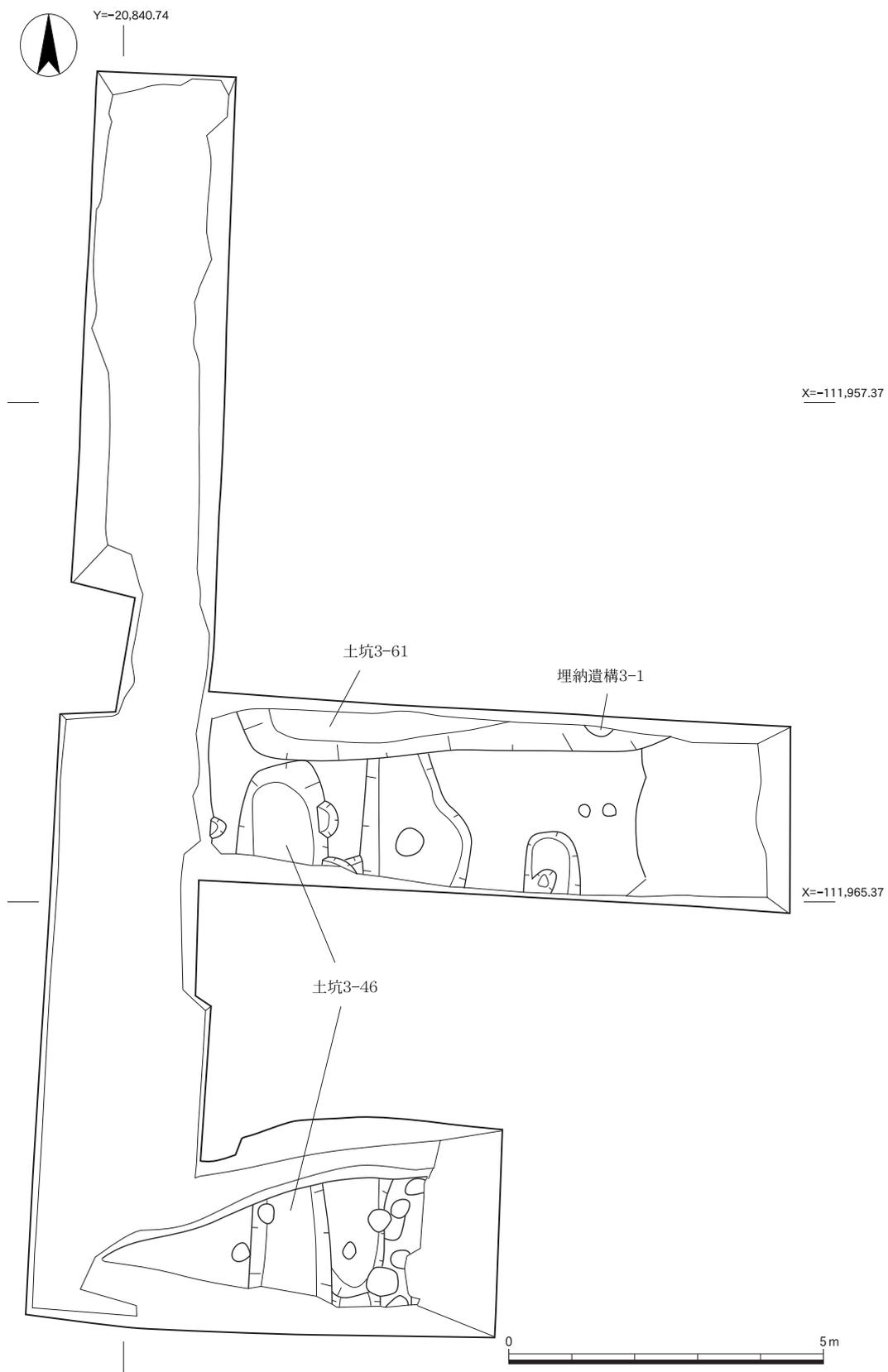


图62 3 - 8 区第 2 面平面图 (1 : 100)

溝3-15 中央部から南部にかけて検出した南北方向の溝である。中央部では溝3-13と重複し、南側は調査区外へ延びる。断面形はU字形で、検出長は約7.7m、幅約0.5～0.7m、深さ約0.15mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は暗灰色粘質土などで、期古段階～中段階の遺物が出土した。

溝3-36 北部で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外へ延び、南側は落込3-1に攪乱されている。西肩も調査区外になる。断面形はU字形で、検出長は3.9mで、幅幅0.7m以上、深さ約0.25mである。埋土は灰褐色砂泥で期古段階の遺物が出土した。

柱穴群 中央部・南部の路面3-4東側を中心に検出した。平面形は多くが円形で、掘形は径約0.3～0.6m、深さ約0.1～0.3mである。柱あたりは径約0.1～0.2mで、底部に石を据えるものがある。調査区が狭いこともあり、建物としてのまとまりは不明である。

第2面の検出遺構（図版15 - 4・5、図62）

埋納遺構・土坑などを検出した。

土坑3-46 調査区中央部・南部で検出した。路面3-4の直下に位置する。2つの調査区に分断され、南側は調査区外になるが、平面形は南北8.5m以上、東西約1.0mの細長い形状に復元できる。深さは約0.4mである。埋土は灰オリーブ色砂泥で、期古段階の遺物がまとまって出土した。

埋納遺構3-1 中央部の北壁際で検出した。北側は調査区外になるが、平面形は径約0.3mの円形が想定できる。深さは約0.1mである。埋土は黒褐色粘質土で、底部に2点の土師器杯を重ねた状態で据える。埋納遺構と推定できる。土師器杯は期に属する。

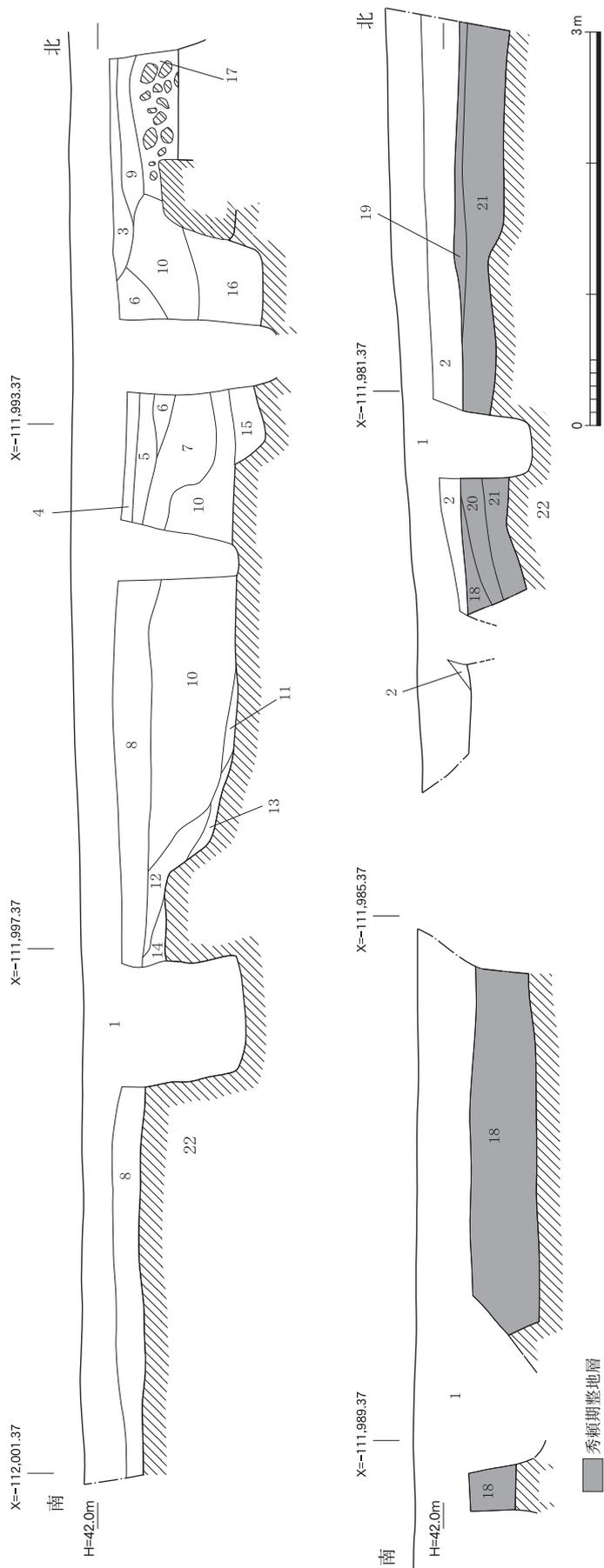
土坑3-61 中央部北壁際で検出した。埋納遺構3-1と重複する。北側は調査区外になるが、南北0.7m以上、東西6.8m以上、深さ0.5m以上の大型の土坑である。埋土はオリーブ黒色砂泥などで、期～期の遺物が出土した。

4 4次調査

（1）調査の概要

4 - 1区～4 - 3区は新館東側で実施した試掘調査である。3次調査の3 - 1区・3 - 2区で検出した石塁・回廊の東延長部にあたり、さらに方広寺境内の東限に該当することから、関連施設の確認を目的とした。4 - 9区は3次調査に引き続いて、新館北西側の遺跡の状況を明らかにするためにドライエリア北部分に設定した。また、4 - 10区は七条通に面し、3次調査の3 - 1区で検出した方広寺南門から蓮華王院南大門に至る南延長部にあたる。方広寺周辺では大規模な整備が行われていることが推定され、また、法住寺殿・六波羅政庁に関連する遺構の検出を目指した。

4 - 1区では方広寺造営に伴う整地層とともに関連する石組を確認した。周辺の遺構の遺存状態は良好である。4 - 9区では鎌倉時代から室町時代の遺構・包含層、4 - 10区では平安時代から江戸時代の多数の遺構・包含層を確認した。



- 1 盛土
- 2 10YR6/8明黄褐色砂泥+10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR6/8明黄褐色砂泥+10YR5/1褐灰色砂泥 (固く締まる)
- 4 10YR5/6黄褐色砂泥 (φ0.2~1.0cm礫を少量含む 固く締まる)
- 5 10YR5/6明黄褐色砂泥+10YR4/4褐色粘質土
- 6 10YR5/6黄褐色砂泥+10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (固く締まる)
- 7 10YR3/4暗褐色粘質土+10YR6/8明黄褐色粘質土
- 8 10YR6/6明黄褐色砂泥+10YR5/1褐灰色砂泥
- 9 10YR5/6黄褐色砂泥+2.5Y5/3黄褐色砂泥 (固く締まる)
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥 (大型瓦・炭・焼土を少量含む 大仏殿火災後処理坑)
- 11 10YR4/1褐色粘土
- 12 10YR4/6褐色粘質土
- 13 2.5Y5/3黄褐色砂~砂礫 (φ0.2~5cmの礫を少量含む)
- 14 10YR6/6明黄褐色砂泥+5Y5/2灰オリーブ色粘質土
- 15 2.5Y5/4黄褐色砂礫 (溝)
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫~粗砂
- 17 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ10cmの礫を多量含む 石組4-1裏込)
- 18 10YR4/6褐色粘質土 (固く締まる 10YR2/3黒褐色砂泥のブロックを含む)
- 19 10YR4/4褐色砂泥~粗砂 (固く締まる)
- 20 10YR5/8黄褐色砂泥 (固く締まる 2.5Y5/3黄褐色粘質土のブロックを含む)
- 21 10YR6/8明黄褐色砂泥+10YR5/1褐灰色砂泥
- 22 10YR6/8黄褐色粘質土 (地山)

図63 4 - 1区西壁断面図 (1 : 50)

(2) 4 - 1区 ~ 4 - 3区の調査

層序 (図63・65)

4 - 1区 (図版16 - 4、図63) 厚さ約0.4~0.5mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、厚さ約0.3~0.4mの方広寺造営に伴う整地層である褐色粘質土などがある。なお、南部では方広寺造営に伴う整地層は確認できず、地山の黄褐色粘質土を地表下約0.4mで確認した。地山検出面の標高は41.3~41.9mである。

4 - 2区 (図版16 - 1・2、図65) 厚さ約0.6~0.7mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、厚さ約0.1~0.2mの方広寺造営に伴う整地層である褐色砂泥がある。なお、南部では4 - 1区と同様、方広寺造営に伴う整地層は確認できず、地山の明黄褐色粘質土を地表下約0.5mで確認した。地山検出面の標高は41.4~41.5mである。

4 - 3区 (図版16 - 3、図65) 厚さ約0.4~0.5mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、厚さ約0.2mの方広寺造営に伴う整地層である黄褐色砂泥がある。地山検出面の標高は41.6~41.7mである。

検出遺構 (図版16、図64)

石組4-1 (図版16 - 5、図64) 4 - 1区中央部西壁際で検出した。西側は調査区外になる。石壘3-1の延長よりやや北に位置し、回廊南雨落溝である溝3-111の延長部にあたる。一辺80cm以上の石2個を組んだもので、裏込には拳大の礫と粘土を詰める。石の面は南東を向くことから東へ連続しない可能性がある。石組4-1を肩口として南側に幅約7.0mの堀状の落込がある。埋土は最下層に厚さ約10cmの褐色粘土が堆積するが、最終的には焼けた大型瓦で埋まる。寛政10年(1789)の方広寺焼失時のものと推定

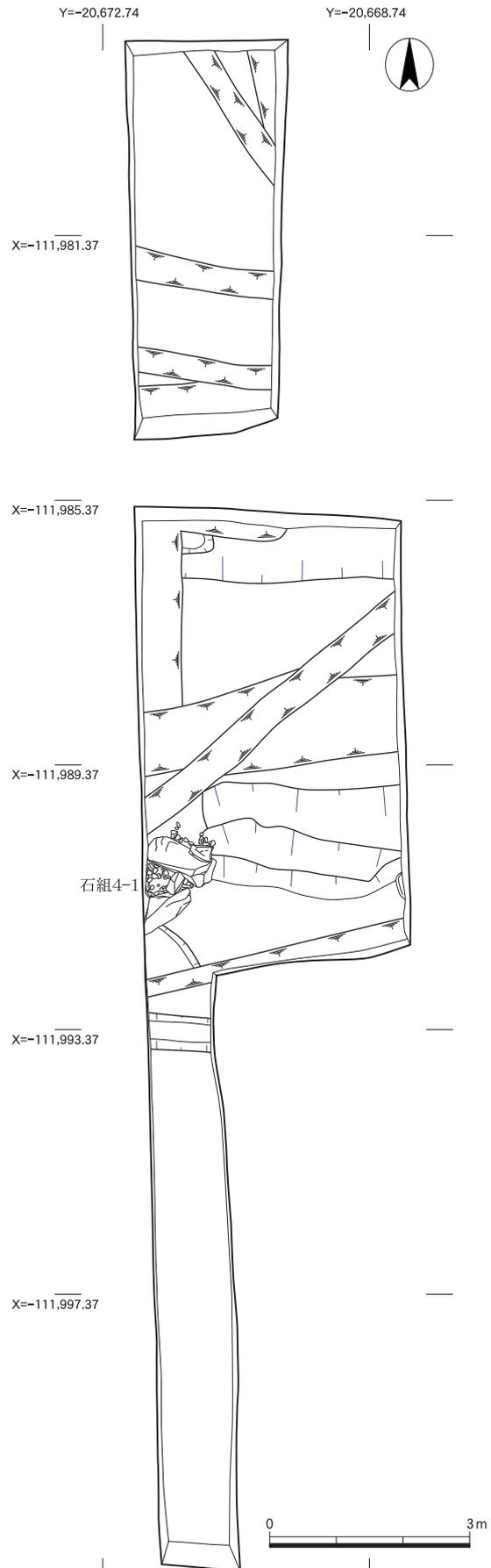


図64 4 - 1区平面図 (1 : 100)

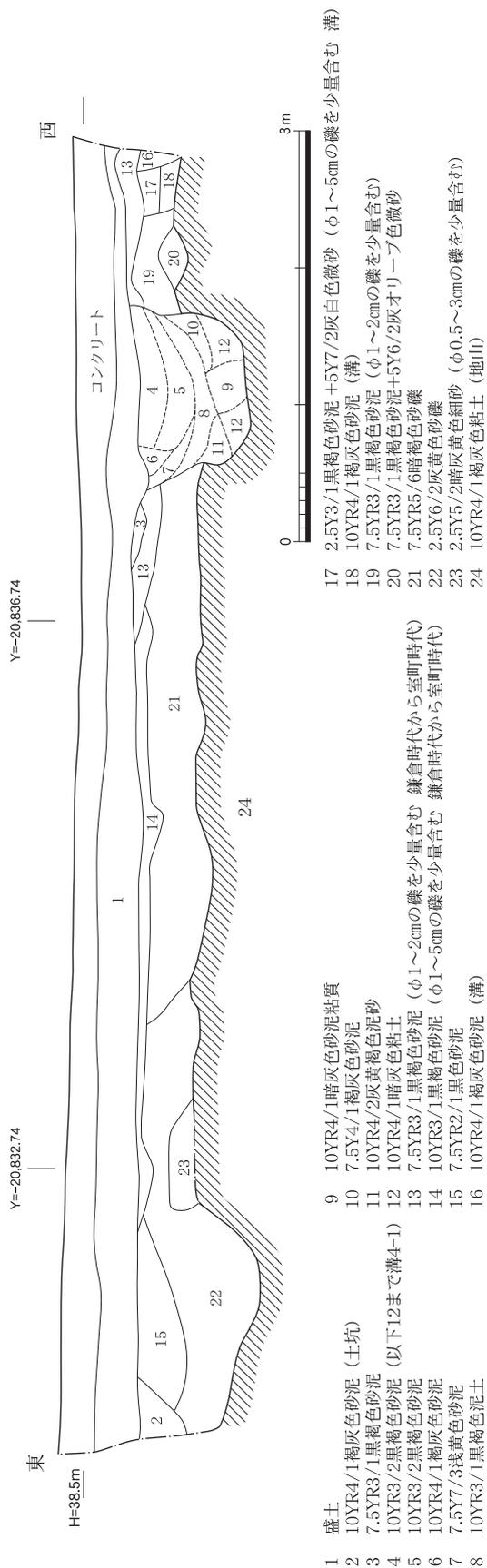


図66 4-9区南壁断面図(1:50)

東側は調査区外へ広がる可能性がある。掘形の平面形は南北約5.8m、東西1.9m以上の長方形である。地山を約0.4mの深さに掘り下げる。東西の壁際にはそれぞれ9基の掘立柱が並ぶ。柱間の間隔は東西約1.6m、南北は各0.7mである。西壁際の柱穴列内側には幅約0.15~0.3m、深さ約0.03cmの浅い溝が伴う。貯蔵施設の可能性がある。埋土は黒褐色砂泥・オリブ灰色粘質土で、期の遺物が出土した。

溝4-1 西部で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外へ延び、北側は削平されて途切れ

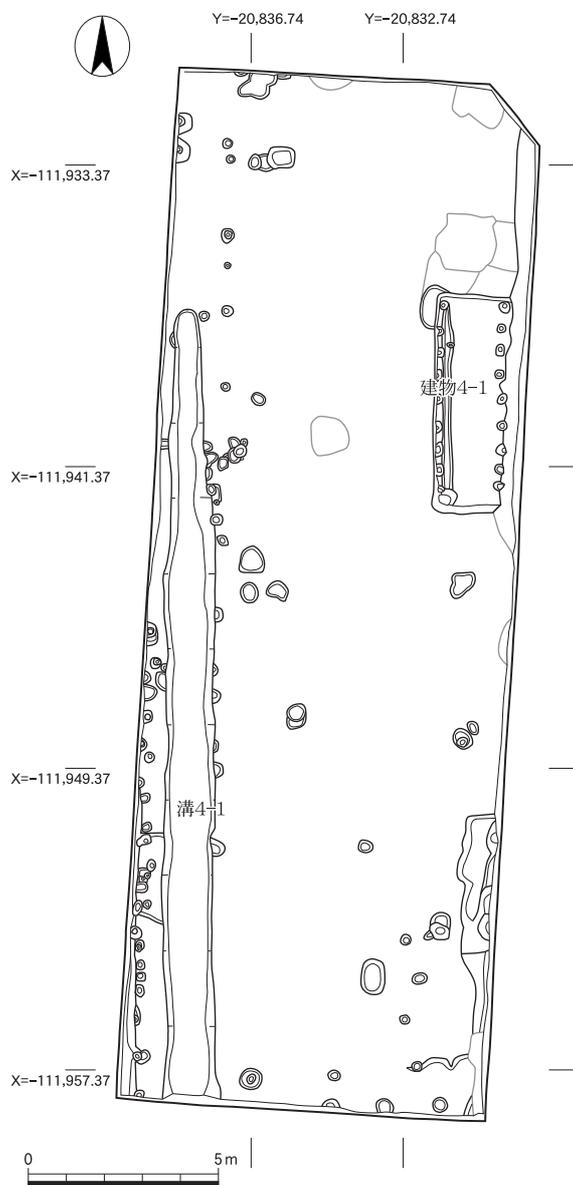
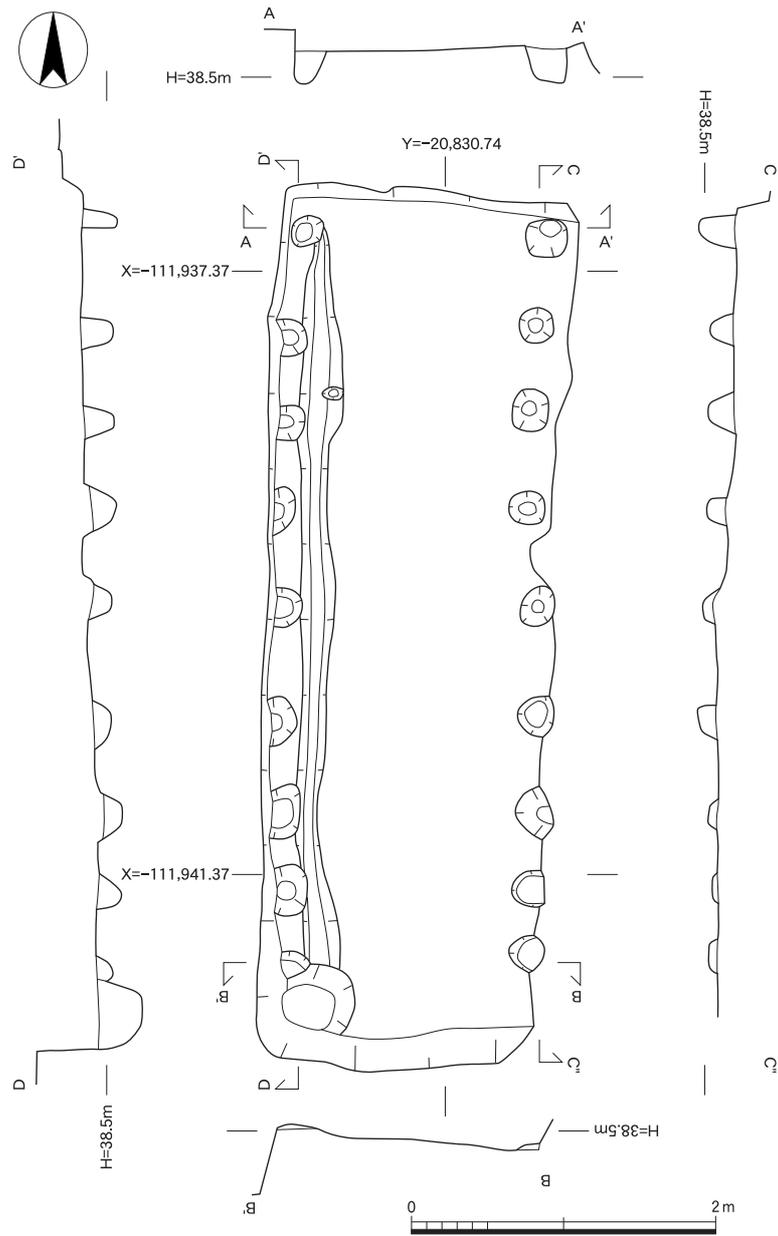


図67 4-9区第1面平面図(1:200)



柱穴埋土は全て青灰色粘土

図68 建物4-1実測図（1：50）

る。断面形はU字形で、検出長は約20.8m、幅約0.7～1.5mである。深さ南端では約0.7mであるが、北側では徐々に浅くなる。底部は南に向けて傾斜する。埋土は灰褐色砂泥・黒褐色砂泥などで、期新段階の遺物が多量にまとまって出土した。

（4）4 - 10区の調査

層序（図69～72）

調査区周辺は北から南に向けて傾斜する。調査区の形状は変則的で、東側の南北方向に長い調査区中央から西側へ東西方向に細長い調査区が張り出す形をとる。それぞれを東半部・西半部とする。

厚さ約1.0～1.2mの盛土・博物館設立に伴う整地層の下は、厚さ約0.3～0.7mの江戸時代の整地層で、下面が方広寺に関連する遺構の検出面となる。この下層には厚さ約1.0～1.7mの明黄褐色砂泥などの方広寺造営に伴う整地層がある。整地は2段階に分けて行われる。ただし調査区内の旧地形は東部が高く、中央部から西に向けて急激に傾斜していることから、この整地層は西半部の低い部分を埋めて堆積する。東半部は盛土の直下に厚さ約0.2～0.3mで室町時代の整地層であるにぶい黄褐色砂泥・黒褐色砂泥があり、方広寺に関係する桃山時代から江戸時代の整地層は削平されている。この下層は地山の暗褐色砂泥・褐色粘質土などになる。地山は西に向けて傾斜しており、検出面の標高は東部では40.4m、西部では38.0mである。

調査では江戸時代の整地層下面・方広寺の遺構検出面を第1面、上層の方広寺造営に伴う分厚い整地層下面を第2面、下層の方広寺造営に伴う整地層下面を第3面、地山検出面を第4面として、それぞれ遺構検出を行った。第1面では桃山時代から江戸時代の遺構、第2面では桃山時代の遺構、第3面では室町時代の遺構、第4面では平安時代から室町時代前期の遺構を検出した。

なお、図69～図71は東西方向に西半部北壁とその延長の断面図、図72は東半部北壁の断面図である。

第1面の検出遺構（巻頭図版3 - 2、図版18、図73）

路面・溝・土坑・柱穴などを検出した。

路面4-1（図版18 - 1） 西半部中央で検出した南北方向の路面である。北側・南側とも調査区外へ延びる。検出長は約8.5m、幅は約5.5mである。小石と砂を敷き詰めており、上面では数条の轍を確認した。厚さは約5cmで1面のみである。下層には厚さ約0.3～0.4mの基礎の整地層がある。出土遺物が少ないため時期の確定は難しいが、豊臣秀頼による造営に伴う遺構と推定できる。なお、路面4-1の標高は約39.8mで、現在の蓮華王院南大門に通じる道路とほぼ同じ高さである。

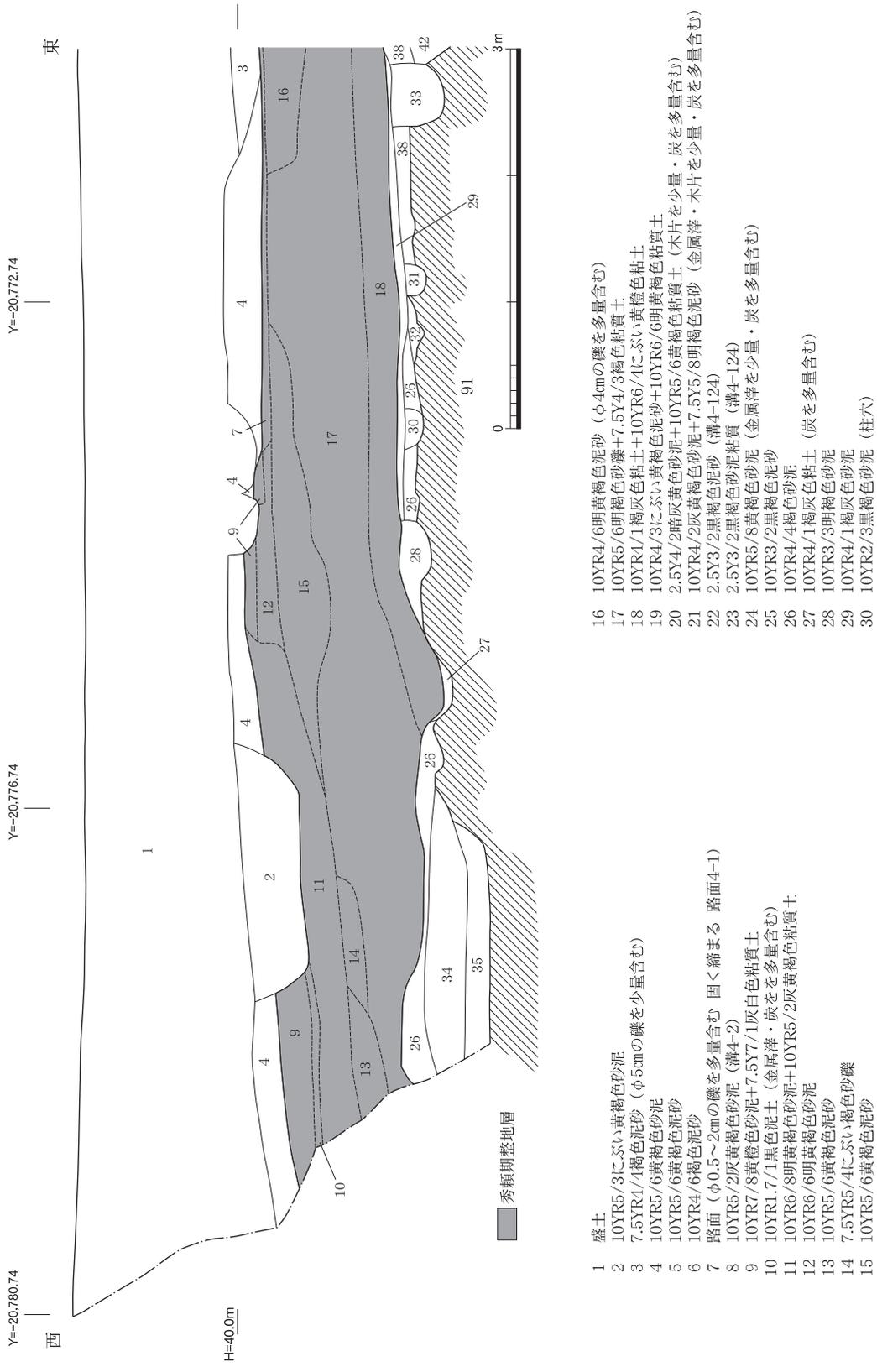
溝4-2 西半部中央で検出した路面4-1に伴う東側溝である。北側・南側とも調査区外へ延びる。北側で約3度東へ振る方位をとる。断面形は浅いU字形で、検出長は約8.5m、幅約1.5m、深さ約0.3mである。底部は南に向けて傾斜する。東西肩口には護岸施設の杭痕が南北約5mの間に並ぶ。埋土は灰黄褐色砂泥などで、上層からは勅期、下層からは 期の遺物が出土した。なお、路面4-1の西側溝は造られておらず、西へ向かって緩やかに傾斜していたようである。

落込斜面整地層（図版18 - 2） 西半部で検出した整地層である。図71の19～21・24層にあたる。厚さ1.0～1.5mにおよび西に向けて急激に傾斜する旧地形の斜面を埋めて堆積する。黄褐色砂泥などが東から西に向かって連続して埋め立てられた状況を示す。 期の土器類とともに多量の焼土・鉄滓・鞆羽口などが出土した。豊臣秀頼による方広寺の造営に伴う整地層と推定できる。

第2面の検出遺構（図版19、図74）

路面・溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。

路面4-2 中央部で検出した南北方向の路面である。北側・南側とも調査区外へ延びる。検出長は約17.6m、幅約3.0mである。粘土の上に小石を叩き締めて堅固に造られており、部分的には2



- 1 盛土
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 3 7.5YR4/4褐色泥砂 (φ5cmの礫を少量含む)
- 4 10YR5/6黄褐色砂泥
- 5 10YR5/6黄褐色泥砂
- 6 10YR4/6褐色泥砂
- 7 路面 (φ0.5~2cmの礫を多量含む 固く締まる 路面4-1)
- 8 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (溝4-2)
- 9 10YR7/8黄褐色砂泥+7.5Y7/1灰白色粘質土
- 10 10YR1.7/1黒色粘土 (金属滓・炭を多量含む)
- 11 10YR6/8明黄褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色粘質土
- 12 10YR6/6明黄褐色砂泥
- 13 10YR5/6黄褐色泥砂
- 14 7.5YR5/4にぶい褐色砂礫
- 15 10YR5/6黄褐色泥砂
- 16 10YR4/6明黄褐色泥砂 (φ4cmの礫を多量含む)
- 17 10YR5/6明褐色砂礫+7.5Y4/3褐色粘質土
- 18 10YR4/1褐灰色粘土+10YR6/4にぶい黄褐色粘土
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂+10YR6/6明黄褐色粘質土
- 20 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥+10YR5/6黄褐色粘質土 (木片を少量・炭を多量含む)
- 21 10YR4/2暗灰黄褐色泥砂+7.5Y5/8明褐色泥砂 (金属滓・木片を少量・炭を多量含む)
- 22 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (溝4-124)
- 23 2.5Y3/2黒褐色砂泥粘質 (溝4-124)
- 24 10YR5/8黄褐色砂泥 (金属滓を少量・炭を多量含む)
- 25 10YR3/2黒褐色泥砂
- 26 10YR4/4褐色砂泥
- 27 10YR4/1褐灰色粘土 (炭を多量含む)
- 28 10YR3/3明褐色砂泥
- 29 10YR4/1褐灰色砂泥
- 30 10YR2/3黒褐色泥砂 (柱穴)

図69 4-10区北壁断面図1 (1:50)

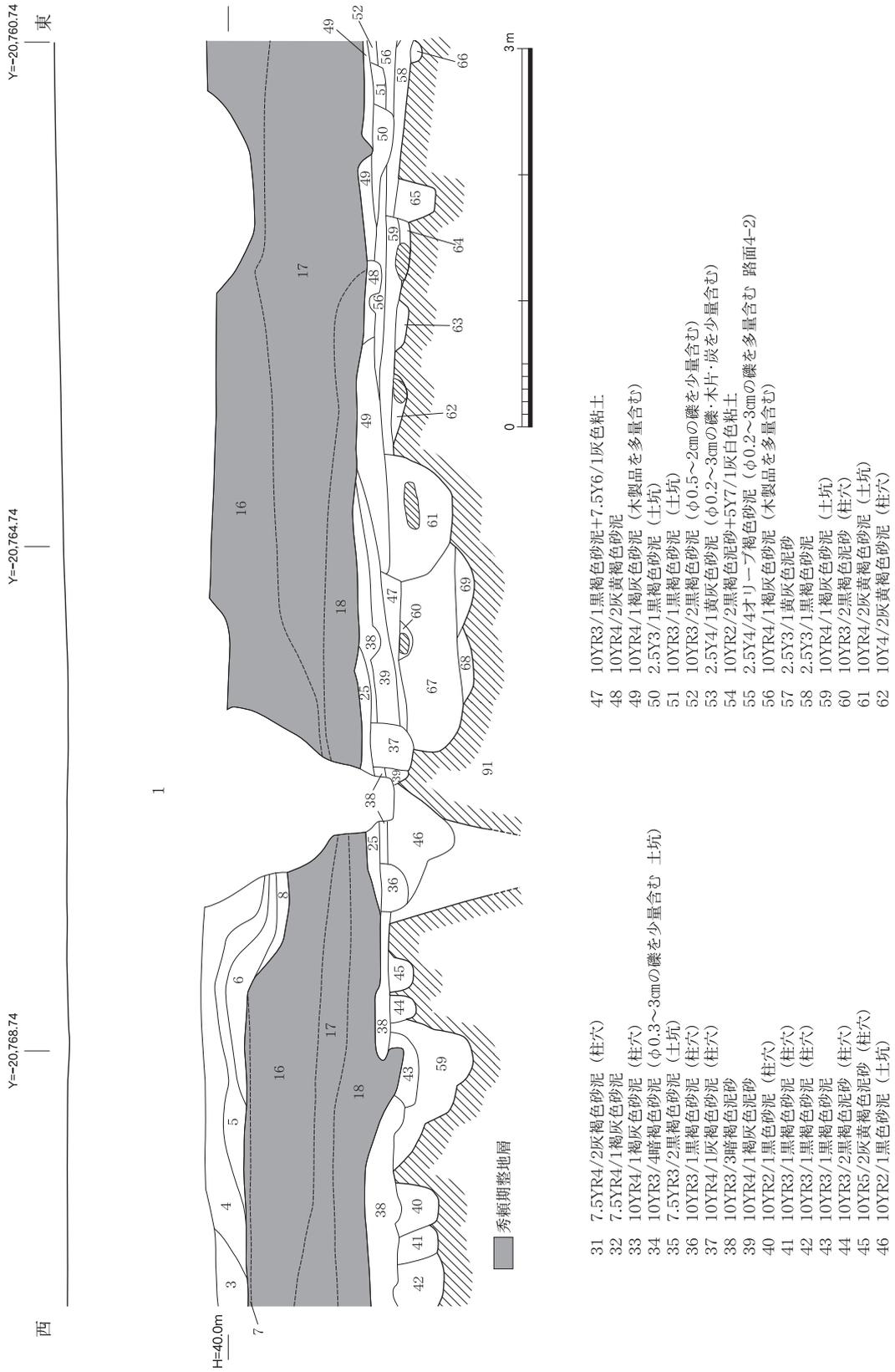
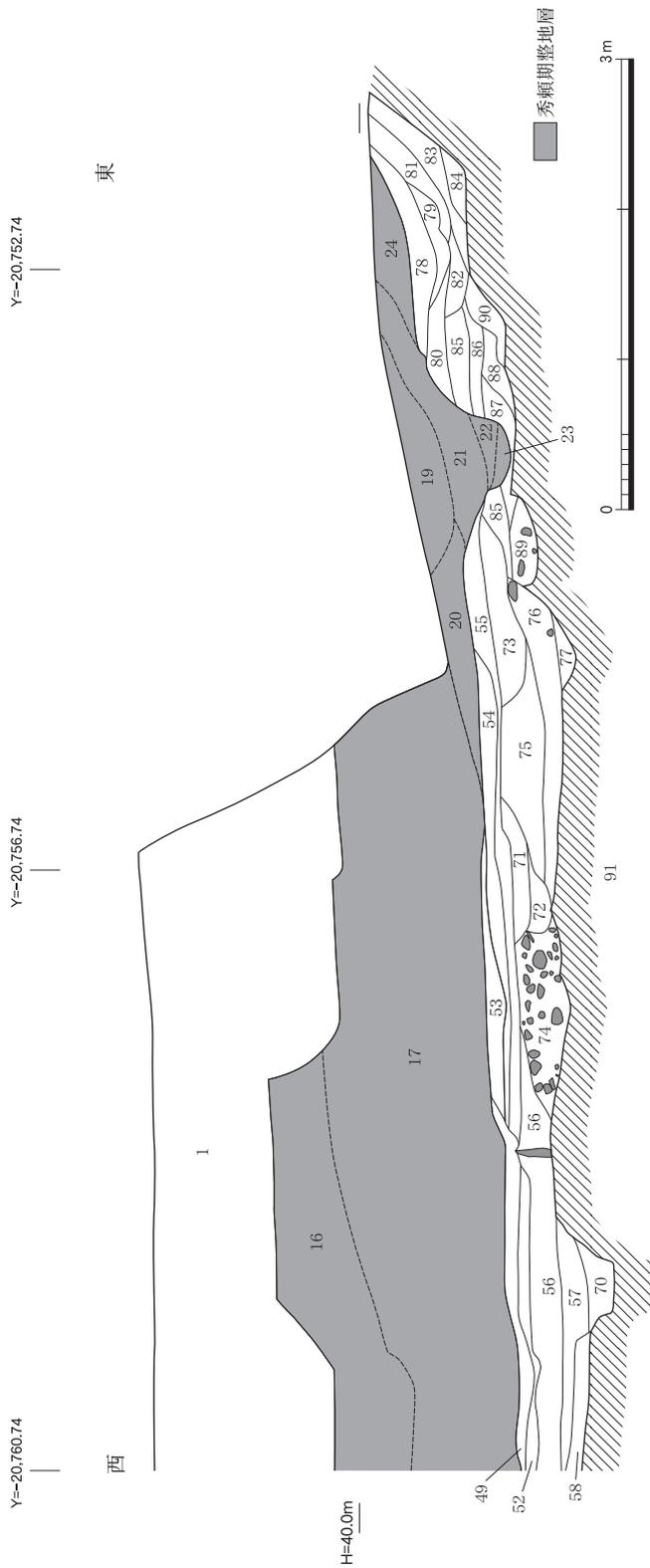
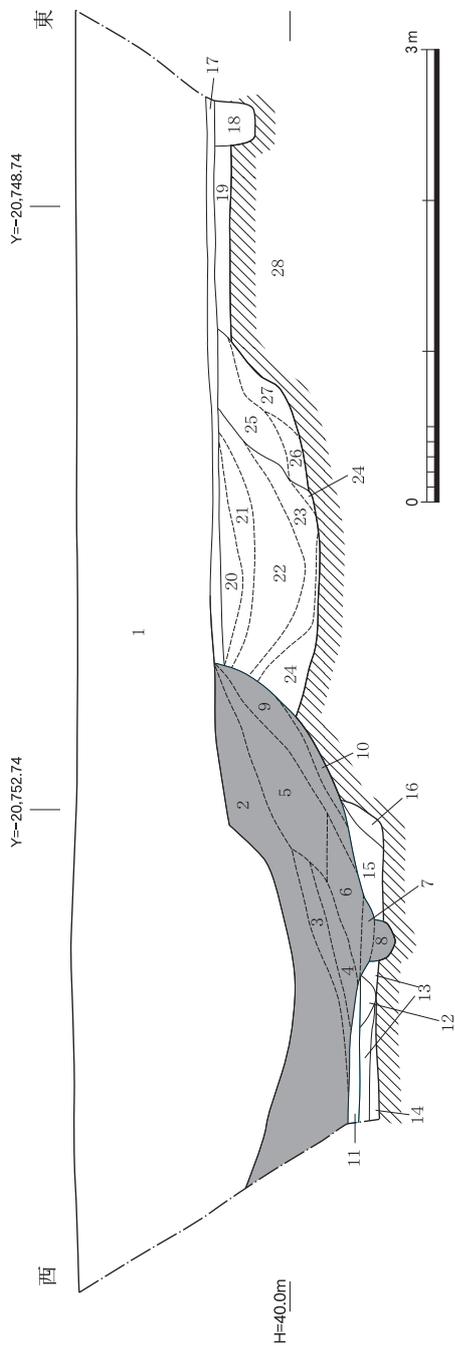


図70 4 - 10区北壁断面図2 (1 : 50)



- 63 10YR3/2黒褐色砂泥 (柱七六)
- 64 10YR3/2黒褐色砂泥
- 65 2.5Y3/1黒褐色泥質土 (柱六)
- 66 7.5Y2/2オリーブ黒色粘質土 (柱六)
- 67 10YR3/2黒褐色泥砂 (土坑)
- 68 10YR4/1褐色泥土 (土坑)
- 69 10YR5/1褐色粘質土 (土坑)
- 70 2.5Y3/1黄灰色泥砂粘質土 (φ3~5cmの礫を少量含む 土坑)
- 71 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 72 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 73 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 74 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土・炭を少量・φ0.5~10cmの礫を多量含む)
- 75 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ0.2~5cmの礫を多量含む)
- 76 10YR4/1褐色砂泥 (φ0.2~3cmの礫を多量含む)
- 77 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を多量含む 溝4-162)
- 78 10YR4/2灰黄褐色砂泥+10YR5/8黄褐色砂泥
- 79 10YR4/4褐色砂泥
- 80 10YR3/2黒褐色砂泥
- 81 10YR4/4褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を少量含む 溝4-273)
- 82 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝4-273)
- 83 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ0.2~2cmの礫を少量含む 溝4-273)
- 84 10YR3/2黒褐色砂泥 (溝4-273)
- 85 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ0.2~1cmの礫を少量含む)
- 86 10YR3/2里褐色砂泥 (φ0.2~5cmの礫を少量含む)
- 87 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (炭を少量含む)
- 88 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 89 10YR4/1褐灰色砂泥 (炭・φ10cmの礫を少量含む)
- 90 10YR3/3暗褐色砂泥 (φ0.2~3cmの礫を少量含む)
- 91 7.5YR4/3褐色粘質土 (地山)

図71 4 - 10区北壁断面図3 (1 : 50)



- | | | | |
|----|------------------------------------|----|--------------------------------------|
| 1 | 盛土 | 15 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 |
| 2 | 10YR7/6 明黄褐色砂礫 | 16 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 3 | 10YR5/1 褐灰色砂泥 | 17 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (室町時代) |
| 4 | 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土を中量含む) | 18 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 5 | 7.5YR6/6 褐色砂泥 (炭・焼土を中量含む) | 19 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 6 | 7.5YR4/4 褐色粘質土 (金属滓・炭・焼土を中量含む) | 20 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 (以下24まで溝4-325) |
| 7 | 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 | 21 | 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 8 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝4-124) | 22 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 9 | 7.5YR6/6 褐色砂泥 (金属滓・炭・焼土を多量含む) | 23 | 10YR3/4 暗褐色砂泥+7.5YR4/4 褐色砂泥 |
| 10 | 7.5YR5/1 褐灰色砂泥 | 24 | 10YR3/3 暗褐色砂泥+7.5YR4/4 褐色砂泥 |
| 11 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (固く締まる) | 25 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 (炭を少量含む 以下27まで土坑4-326) |
| 12 | 10YR3/3 暗褐色泥砂 (柱穴) | 26 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 13 | 10YR3/2 褐色砂泥+2.5Y5/1 黄灰色粘土 (固く締まる) | 27 | 10YR3/3~3/4 暗褐色砂泥 (炭を少量含む) |
| 14 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 | 28 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 (よく締まる 地山) |

図72 4-10区北壁断面図4 (1:50)

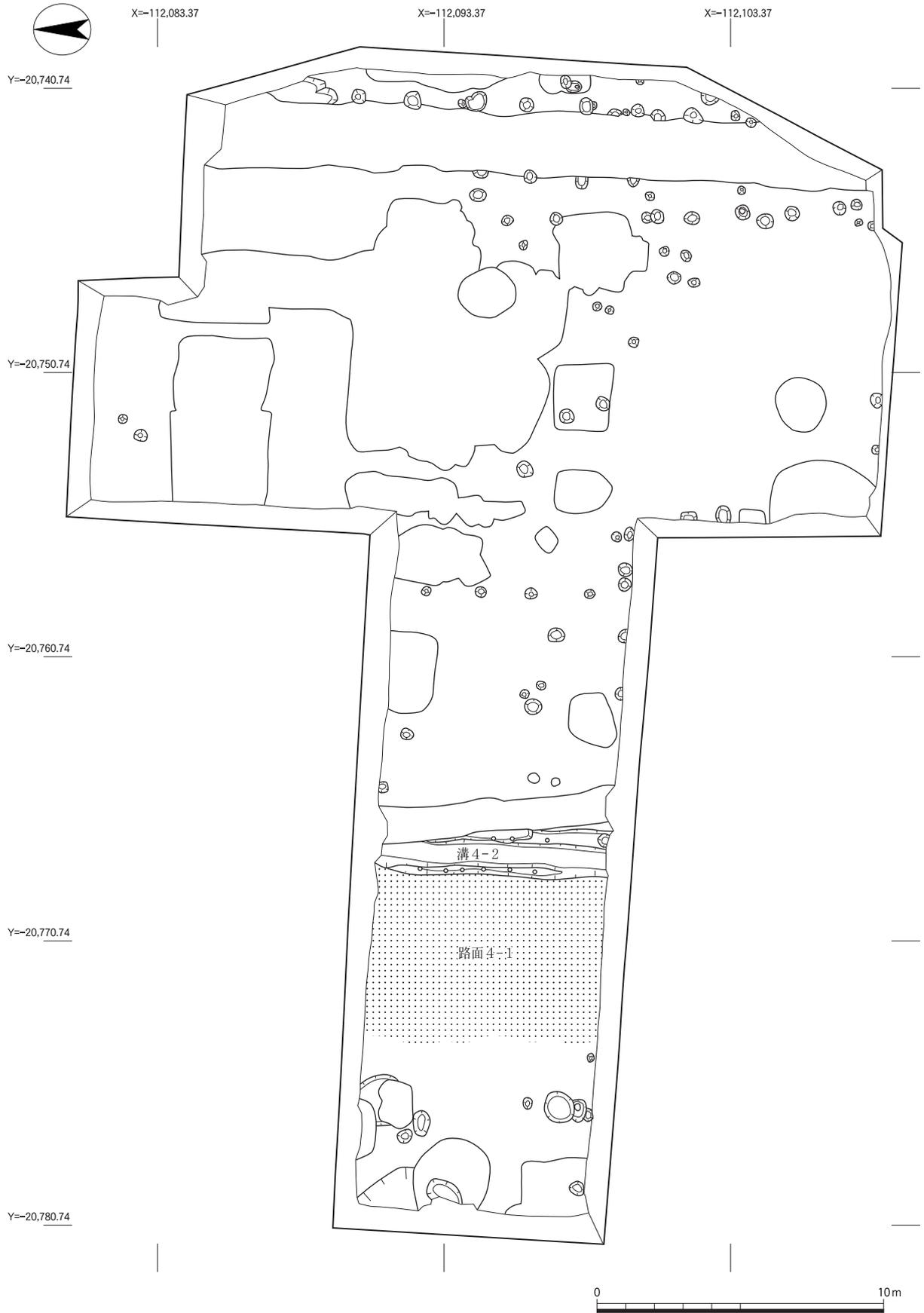


图73 4-10区第1面平面图(1:50)

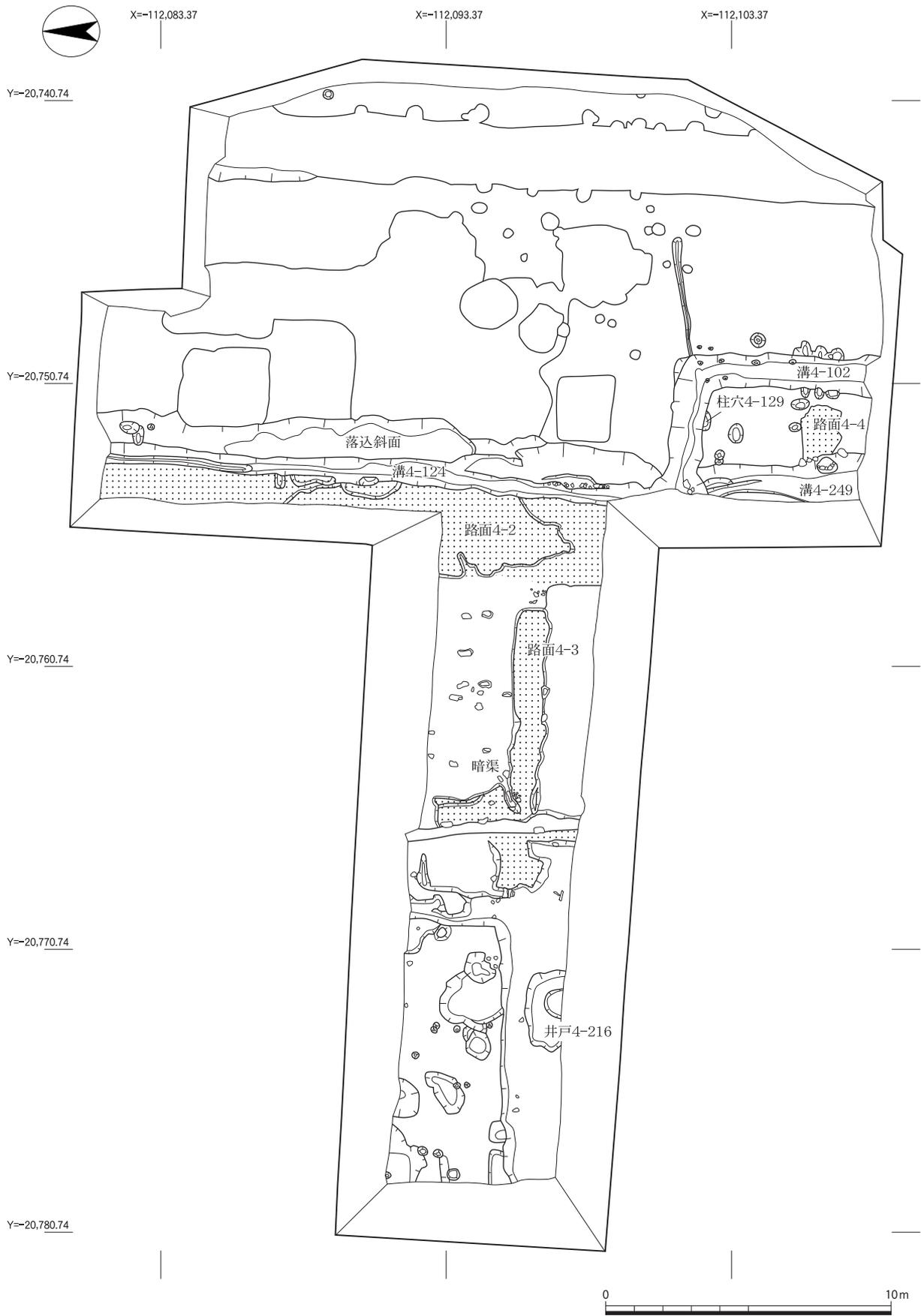


图74 4-10区第2面平面图(1:50)

～ 3面の路面を認めた。

溝4-124 中央部で検出した路面4-2に伴う東側溝である。北側は調査区外へ延びるが、南側は溝4-102と直交してつながる部分で調査区外になる。北側で約4度東へ振る方位をとる。断面形はU字形で、検出長約20.0m、幅約0.5～0.8m、深さ約0.4mである。埋土は黒褐色泥砂などで期の土器・木製品がまとまって出土した。

路面4-3（図版19-3） 西半部で検出した東西方向の路面である。接点は不明であるが、東側は路面4-2につながると推定できる。西側は不明瞭だが、南北方向に広がる部分が別の路面である可能性がある。検出長は約10.0m、幅約1.0mである。粘土の上に小石を叩き締めて堅固に造られている。南北方向に広がる部分では路面の下層でL字形の暗渠を検出した。南側は調査区外へ延びる。石組の溝に板で蓋をする。

路面4-2・路面4-3は西半部に広がる下層の湿地状堆積の直上に敷設される。湿地の上面からは期古段階の土器が出土していることから、これらの路面は方広寺創建時すなわち豊臣秀吉による造営に伴う遺構と推定できる。

溝4-102（図版19-2） 南部で検出したL字形の溝である。西側は溝4-124に直交してつながり、南側は調査区外へ延びる。断面形はU字形で、南北方向の検出長は約7.0m、東西方向の検出長は約4.5mで、ともに幅約1.2～1.5m、深さ1.0～1.3mである。底部は南に向けて傾斜する。溝4-124とつながる部分の南側には五輪塔片を含む大きさ約30～50cmの石を設置して護岸する。南北方向の部分には両肩口に3対の柱穴があり、簡易な橋が設けられていたと推定できる。西側には路面4-4が延びる。埋土は下層に腐植土が堆積し、期の土器類とともに箸・曲物・下駄などの木製品がまとまって出土した。また、上層からは多量の焼土・鉄滓・鞆羽口などが出土しており、豊臣秀頼による方広寺の造営に伴う整地と同時に埋没したことがわかる。

溝4-249 南部の路面4-4の下層で検出した南北方向の溝である。北側は溝4-102に攪乱され、南側は調査区外へ延びる。また、西側も調査区外になる。断面形は逆台形で、検出長約5.5m、幅2.4m以上、深さ約1.0mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は腐植土が中心で、期～期の遺物が出土した。

井戸4-216 西半部南壁際で検出した。調査区壁面が崩落する危険があったため完掘できず、詳細は不明である。

第3面の検出遺構（図75）

西半部を中心に溝・堀状遺構・土坑・柱穴などを検出した。

溝4-162 中央部で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外へ延び、南側は溝4-146に直交してつながる。断面形はU字形で、検出長は約12.0m、幅約0.7m、深さ約0.15mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥で、期の遺物が出土した。

土坑4-314 中央部で検出した。溝4-162に接する。平面形は東西に長く中央でくびれて西に広がる形状である。深さは約0.6mであるが、上部は削平されており、基底部分が遺存している。底部には大きさ10数cmの礫を詰める。埋土は黒褐色砂泥で期の遺物が出土した。

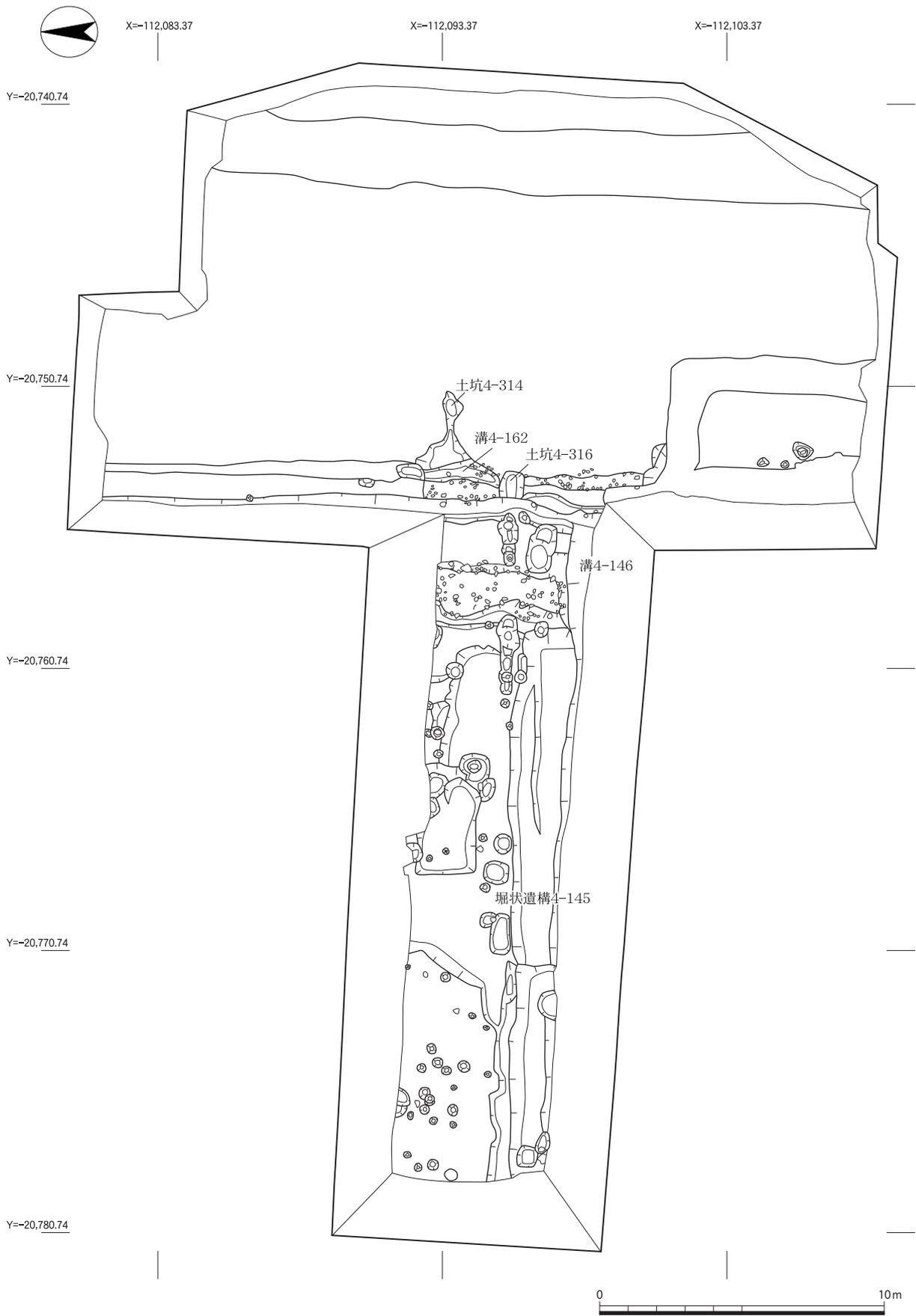


图75 4-10区第3面平面图(1:50)

土坑4-316 中央部で検出した。溝4-162に接続する。平面形は南北約0.7m、東西約1.2mの楕円形で、深さは約0.5mである。埋土は茶褐色砂泥で 期の遺物が出土した。

土坑4-314・土坑4-316は東側の斜面から流れ降りる雨水などを溝4-162に導水する排水施設と考えられる。

溝4-146 西半部南壁際で検出した東西方向の溝である。東側は溝4-162と直交し、西側は調査区外へ延びる。南側も調査区外になる。断面形はV字形に復元でき、検出長は約15.6m、幅0.8m以上、深さ0.4m以上である。埋土は腐植土を含む灰黄褐色砂泥で、多量の瓦を含む 期の遺物とともに木製品がまとまって出土した。

堀状遺構4-145 西半部南壁際で検出した東西方向の遺構である。西側は調査区外へ延び、南側は溝4-146が重複する。断面形は逆台形で、検出長は約18.5m、幅2.0m以上、深さ約0.5mである。埋土は腐植土を含む暗灰黄色粘質土で、多量の瓦を含む 期の遺物とともに木製品がまとまって出土した。

第4面の検出遺構（図版20、図76）

溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。

溝4-281 北西部で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外へ延び、東側は不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、検出長約5.9m、幅約0.9m、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥で、 期新段階～ 期古段階の遺物がまとまって出土した。

溝4-273（図版20 - 3） 中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区外へ延びる。北側で約2度西へ振る方位をとる。西に向かって傾斜する斜面にあるため、東肩は西肩より約0.4～0.5m高い。そのため断面形はJ字形で、検出長は約27.2m、幅約1.2m、深さ約0.3mである。埋土は褐色砂泥などで、 期の遺物が出土した。

溝4-252（図版20 - 3） 中央部で検出した溝4-273に並行する南北方向の溝である。北側・南側とも削平されて不明瞭となる。西に向かって傾斜する斜面にあるため、東肩は西肩より約0.4～0.5m高い。そのため断面形はJ字形で、検出長は約10.0m、幅約1.2m、深さ約0.3mである。西側は拳大の礫や瓦片を粘土で固めている。埋土は黒褐色砂泥で、 期新段階～ 期古段階の遺物が出土した。

井戸4-250（図版20 - 2、図77） 東部で検出した木組の井戸である。掘形は南北・東西とも約4.0mの隅丸方形で、重複して造り替えている。このうち南端部の1基を良好な状態で検出し、一辺が約90cmの方形縦板組であることを確認した。横棧4段が遺存し、縦板には幅約20～25cm、残存長約180cmの材を一辺あたり4枚用いて、補強に薄い板材を添える。木枠下部には径約70cmの円形の掘り込みがあるが、曲物は遺存していなかった。深さは3.5m以上である。埋土は掘形が灰黄色泥土、井戸枠内が褐灰色粘土で、 期古段階の土器類・木製品がまとまって出土した。

土坑4-255 東半部中央で検出した。平面形は不整形で、北東から南西方向を基軸とする細長い遺構である。規模は長さ約7.0m、最小幅約0.2m、最大幅約1.8m、深さ約0.1mである。底部に粘土を貼り、焼土の堆積があることから、窯の基底部の可能性があるが、関連する遺物は一切

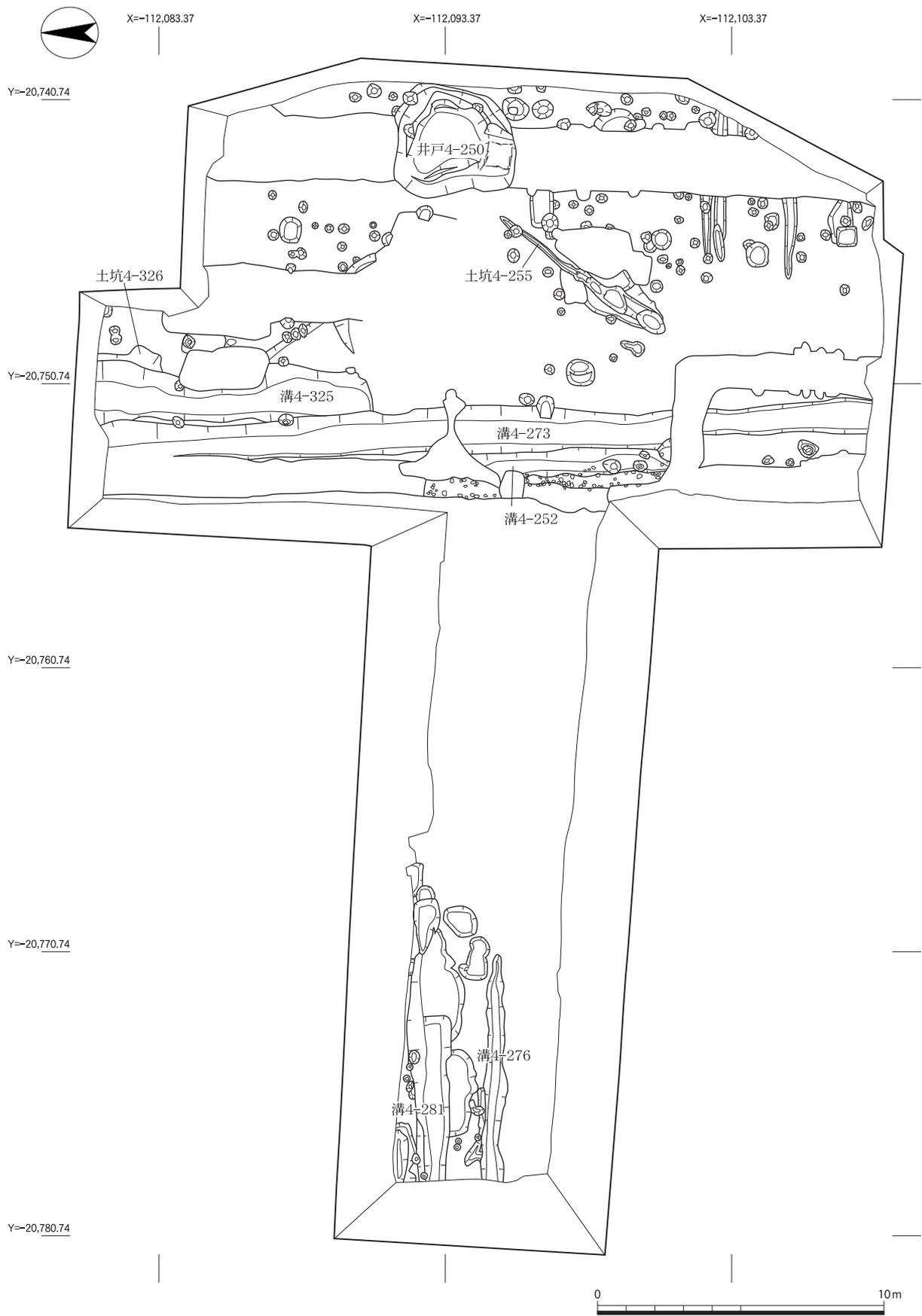


图76 4-10区第4面平面图(1:50)

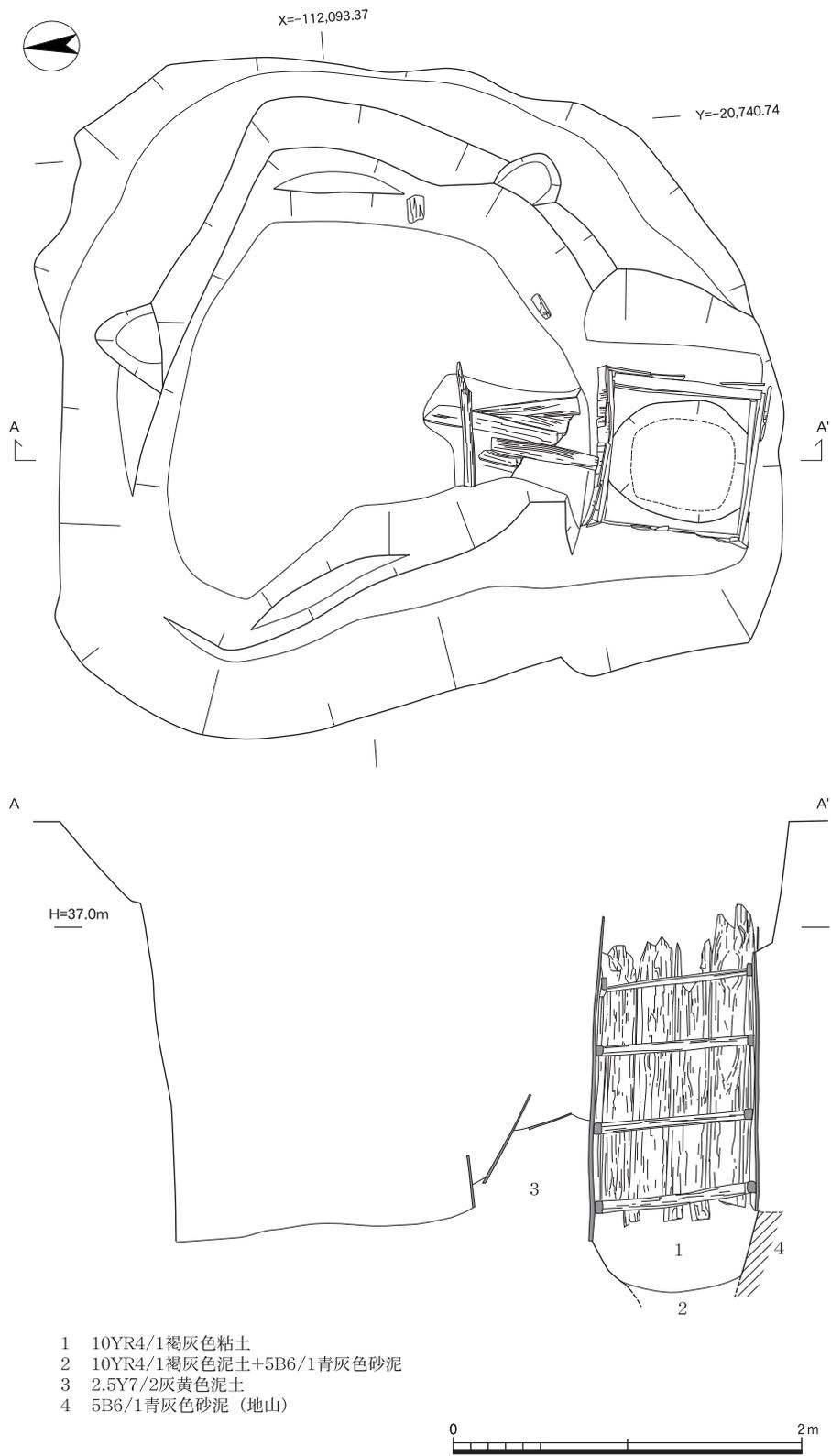


图77 井戸4-250实测图(1:40)

出土していない。出土遺物は少なく、時期の確定は難しい。

溝4-276 北西部で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外へ延び、東側は不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、検出長約7.8m、幅約0.5～0.6m、深さ約0.15mである。埋土は灰褐色砂礫で、 期の遺物がまとまって出土した。

溝4-325 北部で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外へ延び、南側は不明瞭となる。また、西側は部分的に攪乱されている。断面形は浅いU字形で、検出長約9.6m、幅約2.2m、深さ約0.7mである。埋土は暗褐色砂泥などで、 期の遺物が出土した。

土坑4-326 北部で検出した。西側は溝4-325と重複するため、平面形は不明である。埋土は暗褐色砂泥で、 期の遺物が出土した。

5 5次調査

(1) 調査の概要

5 - 1区～5 - 4区は東大路通に面した通用門南側で実施した発掘調査である。敷地東部での各時代の遺跡の状況の確認を目的とした。事前の立会調査から埋設管などを避け、4箇所の細長いトレンチを設定したが、それぞれの調査区がほぼつながる形状になる。

5 - 1区では平安時代から明治時代の遺構、5 - 2区～5 - 4区では室町時代から明治時代の遺構を検出した。

(2) 5 - 1区～5 - 4区の調査

層序(図78)

地山の標高が高いため各時代の遺物包含層は薄く、厚さ約0.2～0.5mの盛土の下を第1面として各時代の遺構を検出した。方広寺造営に伴う整地層は認めていない。

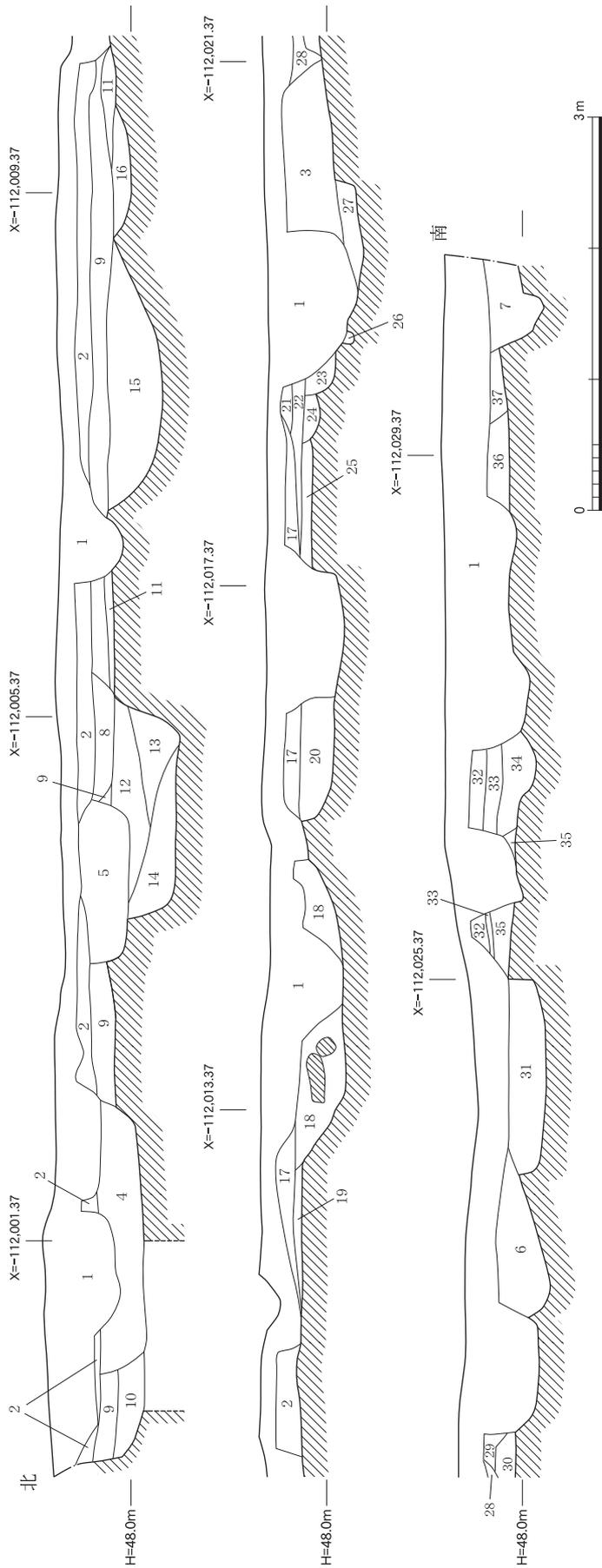
検出遺構(図版21、図79・80)

5 - 1区 江戸時代以降の井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝5-1・土坑5-6・土坑5-8・土坑5-28・土坑5-35・土坑5-39・柱穴、平安時代から鎌倉時代の土坑5-77・土坑5-78・土坑5-83・柱穴を検出した。

5 - 2区 室町時代の溝5-3を検出した。

5 - 3区 明治時代の土坑、室町時代の溝5-2を検出した。明治時代の土坑は東側・西側とも調査区外に広がる。規模は南北約10.0m、東西2.0m以上、深さ1.5mで、大量の窯道具と陶器片が出土した。焼け歪んだ個体も多く、近隣に所在した陶器窯の廃棄物を処理した土坑と推定できる。

5 - 4区 西端で瓦窯5-1を検出した。平面形はほぼ楕円形で、検出規模は南北約2.2m、東西約3.6mである。焼成室と東西の燃焼室床面が遺存する。焼成室は一辺1.75mの方形で、ロストルは4条ある。床面から焼成室基底部までの高さは50cmである。床面には粘土を貼り付ける。側壁は幅20cmあり、瓦と粘土を積み上げて造る。内側から外側に向けて順に黒変、黄変、赤変する。



- 1 盛土
- 2 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 5 10YR4/3~3/3褐色砂泥 (土坑)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑)
- 7 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色泥砂 (土坑)
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑)
- 9 10YR3/3~3/4暗褐色砂泥 (室町時代)
- 10 10YR4/4~4/4暗褐色砂泥
- 11 10YR4/4~4/4暗褐色砂泥
- 12 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑5-6)
- 13 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色粘質土 (φ0.5~2cmの礫を多量含む 土坑5-6)
- 14 10YR4/4褐色粘質土~粘土 (土坑5-6)
- 15 7.5YR3/3~3/4暗褐色砂泥 (土坑)
- 16 7.5YR3/4暗褐色砂泥
- 17 10YR3/3~4/3暗褐色泥砂
- 18 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色泥砂 (土坑)
- 19 7.5YR4/4にぶい黄褐色粘土~砂泥
- 20 10YR4/4褐色泥砂21 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 23 10YR4/2~4/3灰黄褐色粘質土~砂泥 (土坑)
- 24 10YR4/4褐色泥砂
- 25 10YR4/4褐色砂泥
- 26 7.5YR3/4暗褐色細砂主体の粘質土
- 27 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色粘土~シルト
- 28 10YR5/3~4/3にぶい黄褐色砂泥
- 29 10YR4/2~3/2灰黄褐色泥砂
- 30 10YR4/4褐色砂泥~泥砂 (炭を少量含む)
- 31 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥+10YR5/6黄褐色粘土 (土坑)
- 32 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色泥砂 (礫を少量含む)
- 33 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色泥砂
- 34 7.5Y7/1~6/1灰白色泥砂~細砂+10Y5/8黄褐色粘土
- 35 10YR5/6~5/4黄褐色泥砂
- 36 10YR4/4褐色砂泥
- 37 10YR4/3~3/3にぶい黄褐色砂泥~粘質土+10YR5/6~5/8黄褐色粘土~砂泥

図78 5 - 1 区東壁断面図 (1 : 50)

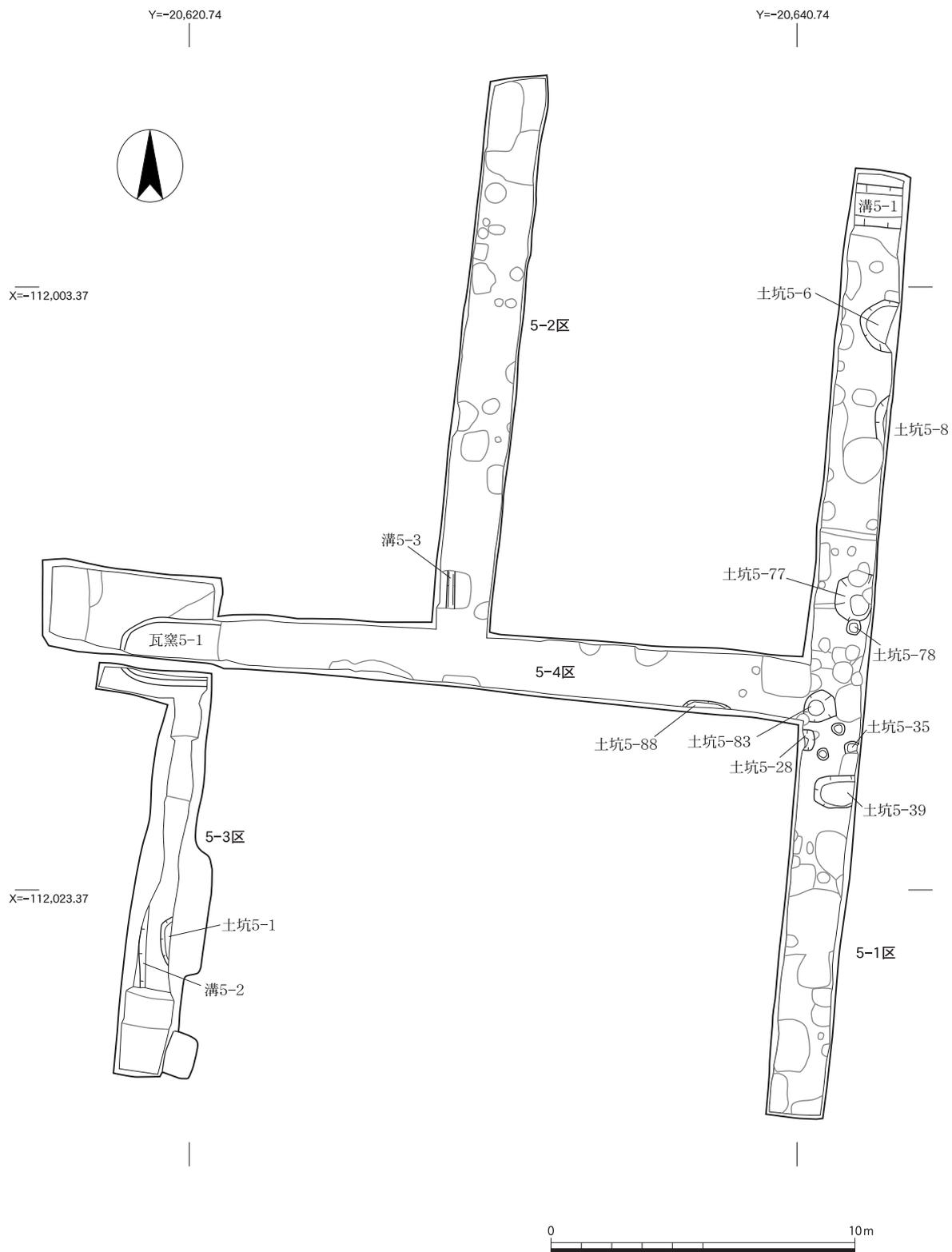


图79 5-1区~5-4区平面图(1:200)

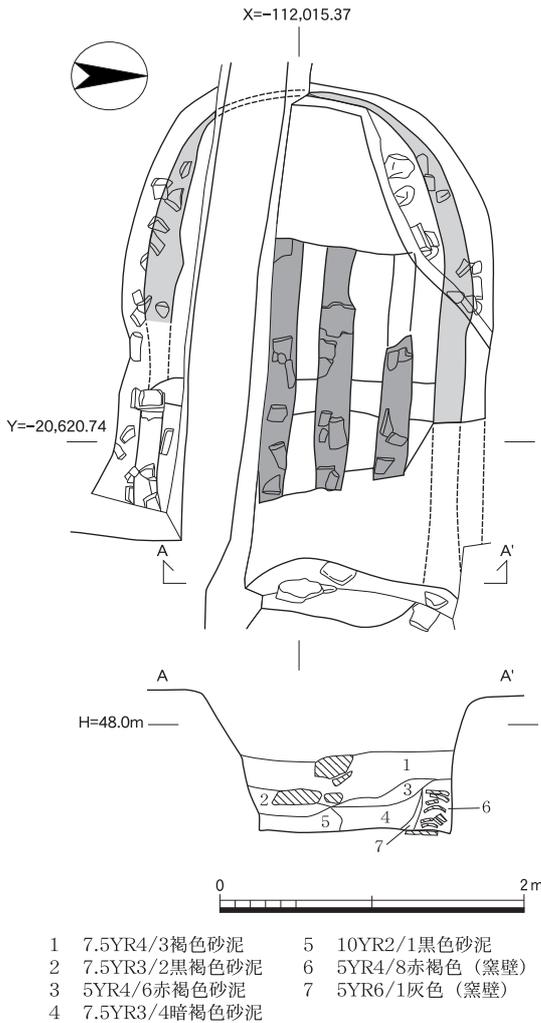


図80 瓦窯5-1実測図(1:50)

焚口は遺存しないが、東西両側に焚口をもつ「達磨窯」と呼ばれる型式の瓦窯である。明治時代に属する。瓦窯5-1は土嚢で保護したのち埋め戻した。

6 6次調査

(1) 調査の概要

敷地内の埋設管設置工事等に伴う立会調査である。

対象地は博物館南門北側のインターロック改修工事地点、新館南側の電気配管地点、本館および仮設収蔵庫東側の既設水道管迂回配管地点、仮設収蔵庫北側のガス管理設地点、仮設収蔵庫東側の雨水排水管理設地点、仮設収蔵庫北東の電気配管および雨水排水管理設地点である。各地点では、それぞれ工事に立ち会って堆積状況の確認を行い(6-19区~6-25区)、断面図が必要と判断した地点においては柱状図を作成して層位の把握をはかった(6-1区~6-18区)。

各立会調査地点は大きく、博物館南門北側・新館南側・本館および仮設収蔵庫東側の3箇所に分けることができる。博物館南門北側では方広寺南門から南へ延びる街路推定地であり、新館南側は南石塁の南に位置することから、方広寺関係の遺構の確認が期待できた。また、本館および仮設収蔵庫東側は博物館建設時に大きく削平を受けたと考えられる地点であり、遺構の有無が調査の目的となった。

(2) 6-1区~6-25区の調査(図版22-3~5、図81)

6-19区 博物館南門北側の地点ではインターロック敷設範囲において立会を行い、6-1区において断面観察を行ったが、工事掘削深度は現代盛土内で収まっていた。

6-21区 新館南側地点では現状で西から東へ高まる緩やかな傾斜面となっており、6-3区~6-7区において断面観察を行った。掘削深度は約0.6~0.9mで地山面までは達していない。6-5区では掘削部全体が現代の攪乱内であったが、その他の地点では現代盛土(インターロック敷設土)の下層で博物館建設時の近代盛土を確認した。6-3区と6-4区では、近代盛土下で炭・焼土とともに大仏瓦を包含した褐色砂泥と黒褐色砂泥を検出しており、方広寺石塁南側の

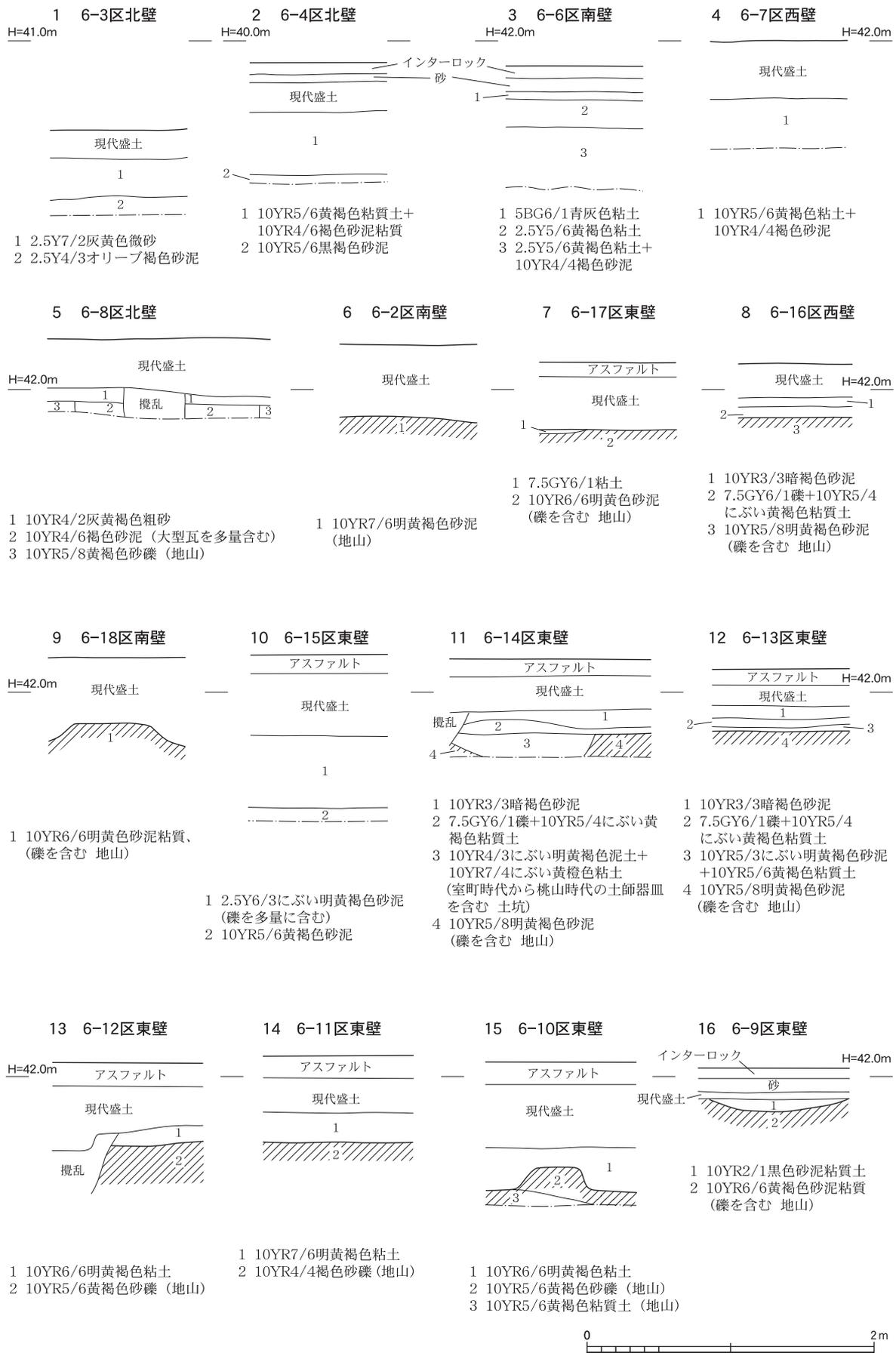


図81 6次調査柱状断面図1~16(1:40)

最終堆積層と考えられる。6 - 6区と6 - 7区では掘削深度は近代盛土内で収まっていた。

6 - 20区・6 - 22区～6 - 25区 本館東側および仮設収蔵庫東側と北側では地山までの深度が浅く、6 - 2区や6 - 18区のように現代盛土の直下で地山面を検出した場所もある。基本的層序は現代の盛土の下層に薄い近代整地層が確認でき、本館建設時に斜面を大きく削平して整地した状況が窺えた。地山面の標高は本館北東部(6 - 2区・6 - 8区・6 - 13区～6 - 18区)で41.7～41.9m、本館東側(6 - 11区・6 - 12区)で41.5mとやや深く、南東部(6 - 9区)では41.8mとまた浅くなる。6 - 10区および6 - 15区では、深く攪乱を受けているのであろう。なお、遺構は削平を受けてほとんど遺存しないが、仮設収蔵庫北側の6 - 8区では近代整地層下で、焼けて赤変した大型瓦を多く含む土坑を検出した。東西約1.3mで、深さは0.1m以上である。また、6 - 14区でも室町時代から桃山時代の土師器皿や大型瓦を包含する土坑を検出した。規模は南北約1.0m、深さは0.2m以上である。

7 7次調査

(1) 調査の概要

博物館敷地内の赤外線監視装置増設工事に伴う立会調査である。

工事は赤外線装置を事務管理棟東側から東大路通・七条通・大和大路通に沿って13箇所と本館北西部に1箇所の合計14箇所の設置と既設センサーを1箇所移設するものである。このうち、5箇所については工事深度が遺構面に達しないため調査の対象外とした。掘削は東通用門北側から開始し、掘削順に7 - 1区～7 - 10区とした。掘削深度は7 - 1区～7 - 7区は0.7m、7 - 8区～7 - 10区は0.5mである。

(2) 7 - 1区～7 - 10区の調査(図版22 - 6・7、図82)

7 - 2区 博物館建設時の近代整地層が厚さ0.6m以上あることを確認した。

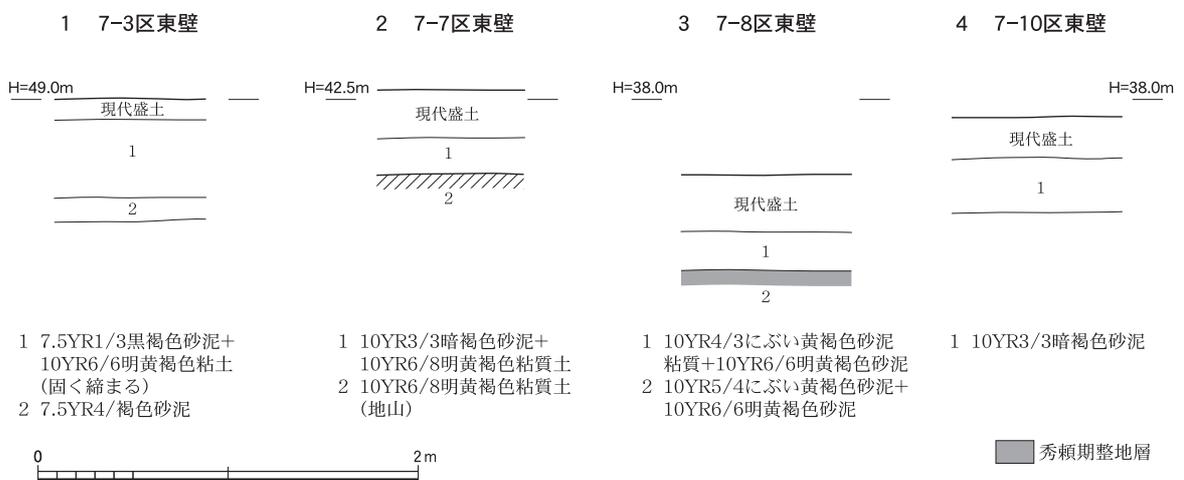


図82 7次調査柱状断面図1～4(1:40)

7 - 3区 近代整地層の下層で平安時代から室町時代の遺物を包含する褐色砂泥層を確認した。平安時代後期の土師器、鎌倉時代後期の須恵器、室町時代後期の備前産播鉢などが出土した。東大路通沿いでの中世遺構面の存在が推定できる。

7 - 7区 地表下0.25mで厚さ約0.2mの近代整地層を確認し、その下層は地山となる。近代整地層からは、軒平瓦周縁部の上端部が出土した。面取りが施してあり、裏側には文様部接合のためのカキヤブリが認められる。

7 - 8区 地表下0.3mで厚さ約0.2mの近代整地層が残り、その下層で方広寺整地層と考えられる地山土を含む黄褐色砂泥を確認した。近代整地層からは、焼けて赤変した瓦片が出土した。方広寺焼失時のものと推定できる。

7 - 10区 近代整地層だけの確認であり、掘削深度から方広寺整地層までは至らなかった。
なお、7 - 1区・7 - 4区～7 - 6区・7 - 9区は全面攪乱を受けていた。

8 8次調査

(1) 調査の概要

博物館敷地内の南トイレ改装工事と本館前スロープ設置工事に伴う立会調査である。工事の掘削箇所はトイレ前に3箇所、本館前スロープ設置の基礎坑が5箇所であるが、掘削地点が隣接しているためトイレ前で1箇所(8 - 1区)、本館前で2箇所(8 - 2区・8 - 3区)の立会調査を実施することになった。工事掘削深度は8 - 1区は0.65m、8 - 2区・8 - 3区は0.75mである。

(2) 8 - 1区～8 - 3区の調査(図版22 - 8、図83)

8 - 1区 地表下0.25mで博物館建設時の近代整地層を検出したが、これらの整地層は掘削深度より深く堆積しており、方広寺の遺構面までは至らなかった。

8 - 2区 掘削深度全体が現代盛土で、近代整地層も確認できていない。

8 - 3区 地表下0.5mで博物館建設時の近代整地層を検出したが、これらの整地層は掘削深度より深く堆積しており、方広寺の遺構面までは至らなかった。

なお、8 - 2区・8 - 3区の現代盛土から鎌倉時代から室町時代の土師器や江戸時代の瓦・施釉陶器などが出土しているが、これらは整地の際に2次的に堆積したものである。

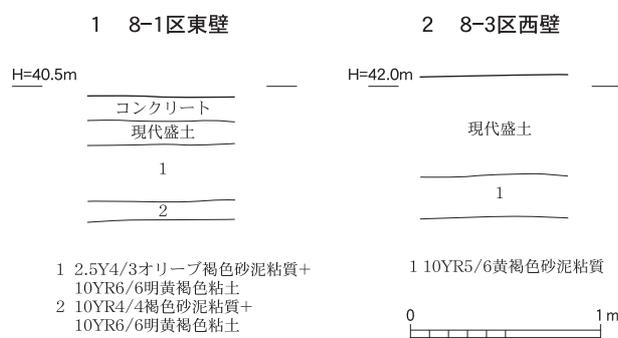


図83 8次調査柱状断面図1・2(1:40)

9 9次調査

(1) 調査の概要

9 - 1区・9 - 2区は本館北西側に設定し、3次調査で検出した方広寺南門東側の回廊の遺存状況の確認を目的とした。9 - 3区は新館南階段西端部、9 - 4区・9 - 5区は新館南西部に設定し、方広寺南西部の石畳の遺存状況および回廊南西隅部の確認を目的とした。

今回の調査は方広寺跡の遺構確認調査であり、各調査区では方広寺に関連する遺構を認められた段階で検出を行い、当該期の遺構に関しては一部しか掘り下げていない。また、各調査区の遺構面は、真砂によって上面を保護したのち埋め戻した。

(2) 9 - 1区の調査

層序(図84)

調査区西端部で深さ約0.4m、東端部では約1.4mの深さまで攪乱されている。層序は西端部で厚さ約0.2m本館建設時の盛土の下層に厚さ約0.1mの江戸時代末から近代の土壌化層である褐色砂質シルトを認めたのみである。これらの下層は地山の黄褐色粘土となり、遺構面はまったく遺存していなかった。地山検出面の標高は41.2mである。

第1面の検出遺構(図版23 - 1、図85)

井戸を検出した。方広寺に関連する遺構はない。

井戸9 - 10(図84) 西壁際で検出した。掘形の平面形は円形であるが、西側の大部分が調査区外になるため規模や詳細は不明である。また、掘削は検出面より約0.5mまでに留めたため、底部を確認していない。2基が重複しており、新しい方の井戸は埋土の状況から中央に幅約0.8mの木枠があったと推定できる。古い方の井戸は掘形を確認したのみである。埋土は掘形が黒褐色砂泥など、井戸枠内が暗褐色泥砂で、期～期の遺物が出土した。

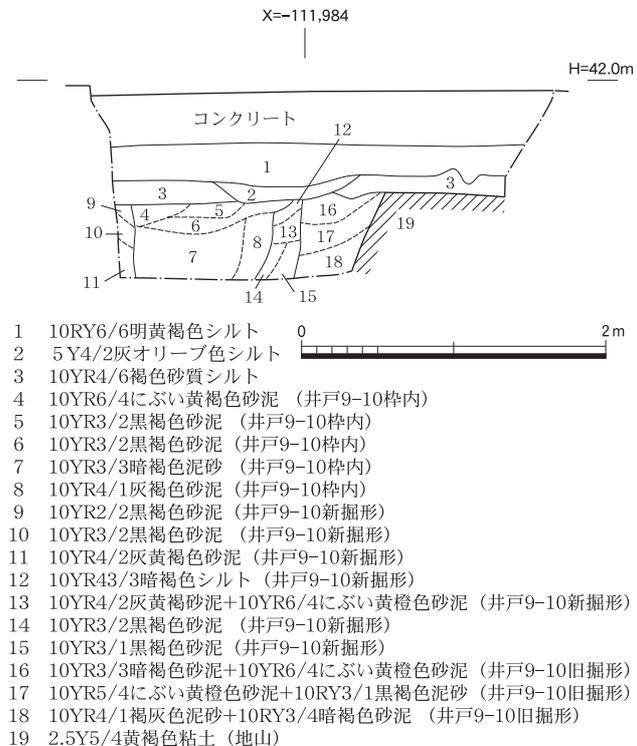


図84 9 - 1区西壁断面図(1:50)

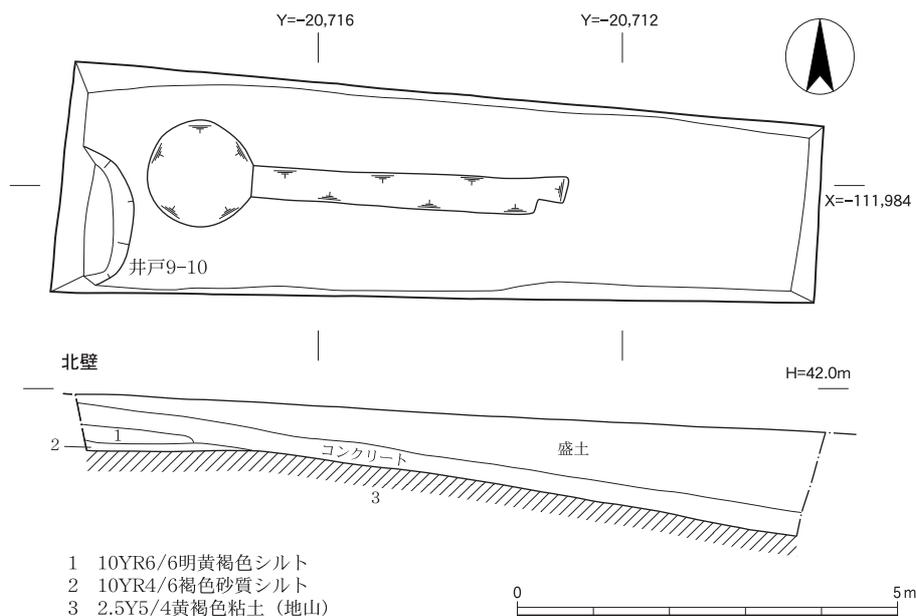


図85 9 - 1区第1面実測図(1:100)

(3) 9 - 2区の調査

層序

3次調査3 - 1区に東接する。厚さ約1.0mの盛土の下層は、厚さ約0.1~0.2mの江戸時代末から近代の土壌下層であるにぶい黄褐色砂泥がある。この下面を第1面として遺構検出を行った。

第1面の検出遺構(図版23 - 3、図86)

方広寺の回廊・溝などを検出した。

回廊 3列に東西方向に並ぶ5基の礎石据付穴を検出した。西側は3 - 1区検出遺構につながり、東側は調査区外へ延びる。礎石はすべて残っていない。柱間に規模は3次調査の成果とあわせて、桁行・梁間ともに3.75m(12.5尺)等間に復元するのが妥当である。北柱列の柱穴9-4・柱穴9-7は遺存状況が良好である。平面形は径約1.0mの円形で、深さは約0.2mである。埋土は褐色泥砂などで拳大の礫を含む。中央柱列の柱穴9-5・柱穴9-8、南柱列の柱穴9-6は攪乱のため遺存状況はよくない。なお、回廊基壇は地山の黄褐色粘土上に、礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥などを約0.2~0.3mの高さに積み上げて構築している。

溝9-2(図87) 南部で検出した東西方向の溝である。回廊南側に並行しているので雨落溝と推定できる。北肩は南柱列の推定心から約1.2m南に位置する。西側は3次調査で検出した溝3-111につながり、東側は調査区外へ延びる。断面形はU字形で、検出長は約5.5m、幅は西端部で約1.2m・東端部で約0.8m、深さは約0.3mである。底部は西に向けて緩やかに傾斜する。埋土は暗褐色砂泥などで、底部には約0.2mの幅で大礫や鉄滓を敷く。多量の大型瓦が出土した。

溝状遺構9-3 南部で検出した東西方向の溝状の落込である。西側・東側とも調査区外へ延びる。断面形は浅いU字形で、検出長約5.5m、幅約2.0m、深さ約0.3mである。3次調査で検出した石

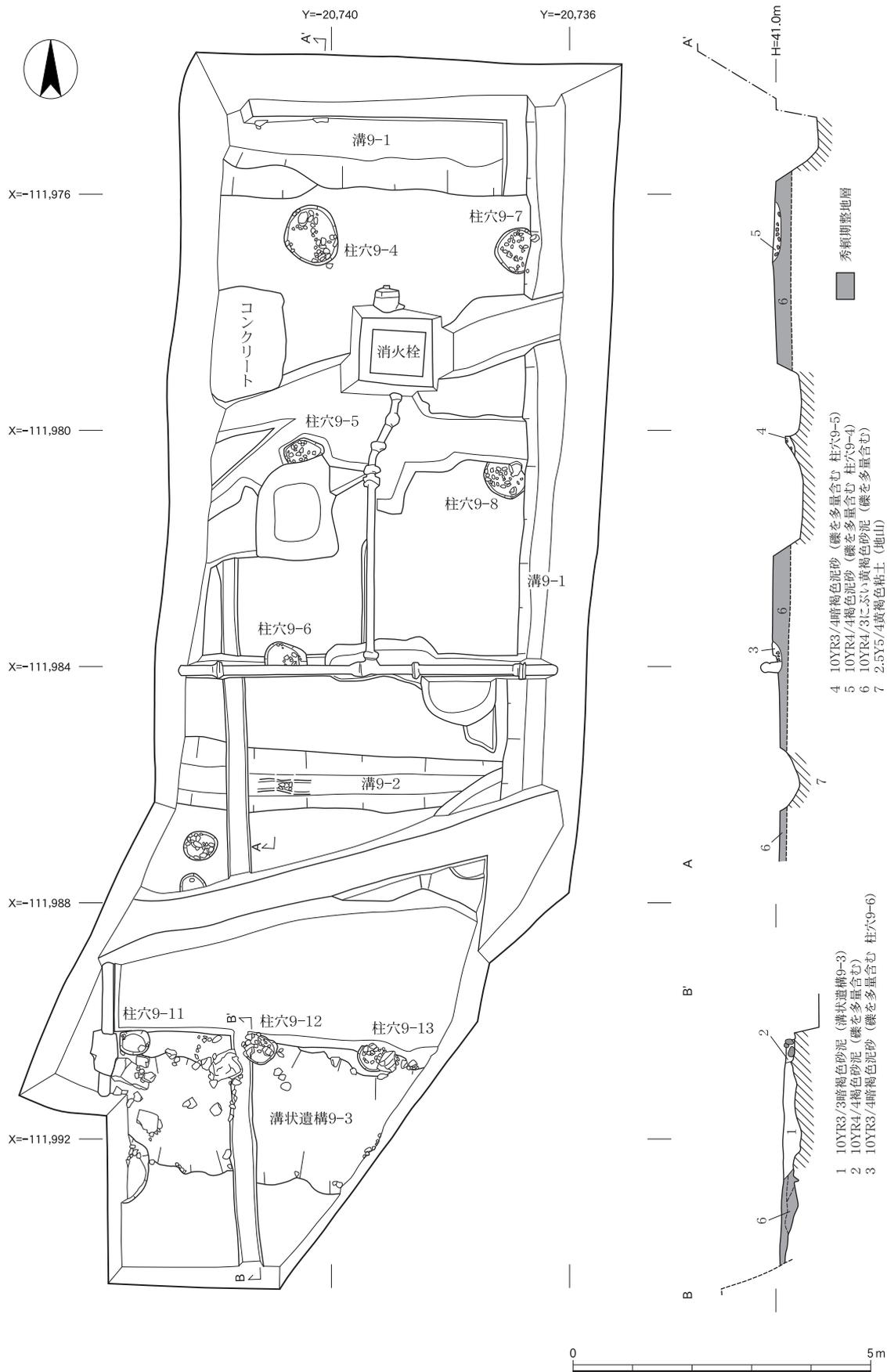


図86 9 - 2区第1面実測図 (1 : 100)

組溝3-100の東延長部に位置しており、北肩部には原位置を保っていないが、大きさ約50cmの石が3石遺存するので、石材が抜き取られたものと推定できる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、多量の礫や椀瓦とともに近代の陶磁器片が出土した。本館建設以前にほとんどの石材が持ち去られ、礫や瓦を廃棄したと考えられる。

なお、溝状遺構9-3の北肩を切り込んで東西柱列（柱穴9-11・柱穴9-13）がある。北壁際の東

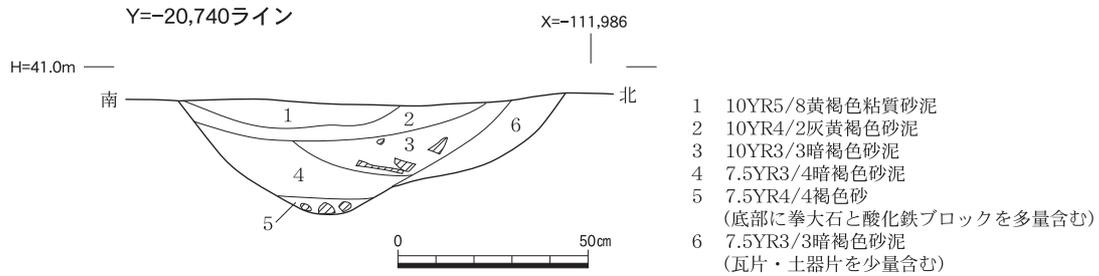


図87 溝9-2断面図(1:20)

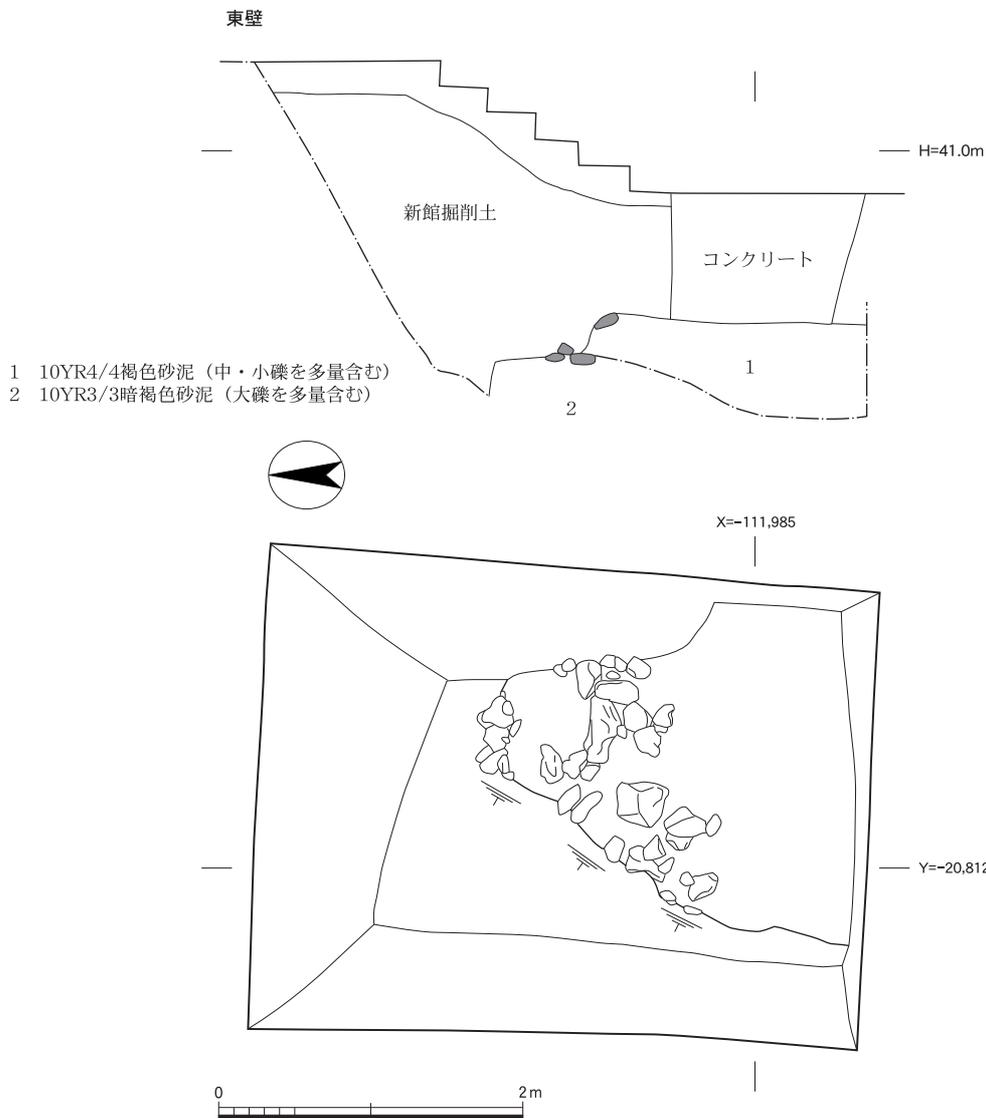


図88 9-3区第1面実測図(1:50)

西溝（溝9-1）や東壁際の南北溝（溝9-9）も同時期のものである。これらの遺構は博物館建設以前の恭明宮に関連する関係の遺構の可能性がある。

（４） 9 - 3 区の調査

層序

新館建設時に攪乱されている。南部の地表下約0.85mで、石罫9-1の裏込を検出した。

第1面の検出遺構（図版23 - 2、図88）

石罫9-1 石罫の裏込土を南東部で検出した。3次調査3 - 2区で検出した石罫3-1の裏込に連続する。北西側は新館建設時に攪乱され、裏込土が遺存する北端はX=-111,983.2付近である。上層は中・小礫が目立つ褐色砂泥、下層は大礫を多量に含む暗褐色砂泥である。

（５） 9 - 4 区の調査

層序

3次調査3 - 2区に西接する。厚さ約0.4mの盛土下面で石罫前面の埋没土上層と裏込土の一部を確認し、地表下約0.6mで石罫の巨石上端を検出した。

第1面の検出遺構（図版24 - 1、図89）

石罫9-2 北部から中央部で検出した。東側は3次調査で検出した石罫3-1につながり、西側は調査区外へ延び現存する石罫につながる。石罫の巨石を1石検出した。大きさは幅200cm以上、厚さ約90cmである。下端まで掘削していないので、高さは不明である。

裏込は検出面で巨石の北側から約3.0mの奥行きがある。巨石側に大礫をブロック状に配し、周囲に中・小礫を多量に入れて固定する。裏込には破碎された石仏が含まれる。

（６） 9 - 5 区の調査

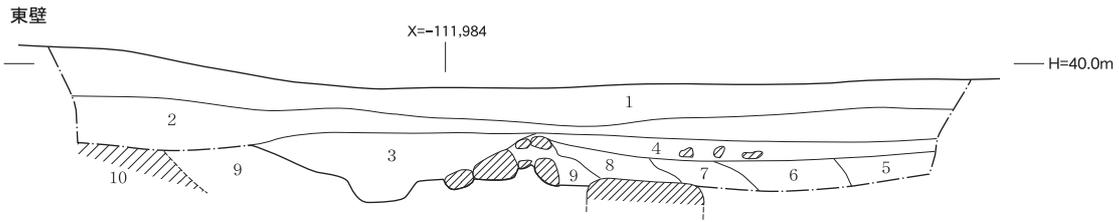
層序（図90）

東半部は攪乱されている。層序は西部で厚さ約0.3mの盛土の下層に厚さ約0.2mの近代整地層である黄褐色砂泥がある。この下面を第1面として遺構検出を行った。

第1面の検出遺構（図版24 - 2、図91）

柱穴9-20・柱穴9-21（図92） 北西部で検出した東西方向に並ぶ柱穴である。柱間の規模は約3.0m（10尺）である。平面形は径約1.0mの円形で、深さは約0.4～0.5mである。埋土は版築状に黄褐色粘土ブロックを多量に含む土を埋める。出土遺物はない。

構造から礎石据付穴の可能性が考えられるが、柱間が10尺であること、礎石根固め石を持たない壺掘り版築構造であること、3 - 1区・9 - 2区で検出した回廊中央柱列の西延長線上に位置的には近いが合致せず、調査区内に南柱列の柱穴が確認できないことなどから、3 - 1区・9 - 2区で検出した回廊と同一遺構とは断定できない。あるいは豊臣秀吉が造営した段階の築地の柱穴とも推定できるが確証はない。



- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1 盛土 | 6 10YR4/4褐色砂泥 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 | 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 |
| 4 7.5YR4/3褐色砂泥 | 9 10YR3/3暗褐色砂泥 (石罫9-2裏込) |
| 5 10YR4/6褐色砂泥 | 10 5YR3/6暗赤褐色砂泥 (地山) |

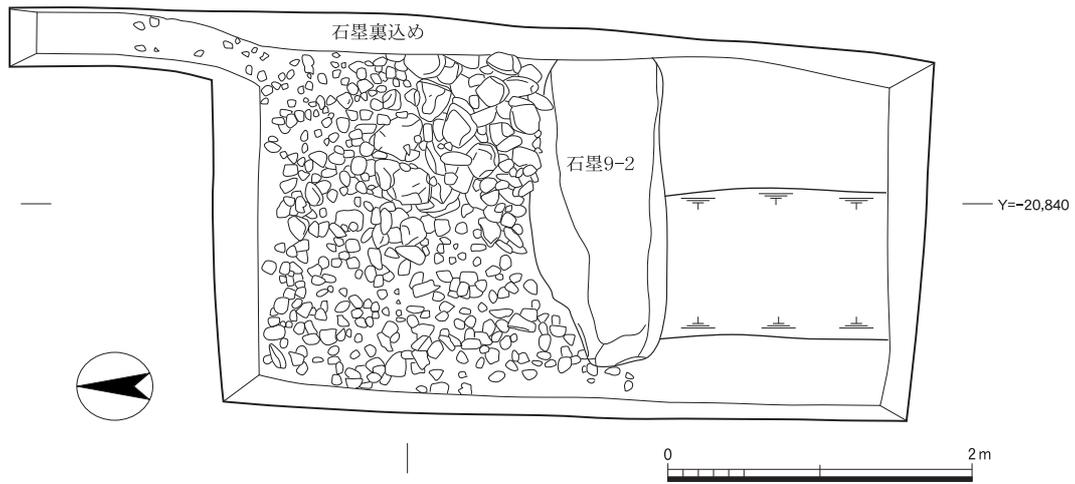
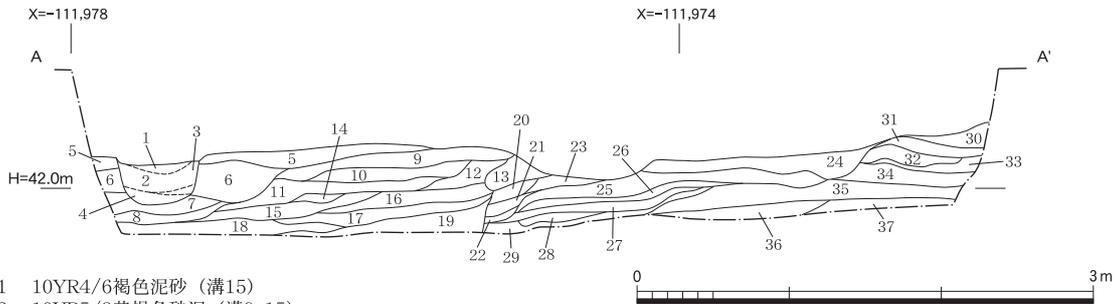


図89 9 - 4区第1面実測図 (1 : 50)



- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR4/6褐色泥砂 (溝15) | 21 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR5/8黄褐色砂泥 (溝9-15) | 22 10YR6/4黄橙色粗砂 |
| 3 10YR4/4褐色砂泥 (溝9-15) | 23 10YR3/3暗褐色砂泥+10YR5/8黄褐色粘質土ブロック |
| 4 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 (溝9-15) | 24 10YR3/3暗褐色砂泥 (φ3.0~10.0cmの礫を少量含む) |
| 5 10YR2/2黒褐色砂泥 | 25 10YR3/1黒褐色砂泥+ 10YR5/8黄褐色粘質土 |
| 6 10YR3/3暗褐色砂泥 | 26 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 7 10YR3/4暗褐色砂泥 | 27 7.5YR3/3暗褐色砂泥 |
| 8 10YR3/4暗褐色砂泥+10YR6/6明黄褐色砂泥 | 28 7.5Y3/4暗褐色砂泥 |
| 9 10YR3/3暗褐色泥砂 | 29 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 |
| 10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 | 30 7.5YR3/3暗褐色砂泥 |
| 11 10YR3/4暗褐色泥砂+10YR3/4暗褐色粘土ブロック | 31 7.5YR3/3暗褐色砂泥+10YR5/6黄褐色砂泥 |
| 12 10YR3/4暗褐色砂泥+10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 | 32 7.5YR3/4暗褐色砂泥 |
| 13 10YR4/6褐色微砂 | 33 10YR3/4暗褐色砂泥 |
| 14 10YR5/3にぶい黄褐色微砂~細砂 | 34 10YR3/4暗褐色砂泥 |
| 15 10YR3/1黒褐色砂泥 (φ1.0cmの礫を少量含む) | 35 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| 16 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 36 7.5YR4/2灰褐色砂泥 |
| 17 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR2/3黒褐色粘質土ブロック | 37 10YR2/1黒色砂泥+10YR5/8黄褐色粘質土 |
| 18 10YR3/2黒褐色砂泥+ 10YR5/3にぶい黄褐色粘土 | |
| 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | |
| 20 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 | |

図90 9 - 5区断面図 (1 : 50)

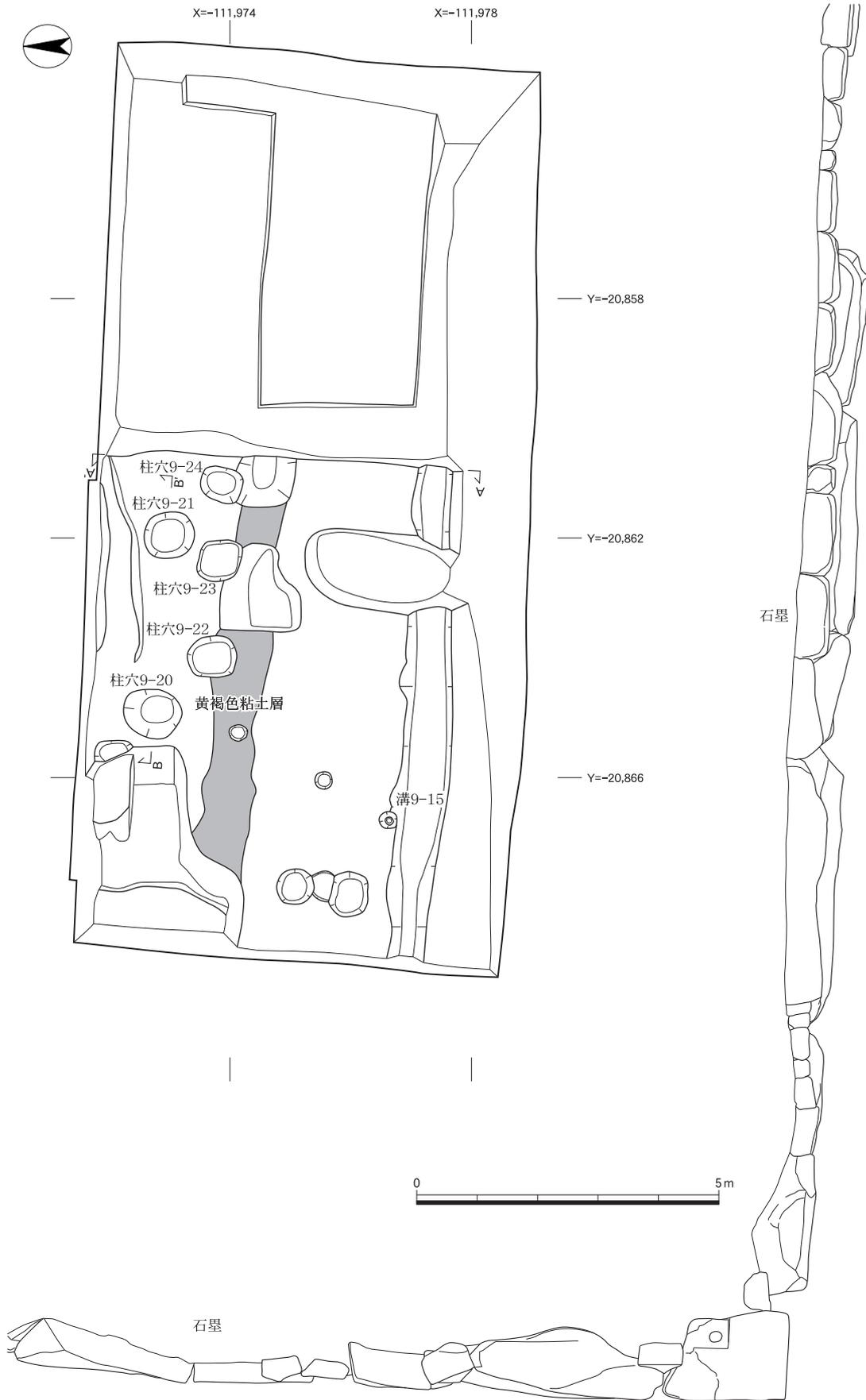


图91 9 - 5 区第 1 面平面图 (1 : 100)

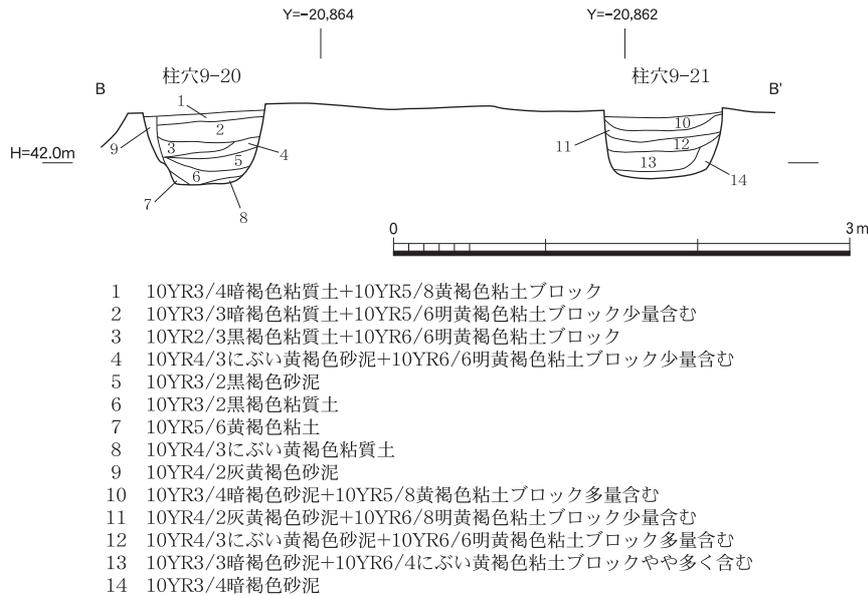


図92 柱穴9-20・柱穴9-21断面図(1:50)

石罫内造成土 中央部で検出した。東西方向に黄褐色粘土層が帯状に延び、北側と南側で整地層の状況が異なる。黄褐色粘土層は北側の盛土造成の土留めとして機能しており、南側は工程として遅れて造成されることが判明した。9-5区は旧地形の最も低い位置にあり、大規模な盛土の必要があったと推定できる。造成土の状況は段階的に平場を造成し石罫を構築した複雑な工程を反映していると考えられる。

なお、東西方向の溝(溝9-15)や柱穴列(柱穴9-22・柱穴9-24)がある。出土遺物は少量のため時期の確定は難しい。溝9-15は方広寺の遺構検出面上に薄く堆積するにぶい黄褐色泥砂層に伴う遺構であることから江戸時代末から明治時代の博物館建設以前の遺構と考えられる。

註

- 1) 遺構検出面の時期は各調査区により異なる。例えば3-1区・3-2区第1面は桃山時代、3-3区第1面は室町時代である。
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃										
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV										
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 3) 1-1区・1-2区は現在の売改札施設がある場所にあたる。
- 4) 築地1-1・溝1-7は方広寺の遺構であるが、鎌倉時代から室町時代の遺構調査中に西側拡張部分で検出したため、ここで報告する。
- 5) 現在、休憩所は撤去されている。
- 6) 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書 発掘調査編』東大寺、2000年。
- 7) 石罫3-1の石材の種類は橋本清一氏に御教示をいただいた。

第4章 遺物

1 遺物の概要

調査で出土した遺物は膨大で、それぞれの調査終了段階での数量を合計すると総数は整理用コンテナに632箱になる。また、整理用コンテナに収納していない石塔・石仏などの大型の石造物も多数出土した。

出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。出土遺物の多くは土器類・瓦類が占める。

調査では各調査区で遺物の採集を行ったが、新しい時代の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。全体的には鎌倉時代から室町時代の土器類、平安時代後期および桃山時代から江戸時代前期の瓦類の割合が大きく、平安時代中期以前および江戸時代中期以降の遺物は少ない。

弥生時代の遺物は弥生土器、古墳時代の遺物は土師器・須恵器、飛鳥時代・奈良時代の遺物には土師器・須恵器がある。これらはすべてより新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した。

平安時代の遺物は、土器類には土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・中国製磁器、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、木製品には井戸枠などがある。法住寺殿に関連する遺物が含まれている。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～奈良時代	弥生土器、土師器・須恵器		弥生土器4点、土師器8点、須恵器1点	少量	0箱
平安時代	土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦、木製品		土師器34点、白色土器1点、須恵器2点、輸入陶磁器1点、瓦47点	少量	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器・白色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品、木製品		土師器312点、白色土器4点、瓦器30点、須恵器59点、焼締陶器2点、灰釉系陶器6点、施釉陶器7点、輸入陶磁器18点、瓦13点、石製品6点、木製品35点	219箱	150箱
桃山時代 ～江戸時代	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器24点、焼締陶器4点、施釉陶器29点、輸入陶磁器7点、瓦112点、土製品25点、石製品58点、金属製品30点、木製品108点	199箱	298箱
合計		956箱	981点(90箱)	418箱	448箱

※ 整理箱数は、整理後、遺物をランク分けしたことと石造物を収納したため、出土時より324箱多くなっている。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、土器類には土師器・白色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器・朝鮮半島製磁器・中国製陶磁器、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・塼、石製品には硯・石鍋・砥石・石塔・石仏、金属製品には銭貨・釘、木製品には箸・曲物・漆器椀・井戸杵・板材などがある。六波羅政庁に関わる遺物が含まれていると推定できる。

桃山時代から江戸時代前期の遺物は、土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・中国製陶磁器、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦、土製品には炉壁・鞆羽口・鋳型、石製品には硯・石塔・石仏・石標・墓標・灯籠・石臼・砥石、金属製品には錫杖・銭貨・煙管・釘・鋳・金属滓、木製品には箸・曲物・漆器椀・下駄などがある。これらの多くは方広寺に関連する遺物である。瓦類は方広寺に使用された大型で分厚い、いわゆる「大仏瓦」である。また、土製品・金属製品は方広寺造営に関わるものの可能性が高い。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する。

2 土器類

土器類は出土遺物の多くを占め、時代ごとの変化が大きい。ここでは弥生時代から古墳時代・平安時代・鎌倉時代から室町時代・桃山時代から江戸時代に大別して、各時代を代表する遺構から出土した土器を紹介する。時代別の出土量では、弥生時代から古墳時代・平安時代はごく少量で、鎌倉時代から室町時代が約6割、桃山時代から江戸時代が約4割を占める。

(1) 弥生時代から古墳時代

弥生時代から古墳時代の土器には、弥生土器・土師器・須恵器がある。すべてより新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した。ほとんどが小片で、調整が不明瞭な個体も多い。

弥生土器(図版25・69 1～3・8) 壺(1～3)・高杯(8)がある。

1は大型の壺の口縁部で、口縁端部が垂下する。調整は横ナデののち端面を凹線・円形浮文を施す。胎土は生駒山西麓産の特徴をもつ。2は緩やかに外反し、端部をわずかに拡張する。調整は内外面とも横ナデである。3は平底と推定できる。調整は底部外面はナデ、体部外面は縦方向のミガキ、内面は八ケののちナデである。8は裾部が外反して開くと推定できる。調整は外面は横ナデののち9条以上の凹線を施す。内面はナデでシボリ痕が残る。3・8は弥生時代中期後半から後期前半、1・2は弥生時代後期前半に属する。

土師器(図版25 4・5～7・9～12) 壺(4)・甕(5～7)・高杯(9～12)がある。

4は底部外面中央がくぼむ。調整は内外面ともナデである。5は受口状口縁の甕である。口縁部は強く屈曲して開き、端部はほぼ垂直に立ち上がる。調整は内外面とも横ナデで、外面の屈曲部分に刺突文を施す。6・7は底部中央がわずかにくぼむ。調整は外面は6が八ケ、7がタタキで、内面はともにナデである。9～11は柱状部の破片で9・10は3方に透孔を復元できる。調整は表面の損傷のため不明瞭であるが、外面はいずれも縦方向のミガキ、内面はナデでシボリ痕が残る。9・11の裾部は内外面とも横ナデである。12は小型の高杯である。杯部は半球形で脚部は

裾部が柱状部から強く屈曲して直線的に開く。ただし、杯部と脚部は直接接合しない。調整は杯部口縁部は横ナデ、杯部外面はオサエののちナデ、内面はハケののちナデ、脚部端部は横ナデ、脚部内面はナデで、外面は不明である。いずれも庄内式土器併行期に属する。

須恵器（図版25・69 13）13は大型の器台脚部の破片である。直径約40cmに復元できる。調整は内外面とも横ナデで、沈線を基準にして透孔を開ける。透孔は破片上部が十字形、下部が2つ以上連続する長方形に復元できる。古墳時代中期に属する。

なお、これらのほかに飛鳥時代から奈良時代の土師器・須恵器がわずかに出土しているが、小破片が多く、図示していない。

（2）平安時代

埋納遺構3-1（図版25・69 14・15）2点の土師器杯は土坑底部に重ねられた状態で出土した。15は欠損部分が多いが、底部に高台をもつ杯身である。調整は14は底部外面はオサエ、底部内面・口縁部内外面は横ナデである。15は底部外面は不明・内面はナデ、口縁部外面はケズリ、内面は横ナデである。 期に属する。

土坑3-61（図版25・69 16～22）土師器杯（18～20）・皿（16・17）・甕（21・22）などが出土した。

杯は口縁部が内弯気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部は18が外面はケズリ、内面は横ナデで、19・20は内外面とも横ナデである。皿は16は口縁部が緩やかに、17は屈曲して開く。調整は16は底部外面はオサエ、内面はハケののちナデ、口縁部内外面は横ナデである。17は底部内外面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。甕は口縁部が屈曲して開き端部はつまみだす。調整は体部外面は21がナデ、22が縦方向のハケで、体部内面・口縁部内外面はともに横ナデである。 期に属する。

3 - 8 区断割（図版25 23～26）土師器杯（23～25）、須恵器杯蓋（26）などが出土した。

杯は口縁部が直線的に開き、端部はわずかに屈曲する。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。須恵器杯蓋は平坦な天井部から口縁部が屈曲して端部はわずかに垂下する。つまみは不明である。調整は天井部外面は回転ケズリ、天井部内面・口縁部内外面は横ナデである。断割から出土した遺物であるが 期でまとまる。

なお、27は井戸4-250から混入して出土した須恵器である。高台をもつ杯身で、調整は内外面とも横ナデである。

溝3-299（図版25・69 28～44）土師器皿（28～43）、白色土器盤（44）などが出土した。

土師器皿には小型皿（28～37）・大型皿（38～43）がある。小型皿・大型皿とも口縁部が内弯する。調整は小型皿・大型皿とも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色土器盤は平底で口縁部は浅く直線的に開く。調整は底部は糸切りで、内外面とも回転ナデである。 期中段階～新段階に属する。

溝4-276（図版25 45～51）土師器皿（45～50）、中国製白磁椀（51）などが出土した。

土師器皿には受皿形の小型皿（45）・小型皿（46～49）・大型皿（50）がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。小型皿は口縁部が内弯する。大型皿は口縁部がやや直線的に開く。調整は小型皿・大型皿とも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白磁椀は底部の破片である。白灰色の素地で内面に施釉がある。 期新段階に属する。

（3）鎌倉時代から室町時代

溝4-1（図版26～28・69～71 52～194） 土師器皿（52～136）、白色土器高杯（137）、瓦器椀（138・139）・鉢（140）・鍋釜類（141～151）・火鉢（152・153）、須恵器皿（154～163）・椀（164～190）・鉢（191・192）、灰釉系陶器鉢（193・194）などがまとめて出土した。

赤色系土師器皿には受皿形の小型皿（52～56）・小型皿（57～106）・大型皿（107～122）がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。小型皿は口縁部が浅く開くものが大部分であるが、やや深いもの（105・106）がある。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿は赤色系土師器皿に比べると出土量は少ない。受皿形の小型皿（123）・小型皿（124～130）・大型皿（131～136）がある。受皿形の小型皿は口縁端部がほぼ直立する。小型皿は赤色系土師器皿と同じ形態である。大型皿は浅いもの（131）と深いもの（132～136）がある。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエのちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。

白色土器高杯は柱状部の破片である。調整は杯部・裾部は回転ナデ、柱状部外面は縦方向の不連続のケズリで円柱形に仕上げる。

瓦器椀には小型のもの（138）と大型のもの（139）がある。ともに低い高台をもつ。調整は外面はオサエで、内面全面と口縁部外面に粗いミガキを施す。鉢は体部が底部から内弯して開き、直立する。調整は体部外面はオサエ、内面は横ナデののち粗いミガキで、口縁部内外面は横ナデである。鍋釜類には口縁部外面に突帯がめぐるもの（141～144）と口縁部が受口状になるもの（145～151）がある。調整は体部外面はオサエ、内面はハケまたはナデで、口縁部内外面は横ナデである。火鉢は口縁部が底部から屈曲して開き、端部は面をもつ。底部は欠損して不明であるが、調整は口縁部外面は連続するオサエ、口縁部内面・端部内外面は横ナデである。

須恵器皿は口縁部が屈曲して開く浅い器形が多い。調整は底部は糸切りで、内外面とも回転ナデである。備前産である。椀は口縁部が内弯して開く深い器形である。調整は底部は糸切りで、内外面とも回転ナデである。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が残るものがある。182は内外面の一部が黒く変色する。また、187底部外面には墨で梅鉢状の模様を描く。189は煤がつく。備前産である。この器形の須恵器皿・須恵器椀が京都でまとめて出土することは珍しい。鉢は口縁部が内弯気味に開くもの（191）と直線的に開くもの（192）がある。192は口縁端部に片口を作る。調整は底部外面がヘラ切りで、内外面とも回転ナデである。東播磨産である。

灰釉系陶器鉢は高い高台が付く。調整は底部外面はヘラ切りで、内外面とも回転ナデである。全面にうすく自然釉がかかる。東海産である。 期新段階に属する。

土坑3-203 (図版29・71 195～203) 土師器皿 (195～203) などが出土した。

小型皿 (195～199) ・大型皿 (200～203) がある。小型皿は口縁部が浅く開く。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。 期中段階に属する。

土坑3-219 (図版29・71 204～210) 土師器皿 (204～209) 須恵器甕 (210) などが出土した。

土師器皿には小型皿 (204～206) ・大型皿 (207～209) がある。小型皿は口縁部が浅く開く。大型皿は口縁部が直線的に開く。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。須恵器甕は土坑内に口縁部を上にした正位置の状態出土した。ほぼ完形である。調整は底部・体部外面はタタキ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。 期中段階に属する。

土坑3-46 (図版29 211～260) 土師器皿 (211～250) 瓦器椀 (251) 須恵器皿 (252・253) ・椀 (254～260) などが出土した。

赤色系土師器皿には受皿形の小型皿 (214) ・小型皿 (215～238) ・大型皿 (241～248) がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。小型皿は口縁部が浅く開く。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿は赤色系土師器皿に比べると出土量はかなり少ない。受皿形の小型皿 (211～213) ・小型皿 (239～240) ・大型皿 (249～250) がある。小型皿は底部中央を押し上げるもの (239) と口縁部が内弯気味に開くもの (240) がある。大型皿は口縁部が内弯気味に開く。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。

瓦器椀は低い高台をもつ。調整は外面はオサエで、内外面に粗いミガキを施す。須恵器皿は口縁部が屈曲して開く浅い器形が多い。調整は底部は糸切りで、内外面とも回転ナデである。備前産である。椀は口縁部が内弯して開く深い器形である。調整は底部は糸切りで、内外面とも回転ナデである。口縁端部外面には重ね焼きの痕跡が残るもの (254・256～258・260) がある。備前産である。 期新段階に属する。

井戸4-250 (図版30・31・71・72 261～339) 土師器皿 (261～279・281～297) ・鉢 (280) 白色土器蓋 (298) ・盤 (299) 瓦器椀 (300・301) ・鍋釜類 (302～308) ・鉢 (309) ・火鉢 (310) 須恵器皿 (328・329) ・杯 (330) ・鉢 (331～334) ・甕 (335) 焼締陶器甕 (335) 灰釉系陶器皿 (337) ・椀 (338) 施釉陶器おろし皿 (339) 中国製青磁皿 (311～314) ・鉢 (315) ・椀 (316～319) 白磁皿 (320) ・椀 (321・322) 青白磁蓋 (323・324) ・合子 (325) 褐釉陶器盤 (326・327) などがまとまって出土した。

赤色系土師器皿には受皿形の小型皿 (261・262) ・小型皿 (263～271) ・大型皿 (272～279)

がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。小型皿は口縁部が浅く開く。大型皿は口縁部が直線的に浅く開く。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には受皿形の小型皿（281～283）・小型皿（284～289）・大型皿（290～297）がある。受皿形の小型皿は小さく、口縁端部がほぼ直立する。小型皿は底部中央を押し上げるもの（284）、口縁部が内弯気味に開くもの（285～288）、浅く開くもの（289）がある。大型皿はやや浅いもの（293～297）とやや深いもの（290～292）がある。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエのちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。鉢は器壁が厚く、口縁部が直線的に外上方へ開く。調整は粗雑で粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。外面全面に煤が付着する。

白色土器蓋は平坦な天井部から口縁部が内弯気味に垂下すると推定できる。天井部外面中央に円柱形のつまみが付く。調整は内外面とも回転ナデである。盤は平底で口縁部は浅く直線的に開くと推定できる。調整は表面の損傷のため不明である。

瓦器椀は小型のもの（300）と大型のもの（301）がある。調整は300は内外面とも横ナデである。301は外面はオサエで、内面全面に粗いミガキを施す。鍋釜類は口縁部外面に突帯がめぐるもの（303～304）と口縁部が受口状になるもの（305～308）がある。調整は体部外面はオサエ、内面はハケまたはナデで、口縁部内外面は横ナデである。鉢は口縁部が外上方に直線的に開く。調整は体部外面はオサエのちナデ、体部内面・口縁部内外面は横ナデである。火鉢は口縁部が底部から屈曲して開き、端部は面をもつ。口縁部外面は横ナデ、内面は横ナデのち粗いミガキである。

須恵器皿は口縁部が低く立ち上がる。調整は粗雑で、内外面とも横ナデである。底部外面はヘラ切りの可能性がある。黄灰色を呈する。杯は口縁部が内弯気味に開く。調整は底部外面はヘラ切りののち粗いナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。黄灰色を呈する。鉢は口縁部が内弯気味に開くもの（333）と直線的に開くもの（331・332・334）がある。331・332は口縁端部が玉縁状になる。また、333・334は口縁端部に片口を作る。調整は底部外面は糸切りで、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。東播磨産である。甕は口縁部が外反して開き、端部は面をもつ。調整は体部外面はタタキ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデである。東播磨産である。

焼締陶器甕は肩が張り、口縁部は外反して開く。調整は体部内面はオサエ・ナデで、口縁部内外面は横ナデである。体部外面には灰緑色の自然釉がかかる。常滑産である。

灰釉系陶器皿は口縁部が直線的に開く。調整は底部外面が糸切りで、内外面とも回転ナデである。内面と口縁端部外面に自然釉がかかる。椀は口縁部が外反気味に開く。調整は内外面とも回転ナデである。自然釉はほとんど認められない。東海産である。

施釉陶器おろし皿は底部の破片である。外面は糸切りで、内面に縦横に鋭いおろし目を施す。

青磁皿は口縁部が内弯気味のもの（311）と直線的に開くもの（312）がある。313は底部内面に櫛描文、314はヘラ描きで文様を描く。鉢は口縁端部が屈曲して受口状となる。椀は口縁端部が

外反するもの(316)と内弯気味に開くもの(317)がある。316・317は口縁部外面に蓮弁を描く。また、317は口縁部内面、319は底部内面にヘラ描きで文様を描く。

白磁皿は高台をもち、浅く開く。椀は口縁端部が外反するもの(321)と玉縁になるもの(322)がある。

青白磁蓋はかえりのあるもの(324)とないもの(323)がある。ともに天井部外面に文様を施す。323は合子の蓋である。合子身は小型で受部を作る。体部外面には文様を施す。

褐釉陶器盤は平底で体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部は玉縁となる。底部内面に濃い茶色で文様を描く。 期古段階に属する。

土坑3-163(図版32 340~347) 土師器皿などが出土した。

小型皿(340~345)・大型皿(346・347)がある。小型皿は浅く開く。やや歪むものが多い。大型皿は口縁部が直線的に浅く開く。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。 期新段階~ 期古段階に属する。

土坑3-179(図版32 348~364) 土師器皿(348~363)、瓦器鍋釜類(364)などが出土した。

赤色系土師器皿には小型皿(348~357)・大型皿(358~361)がある。小型皿は口縁部が浅く開く。大型皿は口縁部が屈曲して外反気味に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿は赤色系土師器皿に比べると出土量はかなり少ない。小型皿・大型皿(362・363)がある。大型皿は口縁部が内弯気味に開く。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。瓦器鍋釜類は口縁部が受口状になるもの(364)がある。調整は体部外面はオサエ、内面はハケで、口縁部内外面は横ナデである。 期古段階~ 中段階に属する。

溝4-281(図版32・71 365~395) 土師器皿(365~393)、瓦器鉢(394・395)などが出土した。

赤色系土師器皿には受皿形の小型皿(365)・小型皿(366~371)・大型皿(374~381)がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。小型皿は口径が小さくなり、口縁部が直線的に開く。底部中央を押し上げるもの(366・367)がある。大型皿は口縁部が屈曲して外反気味に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には小型皿(372・373)・大型皿(382~393)がある。小型皿は底部中央を押し上げるもの(372)と口縁部が内弯気味に開くもの(373)がある。大型皿は口径に大小があり、口縁部が直線的に開くものが多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。瓦器鉢は細長い把手が付き、把手と直交する位置の口縁端部両側に片口が付く形状に復元できる。調整は内外面とも横ナデののち内面に粗いミガキを施す。 期新段階~ 期古段階に属する。

溝4-252(図版33 396~419) 土師器皿(396~417)、須恵器鉢(418・419)などが出土した。

赤色系土師器皿には小型皿（396～399）・大型皿（406～413）がある。小型皿は口径が小さくなり、口縁部が直線的に開く。大型皿は口縁部が屈曲して外反気味に開くものが多い。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には小型皿（400～405）・大型皿（414～417）がある。小型皿は底部中央を押し上げるもの（398・400～403）と口縁部が内弯気味に開くもの（404・405）がある。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。須恵器鉢は口縁端部を拡張する。調整は内外面とも回転ナデである。 期新段階～ 期古段階に属する。

溝3-36（図版33 420～427） 土師器皿（420～427）などが出土した。

赤色系土師器皿には小型皿（420・421）・大型皿（422・423）がある。小型皿は口縁部が直線的に開く。大型皿は口縁部が外反気味に開く。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には小型皿・大型皿（424～427）がある。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。また、器壁が薄いもの（424・425）がある。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。 期古段階に属する。

溝3-15（図版33・71 428～440） 土師器皿（428～439） 白色土器つまみ（440）などが出土した。

赤色系土師器皿は白色系土師器皿に比べると出土量は少ない。小型皿（428・429）・大型皿（434～436）がある。小型皿は外反気味に開くもの（428）と口縁部が直線的に開くもの（429）がある。大型皿は口縁部が外反気味に開く。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には小型皿（430～433）・大型皿（437～439）がある。小型皿は底部中央を押し上げるものが多い。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。白色土器つまみは大型で扁平な宝珠形である。調整は回転ナデののちくびれている部分を縦方向にナデを施す。つまみ周囲の天井部外面に押型で花卉状の模様を描く。器形は不明であるが、大型品の破片であることは確実である。 期古段階～中段階に属する。

溝3-13（図版33 441～457） 土師器皿（441～457）などが出土した。

赤色系土師器皿は白色系土師器皿に比べると出土量はかなり少ない。小型皿・大型皿（451～454）がある。大型皿は口径が小さくなり、口縁部は屈曲して外反気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には受皿形の小型皿（441）・小型皿（442～450）・大型皿（455～457）がある。受皿形の小型皿は小さく、口縁端部がほぼ直立する。小型皿は底部中央を押し上げるものが多い。大型皿は口径に大小があり、口縁部が直線的に開くものが多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。 期古段階～中段階に属する。

溝3-305（図版34 458～464） 土師器皿（458～462） 施釉陶器椀（463）・鉢（464）など

が出土した。

赤色系土師器皿は白色系土師器皿に比べると出土量はかなり少ない。小型皿（458・459）は口径が極端に小さくなり、歪みが大きい。調整はオサエとナデである。白色系土師器皿は小型皿・大型皿（460～462）がある。大型皿は口縁部が浅く外反気味に開く。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。施釉陶器椀は内弯気味の体部片である。内外面に黒色の鉄釉を施す。瀬戸産である。鉢は口縁端部が屈曲して開く。内外面に灰緑色の灰釉を施す。瀬戸産である。 期中段階に属する。

3 - 8 区方広寺整地層（図版34 465～491） 土師器皿（465～481）、焼締陶器播鉢（482）、灰釉系陶器椀（483）、施釉陶器椀（484）・皿（485）・壺（486・487）、中国製青磁椀（488～490）・盤（491）などが出土した。

土師器皿は 期のもとの 期のものである。 期の赤色系土師器皿は白色系土師器皿に比べると出土量はかなり少ない。小型皿・大型皿（467・468）がある。大型皿は口縁部が屈曲して外反気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿には小型皿（465・466）・大型皿（469～477）がある。小型皿は底部中央を押し上げるもの（465）と外反気味に開くもの（466）がある。大型皿は口径に大小があり、口縁部が直線的に開くものが多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。 期の土師器皿は 期のものに比べると出土量は少ない。赤色系土師器には小型皿（478）・大型皿（479）がある。小型皿は口径が小さくなり、口縁部が内弯気味に開く。大型皿は口縁部が屈曲して外反気味に開く。調整は粗雑で底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。白色系土師器皿は大型皿（480～481）がある。口縁部が浅く外反気味に開く。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデで、口縁部内外面は横ナデである。

焼締陶器播鉢は体部が内弯気味に開き、端部は屈曲して外反する。調整は内外面とも回転ナデののち内面に5条一組の播目を施す。信楽産である。灰釉系陶器椀は小型で、口縁部が内弯気味に開く。調整は底部外面は糸切りで、内外面とも回転ナデである。内面にうすく自然釉がかかる。施釉陶器椀は体部が内弯気味に開き、端部は屈曲して外反する。皿は口縁端部が屈曲して開く。椀・皿はいずれも内外面に灰緑色の灰釉を施す。瀬戸産である。壺は小型（487）と大型（486）がある。486は平底で、体部は屈曲して立ち上がる。調整は内外面とも回転ナデである。487は平底で体部は内弯して立ち上がる。壺はともに外面に灰緑色の灰釉を施す。瀬戸産である。青磁椀は高台をもち、488は口縁端部が外反する。490は底部内面にヘラ描きで文様を描く。盤は大型で口縁端部が屈曲して受口状となる。 期の遺物を多く含むが、 期古段階～中段階に属する。

（4）桃山時代から江戸時代

溝4-102（図版34 492～508） 土師器皿（492～501）、焼締陶器播鉢（502）、施釉陶器椀（503～505）・皿（506・507）、中国製青花皿（508）などが出土した。

土師器皿は赤色系土師器皿の係累の小型皿（492）、白色系土師器皿の係累の中型皿（493～497）・大型皿（498～501）がある。小型皿は口径が極端に小さくなり、歪みが大きい。調整はオサエとナデである。中型皿は丸底のものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。大型皿は平底で底部内面に明瞭な圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。

焼締陶器播鉢は体部が直線的に開き、口縁端部は屈曲して外反する。調整は内外面とも回転ナデのの内面に5条一組の播目を施す。信楽産である。施釉陶器椀は大小とも体部が内弯気味に開き、端部は屈曲して外反する。底部外面を除き内外面に暗褐色の鉄釉を施す。皿は口縁端部が屈曲して開くもの（506）と内弯気味に開くもの（507）がある。506は灰緑色の灰釉、507は褐色の鉄釉を内外面に施す。ともに内面に重ね焼き痕が残る。施釉陶器はいずれも瀬戸美濃産である。青花皿は口縁部が外反して開く。内面に施文する。漳州窯系である。期古段階に属する。

土坑3-200（図版35 509～511）土師器皿（509）焼締陶器播鉢（510）施釉陶器皿（511）などが出土した。すべて小片である。

509は大型皿と推定でき、調整は口縁部内外面とも横ナデである。510は口縁端部をまるくおさめ、調整は内外面とも横ナデで、内面に1条ずつの播目を施す。丹波産である。511は口縁部が内弯気味に開き、内面に鉄釉で文様を描いたのち内外面に白色の長石釉を施す。瀬戸美濃産である。期古段階に属する。

3 - 4区方広寺整地層（図版35 512）施釉陶器椀（512）のみ図示した。体部がわずかに内傾して立ち上がり、内外面に明灰色の灰釉を施す。唐津産である。期古段階に属する。

4 - 10区落込斜面整地層（巻頭図版4 - 2、図版35 513～555）土師器皿（513～524）・小型壺（525）焼締陶器播鉢（548・549）施釉陶器椀（526～533）・皿（534～545）・壺（546）・土瓶（547）中国製白磁皿（550～553）青花皿（554・555）などがまとまって出土した。

土師器皿は中型皿（513～515）・大型皿（516～524）がある。中型皿は丸底のものが多い。大型皿は平底で底部内面に明瞭な圈線がめぐる。調整はいずれも底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。小型壺は体部は内弯し、口縁部は内傾する。調整は外面はナデ、内面は横ナデである。

548は体部が内弯気味に開き、口縁端部は内傾する面をもつ。調整は内外面とも回転ナデのの内面に6条一組の播目を施す。信楽産である。549は体部が直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面とも横ナデで、内面に1条ずつの播目を施す。丹波産である。

施釉陶器椀は大小とも体部が内弯気味に開き、端部は屈曲して外反する。底部外面を除き内外面に褐色から黒色の鉄釉を施す。皿は内弯気味に開くもの（534～543）・口縁端部が屈曲して開くもの（544）・口縁部に花弁を作るもの（545）がある。544は押型で底部内面に花文を描く。534～544は灰緑色の灰釉、545は暗褐色の鉄釉を内外面に施す。内面に重ね焼き痕が残るものがある。壺は低い高台をもち、体部は屈曲して立ち上がる。調整は内外面とも回転ナデである。外面に灰緑色の灰釉を施す。土瓶は小型で口縁部をわずかに欠く。注口は短く、把手を付ける小さ

な耳が2箇所に付く。内外面に暗褐色の鉄釉を施す。施釉陶器はいずれも瀬戸美濃産である。

白磁皿は内弯気味に浅く開くもの(550)と口縁端部が屈曲して開くもの(551~553)がある。551・553は口縁端部に花卉を作る。

青花皿は内弯気味に浅く開くもの(554)と口縁端部が屈曲して開くもの(555)がある。内面に施文する。漳州窯系である。期古段階に属する。

3 瓦類

(1) 平安時代から鎌倉時代

調査地からは、平安時代後期を中心とする方広寺以前の瓦類が多く出土する。これらは後白河法皇が院御所として整備した法住寺殿に関係する瓦類と想定できる。法住寺殿出土の瓦類に関しては、1978年に博物館の南側で実施した南殿推定地の発掘調査において多量の瓦類が出土し、播磨系の瓦(類)、讃岐系の瓦(類)、中央官衙系の瓦(類)、南都系の瓦(類)、南都系の伝統を引き継ぐ瓦(類)に分類されている¹⁾。今回の調査で出土した瓦類も、これらの分類と大きく変わらない状況にある。ここでは博物館敷地内から出土した軒瓦について、従来の産地同定に基づき分類に準拠して報告し、必要に応じて他の瓦類についても言及を加える。

軒丸瓦(図版36・73 瓦1~瓦21) 平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての軒丸瓦は、蓮華文(宝相華文)軒丸瓦と巴文軒丸瓦がある。今回の調査では、蓮華文系の軒丸瓦は数量的に出土が少ない。

瓦1~瓦8は京近郊産のいわゆる中央官衙系軒丸瓦である。瓦1は退化した小振りな八弁蓮華文で、弁中央に鎬状の突線が入る。凸面縄叩きの丸瓦を差し込み、瓦当裏面をオサエ整形によって調整する。瓦2~瓦8は巴文系軒瓦である。瓦2~瓦5は外区珠文を持たない三巴文で、瓦6~瓦8は外区珠文を巡らす。瓦2・瓦5~瓦7は左方向に、瓦3・瓦4・瓦8は右方向に巻き込む。また、瓦3・瓦4・瓦6は巴の陰陽が逆に表現される。瓦1と同様に丸瓦を差し込み、瓦当裏面をオサエ整形によって調整する。これらの瓦類は小振りで、砂粒をやや多く含む粗い胎土が特徴的である。瓦5は燻しによって表面が黒く仕上げられているが、全体に灰白色を呈するものが多く、瓦2は還元焼成が不良でにぶい黄橙色となっている。

瓦9~瓦11は播磨系軒丸瓦である。瓦9は堅緻に焼き上がり、側面には灰かぶりも認められる。瓦10は内区に宝相華文を表わし、圈線が輪花状に巡る。ともに南殿の調査でも出土している。瓦11は右方向に巻き込む三巴文軒丸瓦である。瓦9と同様に堅緻に焼き上がり、瓦当面に灰かぶりが認められる。

瓦12は小破片であるが、河内向山瓦窯で焼成された河内産軒瓦である。瓦13は小さな中房の周囲に蕊が巡る六弁蓮華文軒丸瓦である。灰白色の砂粒が少ない胎土と、表面に施された灰色の燻しが特徴的である。和泉国分寺で出土しており、和泉産軒瓦である。

瓦14・瓦15は讃岐系の巴文軒丸瓦である。瓦15の瓦当裏面には粗い縄叩きが認められ、瓦14の

丸瓦部凸面にもナデ調査で消し残された粗い縄叩きを確認できる。

瓦16は南都系の蓮華文軒瓦である。瓦当裏面は丁寧なナデ調整が施される。胎土は白色で、外面は燻しによって黒く仕上げられている。四天王寺から同范瓦が出土しており、鎌倉時代初頭と想定できる。また、瓦17は内区に退化した宝相華文を突線で表現した軒丸瓦と考えられる。瓦当成形および調整が非常に丁寧で、瓦16と同様に全体に黒く燻しが施される。南都系の系譜を引く鎌倉時代の軒瓦であろう。

瓦18～瓦21は、鎌倉時代に下るやや大振りの巴文軒丸瓦である。瓦18・瓦19は三巴文、瓦20は二巴文で、外区珠文は密に巡る。瓦当側面や裏面は丁寧にナデ調整を施し、全体に灰色～暗灰色の燻しがかかる。

軒平瓦・刻銘平瓦（図版37・38・74・75・81 瓦22～瓦60） 軒平瓦は平安時代後期と鎌倉時代のものが主流で、唐草文、半截宝相華文、剣頭文、連巴文、連珠文がある。ただ、一部に平安時代中期の瓦類が出土している。ここでは軒平瓦とともに銘をもつ平瓦についても言及を加える。

瓦22は今回の調査で唯一、平安時代中期まで遡る軒平瓦である。中心飾りに四弁蓮華文を置き、唐草が両側に派生する。凸面は縦方向のヘラケズリによって調整し、顎は曲線顎で幅1cmほどの狭い面をもつ。池田瓦窯で生産された軒平瓦である。なお、「右坊常」「右坊」の銘を凹面布目下にもつ同窯産の平瓦（瓦54～瓦57）も出土している。池田瓦窯は博物館の南約600mの地点にあり、これらは10世紀末の法住寺創建段階に供給された瓦群と想定できる²⁾。

平安時代後期の軒平瓦は、京近郊産の中央官衙系、播磨系、讃岐系軒平瓦がある。

瓦23～瓦29は京近郊産の軒平瓦である。全体に砂粒を多く含み、焼成状態も京近郊産軒丸瓦と同様である。瓦23は退化した均整唐草文軒平瓦で、文様面側は完存する。凸面から顎にかけてオサエ調整で成形し、顎をヘラケズリで2段に面取りする。半折曲げ技法によって成形されたと考えられる。瓦24・瓦25は折曲げ技法によって成形された唐草文軒平瓦で、文様面に凹面から連続する布目が認められる。凸面はオサエ調整で、顎との屈曲部は横ナデ調整を施し、顎面はヘラケズリによる。なお、瓦24の凸面から顎立ち上がり部にかけて、オサエ調整の下に布目が残されている。折曲げ段階に布を利用したことを示している。また、瓦25の平瓦部凸面には二本線のヘラ記号が認められ、同様のヘラ記号は文様部が欠損した他の京近郊産軒平瓦にも確認でき（瓦58・瓦59）、平瓦端部（瓦60）にもみられる。

瓦26～瓦28は折曲げ技法による剣頭文軒平瓦で、文様面に布目が認められる。凸面から顎にかけての成形・調整は瓦26・瓦27は瓦25と同じだが、瓦28は凸面に縄叩きが残る。瓦29はやや大振りな剣頭文で、鎬が逆Y字になっている。製作技法は京近郊産と共通するが、砂粒を非常に多く含み焼成もあまい。

瓦30～瓦38は、平瓦を瓦当に接合して成形する播磨系軒平瓦で、南殿の調査で出土した播磨系軒平瓦とほぼ共通する。瓦30～瓦34は唐草文軒平瓦で、瓦30・瓦34は平瓦を比較的上方に接合し、整合後に凹凸面を丁寧にナデ調整する。焼成は堅緻、灰色～暗灰色を呈する。瓦31・瓦33も平瓦部が外れているが、接合位置は上方である。これに対し、瓦32は裏面中心部に平瓦を接合するた

め、断面が撥形を呈し、平瓦部凹面には布目が残る。瓦31の文様面には灰かぶりが認められ、瓦32・瓦33は燻しを施す。

瓦35・瓦36は半截宝相華文軒平瓦である。瓦35は内面が灰白色を呈し、外面の一部が燻しによって暗灰色となる。平瓦凸面に平行叩きが認められる。瓦36は焼成が堅緻で、全体に暗灰色を呈する。文様部凹凸面のナデ調整も丁寧に施される。瓦37は連巴文軒平瓦で、焼成・胎土は瓦35に類似する。顎部はナデによって丁寧に調整し、平瓦部凹面には布目が残る。瓦38は突線で表わした剣頭文軒平瓦である。平瓦は接合部で欠損するが、剥離面で指ナデによる接合溝が確認できる。砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

瓦39～瓦42は讃岐系の軒平瓦で、瓦39は半截宝相華文、瓦40～瓦42は連巴文である。直線顎に近い緩やかな曲線顎で、顎面を横ヘラケズリで面取りする。また、凸面には粗い縄叩きが斜方向に施されるのが特徴的である。凹面は布目残り、文様面端部は横ヘラケズリを施す。胎土は比較的緻密で、焼成も良好である。讃岐系の連巴文は南殿の調査でも出土しているが、半截宝相華文軒平瓦は初めての出土である。

瓦43・瓦44は鎌倉時代の南都系大型瓦である。凸面は顎部から平瓦部までナデによって丁寧に調整されており、凹型成形台の痕跡が明瞭に残る。凹面も丁寧にナデ調整を施すが、一部布目が残る。瓦43と同文瓦は南都諸大寺をはじめ、栢ノ森遺跡や法金剛院などでも出土する。胎土に砂粒を多く含むが、表面に化粧土を塗り燻しをかけて暗灰色に仕上げる。瓦44は南都諸大寺や東福寺などで出土している。砂粒を多く含むが、堅緻な焼成で文様面に自然釉がかかる。

瓦45～瓦48の唐草文軒平瓦も製作技法や胎土は瓦43・瓦44と共通する。これらの鎌倉時代軒平瓦は、南都系の伝統を引き継ぐ瓦として南殿の調査で報告されている。ただ、このうち瓦45・瓦46は上外区周縁が丸みを帯びており、瓦47も焼成があまく雑な作りとなっている。これらは産地の違いを示しているのであろう。また、瓦48は南都系だが、文様構成が単純化しており、時代が下る可能性がある。

瓦51は南都系の剣頭文軒平瓦で、薬師寺の再建瓦である。胎土は比較的緻密で灰白色を呈し、外面は燻しで暗灰色に仕上げている。鎌倉時代前半の軒平瓦である。瓦52・瓦53は連珠文軒平瓦で、砂粒を若干含むが、比較的緻密な胎土をもつ。瓦52は顎面調整や凹型成形台の痕跡など、南都系中世瓦と共通するが、凹面の布目は残す。瓦53は剥離した顎部の資料だが、顎の形状から和泉産軒平瓦と考えられる。

(2) 桃山時代から江戸時代

桃山時代から江戸時代の瓦類は大半が3 - 1区・3 - 2区の近代の攪乱、方広寺に伴う遺構から出土した。他に1次調査・4次調査・9次調査の各調査区からも出土した。調査時には文様のある軒瓦や刻印を有する瓦を中心に採集し、丸瓦・平瓦の他に軒丸瓦65点、軒平瓦56点、道具瓦9点、刻印瓦71点がある。出土瓦には軒瓦や丸瓦・平瓦に大仏瓦といわれる大型瓦がある。ここでは桃山時代から江戸時代の方広寺に関連する主要な瓦を中心にその概略を記す。

軒丸瓦（巻頭図版4 - 1、図版39～41・76・77 瓦61～瓦82） 軒丸瓦は紋所文と巴文に大別できる。紋所文は桐文と菊文の2種類があり、さらに桐の表現が范によって4つに分類できる。桐文には瓦当径24.2～25.0cmの大型瓦が12点、径16.6cmのものが1点ある。菊文は2点出土した。巴文はすべて右巻きの三巴文で珠文の有無・尾の接し方で分類できる。大きさは瓦当径19.0～20.0cm、17.0～18.0cm、14.2～15.6cmの3群がある。

瓦61は大型桐文軒丸瓦で、五三の桐文である。花の中心に1～3本の蕊をもうけ、中央に1葉、その両側に2葉を配する。主葉脈は二重で、支脈は単線で表す。葉に切込みを入れる。同范が5点、同文が2点ある。瓦当部成形は瓦当部裏面上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部裏面は平坦で横ナデ、下端に円周状の強いナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はミガキを施す。丸瓦部は凸面縦ナデ。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦62は大型桐文軒丸瓦で、五三の桐文である。文様の配置は瓦61と同じであるが、全体に線が簡略化されて葉の切込みも見受けられない。文様に范の木目が付く。同文が2点ある。瓦当部の接合面に斜め方向のカキメを施す。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦63は大型桐文軒丸瓦で、上半分は欠損しており花部が一部残存する。中央に1葉、その両側に2葉を配する。主葉脈・支脈とも単線で表す。葉に切込みを入れる。磨滅で調整不明。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は軟質、周縁の表面は黒灰色、他は灰色を呈する。

瓦64は桐文軒丸瓦で、桐文の配置は大型のものと同じである。花部は一部残存する。葉脈は中心に1本、支脈は対称形に段を付けて表現している。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状の強いナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はナデを施す。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦65は三巴文軒丸瓦で、尾が互いに接し大きな珠文を配する。瓦当部成形は瓦当部裏面上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。磨滅で調整不明。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。

瓦66は三巴文軒丸瓦で、半分以上が欠損する。尾が互いに接する。大きな珠文を配する。珠文に范キズがある。磨滅で調整不明。瓦当部裏面は平坦である。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦67は三巴文軒丸瓦で、尾が互いに接する。大きな珠文を配する。瓦当部成形は瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデを施す。側面は上半縦ナデである。瓦当面に離れ砂付着。丸瓦部は凸面縦ナデ。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。

瓦68は三巴文軒丸瓦で、尾が互いに接する。大きな珠文を密に配する。磨滅で調整不明。瓦当部裏面の下端に円周状の強いナデの凹みがある。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を多く含み、中心部は黒色、周囲は灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦69は三巴文軒丸瓦で、頭部が離れて尾が互いに接する。大きな珠文を配する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状の強いナデを施す。側面は下半横ナデである。周縁上面はナデを施す。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒・小礫を含む土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦70は三巴文軒丸瓦で、頭部が離れて尾が互いに接する。珠文を密に配する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状の強いナデを施す。側面は下半横ナデである。周縁上面はナデを施す。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成は焼き締まり、表面は黒灰色を呈する。

瓦71は三巴文軒丸瓦で、下半分が欠損する。尾が互いに接する。大きな珠文を配する。珠文に範キズがある。丸瓦部はほぼ完形。瓦当部成形は瓦当部裏面の先端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。側面は上半縦ナデである。周縁上面はミガキを施す。瓦当面に離れ砂付着。丸瓦部は成形は粘土板1枚作りで、凹面に鉄線切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目と抜き縄痕跡が付く。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデである。狭端部に釘孔をあけ、孔には鉄釘が遺存する。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦72は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。珠文を13個配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の先端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はミガキを、周縁内外にヘラで面取りを施す。丸瓦部は凸面縦ナデ。凹面に鉄線切り離し痕跡が付く。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦73は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。珠文を15個配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の先端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。磨滅で調整不明。瓦当裏面下端に円周状のナデの痕跡が、側面は横ナデの痕跡がある。周縁内をヘラで面取りを施す。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦74は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。珠文を13個配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の先端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はナデを施す。丸瓦部は凸面縦ナデ。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は燻されて灰色を呈する。

瓦75は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。大きな珠文を配する。瓦当部裏面はやや凹み不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は横ナデである。周縁上面はミガキを、周縁外にヘラで面取りを施す。胎土は砂粒を含み精良な土で灰色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面

は燻されて黒灰色を呈する。

瓦76は三巴文軒丸瓦で、尾が互いに離れる。大きな珠文を配する。瓦当部裏面は中央部がやや凹み不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は横ナデである。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。

瓦77は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。珠文を密に配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は上半縦ナデ・下半横ナデである。周縁上面はミガキを、周縁内外にヘラで面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は燻されて黒灰色を呈する。

瓦78は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに離れる。大きな珠文を配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデを施す。側面は上半縦ナデである。周縁内外にヘラで面取りを施す。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は灰色を呈する。

瓦79は三巴文軒丸瓦で、尾は互いに接する。珠文はない。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、下端に円周状のナデを施す。側面は横ナデである。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は堅く焼きしまり、表面は灰色を呈する。周縁に金箔を貼り付ける。

瓦80は巴文軒丸瓦で、残存するのは尾の部分のみである。瓦当部裏面の接合面に横方向にカキメを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。周縁に金箔を貼り付ける。

瓦81は菊花文瓦である。凸型中房で、単弁の花弁を上下二重に交互に配する。花弁の中央はくぼむ。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。側面は上半縦ナデである。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦82は菊花文瓦で、単弁の花弁を上下二重に交互に配する。花弁の中央はくぼむ。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。側面は上半縦ナデである。瓦当面に離れ砂付着。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

軒平瓦（巻頭図版4 - 1、図版42・43・78・79 瓦83～瓦104） 軒平瓦は桐文と唐草文がある。桐文には桐文のみのもものと唐草を伴うものがある。唐草文には中心飾りが葉形のもの、花形のもの、中心飾りが不明のものがあり、唐草の反転は1～3転に分かれる。各種類の点数は1～7点程度と少ない。桐文軒平瓦は大型よりさらに大きい特大型がある。また、瓦当面にキラコ（雲母粉）が付着するものが現れるが、これらの瓦は江戸時代中期から多く見られる。

瓦83は特大型桐文軒平瓦で、桐文の外に唐草が1回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヘラで縦方向のケズリと横ナデを施す。顎部凸面・裏面は横ナデ。周縁上面はナデとヘラミガキを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質、表面は黒灰色を呈する。

瓦84は特大型軒平瓦で、二重の唐草が反転する。欠損のため中心の文様は不明であるが、桐文の可能性もある。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸面・側面・裏面は横ナデ。周縁上面はナデ、瓦当上縁に面取りを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は軟質、表面は黒灰色を呈する。

瓦85は特大型桐文軒平瓦で、三三の桐文を3箇所配し、外に唐草が1回反転する。桐文の葉は切込みが入り、葉脈は単線で表す。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヘラで縦方向のケズリと横ナデを施す。顎部凸面・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとヘラミガキを施す。瓦当上縁と顎後縁に面取りを施す。周縁上部中央に刻印がある。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。他に同范が1点ある。

瓦86は大型桐文軒平瓦で、五七の桐文を3箇所配し、外に唐草が1回反転する。桐文の葉は切込みが入り、葉脈は単線で表す。花は簡略化されて点で表す。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。磨滅で調整は不明である。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当の離れ砂が付着する。周縁上部に不鮮明な刻印がある。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。

瓦87は大型桐文軒平瓦で、五三の桐文を中央に、両側に三三の桐文を配する。外に唐草が1回反転する。桐文の葉は簡略化されて切込みが浅くなる。葉脈は単線で表す。范ズレがある。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヘラで縦方向のケズリと横ナデを施す。顎部凸面・側面・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとヘラミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。平瓦部は凹面・凸面とも縦方向のケズリののち横ナデを施す。凹面に「山」の刻印がある。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質、表面は黒灰色を呈する。

瓦88は大型桐文軒平瓦で、三三の桐文を3箇所配し、外に唐草が1回反転する。桐文の花・葉は簡略化されて、単線で表した葉脈がわずかに認められる。葉の中央はくぼむ。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面は磨滅で調整は不明である。顎部凸面・側面・裏面は横ナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は青灰色を呈する。図版では別個体の瓦を合成した。

瓦89は大型桐文軒平瓦で、五三の桐文を3箇所配する。桐文の花・葉は丁寧に作られている。葉は切込みが入り、葉脈は主要脈のみ単線で表す。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヘラで縦方向のケズリと横ナデを施す。顎部凸面・側面・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとヘラミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。平瓦部は凹面に縦方

向のケズリと横ナデ、凸面は横ナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。図版では別個体の瓦を合成した。

瓦90は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き五葉で唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部裏面は横ナデ、周縁上面はナデを施す。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当面に離れ砂が付着する。平瓦部は凹面・凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。図版では別個体の瓦を合成した。

瓦91は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き五葉で唐草が2回反転する。瓦90と唐草の向きが逆である。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。平瓦部は凹面・凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦92は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き三葉で唐草が1回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当上縁に面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。

瓦93は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き三葉で唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当面にキラコが付着する。平瓦部は凹面・凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦94は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き三葉で支葉がある。唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当面にキラコが付着する。平瓦部は凹面・凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦95は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは上向き六葉で支葉がある。唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当面にキラコが付着する。平瓦部は凹面に横ナデとミガキ、凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。周縁左に「六小丸文」の刻印がある。

瓦96は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは七葉で上部に点がつく。二重と一重の唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦97は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは下向き三葉で唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。瓦当面にキラコが付着する。平瓦部は凹面に横ナデとミガキ、凸面に横ナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。周縁上端に「^{西カ}院勅右衛門」の刻印文字がある。

瓦98は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは花形で二重の唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデを施す。平瓦部は凹面に縦方向のケズリと横ナデを施す。瓦当面・顎凸面・平瓦部凹面に漆が付着する。瓦当面にはわずかに金箔が遺存する。胎土は砂粒を含む精良な土で、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦99は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは花形で唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当面にキラコが付着する。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦100は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは不明であるが、唐草が1回反転する横に「天」の凸印がある。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁に面取りを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦101は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは不明であるが、簡略化された唐草が3回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面は縦方向のケズリを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、瓦当上縁に面取りを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦102は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは不明であるが、唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデ、顎部凸部・裏面は横ナデを施す。瓦当面にキラコが付着する。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦103は外向唐草文軒平瓦で、中心飾りは不明であるが、唐草が2回反転する。唐草に支葉がみられる。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデを施す。瓦当面にキラコが付着する。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は黒灰色を呈する。

瓦104は軒棧瓦で、丸瓦当部は欠損しており、平瓦当部周縁に接合面のカキメが残る。平瓦当部は外向唐草文で中心飾りは不明であるが、唐草が1回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸

面に顎部を貼り付けて接合する。平瓦凸面の接合面に横方向のカキメを施す。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデを施す。胎土は砂粒を含み、明褐灰色を呈する。焼成は不良である。

道具瓦（図版44・79 瓦105～瓦111） 鳥衾瓦2点、棟端飾瓦3点、止蓋瓦1点、不明瓦1点がある。

瓦105・瓦106は鳥衾瓦である。ともに右巻きの三巴文で、尾は接しない。瓦105は瓦当部上半のみが残存する。調整・技法は不明である。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は軟質である。瓦106は瓦当部裏面に筒瓦をあて、粘土を付加して接合する。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は軟質である。

瓦107～瓦109は棟端飾瓦である。地板部表面に文様を割り込み丁寧にミガキを施す。瓦107は文様の詳細は不明であるが、桐などの植物の葉を表したものか。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質である。瓦108は流水文様で地板裏の接合面にカキメを施す。胎土は砂粒・小礫を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質である。瓦109は文様は不明である。裏面にカキメを施し接合する。胎土は砂粒・小礫を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

瓦110は止蓋瓦である。湾曲した地板部表面に4本の線を割り込み6点一組の押型を施す。欠損しているが、2条の凸帯を接合する。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は軟質である。

瓦111は不明瓦である。長方形の平板裏面にカキメを施し、熨斗瓦に接合する。調整は横ナデで、端部に刻印がある。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

丸瓦（図版45・46 瓦112～瓦114）

瓦112は大型丸瓦で、広端幅22.7cm・長さ36.5cm以上ある。玉縁部は欠損する。成形は粘土板1枚作りで、凹面に糸切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目残り、布には抜き縄が付けられる。3つ螺旋の抜き縄痕跡が付く。両側縁・広端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。胎土は砂粒・小礫を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

瓦113は丸瓦で、狭端幅18.2cm・長さ33.1cm、玉縁幅9.7cm・長さ6.6cmある。成形は粘土板1枚作りで、凹面に糸切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目残り、抜き縄痕跡がわずかに付く。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデである。胎土は砂粒・小礫を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

瓦114は丸瓦で、狭端幅15.8cm・長さ17.3cm以上、玉縁幅9.7cm・長さ4.5cmある。成形は粘土板1枚作りで、凹面に鉄線切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目残る。両側縁・玉縁部端縁の内面にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデである。狭端部付近の凸面に釘孔を2箇所つける。胎土は砂粒・小礫を含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

平瓦（図版47 瓦115）

瓦115は大型平瓦で、幅26.1cm以上・長さ50.5cm・厚さ3.3～3.7cmある。成形は粘土板1枚作りである。凹面は横ナデ、両側縁部と側面は縦ナデを施す。凸面は縦ナデ、両側縁・広端面の内面

表3 瓦一覽表

番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構
瓦1	3-8区断割	瓦59	井戸1-150	瓦117	3-1区粘土層
瓦2	井戸1-150	瓦60	土坑1-110	瓦118	3-1区褐色砂泥
瓦3	土坑4-314	瓦61	柱穴3-5	瓦119	溝3-111
瓦4	4-10区落込斜面整地層	瓦62	溝4-102	瓦120	柱穴1-13
瓦5	土坑4-214	瓦63	3-2区褐色砂泥	瓦121	土坑3-200鑄造遺構
瓦6	3-8区灰褐色砂泥	瓦64	溝3-100	瓦122	3-2区瓦・石敷
瓦7	路面3-4	瓦65	3-2区石罌3-1裏込	瓦123	柱穴1-16
瓦8	4-10区黒褐色砂泥	瓦66	3-1区攪乱	瓦124	3-1区攪乱
瓦9	土坑1-105	瓦67	3-2区灰色粘土	瓦125	3-2区南壁瓦溜
瓦10	4-9区整地層下層	瓦68	3-1区機械掘削中	瓦126	土坑3-200鑄造遺構
瓦11	柱穴3-151	瓦69	溝9-1	瓦127	3-4区焼土・炭層
瓦12	溝4-1	瓦70	4-10区落込斜面整地層	瓦128	溝3-111
瓦13	落込3-1	瓦71	3-1区攪乱	瓦129	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦14	路面3-4	瓦72	3-2区石罌3-1裏込	瓦130	3-4区黄褐色整地層
瓦15	溝4-1	瓦73	3-1区瓦溜	瓦131	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦16	土坑4-314	瓦74	土坑9-3	瓦132	3-1区近代整地層
瓦17	溝4-281	瓦75	土坑3-200鑄造遺構	瓦133	3-1区近代整地層
瓦18	路面3-4	瓦76	3-2区石罌3-1周辺	瓦134	土坑3-200鑄造遺構
瓦19	4-10区黒褐色砂泥	瓦77	3-2区石罌3-1裏込	瓦135	3-2区瓦・石敷
瓦20	4-10区粘土整地層	瓦78	3-2区機械掘削中	瓦136	3-2区瓦・石敷
瓦21	路面3-4	瓦79	3-1区攪乱	瓦137	3-2区瓦・石敷
瓦22	4-10区黒褐色砂泥	瓦80	土坑3-200鑄造遺構	瓦138	3-2区褐色砂泥
瓦23	柱穴1-52	瓦81	3-1区整地層	瓦139	3-2区褐色砂泥
瓦24	土坑1-110	瓦82	3-2区石罌3-1周辺	瓦140	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦25	土坑1-150	瓦83	3-4区北壁	瓦141	9-5区機械掘削中
瓦26	土坑1-150	瓦84	土坑1-9	瓦142	1-2区包含層
瓦27	井戸4-250	瓦85	土坑3-200鑄造遺構	瓦143	3-1区攪乱
瓦28	4-10区青灰色粘土	瓦86	3-2区褐色砂泥	瓦144	9-5区攪乱
瓦29	土坑4-190	瓦87	土坑3-200鑄造遺構	瓦145	3-2区南壁瓦溜
瓦30	柱穴1-28	瓦88	3-2区機械掘削中	瓦146	4-10区落込焼土層
瓦31	4-10区落込斜面整地層	瓦89	土坑3-200鑄造遺構	瓦147	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦32	落込3-1	瓦90	3-2区攪乱	瓦148	3-1区近代整地層
瓦33	溝4-1	瓦91	3-1区機械掘削中	瓦149	3-2区瓦・石敷
瓦34	井戸4-250	瓦92	9-5区機械掘削中	瓦150	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦35	1-2区包含層	瓦93	3-1区機械掘削中	瓦151	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦36	溝4-1	瓦94	9-5区攪乱	瓦152	3-2区瓦・石敷
瓦37	井戸3-204	瓦95	3-1区攪乱	瓦153	3-2区瓦・石敷
瓦38	4-10区落込斜面整地層	瓦96	3-1区盛土	瓦154	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦39	井戸4-250	瓦97	3-1区攪乱	瓦155	3-2区瓦・石敷
瓦40	溝4-1	瓦98	3-1区攪乱	瓦156	3-1区攪乱
瓦41	溝4-1	瓦99	溝3-100	瓦157	3-7区機械掘削中
瓦42	落込3-1	瓦100	3-2区石罌3-1裏込	瓦158	3-2区瓦・石敷
瓦43	土坑5-6	瓦101	3-2区攪乱	瓦159	溝3-111
瓦44	土坑4-64	瓦102	3-2区石罌3-1裏込	瓦160	柱穴3-8
瓦45	4-10区石敷層	瓦103	3-1区攪乱	瓦161	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦46	4-10区黒褐色砂泥	瓦104	3-1区攪乱	瓦162	9-5区攪乱
瓦47	4-10区黒褐色砂泥	瓦105	3-1区近代整地層	瓦163	3-2区瓦・石敷
瓦48	溝4-281上層	瓦106	3-1区攪乱	瓦164	3-2区瓦・石敷
瓦49	土坑1-15	瓦107	1-2区包含層	瓦165	3-2区瓦・石敷
瓦50	路面3-4	瓦108	3-1区攪乱	瓦166	3-2区瓦・石敷
瓦51	土坑4-214	瓦109	3-1区盛土	瓦167	溝3-111
瓦52	土坑4-314	瓦110	土坑1-8	瓦168	3-2区瓦・石敷上面粘土層
瓦53	4-10区黒褐色砂泥	瓦111	1-3区	瓦169	3-2区瓦・石敷
瓦54	4-10区礫敷	瓦112	土坑1-1	瓦170	4-10区落込斜面上層
瓦55	4-10区黒褐色砂泥	瓦113	土坑1-250	瓦171	3-4区近代整地層
瓦56	4-10区黒褐色砂泥	瓦114	3-1区褐色砂泥	瓦172	3-4区攪乱
瓦57	4-10区礫敷	瓦115	3-2区瓦・石敷上面粘土層		
瓦58	1-1区包含層	瓦116	3-2区瓦・石敷上面粘土層		

表4 方広寺刻印瓦一覧表1

番号	種類	刻印の種類・位置	胎土・色調	焼成	備考
瓦116	丸瓦 (鉄線切離し痕)	円形の圏線に「大工」の文字・狭端部凸面	砂粒・小礫含む 灰色	硬質	*
瓦117	平瓦	円形の圏線に「大工」の文字・端部付近凸面	砂粒含む 灰色	硬質	*
瓦118	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「大工」の文字・狭端部凸面	砂粒・小礫含む 青灰色	硬質	*
瓦119	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「大」の文字・狭端部凸面	砂粒多く含む 灰白色	硬質	
瓦120	丸瓦 (抜き縄痕)	三角形の圏線に「大」の文字・狭端部凸面	砂粒・小礫含む 灰白色	硬質	
瓦121	丸瓦 (抜き縄痕)	三角形の圏線に「大」の文字・狭端部凸面	砂粒多く含む 灰白色	硬質	
瓦122	平瓦	菱形の圏線に「大」の文字・端面	砂粒・小礫含む 灰白色	硬質	
瓦123	丸瓦	「大」の文字・狭端面・狭端面	砂粒含む 灰白色	硬質	
瓦124	平瓦	雲形の圏線に不明・端面	砂粒含む 浅黄橙	硬質 2次的被熱で変色	
瓦125	平瓦	雲形の圏線に「大」の文字・端面	砂粒・小礫含む 灰色	硬質	
瓦126	丸瓦(鉄線切離し・抜き縄痕)	円形の圏線に「太」の文字・狭端面	小礫多く含む 灰白色	硬質	*
瓦127	平瓦	円形の圏線に「太」の文字・端面	砂粒・小礫含む 灰色	硬質	*
瓦128	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「大一」の文字・狭端部凸面	砂粒多く含む 灰白色	軟質	*
瓦129	丸瓦	円形の圏線に「吉」の文字・狭端部凸面	砂粒含む 灰色	硬質	*
瓦130	平瓦	円形の圏線に「山」の文字・端面	砂粒含む 灰色	硬質	
瓦131	平瓦	三角形の圏線に凸線の山笠と「山」の文字・端面	砂粒・小礫多く含む 灰白色	硬質	
瓦87	軒平瓦	三角形の圏線に凸線の山笠と左右逆「山」の文字・瓦当部付近凹面	砂粒多く含む 灰色	硬質	
瓦132	丸瓦 (鉄線切離し痕)	円形の圏線に「一」の文字・狭端部凸面	砂粒・小礫多く含む 灰色	硬質	
瓦133	丸瓦	扇面形の圏線に「や」の文字・狭端部凸面	砂粒少量含む 明黄褐色	やや軟質 2次的被熱で変色	
瓦134	丸瓦 (抜き縄痕)	「三」の文字・狭端部凸面	砂粒含む 灰白色	硬質	*
瓦135	平瓦	円形の圏線に凸線の円内に「上」の文字・端面	砂粒少量含む 灰白色	やや軟質	
瓦136	丸瓦(鉄線切離し・抜き縄痕)	円形の圏線に凸線の円内に「上」の文字・狭端部凸面	小礫含む 灰色	硬質	
瓦137	平瓦	円形の圏線に凸線の円内に「上」の文字・端面	砂粒含む 灰色	硬質	*
瓦138	平瓦	雲形の二重圏線内に文字か・凹面	砂粒含む 灰色	硬質	
瓦139	丸瓦 (抜き縄痕)	宝珠に「上」の文字・狭端部凸面	砂粒少量含む 灰白色	やや軟質	
瓦140	平瓦	三角形の圏線に「+」の文字・側面	砂粒少量含む 灰色	やや軟質	
瓦141	丸瓦	円形の圏線に「+」の文字・凸面	砂粒含む 灰白色	やや軟質	
瓦142	平瓦か (釘穴あり)	四角形の圏線に「夕」の文字・側面	砂粒含む 灰色	やや軟質	
瓦143	道具瓦	「五」文字・端面	砂粒含む精良な土 灰白色	硬質	
瓦111	道具瓦	四角形の凹線に「光□□」の文字・側面	砂粒含む 灰色	硬質	

*は図録『特別展 城下町大坂―地中より今甦る激動の歴史―』に掲載された刻印瓦と同文字・記号瓦である。

表5 方広寺刻印瓦一覧表2

番号	種類	刻印の種類・位置	胎土・色調	焼成	備考
瓦 144	丸瓦	四角形の圏線に「御用 御瓦師 蒔田五左衛門」	砂粒含む 灰色	やや軟質	
瓦 145	丸瓦 (鉄線切離し痕)	「吉春□□ら」の文字・狭端部凸面	砂粒含む 灰褐色	やや軟質	
瓦 146	平瓦	円形の圏線に「三葉」記号・端面	砂粒含む 灰白色	やや軟質	
瓦 85	軒平瓦	不明記号・瓦当周縁上端	砂粒多く含む 灰色	軟質	
瓦 147	平瓦	扇面形の圏線に不明記号・端面	砂粒含む 灰色	硬質	
瓦 148	平瓦	四角形の圏線に不明記号・端面	砂粒含む 黄灰白色	やや軟質 2次的被熱で変色	
瓦 149	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「米」の記号・狭端部凸面	砂粒多く含む 暗灰色	硬質	
瓦 150	丸瓦	円形の圏線に「I」と「×」の組み合わせ 記号・凸面	砂粒含む 灰白色	やや軟質	
瓦 151	丸瓦 (抜き縄痕)	四角形の圏線に「I」と「×」の組み合わ せ記号・狭端部凸面	砂粒含む 灰白色	硬質	*
瓦 152	丸瓦 (抜き縄痕)	四角形の圏線に「I」と「×」の組み合わ せ記号・狭端部凸面	砂粒含む精良な土 灰白色	やや軟質	*
瓦 153	丸瓦 (痕抜き縄痕)	四角形の圏線に「I」と「×」の組み合わ せ記号・狭端部凸面	砂粒含む 灰色	硬質	*
瓦 154	丸瓦(糸切離 し・抜き縄痕)	円形の圏線に「+」の記号・狭端部凸面	砂粒多く含む 赤褐色	やや軟質	
瓦 155	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「井」の記号・狭端部凸面	砂粒多く含む 灰白色	やや軟質	
瓦 156	平瓦	円形の圏線に「井」の記号・端面	砂粒・少礫含む 灰白色	硬質	
瓦 157	丸瓦 (抜き縄痕)	円形の圏線に「キ」の文字・狭端部凸面	砂粒多く含む 赤褐灰色	やや軟質	
瓦 158	丸瓦 (抜き縄痕)	三角形の圏線に「三葉」記号・端部付近凹 面	砂粒多く含む 灰白色	やや軟質	
瓦 159	丸瓦 (抜き縄痕)	凹の鋸形・狭端部凸面	砂粒多く含む 灰色	硬質	
瓦 160	丸瓦 (抜き縄痕)	凹の三角形内に凸の横線・凸面	砂粒・少礫含む 灰白色	やや軟質	*
瓦 161	丸瓦	凹の三角形内に凸の横線・凸面	砂粒含む精良な土 灰白色	やや軟質	
瓦 162	平瓦	凹の三角形に凸の三角形と中心に点・端面	砂粒・小礫含む 灰白色	やや軟質	
瓦 163	平瓦	三角形の圏線に凸線の三角形。内は不明・ 端面付近凹面	砂粒・小礫少量含む 灰白色	硬質	
瓦 164	平瓦	三角形の圏線に不明・端面付近凹面	砂粒・小礫少量含む 灰白色	硬質	
瓦 165	平瓦	円形の圏線に雁・端面付近凹面	砂粒含む 灰色	硬質	
瓦 166	平瓦	円形の圏線に雁・端面	砂粒含む 灰白色	硬質	
瓦 167	平瓦	円形の凹線内不明・端面	砂粒含む精良な土 黄褐白色	硬質 2次的被熱で変色	
瓦 168	平瓦	凹の三日月・端面	砂粒含む 灰白色	硬質	
瓦 169	平瓦	杉の木・端面	砂粒多く含む 灰色	やや軟質	
瓦 170	平瓦	菊花・側面	砂粒多く含む 黄褐灰色	やや軟質	
瓦 171	丸瓦 (鉄線切離し痕)	円形の圏線に蜂巢・狭端面凸面	砂粒含む精良な土 灰白色	硬質	
瓦 172	平瓦	円形の圏線に五弁花・端面	砂粒・小礫含む 浅黄橙色	やや軟質 2次的被熱で変色	

*は図録『特別展 城下町大坂―地中より今甦る激動の歴史―』に掲載された刻印瓦と同文字・記号瓦である。

にヘラで面取りを施す。広端面に「大工」の刻印がある。胎土は砂粒・小礫を多く含み、灰色を呈する。焼成は硬質である。

刻印瓦（図版48・49・80、表4・5 瓦85・瓦87・瓦111・瓦116～瓦172）出土した刻印瓦は91点で、軒瓦や丸瓦・平瓦、道具瓦などがある。刻印は多種多様で、「大」・「山」・「吉」・「上」の文字や記号など52種ある。ほとんどが3 - 2区の瓦・石敷上面粘土層から出土した。刻印の位置は、丸瓦は狭端部凸面、平瓦は端面が大半である。また、刻印瓦には大阪城の調査で出土したものと³⁾同じ刻印が数点ある。

4 土製品

土製品の大部分は金属加工に係る炉壁・鞆羽口・鑄型などが⁴⁾占める。これらは方広寺回廊の内側にあたる3 - 4区、3 - 1区・3 - 2区、4 - 10区落込斜面整地層からまとめて出土した。それぞれの場所で様相は異なる。3 - 4区では炉壁・銅滓が目立つが、鞆羽口は認めていない。3 - 1区では土坑3-200からは鞆羽口・金属滓がまとめて出土したが、鑄型はない。鑄型は3 - 4区、石塁3-1・南門周辺から出土した。4 - 10区では鞆羽口・鉄滓が整地層中に多量に含まれていた。

炉壁（図版52・82 土12～土14・土45～土53）すべて破片である。3 - 4区から出土した炉壁はブロック形のもの（土45）、円筒形のもの（土49～土53）、棒状のもの（土47・土48）、L字形のもの（土46）がある。ブロック形のは長さ10.5cm以上、幅11.8cm、厚さ4.4cmで、直径約1cmの円孔があく。炉の構造材と推定できる。円筒形のは内径約60cmに復元することができる。厚さ約4.5cmで、約2.2～2.3cmずつスサ入りの粘土を2段階に重ねて成形する。内面には銅滓が厚く付着し、溶融して流れた状態を示すものがある。棒状のものは細長い板棒状で、長側面の一方に銅滓が厚く付着し、もう一方は凹凸が目立つ。広面は両面とも別の部材が重なる痕跡がある。大型の部材を積み上げたのち目止めとして充填した部分と推定できる。L字形のものも側面の一方に銅滓が厚く付着する。送風口などの開口部の部材と推定できる。豊臣秀頼の造営時に属する。

3 - 1区・3 - 2区から出土した炉壁は、すべて大型のブロック形（土12～土14）である。緩やかに内傾する曲面をもつものがある。広面の一方は灰色に変色し、細かい亀裂がある。秀頼造営時に属する。

鞆羽口（図版50・51 土1～土11）土坑3-200から多量に出土した鞆羽口（土1～土7）は、大型の先端がすぼまる円柱形で、先端部には金属滓が付着する。被熱による溶融・変色の状況から使用回数は少なかった可能性がある。秀頼造営時に属する。

4 - 10区から出土した鞆羽口（土8～土11）は、大型の先端がすぼまる円柱形で、先端部には鉄滓が付着する。土坑3-200出土と比べるとやや小型のものが多い。秀吉から秀頼造営時に属する。

鑄型（図版52～57・81 土15～土44）3 - 4区から出土した鑄型（土31～土44）は、いずれ

も細片である。粗土の上に真土を塗り重ねる。真土のみが剥離した破片があり、中には厚さ2cm以上の分厚いもの(土44)がある。凸曲面があるもの(土40・土41)や半球形のくぼみをもつもの(土42～土44)がある。銅滓が付着するもの(土31～土36)があるが、鑄造した製品は確定できない。秀頼造営時に属する。

3-1区・3-2区から出土した鑄型は極めて大型のブロック形(土15～土30)⁵⁾が多い。スサを含む粗土を方形に成形し、内側に曲面を加工して、真土を塗り重ねる。真土を塗る部分の粗土には連続する指先の圧痕や真土を付着させるために施した斜交する浅いカキヤブリ痕がある。真土は大部分が剥落しているが、残存部分では厚さ約0.5～1.0cmで、表面が黒く変色しているものがある。極めて大型の形状から大型鑄造品であることは間違いない。梵鐘または大仏の鑄型であることが考えられるが、内側の曲面が正確な円弧ではないことから大仏の鑄型である可能性が高い。ただし部位は不明である。また、破断面に金属滓が付着した破片があることから、湯が飛び散る範囲で足場などに製作作業の中で転用されていたことが推定できる。秀頼造営時に属する。

埴埴 4-10区から破片が出土した。外面は高熱を受けて溶解する。

これらの他の土製品には江戸時代中期以降の土人形・土鈴などがある。また、明治時代に属するが、5次調査では大量の窯道具が出土した。大半は信楽焼のサヤ鉢で、その他に各種トチン・タナイタ・支柱などがある。サヤ鉢には刻印・鉄釉で記号や文字を描くものがあり、窯元の印と考えられる。また、瓦窯5-1周辺からは「ツツミ」と呼ばれる瓦専用のトチンが出土した。

5 石製品

石製品の大部分は石壘3-1周辺を中心に出土した大型の石造物が占める。ここでは先にその他の石製品を紹介したのち、出土遺構ごとに大型の石造物を報告する。

硯(図版82、図93 石1～石5) 形態は方形を基本とする。室町時代から桃山時代の遺構・包含層から出土した。

石1・石2の平面形は四隅を欠き込む花卉状である。石1は一部に墨痕が残る。陸部には不定方向に直線的な鋭い切込みがある。破損したあと砥石に転用したと推定できる。石材は灰色の粘板岩で、溝3-15より出土した。期古段階～中段階に属する。石2の陸部には微弱な削痕がある。石材は黒色の粘板岩で、4-10区包含層から出土した。時期の確定はできない。

石3・石4の平面形は海部側の幅が狭くなる台形である。周縁部上面に線彫りで円弧を描き裝飾する。石3は一部に墨痕が残る。石材は黒色の粘板岩で、井戸4-250から出土した。期古段階に属する。石4は裏面に幅の広い工具による粗い加工痕や剥離痕がある。石材は灰色の粘板岩で、土坑4-181から出土した。室町時代に属する。

石5の平面形は方形である。周縁部は細く高い。一部に墨痕が残る。使用痕により陸部は凹む。石材は灰色の粘板岩で、4-10区落込斜面整地層から出土した。期古段階に属する。

不明石製品(図版82、図93 石6・石7) 石6平面形は不整形な四角形で、上面中央に不整形な四角形の浅いくぼみを加工する。くぼみの底面には縦横に切込みがある。墨痕がないので硯

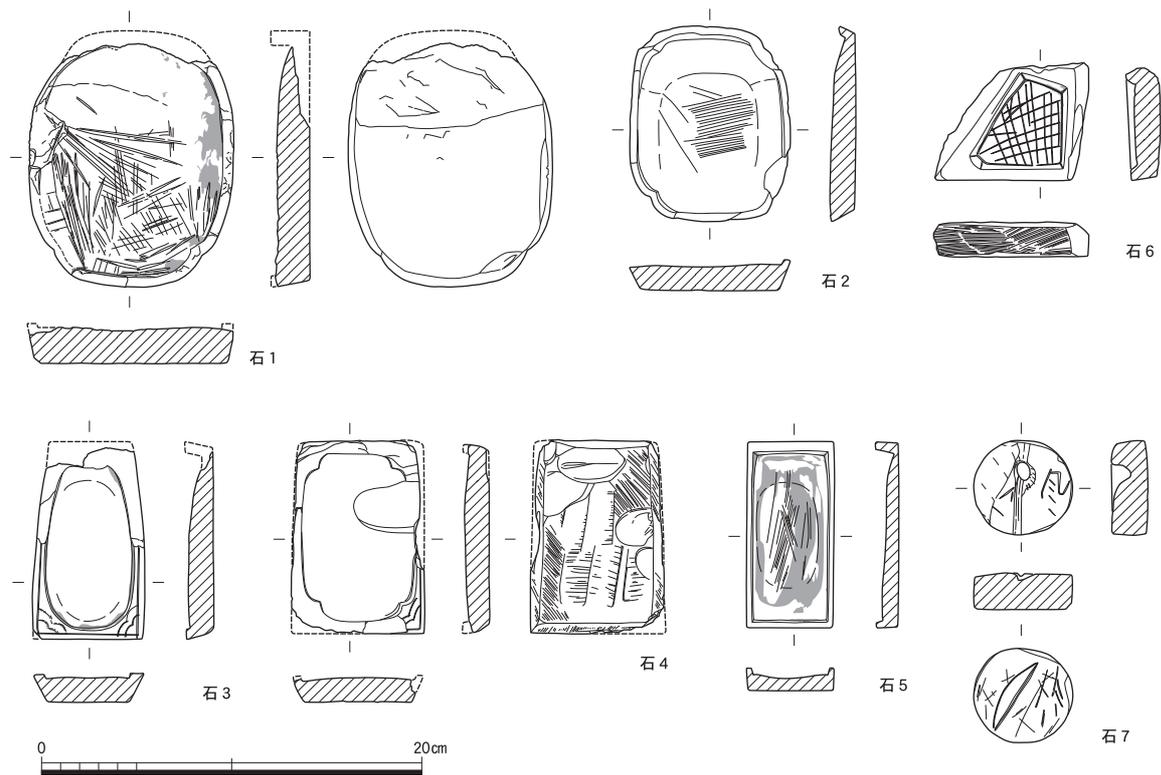


図93 石製品実測図（1：4）

とは確定できない。石材は黄灰色の粘板岩で、落込3-1から出土した。 期に属する。石7は厚い円盤形で上面中央に切込みと円穴を穿つ。加工は粗い。石材は滑石で、落込3-1から出土した。期に属する。

これらの他の石製品には、滑石製石鍋・砥石などがある。

石壘3-1裏込（図版58・59 石8～石27） 石塔（石8～石19）・笠石（石20）・石標（石21）・石仏（石22～石27）などが出土した。

石塔には一石五輪塔（石8～石11）・五輪塔の部材（石12～石19）がある。一石五輪塔はいずれも破片である。五輪塔の部材には組み合わせの突起を作るもの（石12～石15・石17）とくぼみを加工するもの（石18・石19）がある。石16～石18は側面に梵字を刻む。石材はいずれも花崗岩である。

石20は平面形はほぼ四角形で、底面を平坦、上面を丸く成形する。灯籠や石碑の笠石の可能性はある。石材は花崗岩である。石標は1点のみ出土した。前面を平坦に加工し、上部に突起を作る。前面には文字らしき痕跡があるが、判読できない。石材は花崗岩である。

石仏は前面に一尊の座像を浮き彫りする。石22・石25・石27は上部に庇を作る。石材はいずれも花崗岩である。

石壘3-1の構築に用いられていたことから、確実に豊臣秀吉による方広寺造営以前に属する。

溝3-100・溝3-100掘形（図版60 石28～石33） 石塔・墓標（石28・石29）・石標（石30）・石仏（石31～石33）・石灯籠（石34）などが出土した。石組本体や掘形裏込に使用されて

いた。

墓標はいずれも破片である。前面を彫りくぼめ中央に題目を刻み、石29は下部に蓮華座を陽刻する。石28の題目右側には「悲母善妙」、左側には年号とおぼしき文字を刻む。不明瞭であるが、「元」の右はらいが欠落し、「禄」の偏のみとすると「元禄十四年」と読める。石29の題目右側には「悲父妙」、左側には「悲母妙正」と刻む。石材はいずれも花崗岩である。

石標は前面を平坦に加工し、上部に突起を作る。前面には文字の痕跡は残っていない。石材は花崗岩である。石仏は前面に一尊の座像を浮き彫りする。石材はいずれも花崗岩である。石34は灯籠の中台の破片である。上面に円形の低い突起を作り出し、側面は蓮弁を飾る。石材は花崗岩である。

溝3-100は掘形から出土した土器類から 期～劬期に構築されたことがわかる。墓標の型式や元禄14年（1701）の年号からも矛盾しない。溝3-100出土の石造物は石罌3-1の構築に用いられたものが転用され、また、江戸時代中期のものが混入していると推定できる。

石罌3-1周辺（図版61・62 石35～石57） 石罌3-1周辺の遺構から出土したもの（石35～石39）と石罌3-1周辺に散乱して出土したもの（石41～石57）がある。

前者には石塔（石35・石36・石38～石40）・笠石（石37）などがある。石35は一石五輪塔、石36は小型の石塔の破片である。石38～石40は五輪塔の部材である。石40は側面の4面に梵字を刻む。石材はいずれも花崗岩である。石37は平面形は長方形で、四方を強い反りをもつ屋根形に加工し、上面に平坦な突起を作る。石材は花崗岩である。

後者には石塔（石41～47）・墓標（石48・石49）・石仏（石50～石56）・石臼（石57）などがある。石41～石46は五輪塔の部材、石47は宝篋院塔の破片である。石材はいずれも花崗岩である。墓標はいずれも破片である。前面を彫りくぼめ中央に題目を刻む。石48の題目右側には文字の痕跡があるが判読できない。石49の題目両側にはそれぞれ「妙」とあるが下部は欠損する。石材はいずれも花崗岩である。石仏は前面に一尊の座像を浮き彫りにするものが多いが、石52は二尊が並ぶ。石54～石56は龕を設け、石54・石55は上部に庇を作る。石材はいずれも花崗岩である。石57は石臼の破片で、中央に円孔を穿つ。石材は花崗岩である。

溝3-100と同じ型式の墓標が含まれていることから、石罌3-1周辺から出土した石造物は石罌3-1の構築に用いられたものが崩落あるいは転用され、また、江戸時代中期のものが混入していると推定できる。

4 - 10区（図版63 石58～石64） 石塔（石59）・石仏（石60～石63）のほか不明石製品（石58・石64）がある。

石58は粗く割れた石材に直径約7cmの円穴を穿つ。門扉の軸石の可能性もある。石材は花崗岩で、井戸4-250から出土した。 期古段階に属する。

石59は五輪塔の水輪で上面・下面に組み合わせのくぼみを加工し、側面の4面に梵字を刻む。石材は花崗岩である。石仏は前面に一尊の座像を浮き彫りする。石61は上部に庇を作る。石材はいずれも花崗岩である。石64は角部の破片で緩やかな突起を作る。石材は花崗岩である。用途は

不明である。

石59～石64は落込斜面整地層や溝4-124などから出土していることから、確実に豊臣秀頼による方広寺造営以前に属する。

6 金属製品

金属製品には銅製品・鉄製品がある。また、ここで金属加工に関する金属滓について報告する。

(1) 銅製品

多様な種類が出土した。用途不明の製品が多く、ここでは全体的な形態がわかり、用途もある程度推定できる個体を限定して掲載した。

銅銭（図版83、図94 金1～金12） 銭銘があるもの（金1・金2）とないもの（金3～金12）がある。金1・金2はともに「洪武通寶」と判読できる。金3～金12は非常に薄く、外縁・内郭

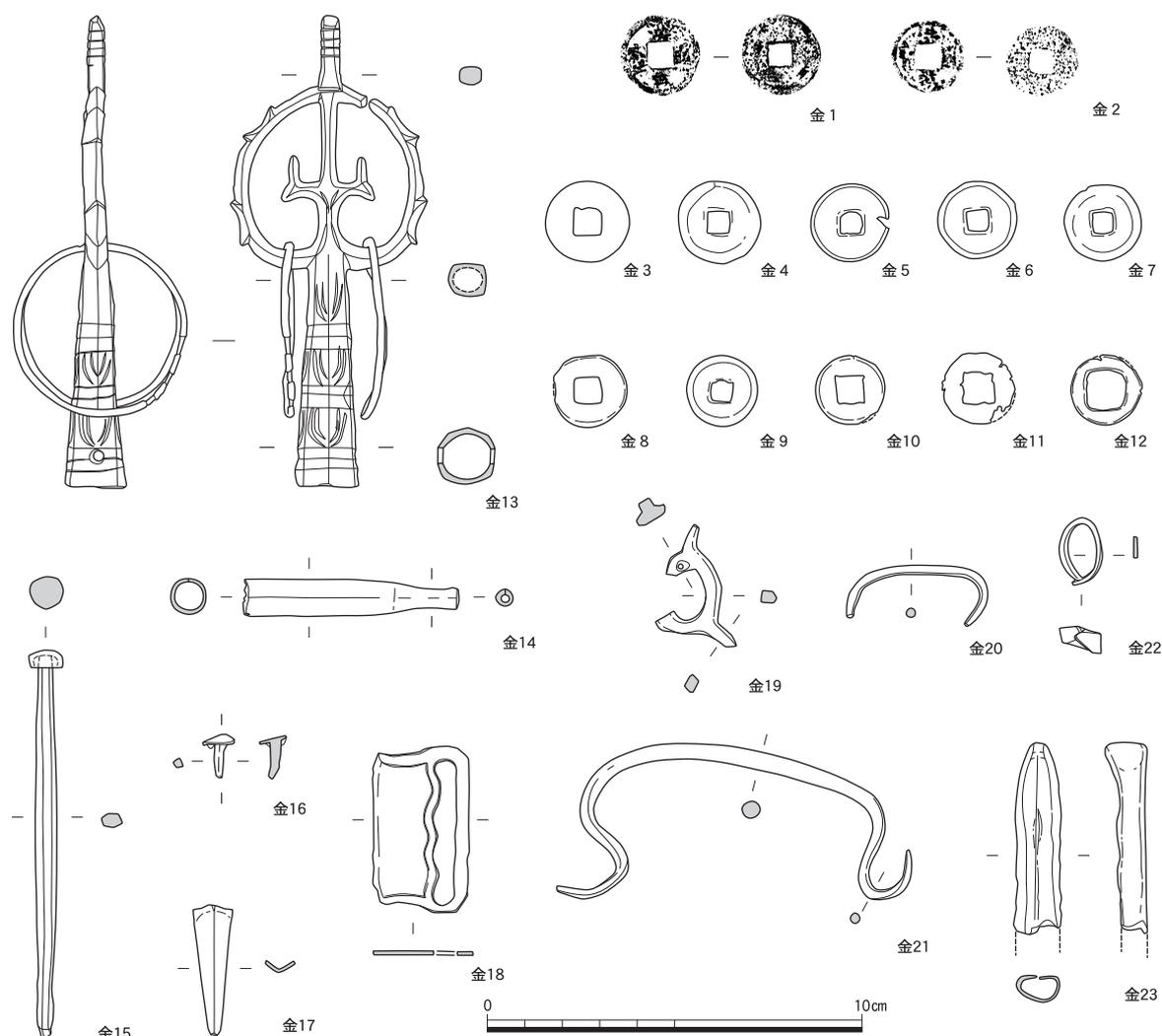


図94 銅製品実測図（1：2）

の段は不明瞭なものが多い。また、金12のように内郭が極端に大きいものがある。すべて3 - 4区の方広寺造営に伴う整地層から出土した。図示した以外にも十数点の破片があるが、いずれも金3～金12のような無銘の薄い銅銭である。桃山時代の京都ではこの型式の銅銭の出土例はほとんどない。なお、銅銭は鎌倉時代から室町時代の遺構や包含層からも出土している。

錫杖（図版83、図94 金13） 手錫杖の頭部である。鑄造品で両側には銅輪を一つずつ付ける。基部は中空で目釘孔を両側に加工する。外面は3箇所を直線文で区切り円弧状の文様を飾る。石壘3-1の裏込から出土したことから方広寺造営に伴う地鎮に用いた可能性がある。

煙管（図94 金14） 吸口である。薄い銅板を丸めて接合する。溝3-100から出土した。 期～劬期に属する。

棒状銅金具（図94 金15） 中央部がやや太くなる棒状の体部に扁平な頭部を接合する。先端はやや尖る。3 - 1区から出土した。時期の確定はできない。

銅鋳（図94 金16） 短く尖る体部に笠形の頭部を接合する。3 - 1区から出土した。時期の確定はできない。

板状銅金具（図94 金17） 完形品である。銅板を山形に折り曲げ、先端は尖る。一部に鍍金が残ることから、何らかの金具の可能性がある。3 - 1区から出土した。 期に属する。

不明銅製品（図94 金18～金23） 金18は薄板に細長い孔があく。金19は変則的な形態で、何らかの部品であると考えられる。金20・金21は把手状に曲げたものである。金22は薄い板を輪状に曲げる。金23は薄い銅板を丸めて袋状に成形する。金18・金19・金21は3 - 1区から出土した。時期の特定はできない。金20・金22・金23は3 - 4区の方広寺造営に伴う整地層から出土した。

（2）鉄製品

多数出土したが、錆による損傷が激しく、原形がわかる個体は少ない。

小柄（図95 金24） ほぼ完形であるが、刀身は錆で損傷する。柄は銅製または真鍮製である。金属板を折り曲げて成形し、草花の文様を線刻する。4 - 10区落込斜面整地層から出土した。期古段階に属する。

金具（図95 金25） ほぼ直角に2回折り曲げる。釘を再加工した可能性がある。3 - 1区から出土した。 期に属する。

釘（図版83、図95 金26・金27） 釘は多数出土した。金26は一般的な大きさの釘、金27は最も大きな釘である。金27の体部は直径約2cmの円柱形で頭部を平坦に加工する。金26は土坑3-200、金27は3 - 7区から出土した。ともに 期に属する。

鋳（図版83、図95 金28～金30） 鋳も大きい。長さ（渡り）・幅（爪）の形状は多様であるが、断面はいずれも方形である。いずれも3 - 1区・3 - 2区から出土した。 期に属する。

（3）金属滓（図版82）

金属加工に関連する土製品と同様、方広寺回廊の内側にあたる3 - 4区、土坑3-200周辺、

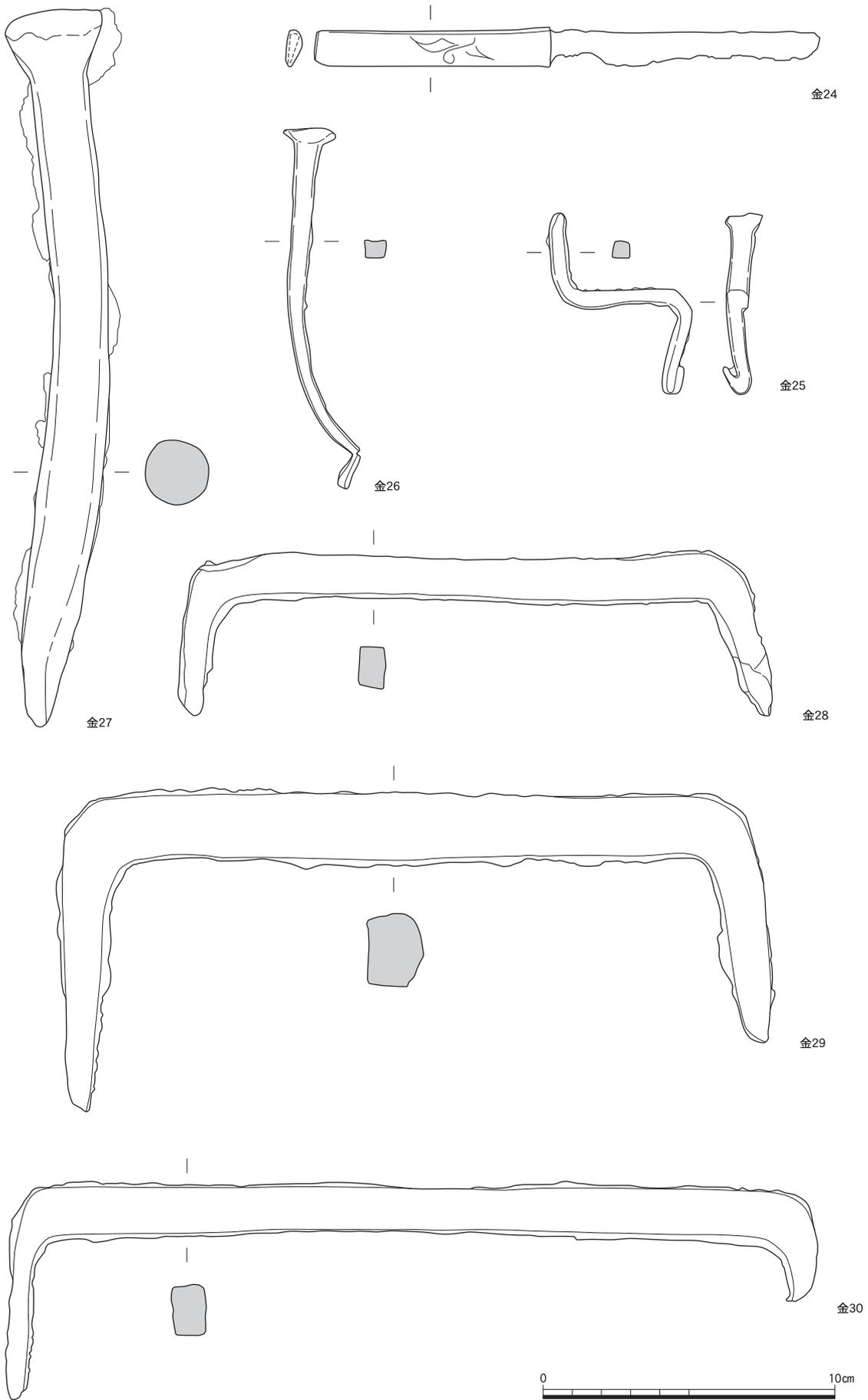


図95 鉄製品実測図(1:2)

4 - 10区落込斜面整地層からまとまって出土した。それぞれの区域での様相は異なる。

3 - 4区では銅を主成分とすると推測できる金属滓がまとまって出土した。砂・土が混じり込んだものがある一方で、粒状・球形のもの（金33～金37）や滴状に流れた状態で固まったもの（金38・金39）がある。また、炉壁に付着したものも多い。唯一、出土した銅塊（金40）の成分を分析したところ、銅が92～93%、鉛が7～8%で、錫がほとんど含まれていないという成果を得た⁶⁾。なお、鉄滓はほとんど認めていない。

土坑3-200周辺では遺構埋土を中心に金属滓が多量に出土した。比較的大型の塊や砂・土・炭が混じり込んだものが多い。また、鋳型や鞆羽口に付着するものがある。成分の詳細は現状では不明である。

4 - 10区落込斜面整地層では鉄を主成分とすると推測できる金属滓が多量に出土した。大型の塊が多い。

いずれも 期古段階に属しており、方広寺造営の実態をうかがうことができる資料である。なお、金属滓の詳細な成分分析は今後の課題としておきたい。

7 木製品

木製品は各調査区で出土しているが、大半は4 - 10区で出土したもので、井戸枠や曲物などの井戸部材が多くを占める。井戸部材以外の木製品は井戸・溝・落込斜面などから出土し、建物端材・曲物・箆・櫛・下駄・漆器類などがある。漆器類は遺存状態が良好なものは少ない。ここでは4 - 10区の井戸・溝・包含層などから出土した遺物を中心にその一部を掲載する。

井戸4-250（図版46・84 木1～木31） 井戸部材の木枠や曲物以外に木枠内から箆・漆器・櫛などが出土した。 期古段階に属する。

箆（木1～木12）は長さ・太さが異なるものが多数出土した。全面に面取りを施し、両端を細く削るものや一端だけ削るものがある。断面は楕円・円形・多角形に仕上げる。樹種は主にヒノキで、木6・木11はスギ、木はモミ属である。

付木（木13・木14）は箆の転用で、火付けに使用したものである。樹種はヒノキである。

横櫛（木15）は棟部は断面半円形で緩やかな弧状をなす。表面はなめらかで丁寧な作りである。歯は密で鋸で挽き出し58本残存する。樹種はイスノキである。

紡錘車（木16）は半分が欠損する。中心に棒を通すための小孔を開ける。樹種はヒノキである。

曲物（木17・木25～木31）は多数出土した。木17は曲物底板の破片である。木28～木31は曲物の底板または蓋の一部である。木25～27は曲物底板の一部である。木25・木30は片面に刃物痕があり、まな板に転用されたことがわかる。木27は周囲を削った単位が明瞭に残り、表面には刃物で彫った痕跡がある。木28は四方に切込みを入れる。片面に不定形な黒い焦げ痕が付く。木29は長側面に木釘を通す4箇所の目釘孔がある。木31は数箇所に刻目がつき、2箇所に穿孔がある。樹種は木17・木25・木26・木28・木29・木31がヒノキで、木27・木30がスギである

漆器（木18・木19）には皿・椀がある。木18は皿である。内外面に黒色の漆を施し、赤色の漆

漆器（木63～木68）には蓋・箱物・椀がある。木63は蓋である。平面円形で天井部は緩い弧を呈する。底部は削り込まれている。底部立ち上がり部分に黒色の漆が残存する。樹種はスギである。木64は箱物部材の一部で、内外面に黒色の漆の上から赤色の漆を施す。内面の底板がつく部分は塗りが無い。樹種はスギである。木65～木68は椀である。木65は内面赤色の漆・外面黒色の漆で、樹種は散孔材である。木66・木67は内外面とも赤色の漆で、木67は器高が低い。樹種はともにケヤキである。木68は内外面赤色の漆で、高台が高い。樹種はブナである。

木球（木69・木70）には大小がある。木69は扁平な球形を呈する。片面に砂粒による無数の小孔がある。使用痕と考えられる。樹種はカキノキである。木70は上部を欠損しているが、木69より一回り大きい。樹種はエゴノキである。

曲物（木71）は底板がある。樹種はヒノキである。

付札（木72）は両面とも文字は確認できない。樹種はスギである。

琴柱形木製品（木73）は底面は平坦で上面を弧を描くように削り込む。樹種はコウヤマキである。

棒状木製品（木74）は全面を削り両端を細くする。表面は中央に長軸に沿って深く抉り、裏面は上部に穿穴する。樹種はスギである。

下駄（木75～木78）は多様である。木75は連歯下駄で前歯は中央を削り込む。平面形は先端が幅広の方形を呈する。樹種はスギである。木76は差し歯下駄で平面楕円形を呈し、下面の浅い溝と柄穴に歯を嵌める。柄穴は前後それぞれ2箇所ある。樹種は体部がケヤキ、歯はスギである。木77・木78は連歯下駄で、平面形は方形で隅部を丸くおさめる。樹種は木77が二葉マツ、78がケヤキである。

溝4-102（図版67・87 木79～木113） 路面4-2に伴う溝である。櫛・漆器・箸・曲物・下駄など生活用品が多く出土した。 期古段階に属する。

横櫛（木79）は棟部は断面台形で粗い面取りを施し、半円形をなす。歯は密で鋸で72本挽き出す。樹種はツゲである。

不明木製品（木80・木81）は多様である。木80は平面形は円形で、厚さは0.7cmである。土圧で変形している。中央に穿孔があり、木軸が遺存する。墨書があるが判読できない。樹種はスギである。木81は一辺2.2cmの方形で、厚さは0.9cmである。隅は丸く収める。樹種はヒノキである。

棒状木製品（木82）はほぼ完形で、全面に丁寧なケズリが施されている。樹種はヒノキである。

不明部材（木83・木84）は多様である。木83は平面形が台形に削られている。樹種はヒノキである。木84は全面にケズリ痕がつく長円形で中央に長方形の穿孔がある。柄を通して使用したものと思われる。樹種はヒノキである。

漆器（木85～木89）には蓋・椀がある。木85は蓋である。平面円形で天井部は緩い弧を呈する。端部に面取りを施す。底部は削り込まれており、内外全面黒色の漆である。樹種はスギである。木86～木89は椀である。木86はやや小振りで内面赤色の漆・外面黒色の漆である。樹種はサクラ属である。木87は上半分が欠損している。内外面赤褐色の漆である。樹種は散孔材である。木88

は高台が高く、底部も2.9cmと厚い。口縁端部は欠損する。内外面赤色の漆で、樹種はカエデ属である。木89の体部は底部から開き気味に立ち上がる。端部と高台が欠損する。内面赤色の漆・外面黒色の漆で、見込み中央に二重四角の彫り込みがある。樹種はサクラ属である。

箬（木90～木103）は長さ・太さが異なる。全面に面取りを施し、両端を細く削るものや一端だけ削るものがある。断面は楕円・円形がある。樹種は主にスギとヒノキである。

付木（木104・木105）は箬の転用である。樹種はヒノキである。

棒状木製品（木106）は片面上部中央にV字形の切込みを入れる。樹種はヒノキである。

板状木製品（木107）は方形に加工された丁寧な作りである。樹種はスギである。

桶（木108）は側板がある。両面とも表面は滑らかで、内面に刻目や調整痕がある。樹種はヒノキである。

折敷（木109）は底板がある。方形の薄板で隅は丸くおさめる。立ち上がり部を取り付けるために外側の上下に2箇所、端の4箇所に小孔がつけられている。樹種はヒノキである。

棒状木製品（木110）は上端にV字形の切込みを入れ、約4.5cm下方に幅1.0cmの欠き込みを作る。樹種は二葉マツである。

樽（木111・木112）は蓋板がある。木111は端部から2.0cmの位置に径3.0cmの栓孔をあける。ともに蓋上面に2筋の紐を巻いたと考えられる圧痕がある。樹種はスギである。

下駄（木113）は連歯下駄である。樹種は二葉マツである。

柱穴4-129（図版68・88 木114） 1点のみ図示した。 期古段階に属する。

独楽状製品（木114）は全体を削って調整する。下にすばまり2条の刻みを施す。上面は中央に0.8cmの凹みをつける。樹種はヒノキである。

溝4-124（図版68・88 木115・木116） 路面4-2東側溝である。出土木製品は少量である。期古段階に属する。

曲物（木115）は底板がある。側面の上方を削る。樹種はスギである。

下駄（木116）は連歯下駄で、平面形は楕円形を呈する。樹種はヒノキである。

4 - 10区褐灰色砂泥層（図版68・88 木117～木125） 西半部の落込斜面整地層下層（図69～71の49層）にあたる。箬・蓋などが少量出土した。 期古段階に属する。

箬（木117～木123）は長さ・太さが異なる。全面に面取りを施し、両端を細く削るものや一端だけ削るものがある。断面は楕円・円形がある。木121～木123は欠損している。樹種はすべてヒノキである。

蓋（木124）はほぼ完形である。側面から上面にケズリ痕が明瞭に残る。底部中心にはコンパス状のもので円を描いた際にできたと考えられる穴がある。側面は焼けて黒い焦げ痕がつく。樹種はヒノキである。

曲物（木125）は底板がある。側面の上方を削るが、上面・下面は未調整である。樹種はヒノキである。

4 - 10区落込斜面整地層（図版68・88 木126～木143） 西半部で検出した分厚い整地層で

ある。箆・桶などが少量出土した。 期に属する。

箆（木126～木137）は長さ・太さが異なる。全面に面取りを施す。欠損しているものが多い。樹種は主にヒノキでスギが混じる。

桶（木138・木139）は側板がある。断面はわずかに湾曲する。木138は下部内外面に箍の圧痕がつく。木139は小口を斜めに削り落とす。樹種はスギである。

板状木製品（木140・木141）は多様である。木140は角柱状である。樹種はヒノキである。木141は長軸一辺と上端に計7箇所の小孔を開ける。小孔には木釘が残る。樹種はヒノキである。

棒状木製品（木142）は長軸方向に粗いケズリ痕がある。樹種はヒノキである。

木札状木製品（木143）は上部は緩やかな弧を描くように細かいケズリを施し、下端は斜めに削り落とす。文字や墨書の痕跡はない。樹種はヒノキである。

8 その他の出土遺物

上記以外の遺物として焼土と炭についてふれておく。

焼土は鎌倉時代から室町時代の遺構・包含層を中心に出土した。橙色から黄橙色の色調を示し、大部分は直径1cm以下の細粒に砕けている。火災の痕跡や竈の存在を推測できるが、遺構との関連は確定できない。

炭は各時代の遺構・包含層から出土した。特に桃山時代から江戸時代前期の鑄造に関連する土製品や金属滓に伴うものが多い。細片が多く、樹種の同定は実施していない。

註

- 1) 『法住寺殿跡 平安京跡研究調査報告第13輯』(財)古代学協会、1984年。
- 2) 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会、1984年。
- 3) 『特別展 城下町大坂 - 地中より今甦る激動の歴史 - 』大阪城天守閣特別事業委員会、1993年。
- 4) 金属加工に関わる出土遺物については、久保智康氏に御教示をいただいた。
- 5) 極めて大型のため鑄造状態の向きを確定することが困難である。画像実測図は実際の鑄造状態の向きとは限らないことをお断りする。
- 6) 分析にあたっては、早川泰弘氏、吉田澗代氏の御高配を得た。
- 7) 西山良平氏、馬田綾子氏に釈読していただいた。田中利津子「京都・六波羅政庁跡」『木簡研究』第22号、2000年

第5章 まとめ

1 遺構の変遷

(1) 弥生時代から奈良時代

一連の調査で検出した遺構および出土遺物から調査地とその周辺の歴史的状況を検討する。

調査で出土した最も古い遺物は、弥生時代中期後半から後期前半に属する弥生土器である。4 - 10区井戸4-250などから出土した。やや時代が新しくなる古墳時代前期（庄内式土器併行期）の土師器も出土している。いずれも小片ではあるが、多くはこの時期の京都盆地周辺で出土する土器と共通する特徴を備えている。その一方で、1点のみではあるが、生駒山西麓産の胎土で作られた壺の存在は地域間交流の片鱗をうかがわせる。

古墳時代の須恵器器台は4 - 10区の包含層より出土した。大型の器台片であり、古墳に供献された土器が、破壊などを契機として後世の包含層に混入した可能性は十分に考えられる。また、飛鳥時代から奈良時代の土師器・須恵器が少量ながらも出土していることを確認した。

弥生時代から奈良時代の遺物は、遺構には伴わず新しい時期の遺構埋土や包含層から破片として出土した。出土地点は敷地西部の1 - 2区、敷地南部の4 - 10区などに偏る傾向がある。また、次に述べるように平安時代前期から中期の遺構は敷地西部の3 - 8区、敷地南部の4 - 10区西端で検出した。東から西へ傾斜する旧地形の低い部分にまとまる傾向が看取できる。あるいは、かつて東側に存在した遺跡が地形の大規模な改変により削平され、残滓の遺物が破片となって周囲に堆積した状況を想定できるかも知れない。

これまで調査地周辺では平安時代を遡る遺跡の存在が知られておらず、今回の成果も断片的なものにすぎない。しかしながら、今後の周辺の調査にあたって後世の攪乱を受けている可能性に十分配慮しながら、かつて西に鴨川、南に池を臨む丘陵斜面に存在したであろう集落や古墳の復元をすすめていく必要があると考える。

(2) 平安時代

調査で検出した最も古い遺構は、平安時代前期の3 - 8区埋納遺構3-1・土坑3-61である。少し新しくなるが、4 - 10区の溝4-325・土坑4-326もこの時期に属する。これらの遺構は記録に残る法住寺建立に遡るものである。また、遺構には伴わないものの平安時代前期から中期に属する土師器・白色土器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器類が出土しており、平安遷都後、間もない頃から調査地周辺に人々の活動があったことが明らかとなった。

法住寺殿が造営された平安時代後期の検出遺構には敷地北部の3 - 4区溝3-149・溝3-299、1 - 2区井戸1-150・井戸1-200および1 - 1区・1 - 2区の柱穴群、敷地東部の5 - 1区の土坑5-77・土坑5-78などがある。調査地全域に分布するが、この時期の遺構は全体的に少ない傾向に

あり、また、これらが調査地に推定されている法住寺殿北殿の殿舎などの施設に係るものであるかも不明である。ただし、この状況から法住寺殿造営時の遺構が少なかったと即断することはできない。地形の大規模な改変により削平を受けたこと、また、遺構保存のため調査を方広寺の遺構検出面で止めたり、方広寺造営に伴う整地層・鎌倉時代から室町時代の包含層が分厚いため下層まで掘削が及ばなかったことなどの要因を考慮すべきである。

(3) 鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代には平安時代後期よりも遺構が増加し、活況を示すようになる。検出した遺構は敷地北西部の3 - 4区溝3-149・路面3-3などのように、概ね北でやや東に振る方位をとる。また、重複が著しかったため建物の復元には至っていないが、1 - 1区の第1面柱穴群を例にあげると、X=-112,034付近の東西柱穴列の並びを西側で約3度北へ振る方位に軸線を定めると、その軸線から北側・南側にそれぞれ約1.5mの平行する線上に柱穴が密に並び、X=-112,029付近にも柱穴が密な部分がみられる。これらに直交する南北列は調査区両端にある。街区の復元には至っていないが、この方位は現存する蓮華王院三十三間堂や周辺の調査で検出した街路や建物・雨落溝の方位とほぼ共通することから、おそらく法住寺殿造営に伴う地割りを踏襲したものであろう。このことは同様に北側で2 - 3度東へ振る方位をとる溝3-149が平安時代後期から鎌倉時代にかけて機能していることからもうかがうことができる。

鎌倉時代の遺構の増加の要因については検討が必要である。調査地は六波羅政庁の推定地にあたるが、南方(南殿)の主要施設は六条大路末よりも北側にあったと考証されており、調査地からの位置にやや隔たりがある。調査で検出した遺構からも調査地周辺に大規模な施設が存在した痕跡はない。一方、出土遺物の量は多い。溝4-1からは 期新段階、井戸4-250からは 期古段階の鎌倉時代後半に属する良好な一括資料を得ることができた。溝4-1には京都でまとまって出土することは珍しい備前産の須恵器皿・須恵器椀が多く含まれていることも興味深い。

蓮華王院が存続していたことに端的にあらわれているように、法住寺殿を中核としていた経済機能がその後も継続し、交通路の要所にある物資の集積地としての役割を果たした。あるいは鎌倉時代後半にあって臨時的なものであった可能性はあるが、六波羅政庁の機能が充実し、駐留・流通のための施設が周辺にまで拡大し影響が及んだ、などのいくつかの仮説を立てることができる。実証は今後の課題である。

室町時代も引き続き各調査区で遺構を検出した。貯蔵施設と考えられる4 - 9区建物4-1のほか3 - 8区では落込3-1の埋め立て、4 - 10区では斜面の地形を利用して溝4-273・溝4-252・堀状遺構4-145の構築など活発な土地利用の痕跡が明らかとなった。また、敷地東部の5 - 1区、東大路通沿いの7 - 3区の立会調査で遺構・包含層を検出したことから、この時期の遺構が東側にも広がるのが推測できる。

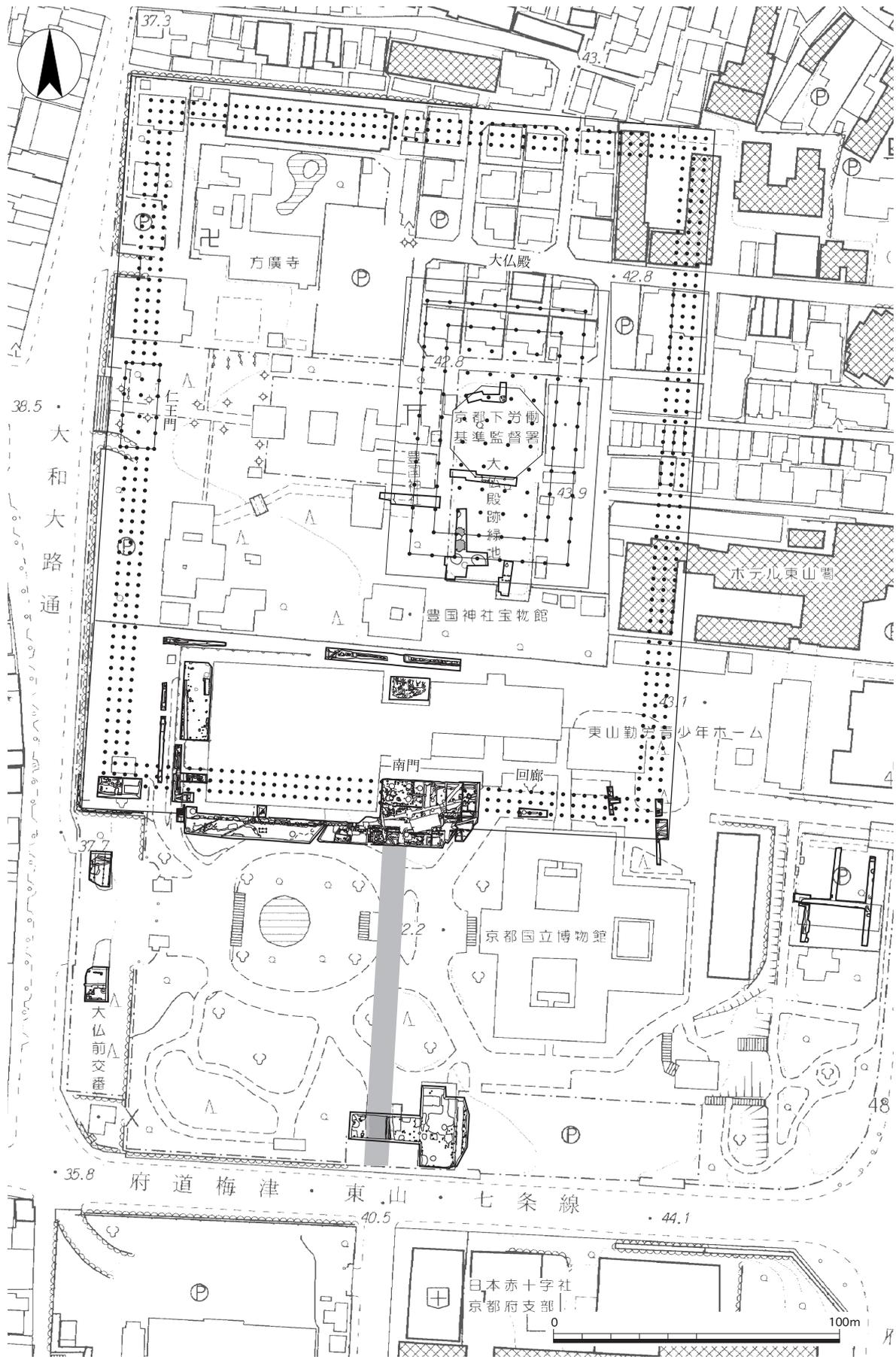


図96 方広寺遺構復元図 (1 : 2,000)

(4) 桃山時代から江戸時代前期(図96)

調査地周辺の地形の改変が最も大規模に行われたのが方広寺の造営であることは確実である。東から西に向けて傾斜する斜面の東側では地山を削り取り、西側では石塁を築くと同時に盛土を行い広範な平坦面を造り出す。この時に調査地東部を中心に室町時代以前の遺構が削平されたものと考えられる。また、各調査区で認めた方広寺造営に伴う整地層は黄褐色を基調とし粘土や砂礫を多く含んでいる。これらは東側の地山を削り取った土を利用したものであり、中には検出時に地山と見紛う部分もあった。石塁内側となる3-3区・3-5区・3-8区・3-6区・3-7区で検出した方広寺造営に伴う整地層は、豊臣秀吉の造営時のものと推定でき、また上面で顕著な遺構を検出していないことから、回廊と大仏殿の間は平坦な境内地であったことがわかる。

方広寺造営に伴う整地・造成の状況は時期・場所により異なっている。4-10区では、豊臣秀吉による造営では東から西に向けて傾斜する地形を雛壇状に成形して平坦面を造り出しているのに対し、豊臣秀頼の造営では約1.5mの厚さで一気に盛土をして大規模な造成を行う。石塁下の3-2区では、秀吉の造営時は石塁の基底部分を地山に切り込む形で据えるが、おそらく秀頼の造営時には、東に上る緩やかな斜面をつくり出すように盛土する。4-10区・3-2区では方広寺創建当初およびその直前の湿地状堆積を確認しており、土地を有効利用するために付近一帯の大規模な整地が必須だったのであろう。また、石塁内側にあたる3-4区では、秀頼の造営時に鑄造に使われた多量の砂・焼土・銅滓などを次々と埋めて整地層としている。この整地層は大規模な廃棄土坑の可能性もあるが、いずれにしても秀頼の造営時に大仏の鑄造と造成が同時に行われたことが推測できる。造営開始以後、必要に応じて境内や周辺の各所で整地が続けられたのである。

方広寺の造営にあたっては先行する地割りの方位が影響を与えた。大和大路に面して現存する石塁をはじめ、調査で検出した3-2区石塁3-1、3-1区南門・回廊などの施設や1-2区築地1-1・柱穴列1-1～柱穴列1-3が北側で約3～5度東へ振る方位をとることから看取できる。そのほか調査地北側の公園で検出した大仏殿も共通する方位で造営されたことが明らかとなっている。

次に検出した遺構を個別に検討する。方広寺南面の石塁は3-1区・3-2区で東西約65mを確認した。現存する石垣を含めると約128mになる。これまで『洛中洛外図』などの絵画資料による検討では方広寺南面の石塁の状況は不明であったが、調査成果により石塁は南門付近で南北方向の石垣3-1につながり、これより東は創建時から石塁がなかったことが確認できた。また、石塁の構築方法について多くの知見を得ることができた。

3-1区では礎石据付穴の配置から南門と回廊の構造を明らかにすることができた。絵画資料では南門は四脚門、回廊は単廊として描かれることがあるが、実際には南門はより格式の高い八脚門、回廊は複廊であることが判明した。また、9-1区・9-2区では回廊の東への遺存状況を確認することができた。9-2区の礎石据付穴により回廊は南門から柱間5間分を検出したことになる。ところが東延長に位置する9-1区では遺構面が遺存しておらず途中で遺構が削平さ

れている可能性が高い。ここで9 - 1区と9 - 2区の地山の標高を比較すると、9 - 1区西端部では41.2m、9 - 2区東端部では40.85mとなる。これらを結んで現状での傾斜を想定するとともに、9 - 2区で検出した回廊南側の雨落溝の傾斜を考慮して遺構面の遺存範囲を想定してみると、 $Y = -20,730$ 付近(9 - 2区東壁から約6m東側)で地山の高さと同落溝底部の高さが同じとなり、これより東側では遺構面が削平されていることになる。なお9 - 5区では、礎石据付穴と考えられる柱穴9-20・柱穴9-21を検出したが、南門東側の回廊とは礎石据付穴の構造が異なること、西延長線上に合致しないことなどから複廊の南西隅部の遺構と確定するに至らなかった。南門西側の回廊の礎石据付穴が完全に削平されたとは考えがたいことから、遺構の状況から秀吉の造営時の築地塀、あるいは単廊であったことも想定できる。今後、石塁西面における回廊の調査を進めることにより、これらの問題を解決していく必要がある。

3 - 4区・3 - 1区・4 - 10区では境内の路面を検出した。蓮華王院南大門から方広寺南門を経て大仏殿に至る南北路に該当する。4 - 10区では形状を異にする、秀吉の造営時・秀頼の造営時の2つの路面を認めた。方広寺の造営にあたって周辺の整備が行われた証左である。また、敷地西部の1 - 1区・1 - 2区、大和大路通沿いの7 - 8区の立会調査で方広寺造営に伴う整地層を検出したことから、この時期の遺構が敷地南西部にも広がることが明らかになった。1 - 2区柱穴列1-1～柱穴列1-3は『豊国祭図』を参考にすると祭を見物するための棧敷の痕跡である可能性を指摘できる。

3 - 4区・3 - 1区・4 - 10区では鑄造生産に関わる遺物がまとまって出土し、場所によって生産の様相が異なっていることが判明した。3 - 4区では方広寺造営に伴う整地層に鑄造に用いた多量の砂・焼土・金属滓などを含む。金属滓はすべて銅滓で、銅滓が付着した路壁もある。出土量は少ないが整地層中には銭貨などの銅製品が含まれており、鑄造のために集められた原料が紛れ込んだ可能性を指摘できる。銅滓は大仏の鑄造に関係すると推定できるので秀頼の造営時のものである。3 - 1区では鑄造遺構と考えられる土坑3-200を検出した。規模と形状から大型鑄造品の鑄型を設置する定盤の基礎部分に相当すると考えられる。秀吉の造営時に造られたと推定できる石垣3-1を埋めた整地層上に成立していることから秀頼の造営時のものである。4 - 10区では落込斜面整地層を中心に多量の焼土・鉄滓・鞆羽口などが出土した。遺構は検出していないが、近傍での鉄製品の生産が推測できる。秀吉の造営から秀頼の造営までの時期のものである。

一連の調査で検出した方広寺の遺構を図96にまとめた。調査地北側で実施した大仏殿の調査成果を含めている。広大な寺域を占めた方広寺にあって調査を実施した範囲はわずかではあるが、今後の調査の進展により方広寺の実像が更に明らかとなることは間違いない。

2 大仏瓦について

各調査区からは、方広寺に使用された瓦が多数出土している。これらは地震や火災後に処理されたものと考えられる。しかし、方広寺に葺かれた瓦の総数からみれば出土した瓦はそれほど多くない。出土した瓦は3 - 1区・3 - 2区からのものが大半を占める。これらの中には大仏瓦と

よばれている大型の瓦がいくつか見受けられる。完形ではないが丸瓦の長さが36.5cm以上・広端幅22.7cm、平瓦の長さが50.5cm・幅26.1cm以上・幅3.3～3.7cmある。これは「御用瓦師寺嶋家文書」¹⁾の「瓦寸尺之覚」元和3年(1617)の中に「大仏瓦(平瓦) 長さ1尺7寸、幅広口1尺5寸、厚み1寸1分」とある寸法とほぼ同じである。また、大型瓦には図版39～44に示したように軒平瓦・軒丸瓦も含まれており、瓦当文様はすべて桐文である。桐文の意匠は葉の表現や花の数などに違いがみられるが、配置はほとんど同じである。また、この他に特大瓦としてさらに大きな軒平瓦の破片が数点あり、これらの大型瓦は方広寺大仏殿に葺かれていたものと考えられる。特に秀頼の造営時の遺構である土坑3-200からは大型軒平瓦が、3-1区の瓦・石敷からは刻印瓦がまとまって出土している。刻印瓦は丸瓦・平瓦にわたり、刻印の種類も多様である(図版48・49・80)。この刻印のなかには大阪城下で出土した刻印瓦と同じものが8種ある²⁾。つまり土坑3-200や3-1区の瓦・石敷から出土したこれらの瓦は、方広寺創建当初の瓦である可能性が高いのである。ちなみに2000年に豊国神社東側で実施した公園整備に伴う大仏殿跡の試掘調査で出土した軒瓦の瓦当は、巴文軒丸瓦と唐草文軒平瓦のみで桐文はない。大きさも桐文軒丸瓦が瓦当径24.2～25.0cmであるのに対し、巴文軒丸瓦は29.0cmとさらに大きい。瓦は大きい桐文ではないのは、秀吉の死後豊臣氏の勢力が衰えて徳川家康に遠慮したものであろうか。瓦の制作技法では、丸瓦に糸切り痕と鉄線切り痕が付くものがあるが、鉄線切り痕が付くものの方が多い。また、抜き縄痕の付くものもみられる。

方広寺の大仏瓦はどこで生産されていたのであろうか。太閤塀の南側の東西道路は瓦屋町通と呼ばれ、方広寺の造営をきっかけに瓦師が集まっていたという瓦町がある。現在は東瓦町・本瓦町・南瓦町・新瓦町西組・新瓦町東組に分かれるが、「坊目誌」³⁾によると「天正十四年大仏殿建立に際し、瓦工を置きし所なりしも、後には普通の屋瓦を製造する物、此に住し、盛んに斯業に従事す。(中略)大仏瓦[京瓦と云ふ]の名声を博せり」とある。

現在のところ窯跡は発見されていないが、この周辺で大仏瓦が生産されていた事は確かであろう。ここに書かれた瓦工とは寺嶋家のことである。安土城・大坂城・伏見城に瓦を供給した初代惣左衛門が方広寺の瓦も生産したと考えられる。寺嶋家は「京都御役所向大概覺書」⁴⁾によると「京都定職人井觸下之事」正徳5年(1715)には大佛境内池田町に住んで吉左衛門と称し、瓦窯本細工人50人、同仕手形手間取144人、同葺師手間取61人を差配したとある。伏見城や方広寺の瓦供給を契機にこの地に築かれた瓦窯は江戸時代に繁栄をきわめ、現在もそのまま地名となって受け継がれているのである。博物館敷地東部でも5次調査で明治時代の瓦窯を1基検出している。

註

- 1) 藤本篤「御用瓦師寺嶋家文書」『大坂市史資料』第一三輯 大阪市史編纂所 1986年
- 2) 『特別展 城下町大坂-地中より今甦る激動の歴史-』大阪城天守閣特別事業委員会 1993年
- 3) 『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』平凡社 1987年
- 4) 『京都御役所向大概覺書 - 下巻 - 』清文堂史料叢書第六刊 1973年

圖 版



1 調査地遠望（西から）



2 調査地遠望（南から）



1 1 - 1区第1面(桃山時代から江戸時代 北から)



2 1 - 1区第1面(鎌倉時代から室町時代 東から)



1 1 - 1区第2面(東から)



2 1 - 1区土坑1-250(北から)



1 1 - 2区第1面 (桃山時代から江戸時代 北西から)

2 1 - 2区築地1-1・溝1-7 (南東から)



3 1 - 2区第1面 (鎌倉時代から室町時代 北西から)



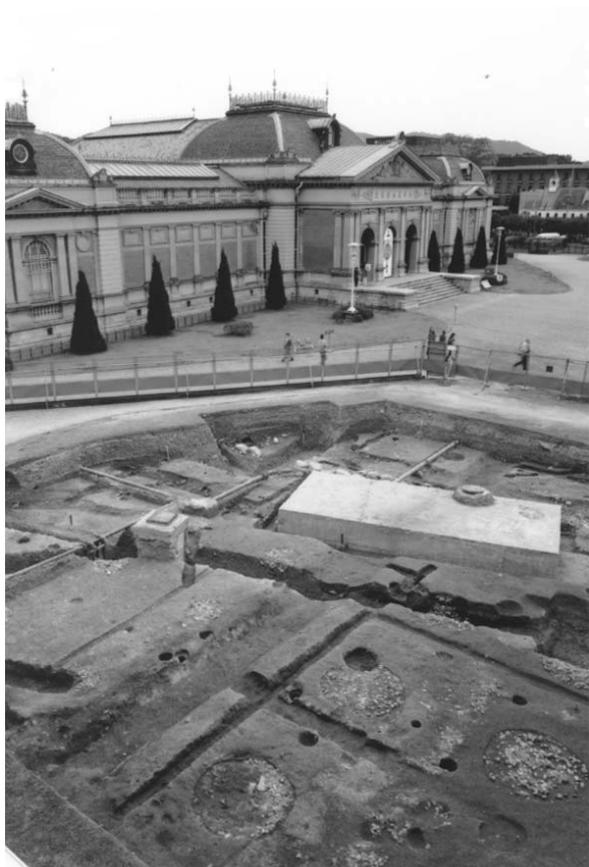
1 1 - 2区第2面(北東から)



2 1 - 3区第2面(西から)



1 3 - 1区第1面(北東から)



2 3 - 1区方広寺南門・回廊(北西から)



3 3 - 1区柱穴3-17断面(南東から)



1 3 - 1区路面3-1・溝3-100 (北西から)



2 3 - 1区溝3-111 (東から)



3 3 - 1区溝3-100 (東から)



1 3 - 1区土坑3-200 (東から)



2 3 - 1区土坑3-200・石垣3-1 (西から)



3 3 - 1区土坑3-200北東隅 (北東から)



4 3 - 1区土坑3-200遺物出土状況 (西から)



1 3 - 2区第1面（東南東から）



2 3 - 2区石罫3-1と瓦・石敷（南西から）



1 3 - 2区石罫3-1断割断面(南東から)



2 3 - 2区石罫3-1裏込め(西から)



3 3 - 1区溝3-100細部(刻印)



4 3 - 2区石罫3-1細部(石割痕)



1 3 - 3区第1面(北から)



2 3 - 4区第1面(東から)



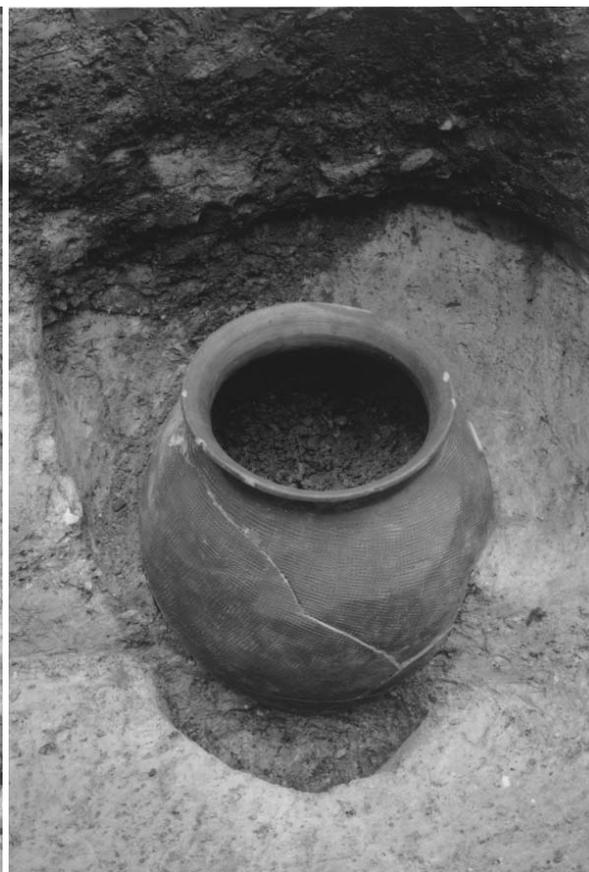
1 3 - 4区第2面(北東から)



2 3 - 4区路面3-3(北から)



1 3 - 4区井戸3-204 (南から)



2 3 - 4区土坑3-219 (北東から)



3 3 - 4区南東部第3面 (北西から)



1 3 - 5区第1面(北から)



2 3 - 6区第1面(西から)



3 3 - 7区西部第1面(東から)



4 3 - 7区東部第1面(西から)



1 3 - 8区北部第1面(北から)



2 3 - 8区中央部第1面(西から)



3 3 - 8区南部第1面(北東から)



4 3 - 8区溝3-13遺物出土状況(北から)



5 3 - 8区土坑3-46(北から)



1 4 - 2区(東から)



2 4 - 2区遺物出土状況(南東から)



3 4 - 3区(南東から)



4 4 - 1区(北東から)



5 4 - 1区石組み4-1(南東から)



1 4 - 9区北部第1面(北から)



2 4 - 9区建物4-1(北から)



3 4 - 9区南部第1面(北から)



1 4 - 10区路面4-1 (北から)



2 4 - 10区落ち込み斜面 (北から)



1 4 - 10区第2面 (北東から)



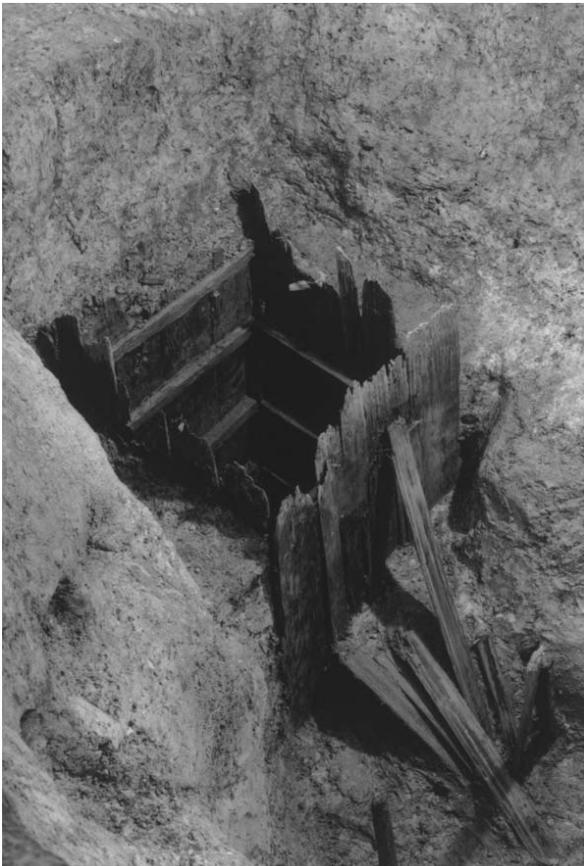
2 4 - 10区溝4-102 (北から)



3 4 - 10区路面4-3暗渠 (北から)



1 4 - 10区第4面(東から)



2 4 - 10区井戸4-250(北東から)



3 4 - 10区溝4-252・溝4-273(北から)



1 5 - 1区 ~ 5 - 4区第1面 (北から)



2 5 - 3区瓦窯5-1 (西から)



3 5 - 3区東壁 (北東から)



1 2 - 1区 (南から)



2 2 - 2区 (東から)



3 6 - 8区北壁 (南から)



4 6 - 16区西壁 (北東から)



5 6 - 14区東壁 (西から)



6 7 - 3区東壁 (西から)



7 7 - 8区 (東から)



8 8 - 1区東壁 (西から)



1 9 - 1区第1面(東から)



2 9 - 3区第1面(北西から)



3 9 - 2区第1面(北西から)

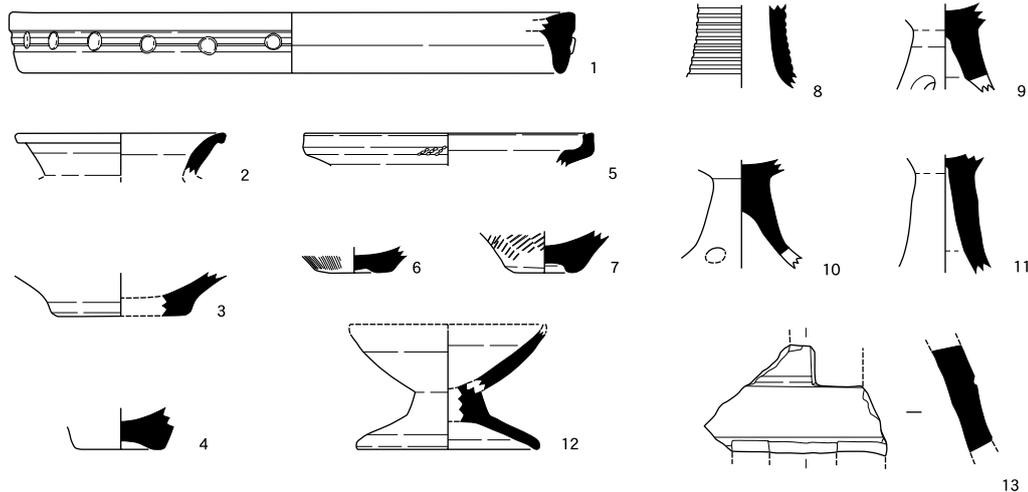


1 9 - 4区第1面(南西から)

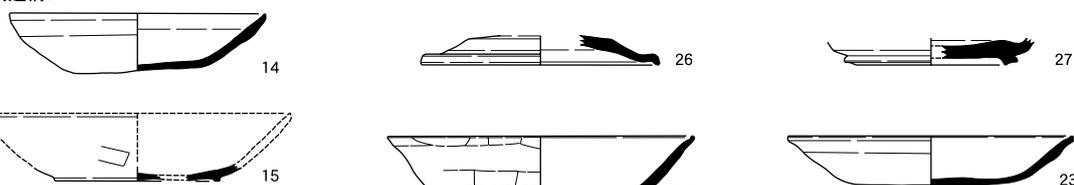


2 9 - 5区第1面(北西から)

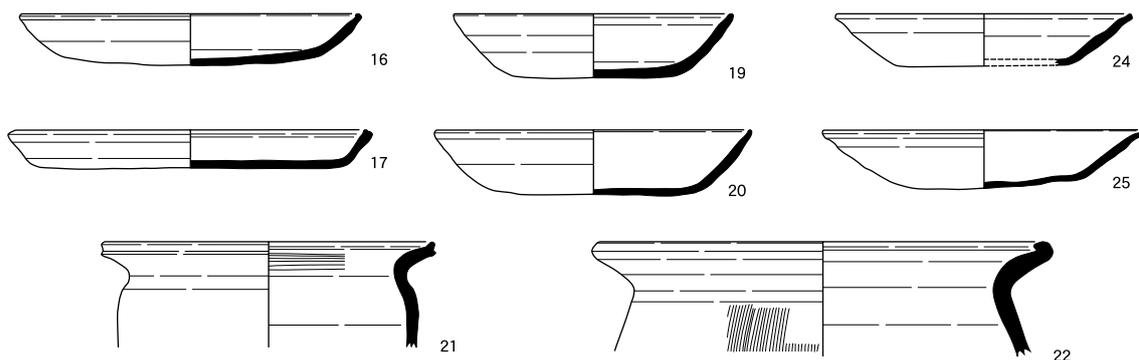
弥生土器・土師器・須恵器



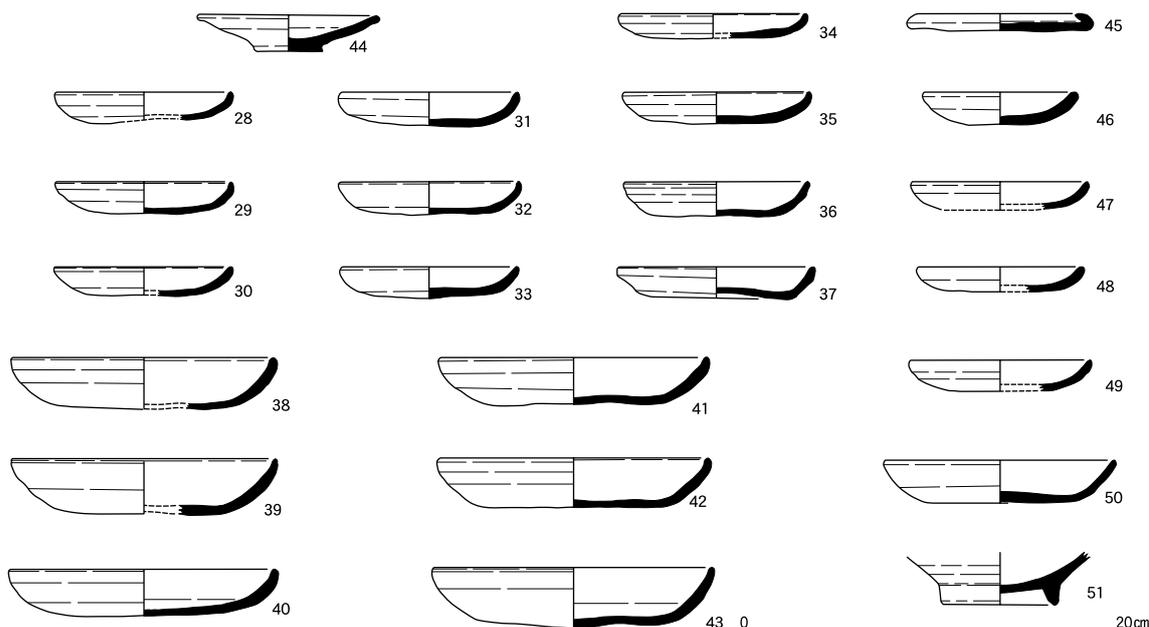
埋納遺構3-1



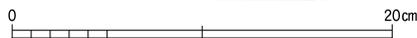
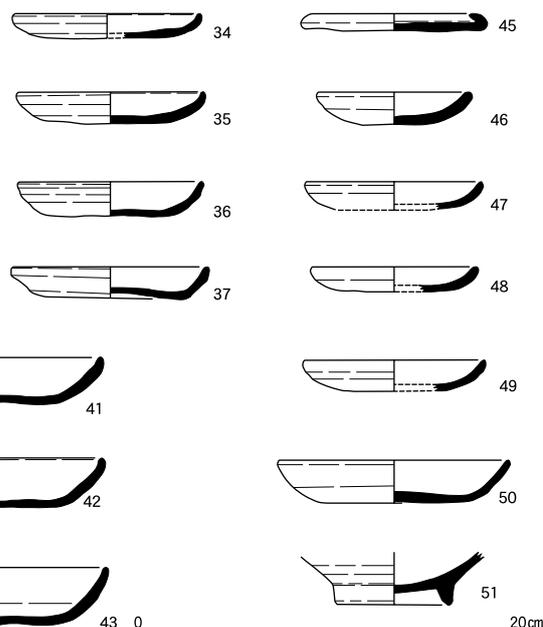
土坑3-61



溝3-299

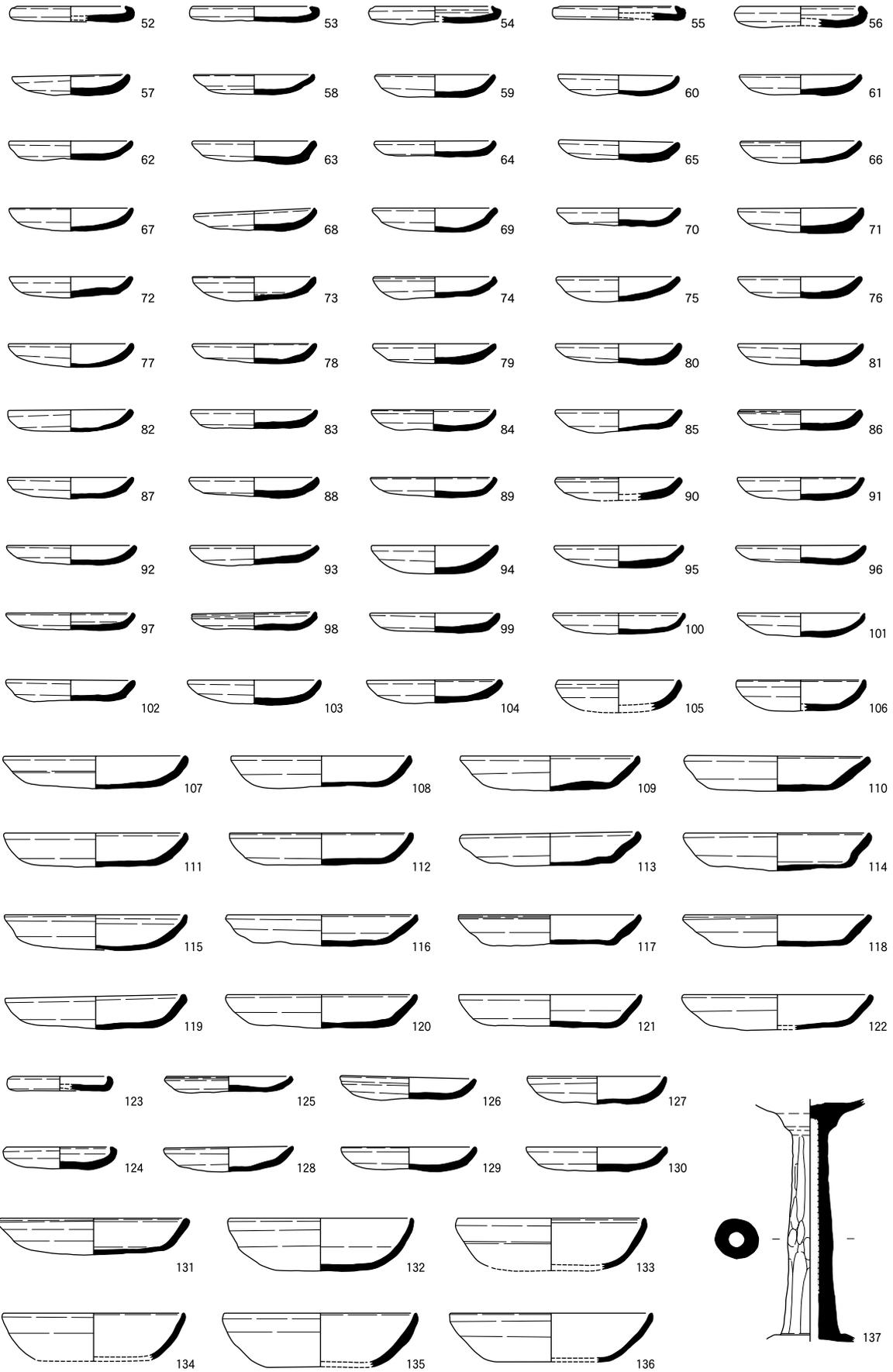


溝4-276

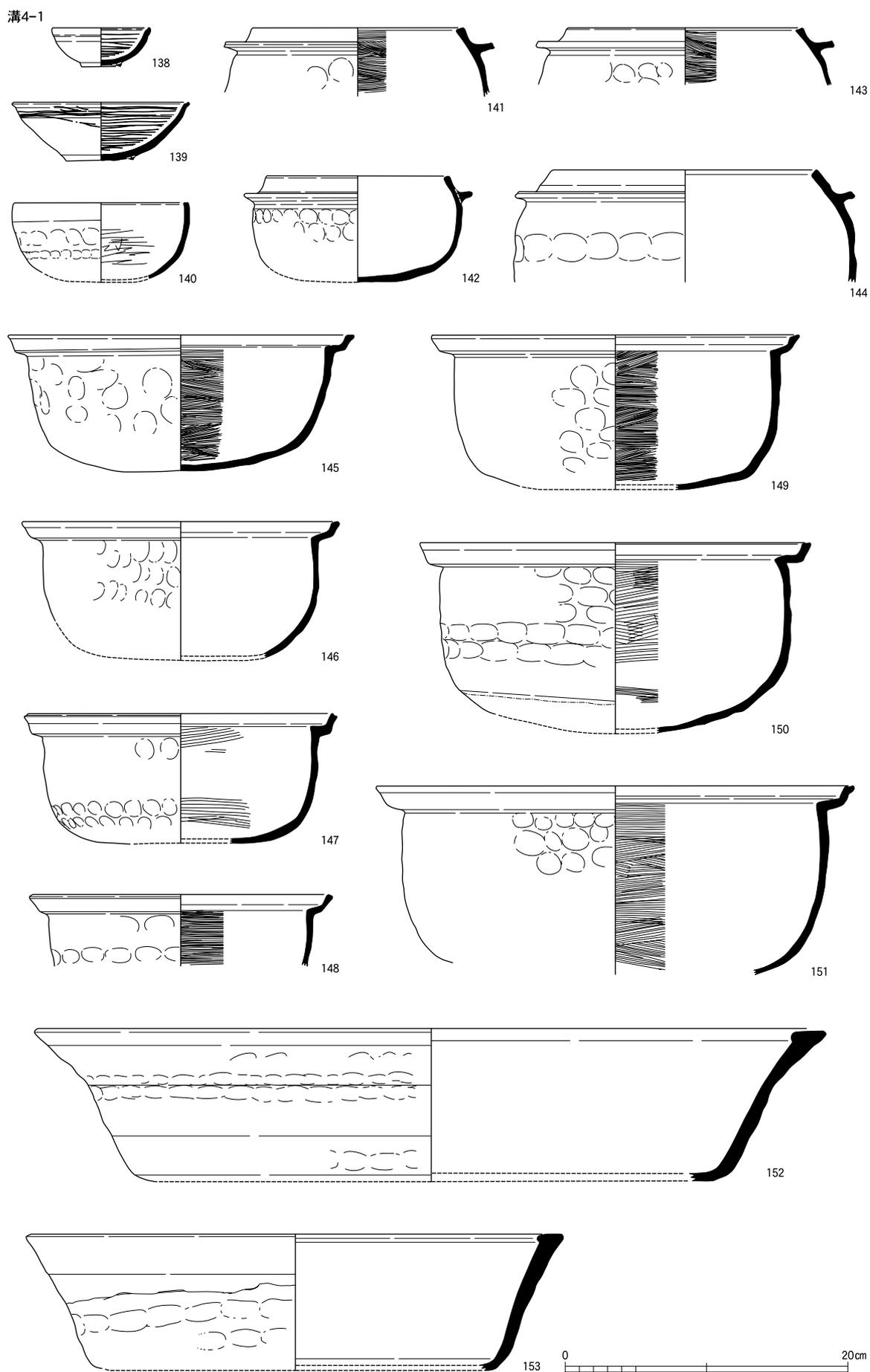


土器類実測図（1）

溝4-1

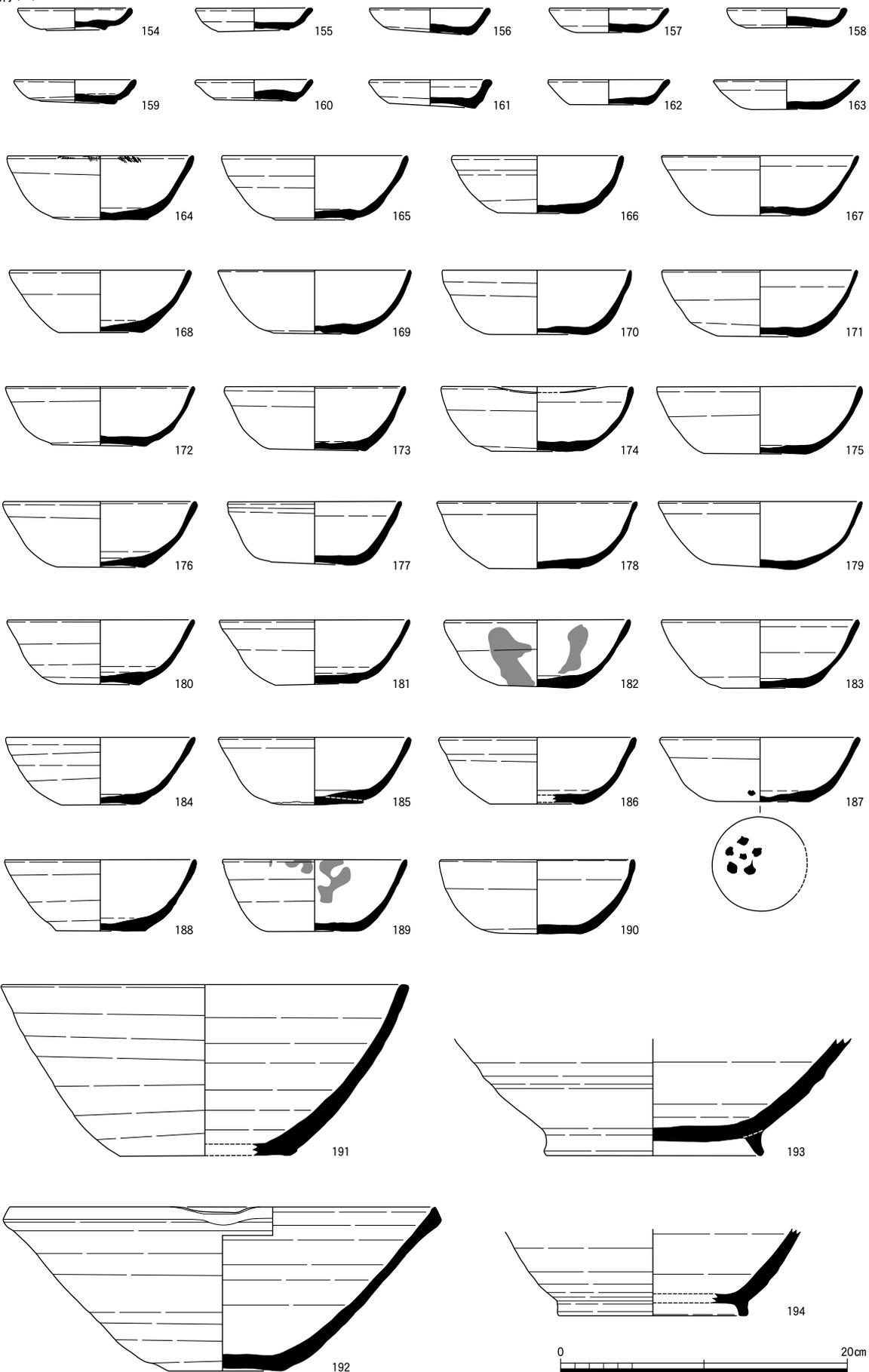


土器類実測図 (2)



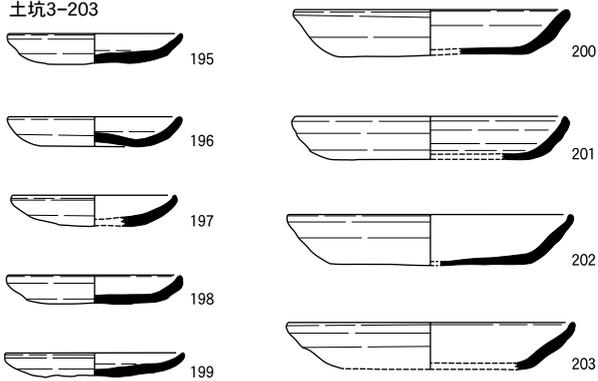
土器類実測図 (3)

溝4-1

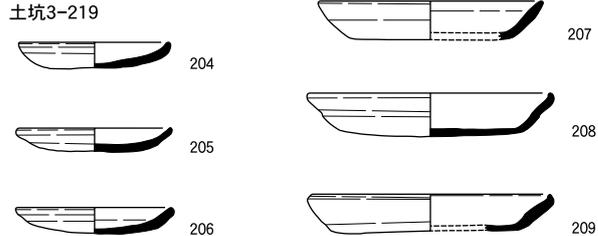


土器類実測図（4）

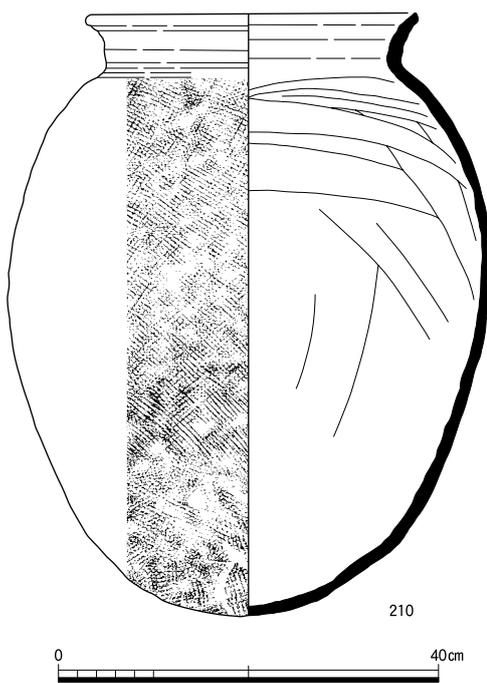
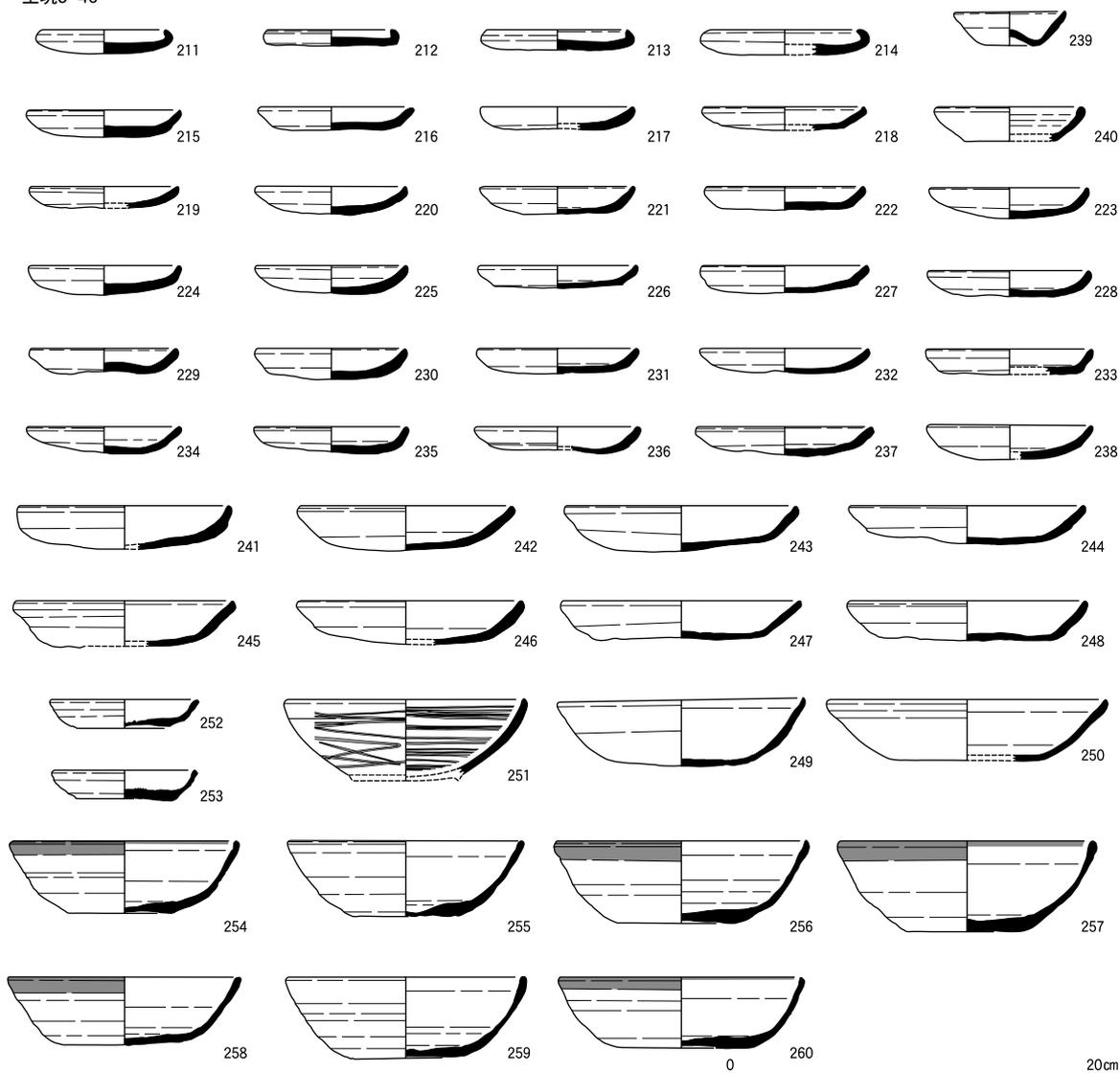
土坑3-203



土坑3-219

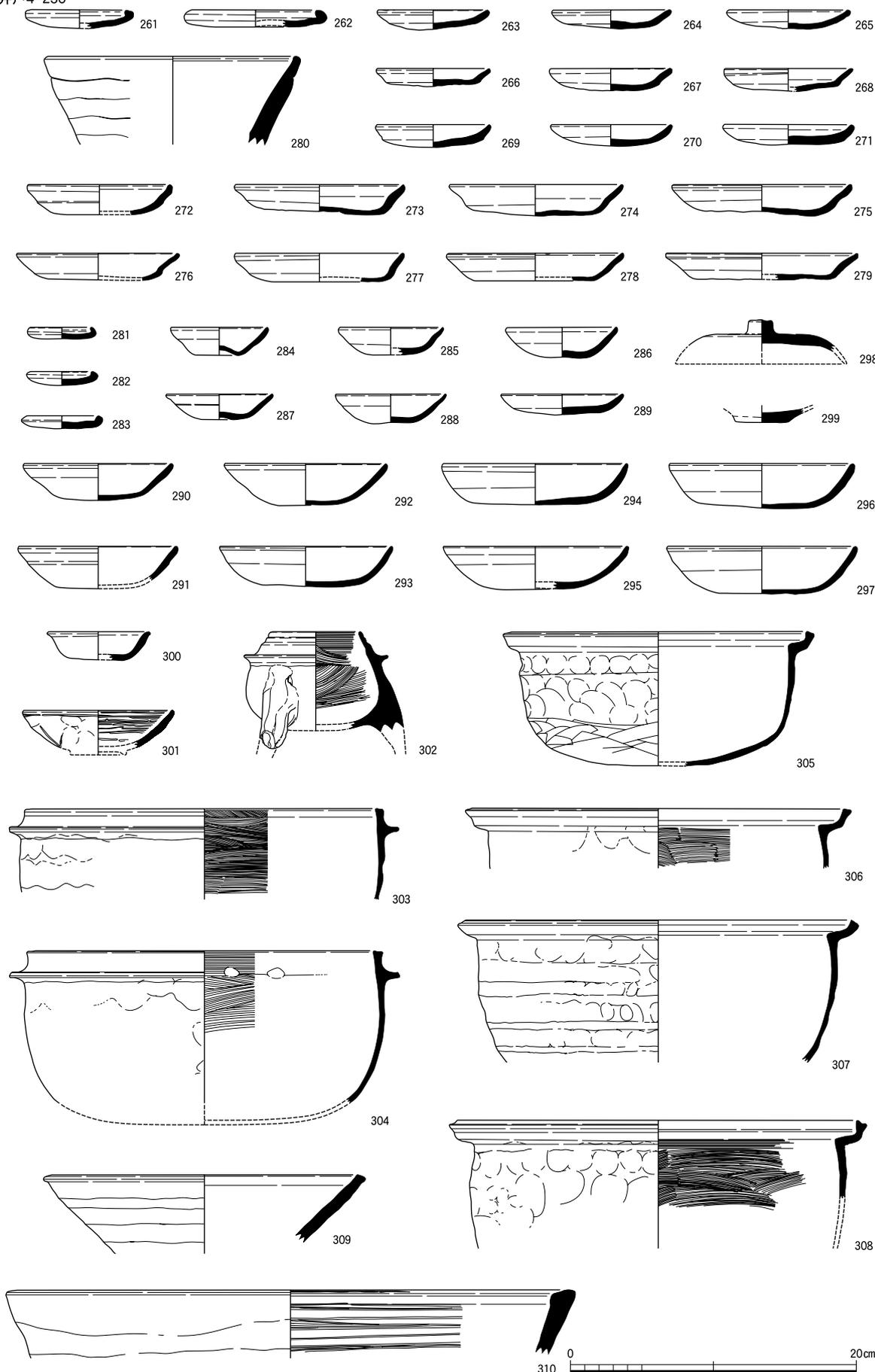


土坑3-46



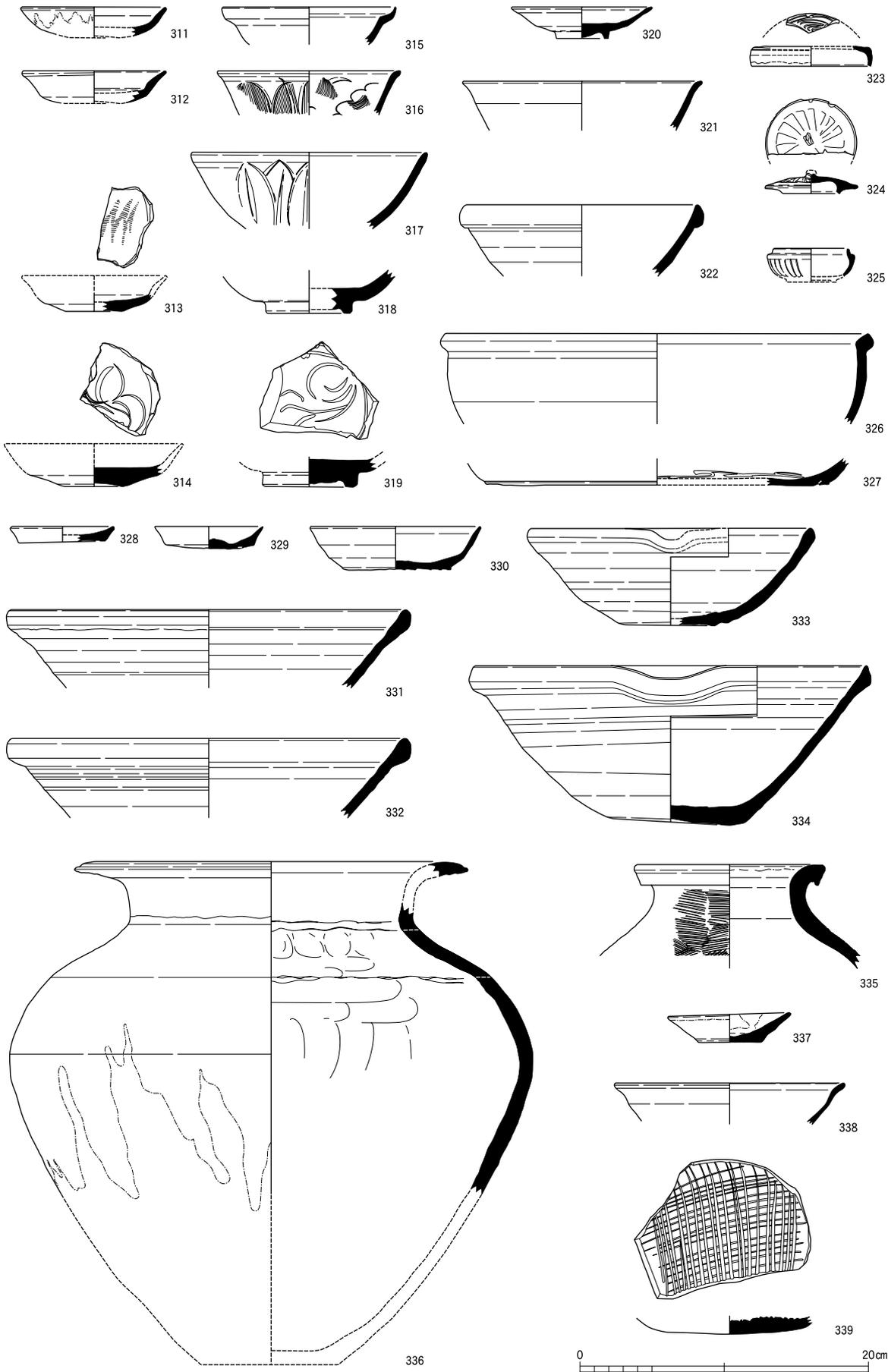
土器類実測図 (5)

井戸4-250



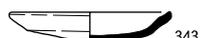
土器類実測図 (6)

井戸4-250

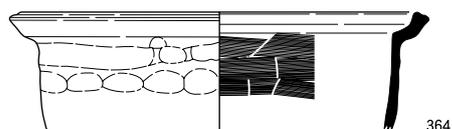
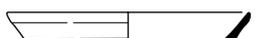
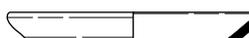
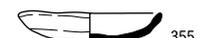
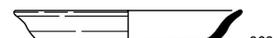


土器類実測図 (7)

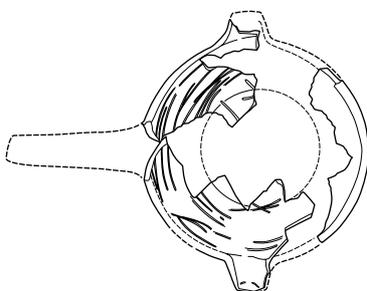
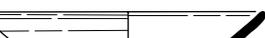
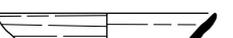
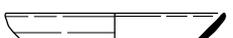
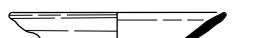
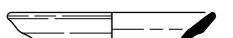
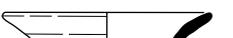
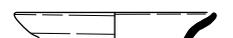
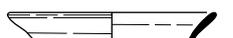
土坑3-163



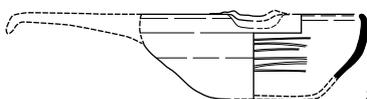
土坑3-179



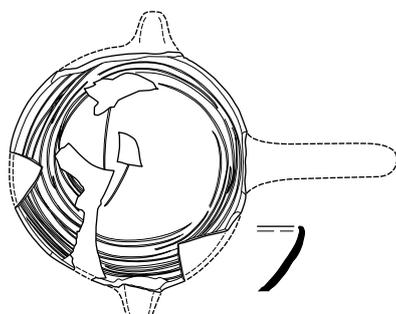
溝4-281



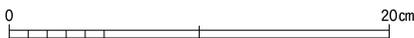
1



394

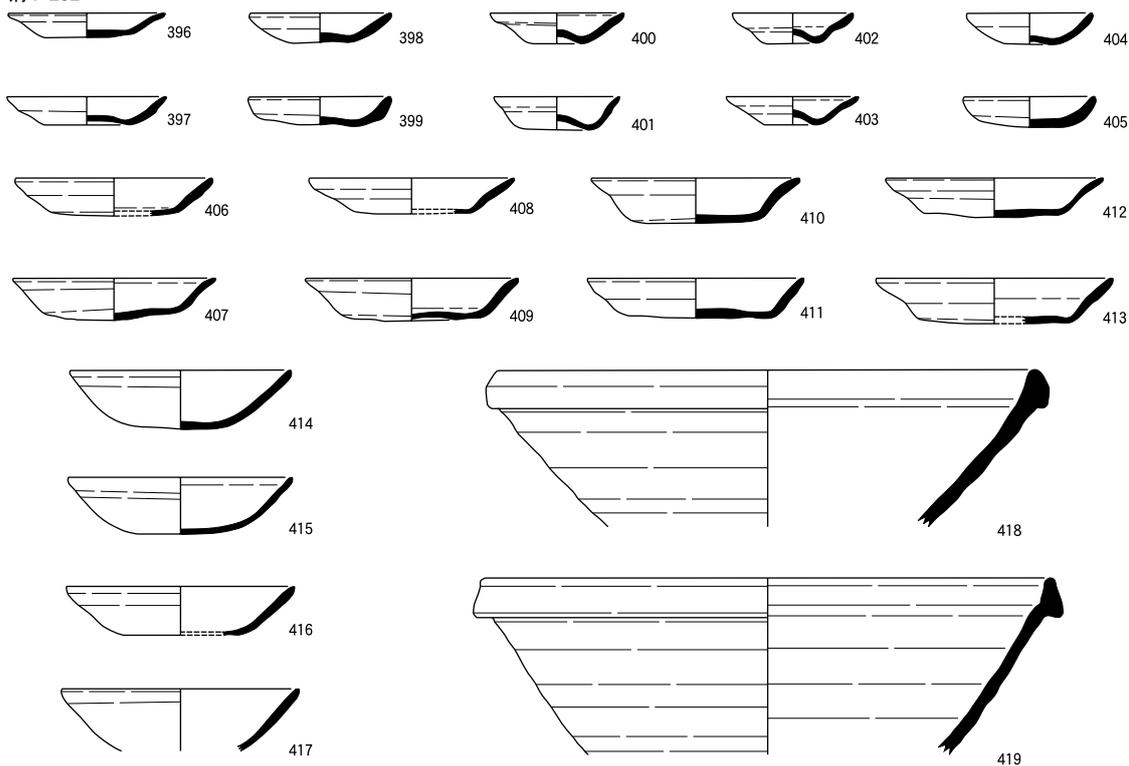


395

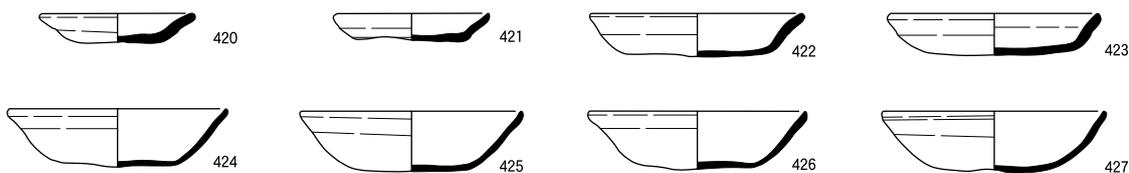


土器類実測図 (8)

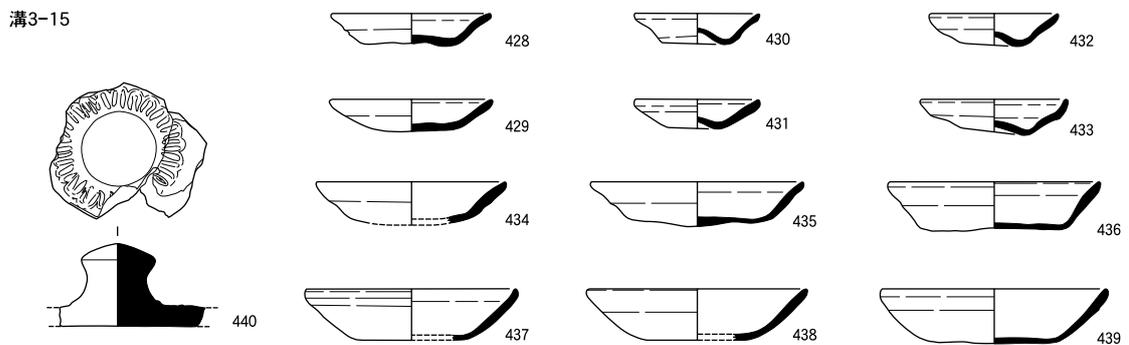
溝4-252



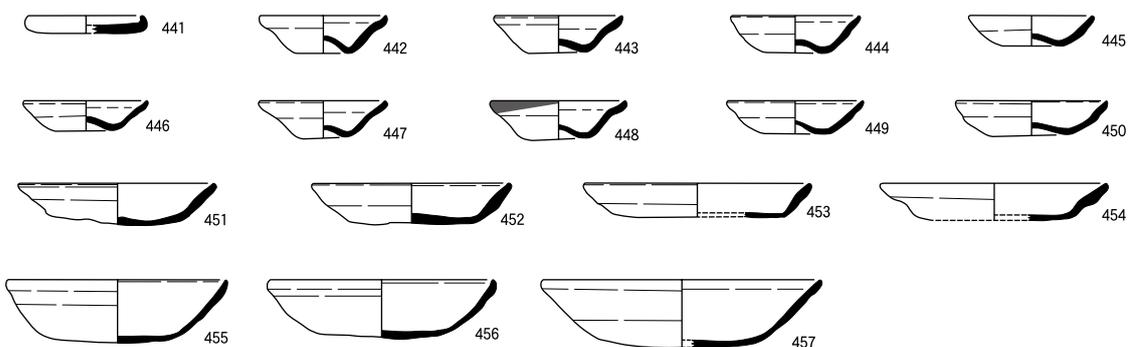
溝3-36



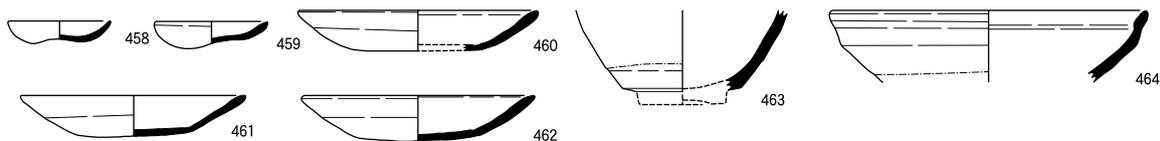
溝3-15



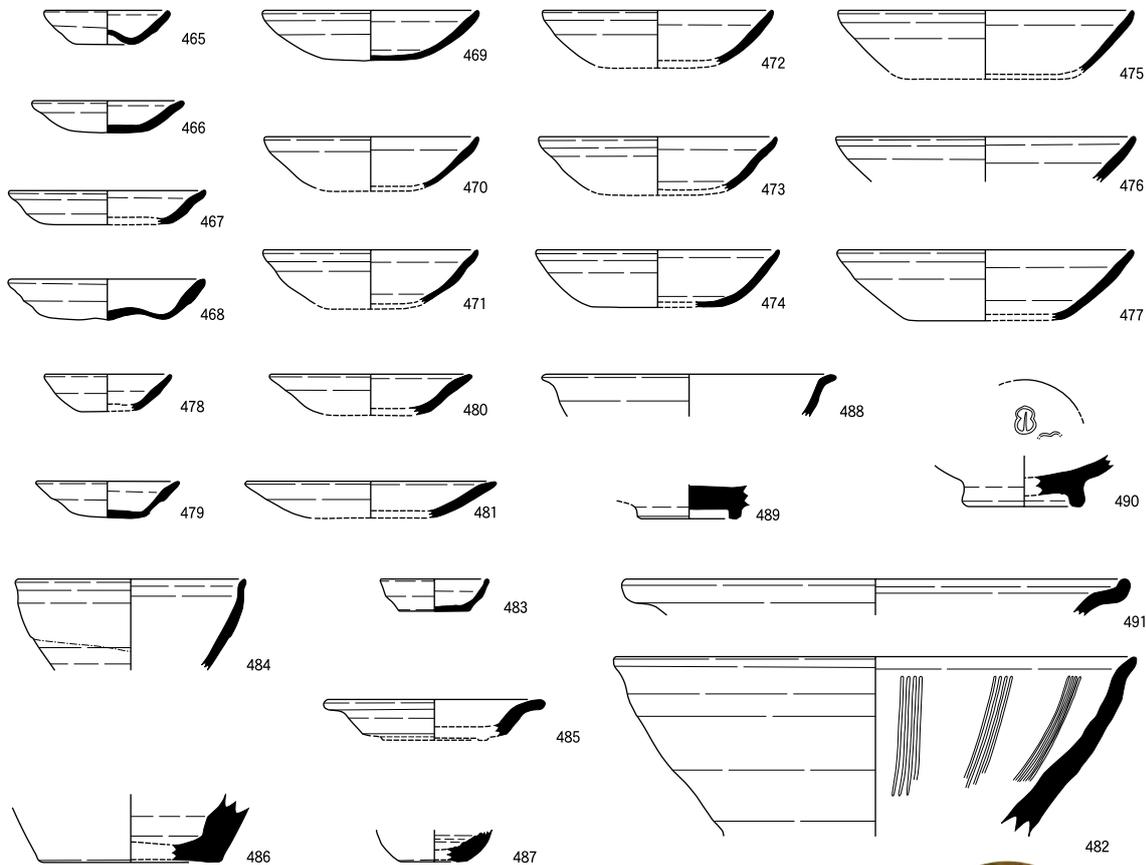
溝3-13



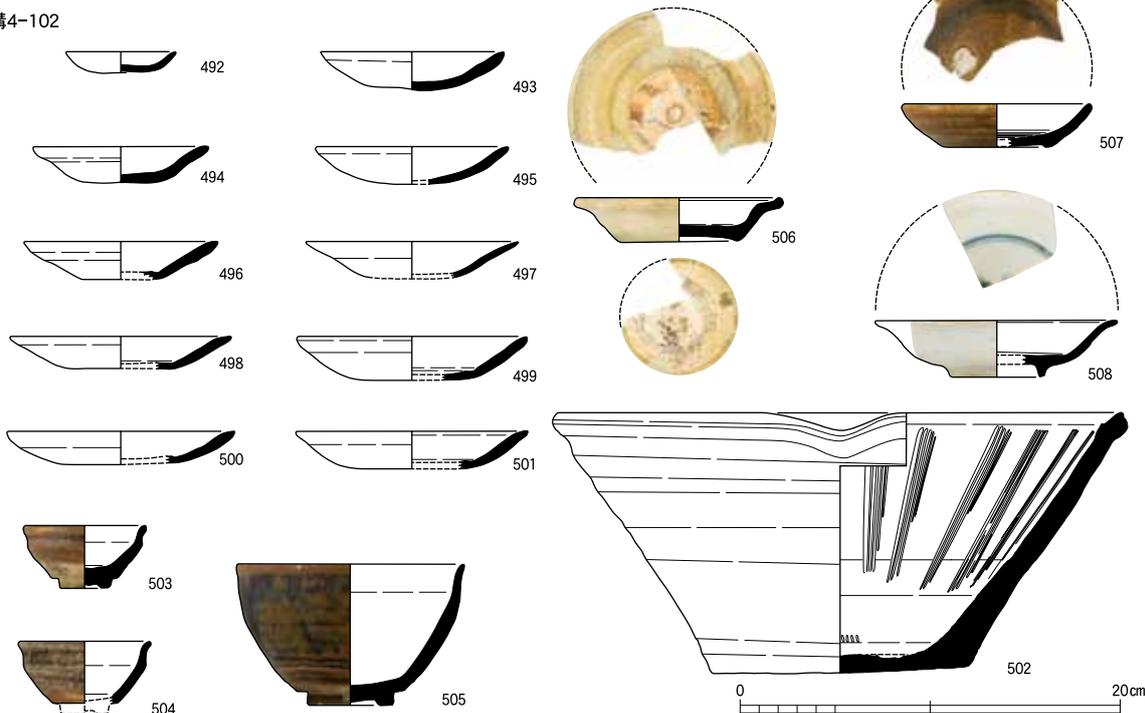
溝3-305



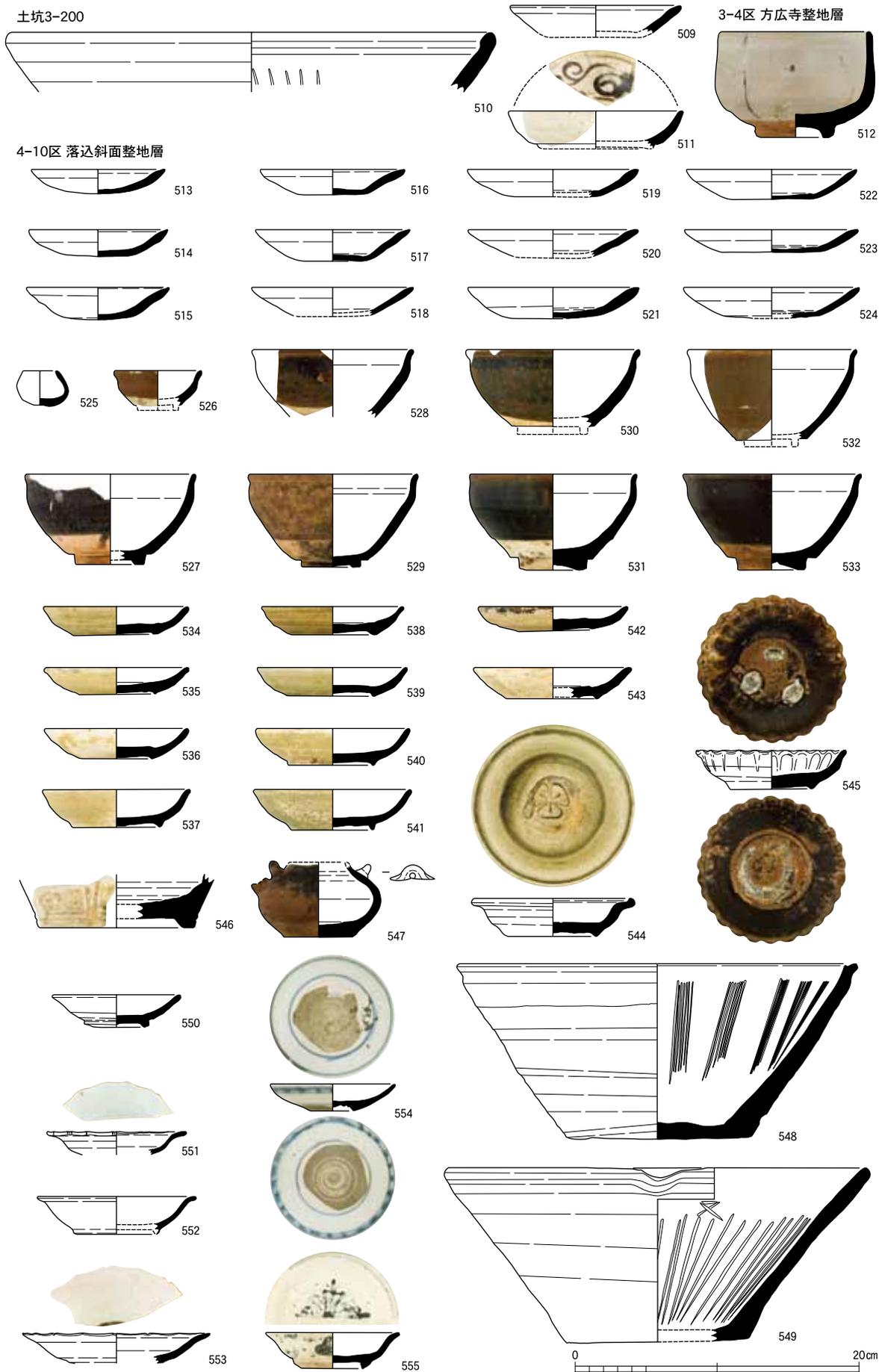
3-8区 方広寺整地層



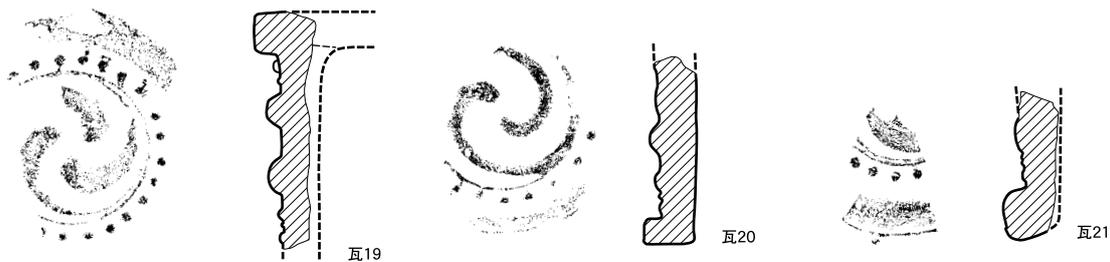
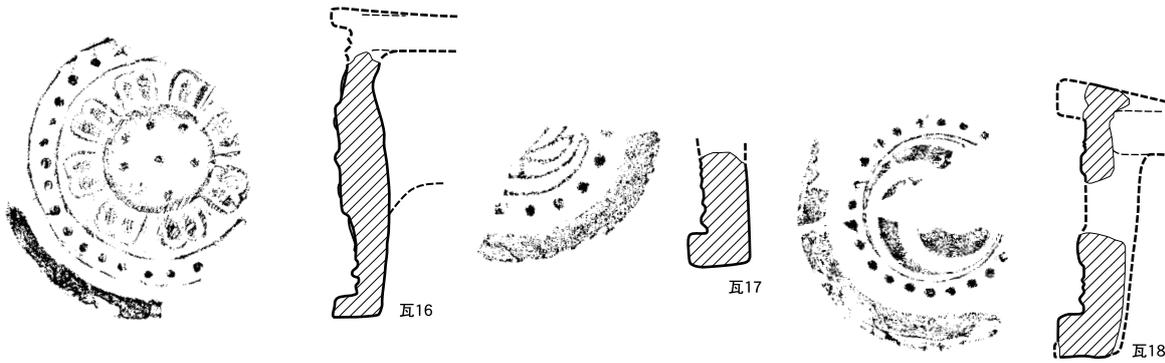
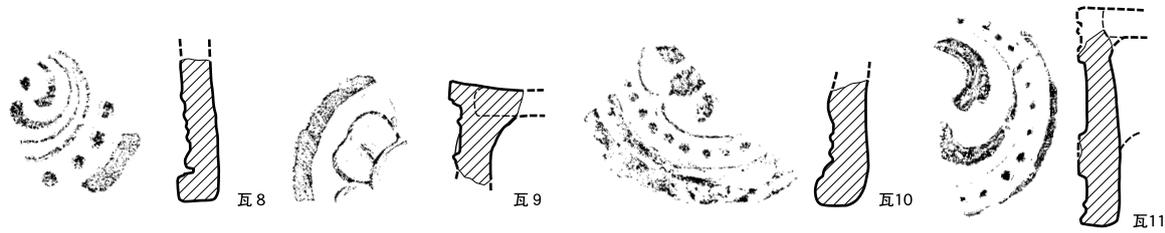
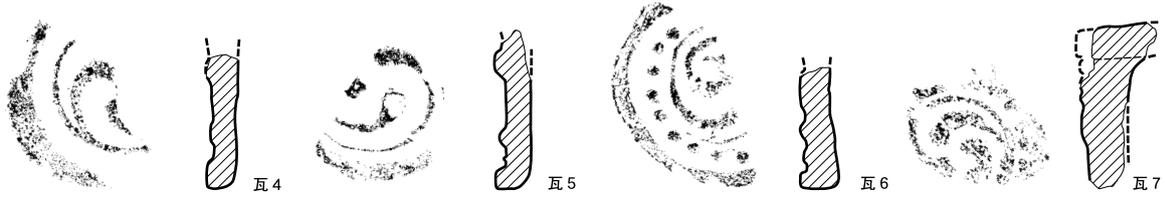
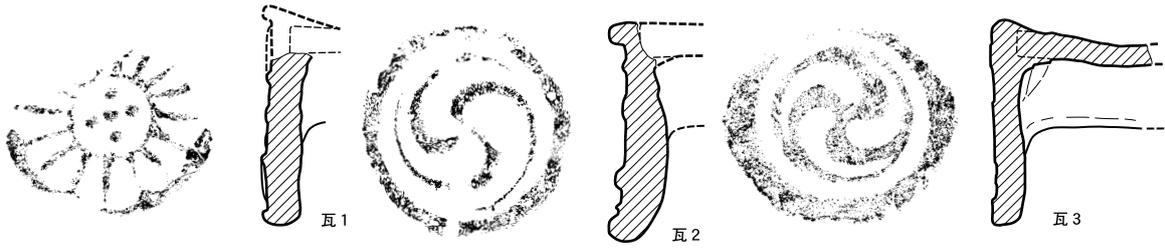
溝4-102

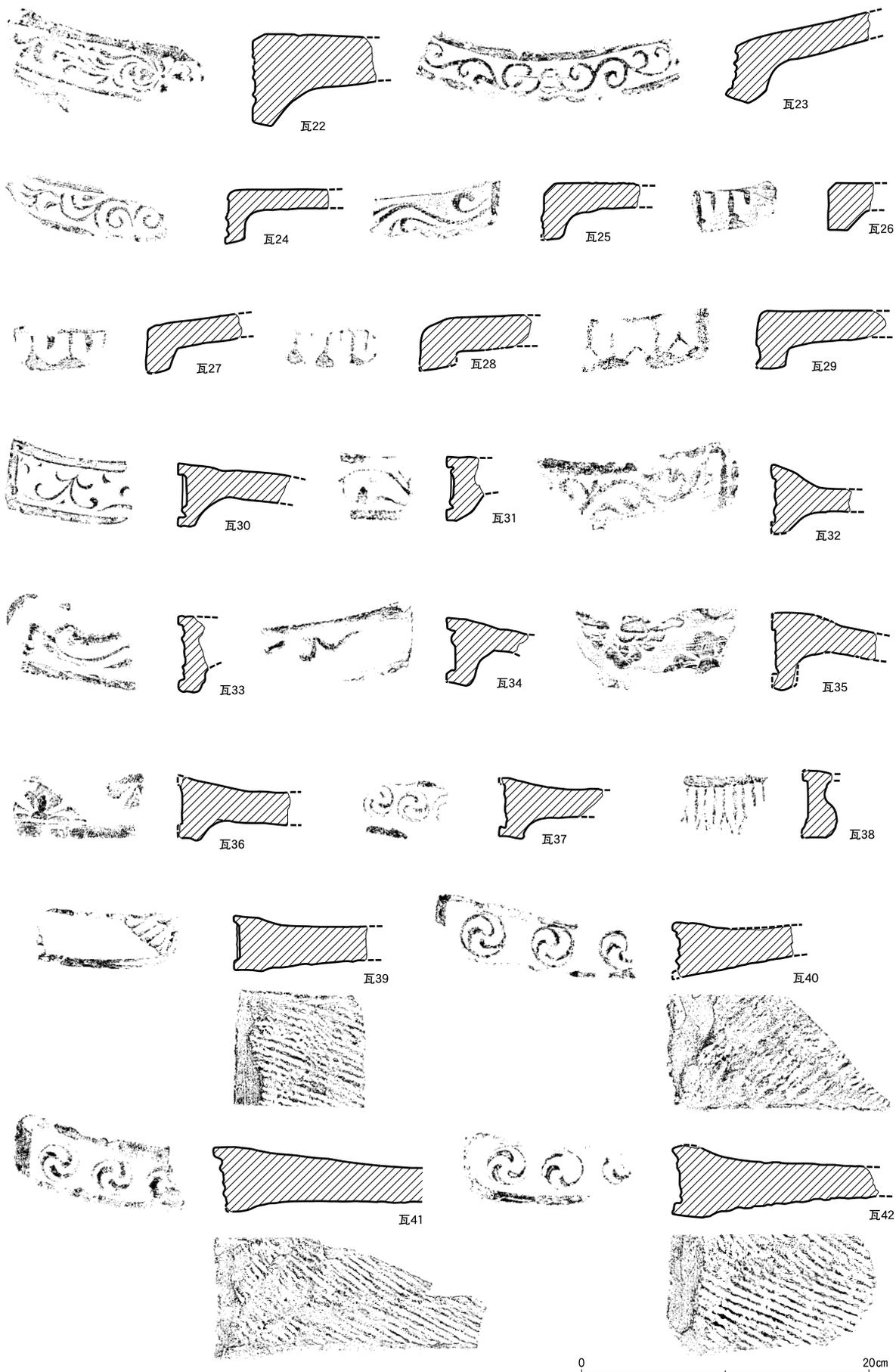


土器類実測図 (10)

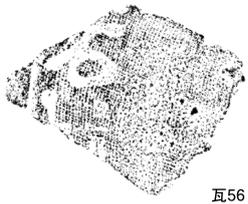
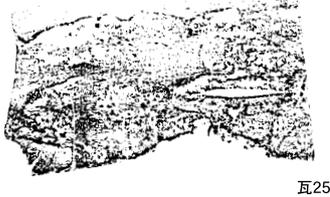
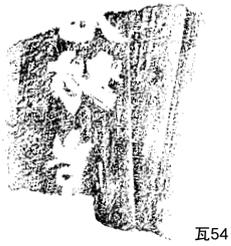
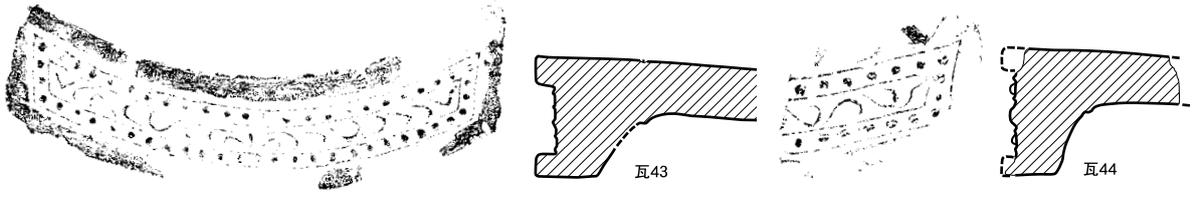


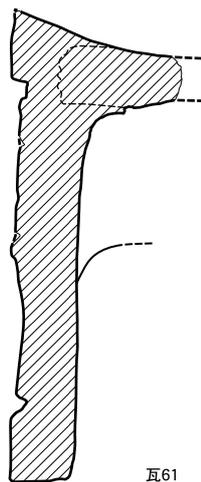
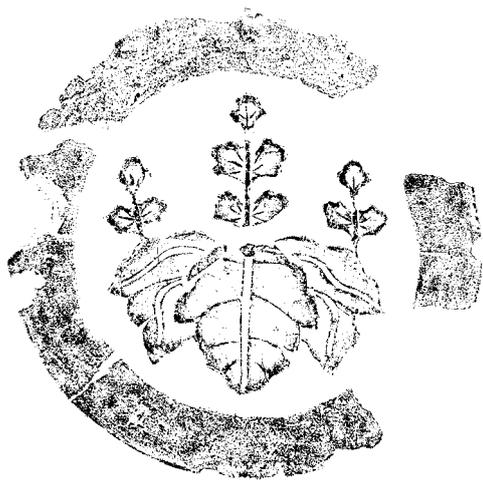
土器類実測図 (11)



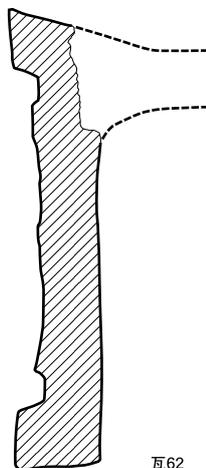
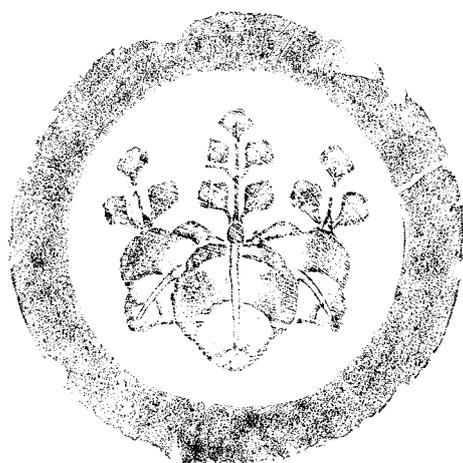


图版 38
遺物

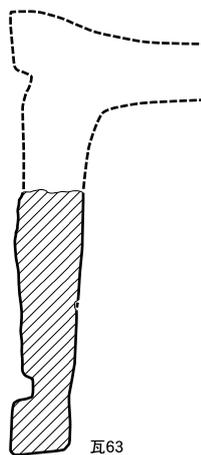
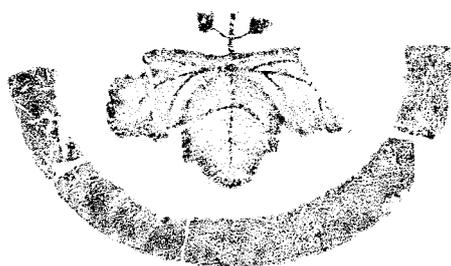




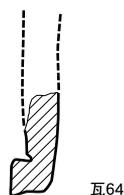
瓦61



瓦62

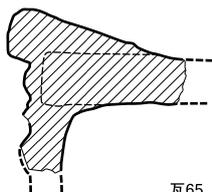


瓦63

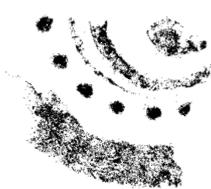


瓦64





瓦65



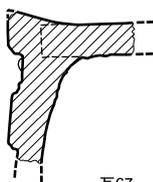
瓦68



瓦66



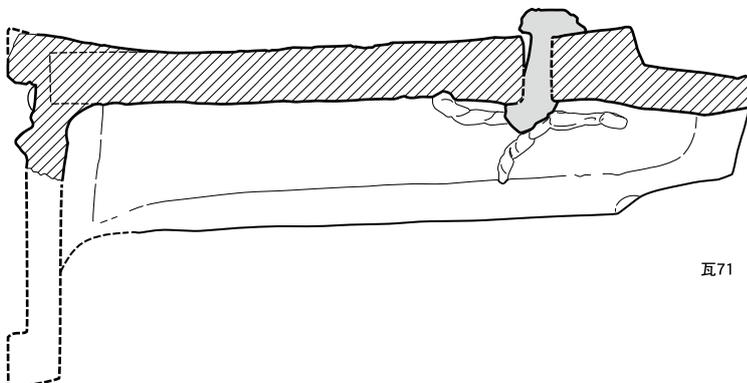
瓦69



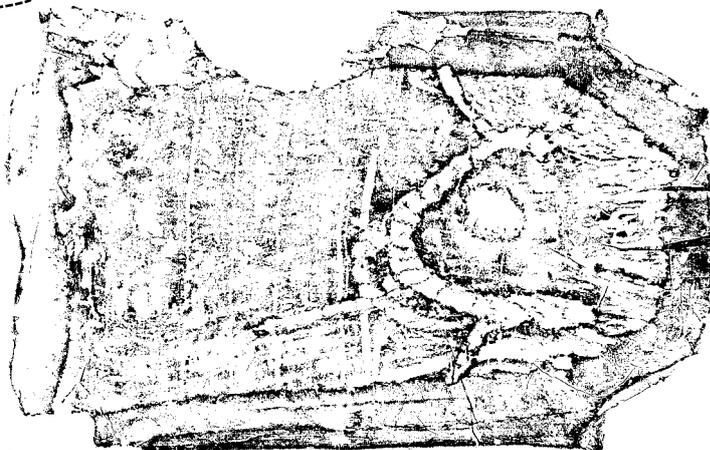
瓦67

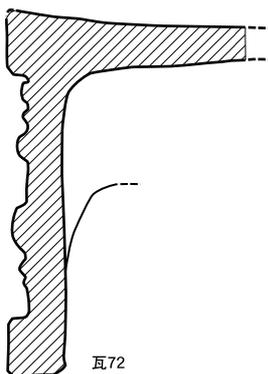
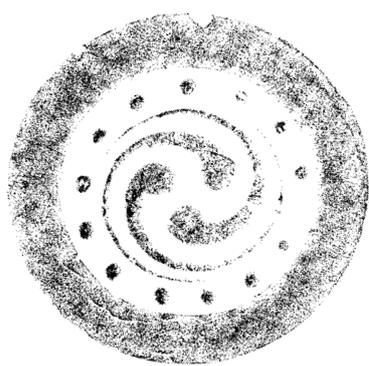


瓦70

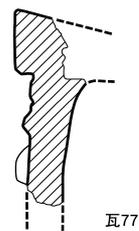


瓦71

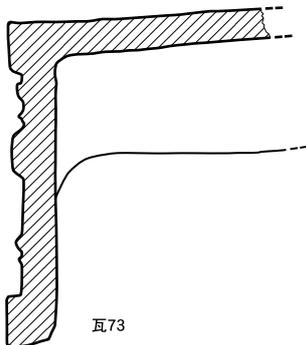




瓦72



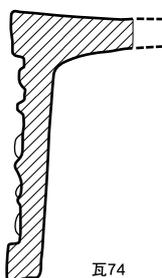
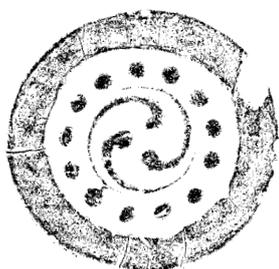
瓦77



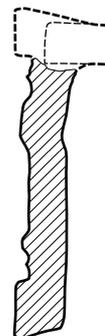
瓦73



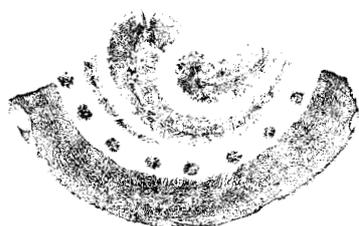
瓦78



瓦74



瓦79



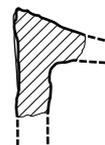
瓦75



瓦80



瓦76

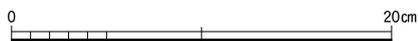
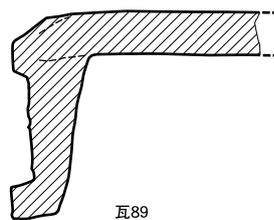
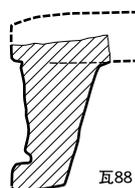
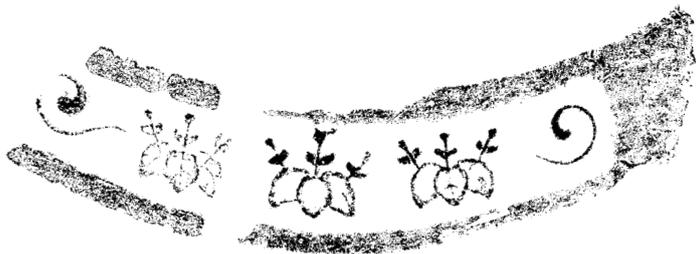
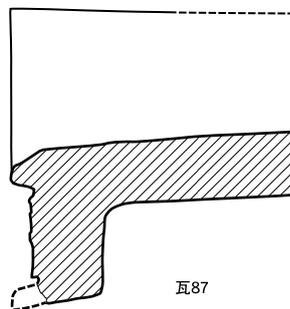
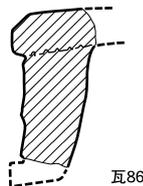
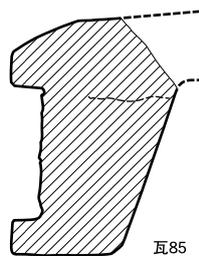
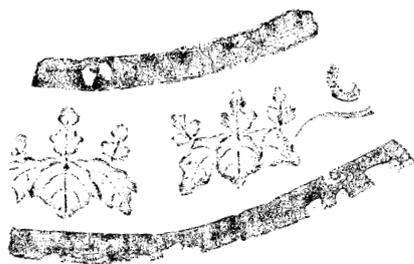
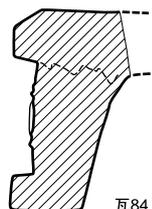
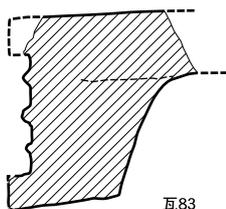


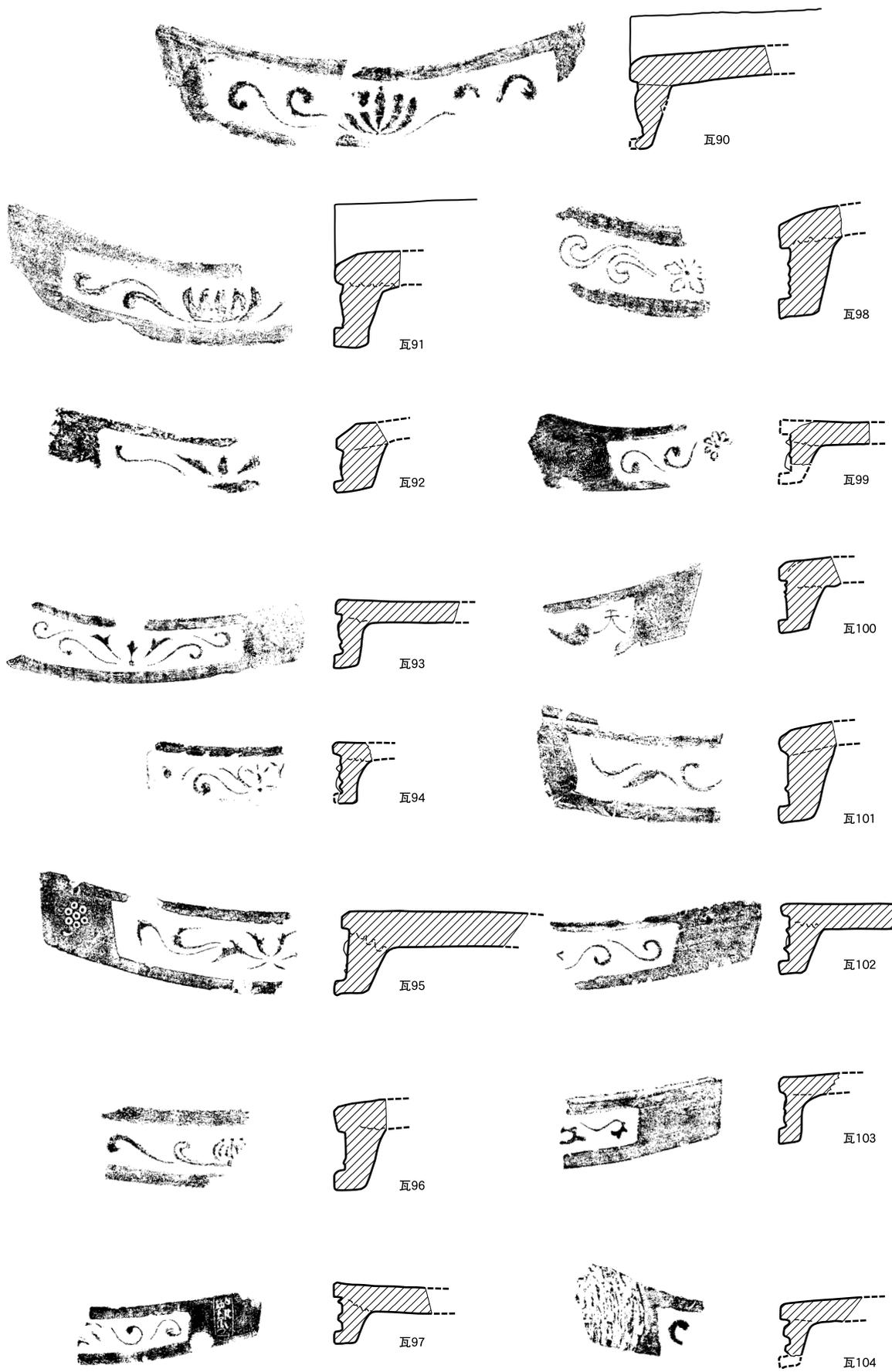
瓦81

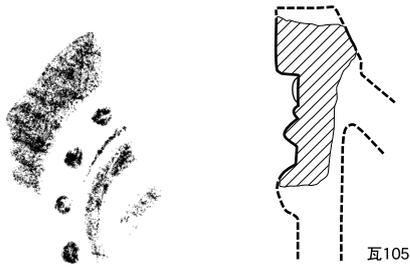


瓦82

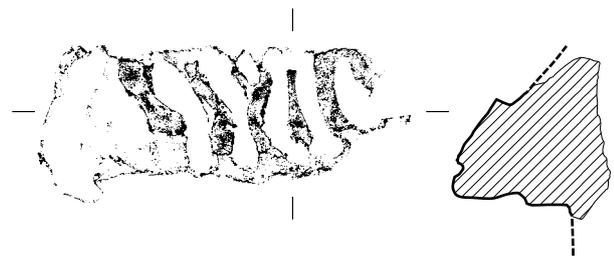




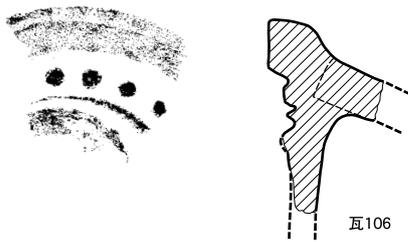




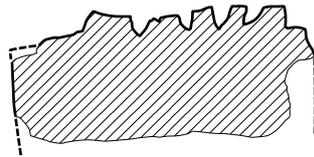
瓦105



瓦109



瓦106



瓦107



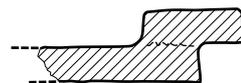
瓦110

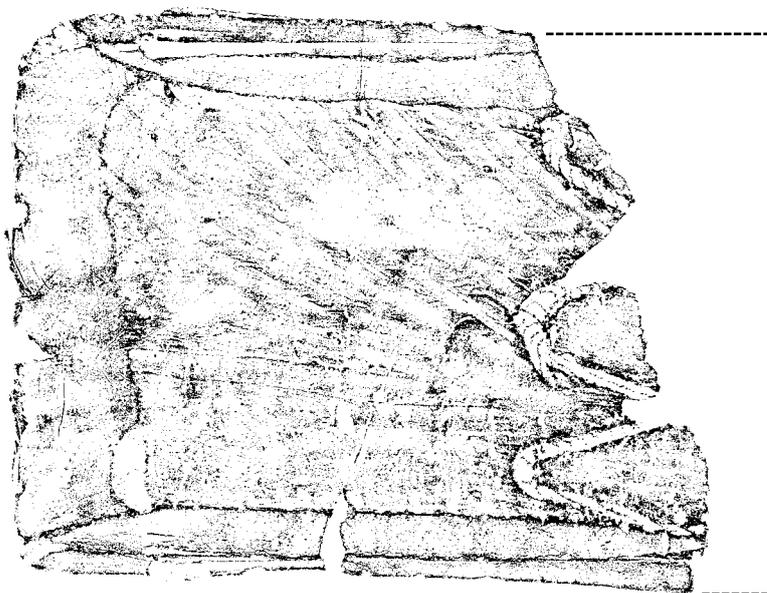


瓦108



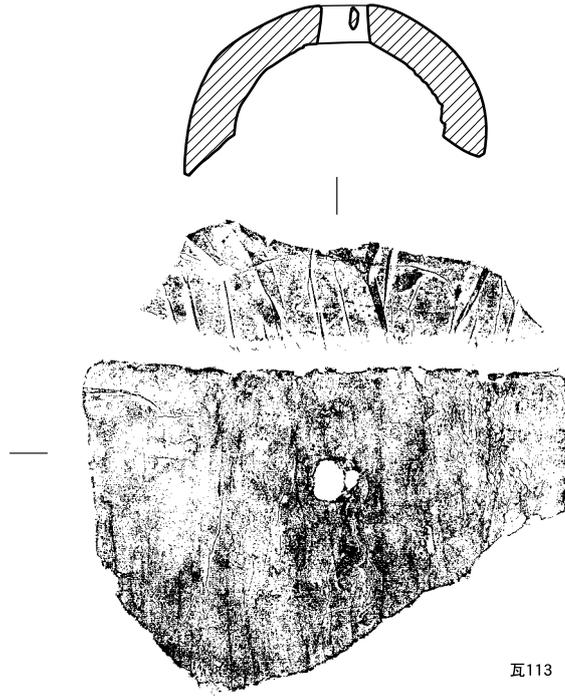
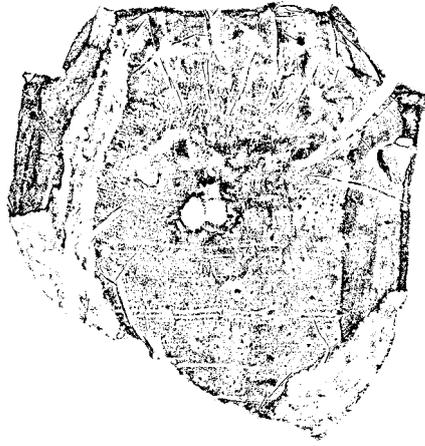
瓦111



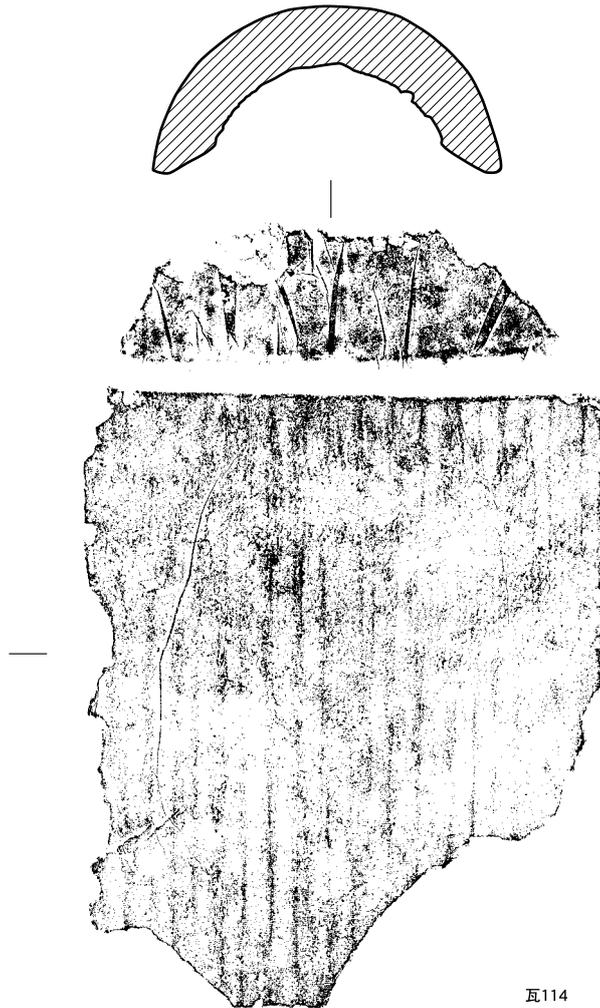


瓦112



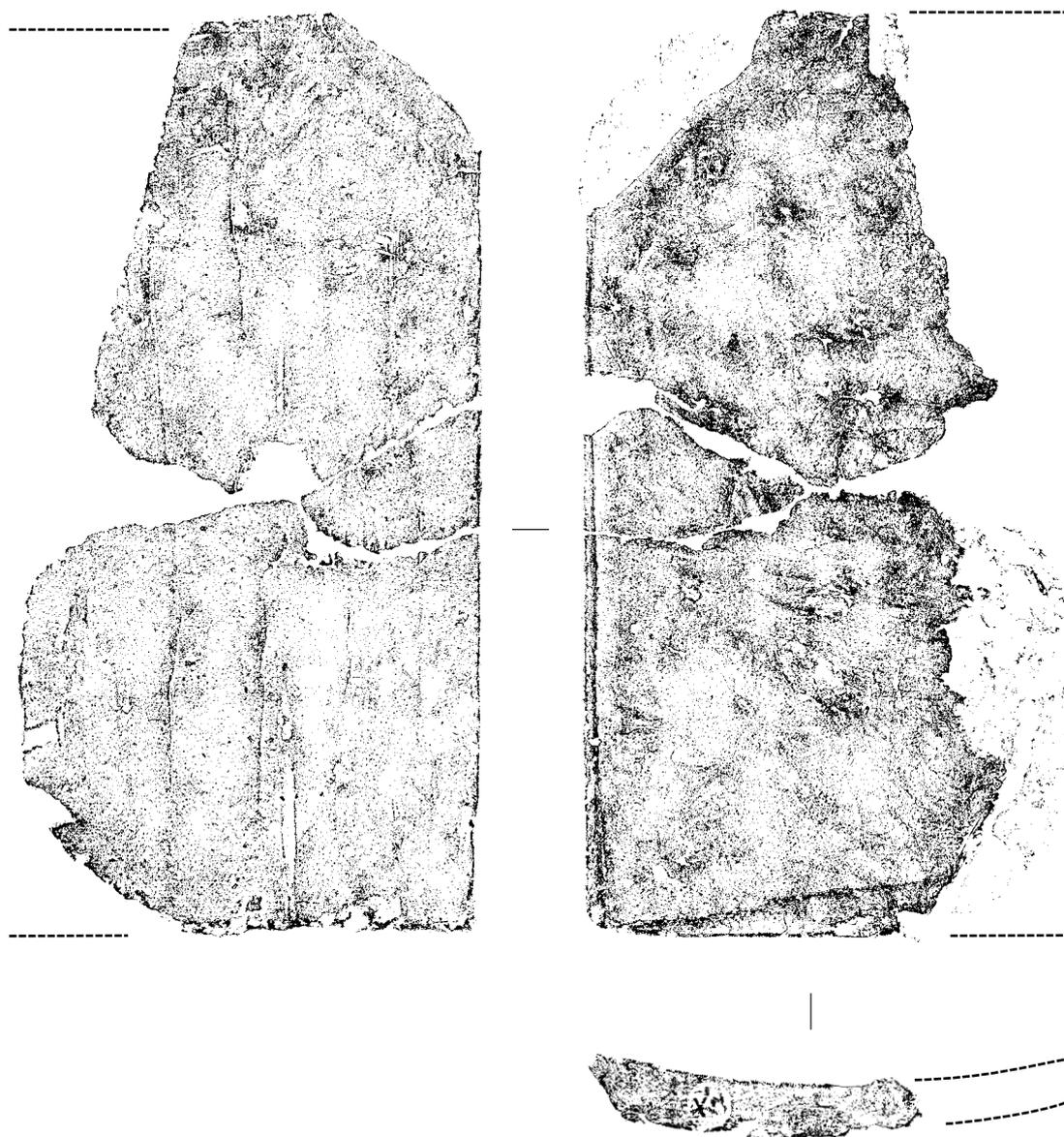


瓦113



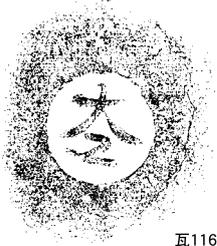
瓦114



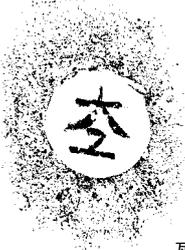


瓦115

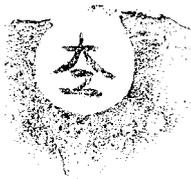




瓦116



瓦117



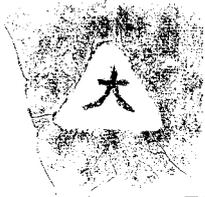
瓦118



瓦119



瓦120



瓦121



瓦122



瓦123



瓦124



瓦125



瓦126



瓦127



瓦128



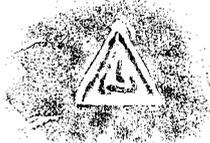
瓦129



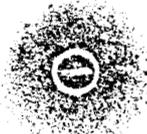
瓦130



瓦131



瓦132



瓦133



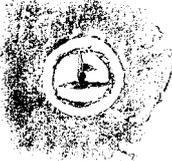
瓦134



瓦135



瓦136



瓦137



瓦138



瓦139



瓦140



瓦141



瓦142



瓦143



瓦144



瓦145



瓦刻印拓影 (1)



瓦144



瓦145



瓦146



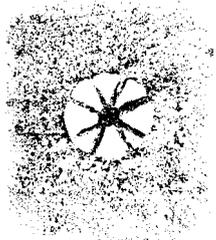
瓦85



瓦147



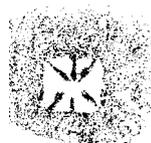
瓦148



瓦149



瓦150



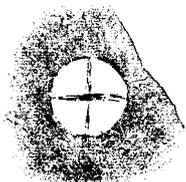
瓦151



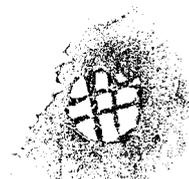
瓦152



瓦153



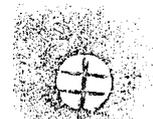
瓦154



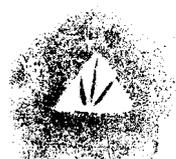
瓦155



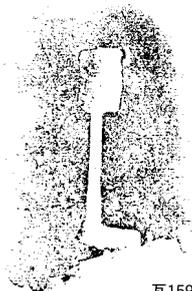
瓦156



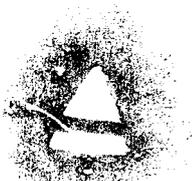
瓦157



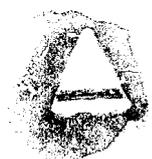
瓦158



瓦159



瓦160



瓦161



瓦162



瓦163



瓦164



瓦165



瓦166



瓦167



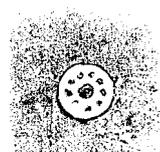
瓦168



瓦169



瓦170



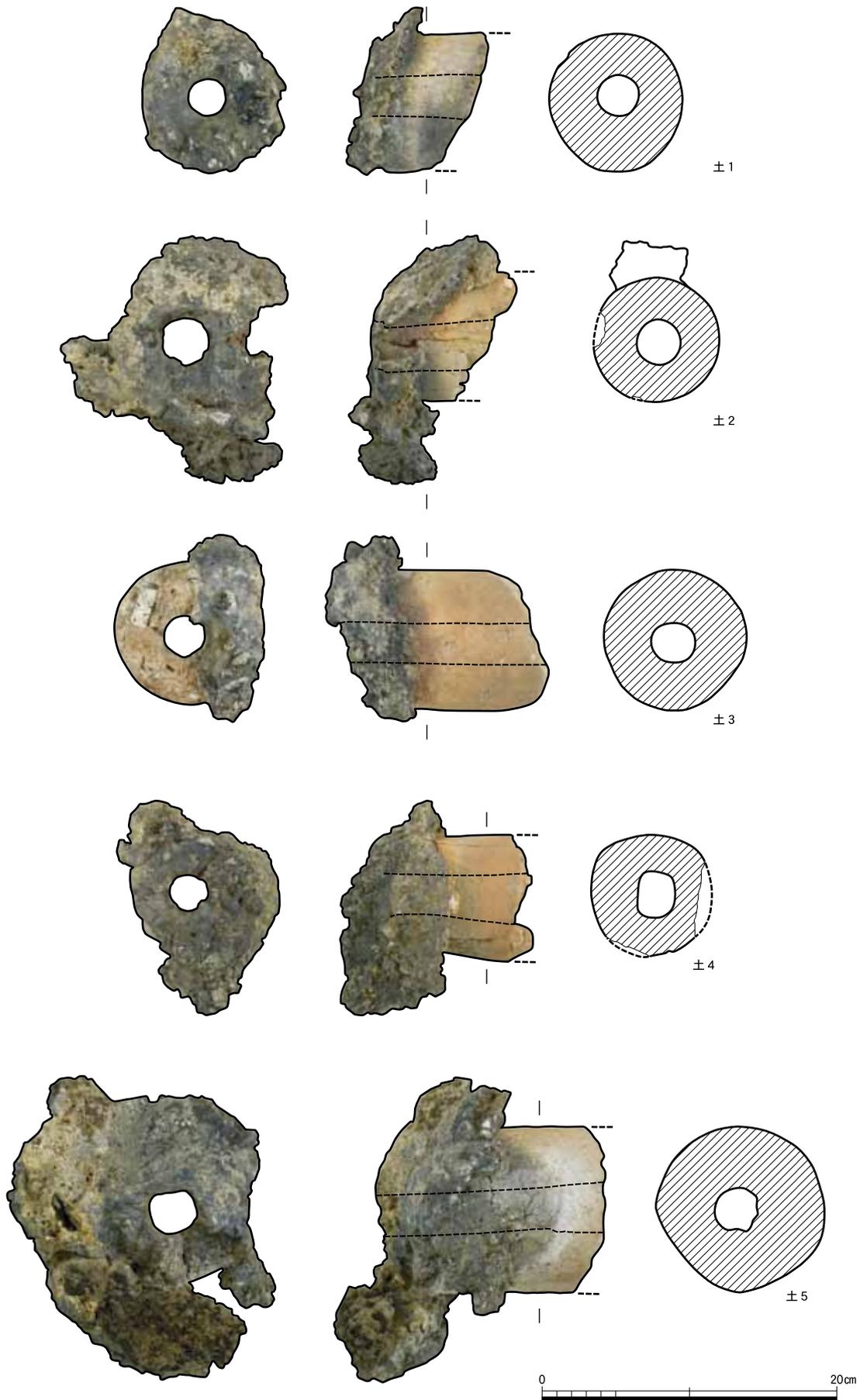
瓦171



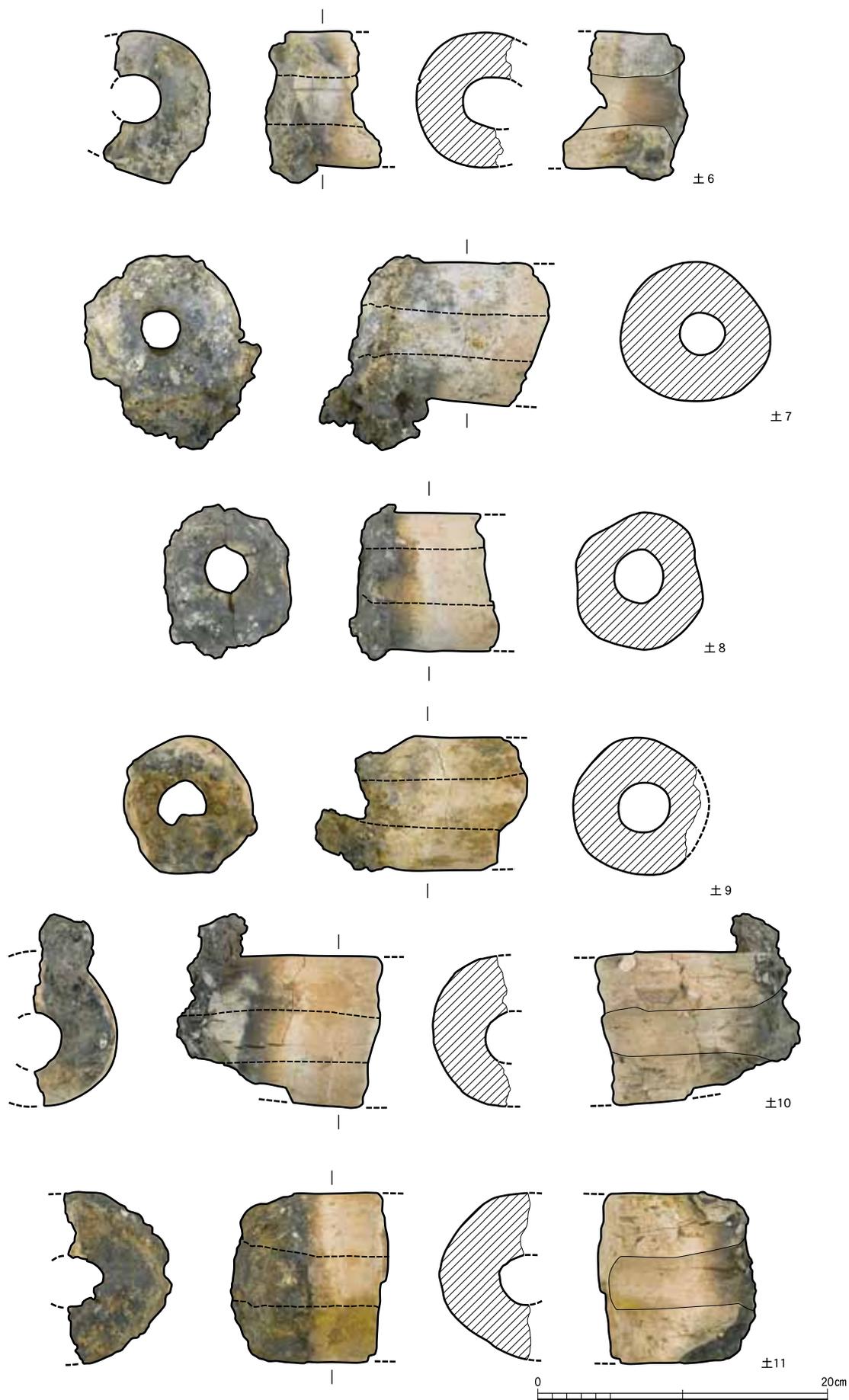
瓦172



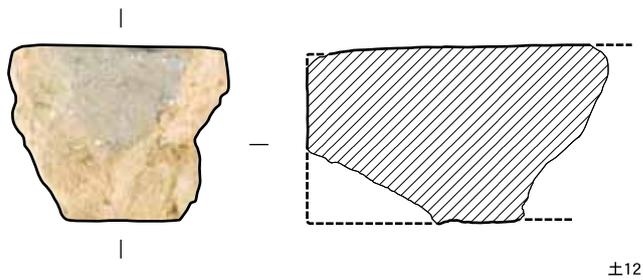
瓦刻印拓影 (2)



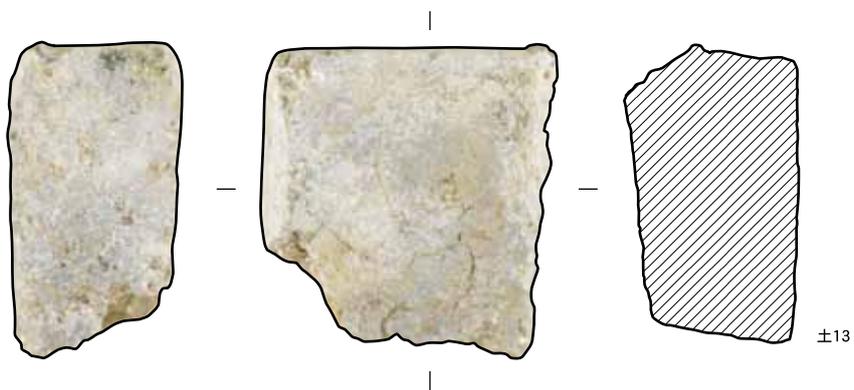
土製品画像・実測図 (1)



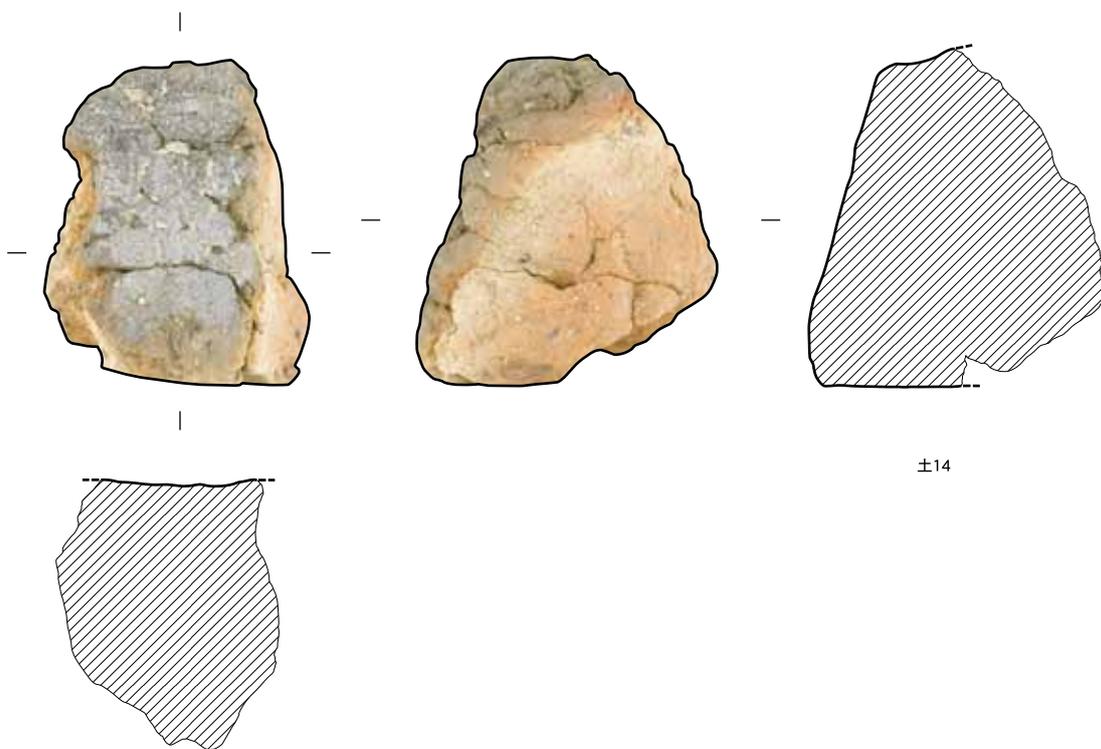
土製品画像・実測図（2）



±12

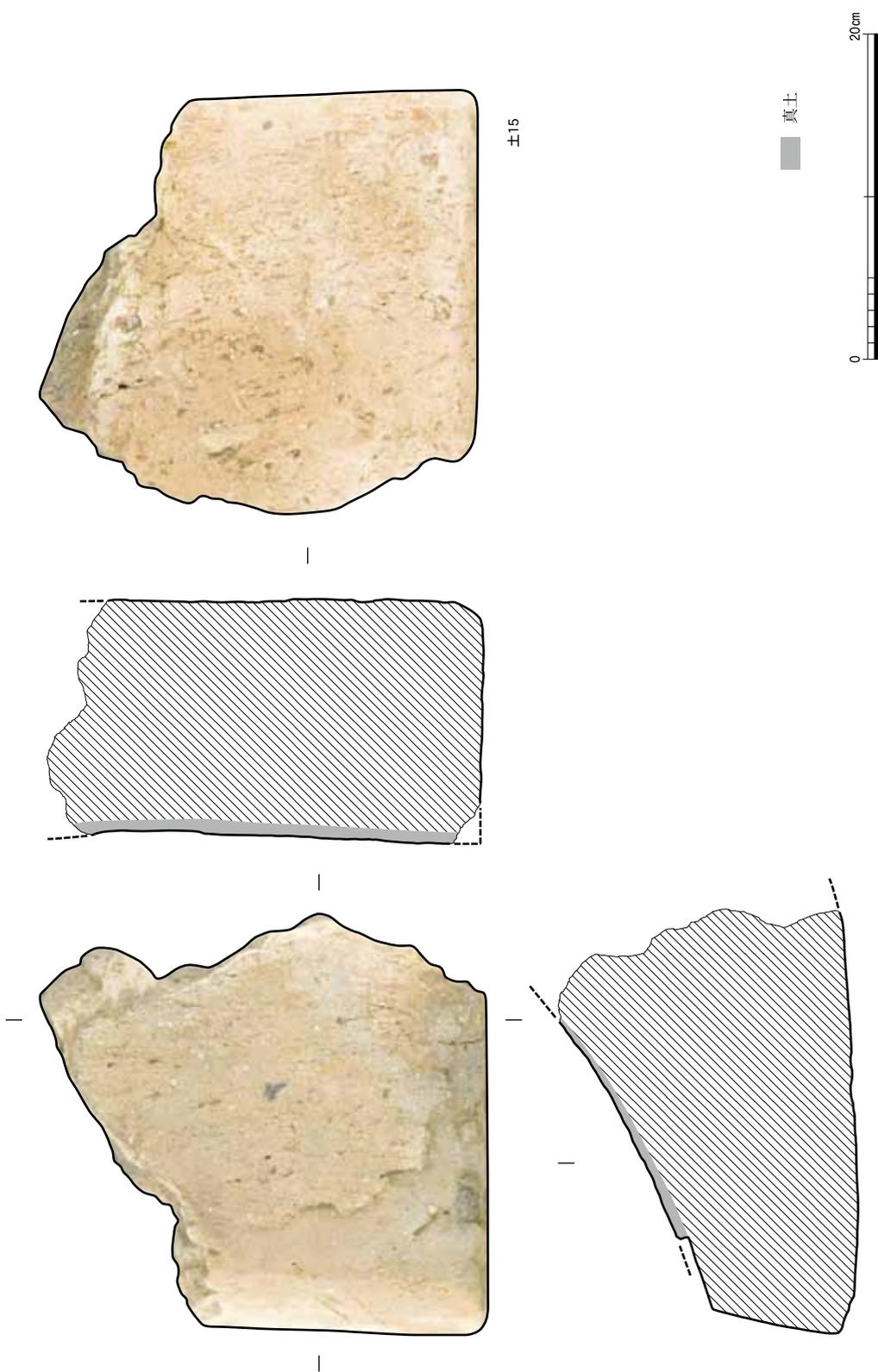


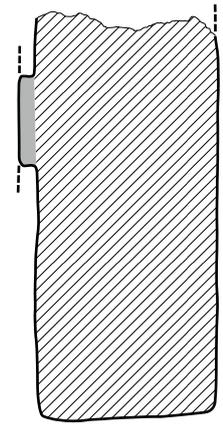
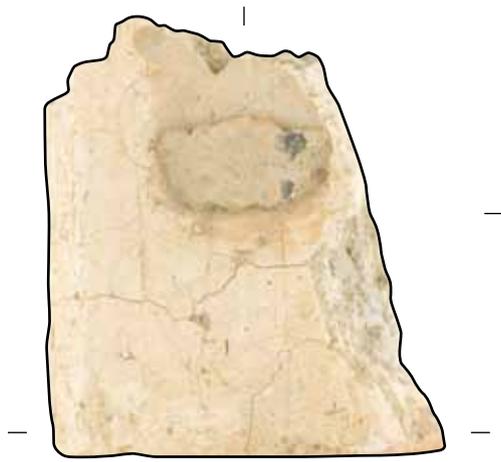
±13



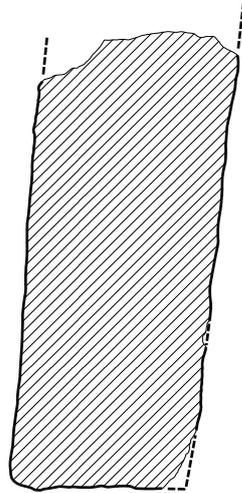
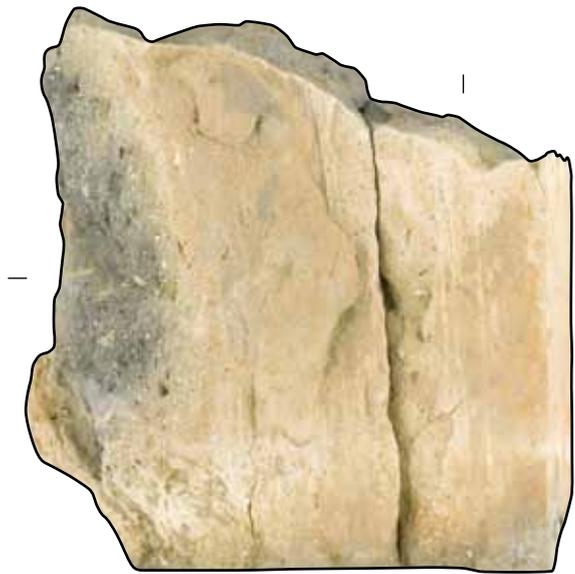
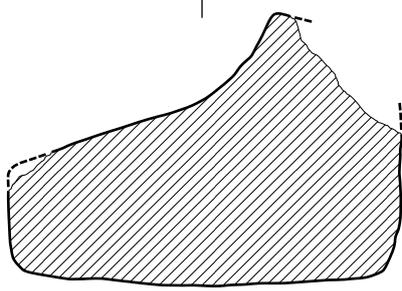
±14







±16



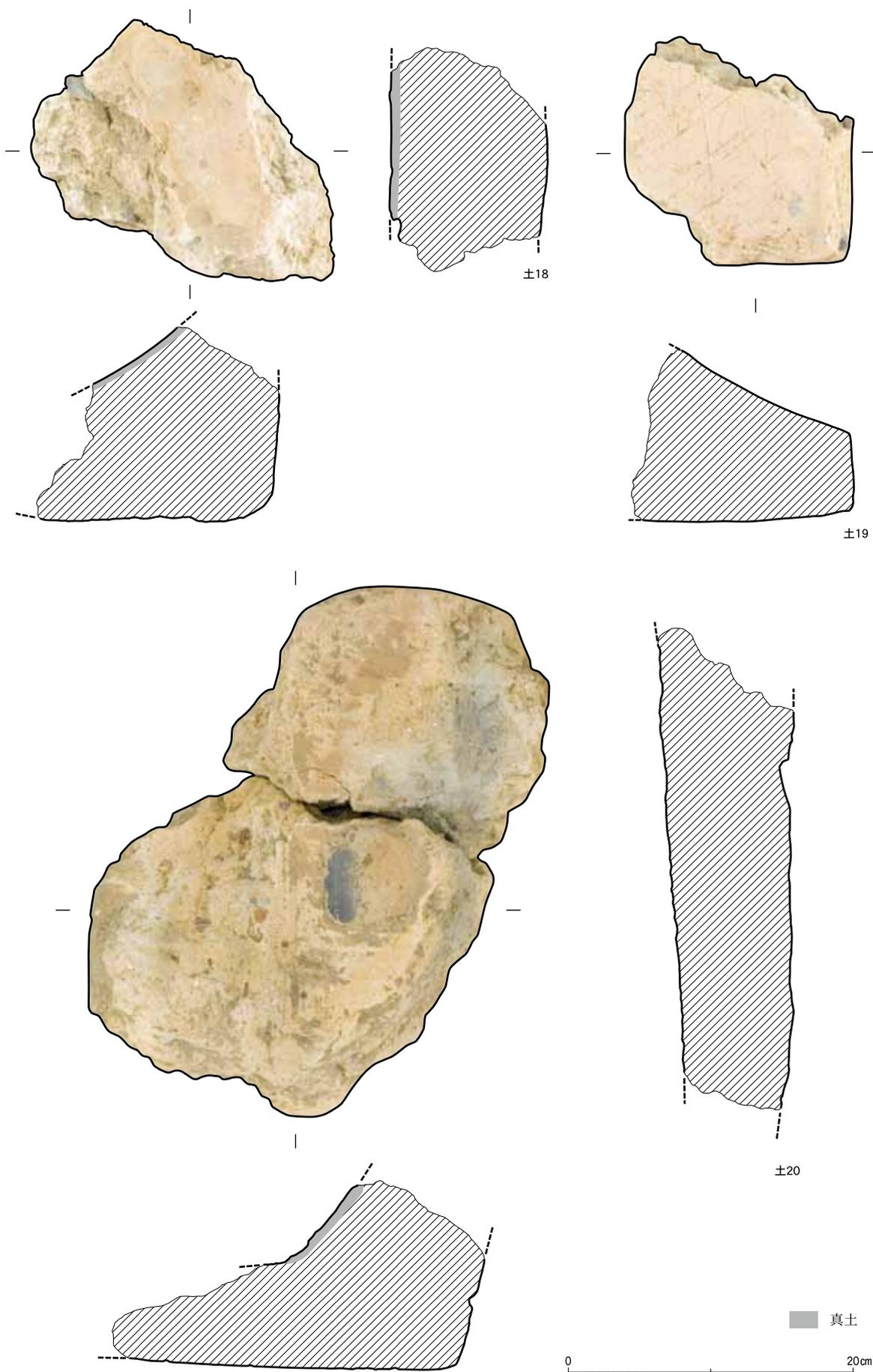
±17



■ 真土

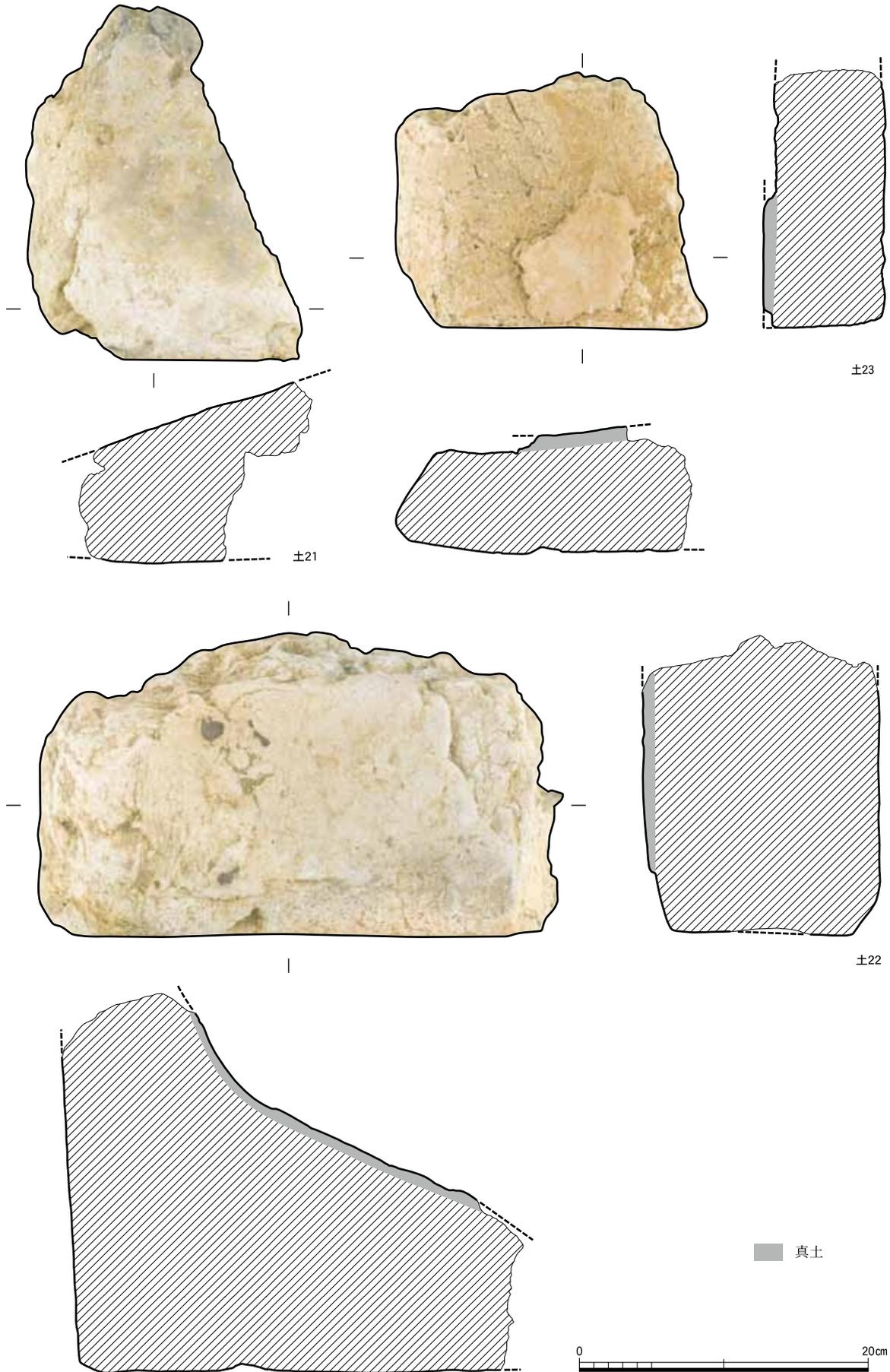


土製品画像・実測図（5）

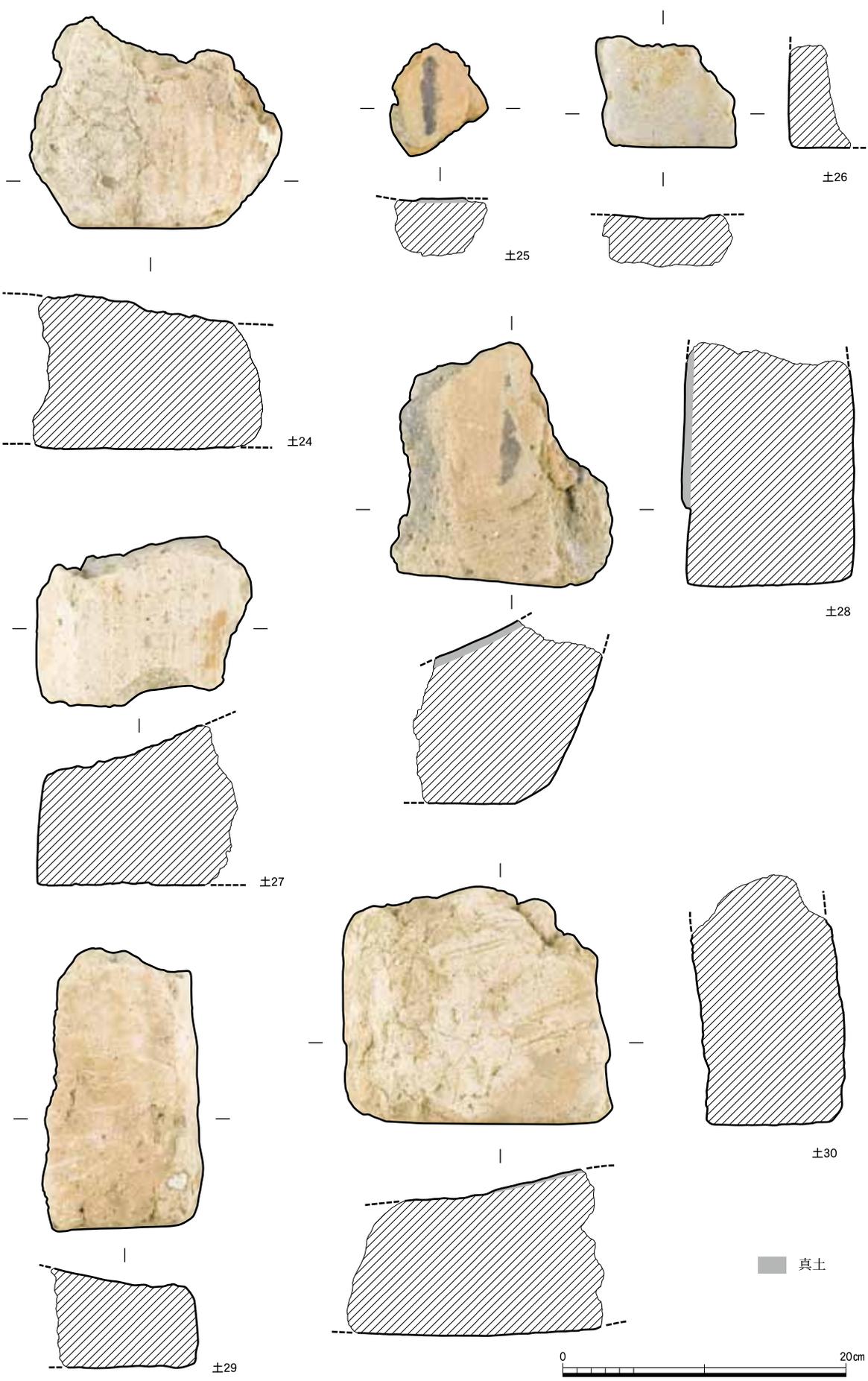


土製品画像・実測図(6)

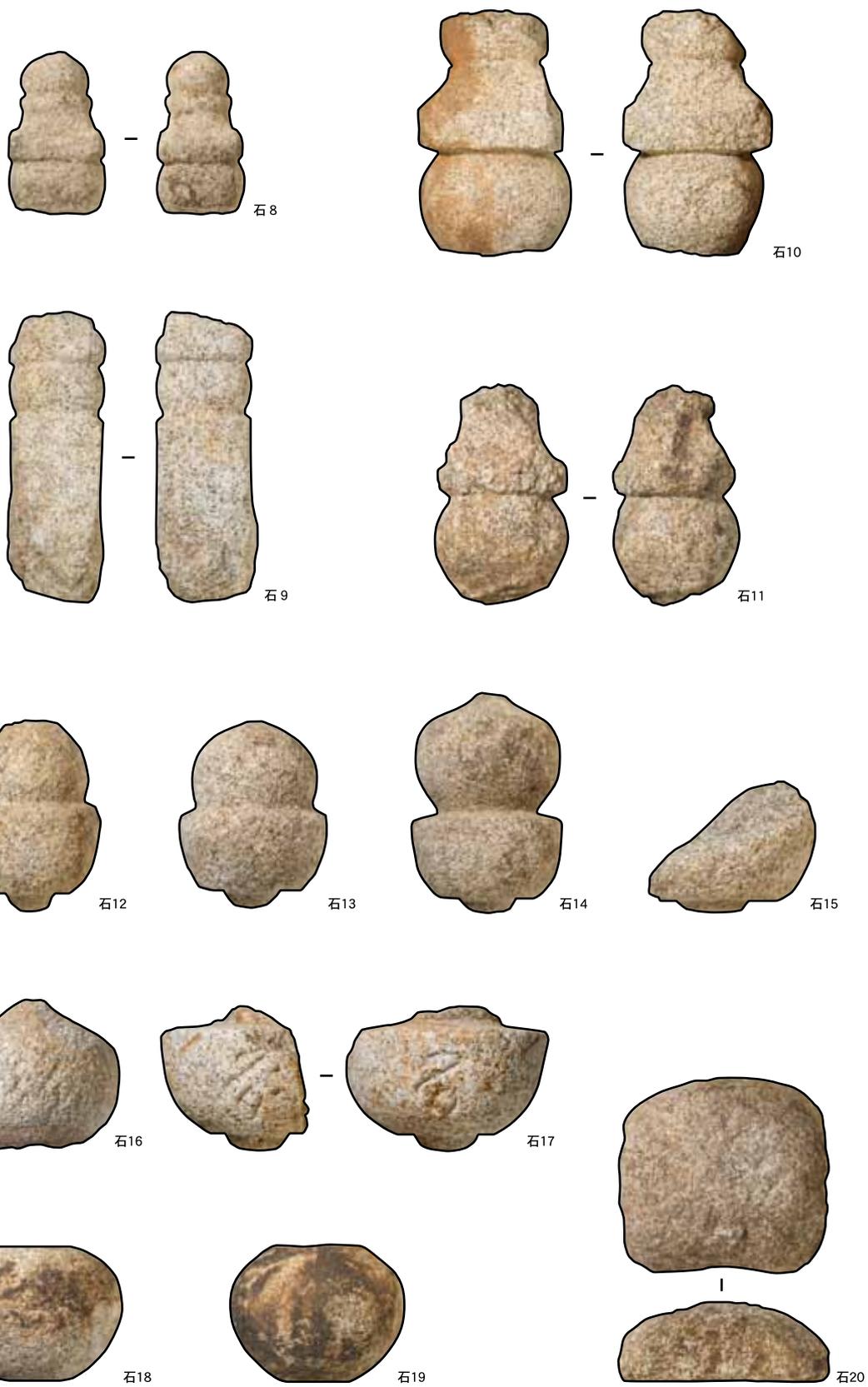
図版 56
遺物

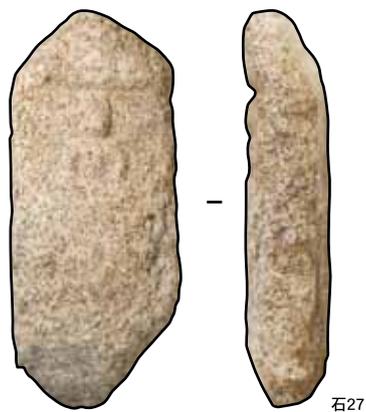
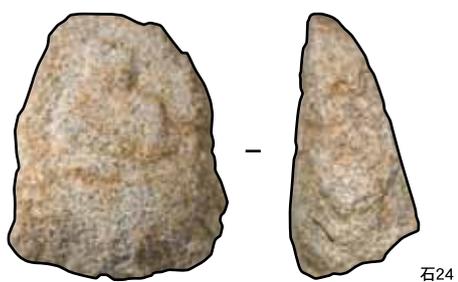
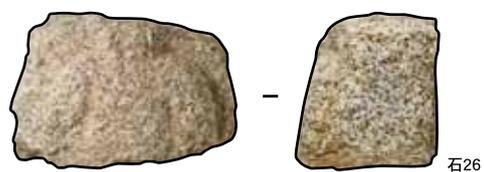
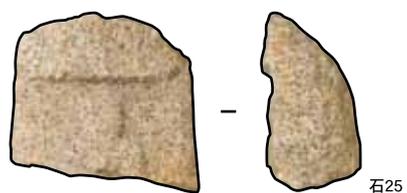
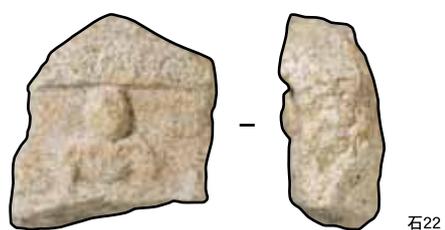
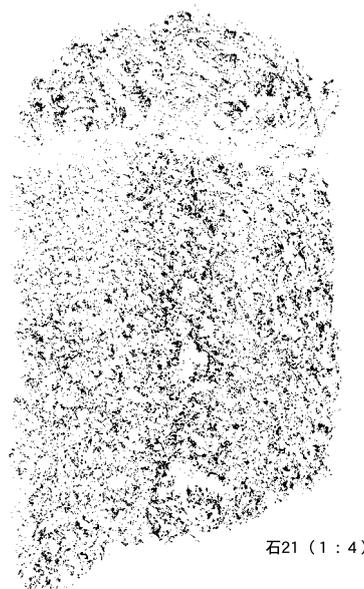
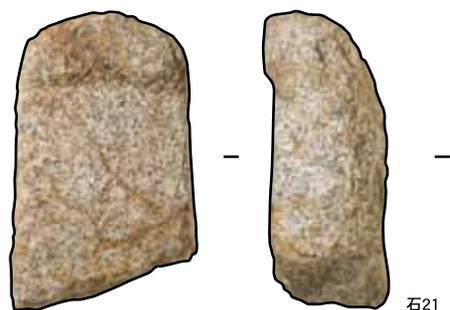


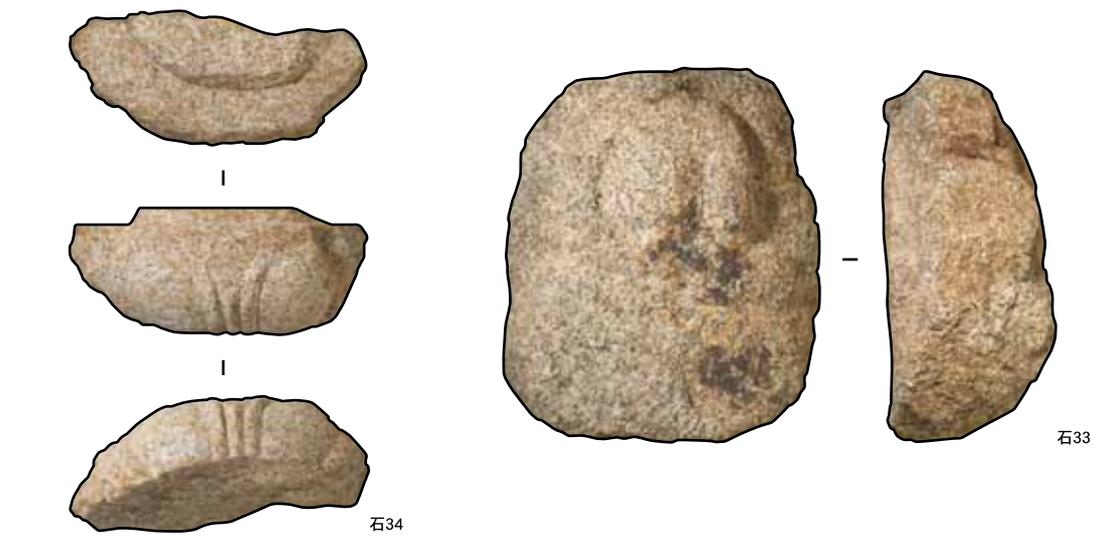
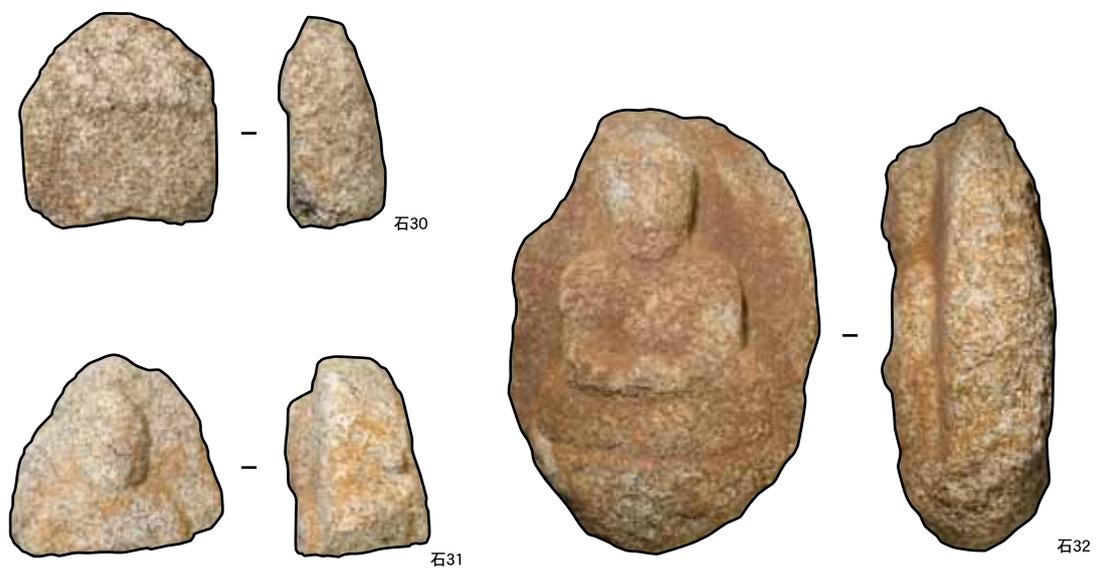
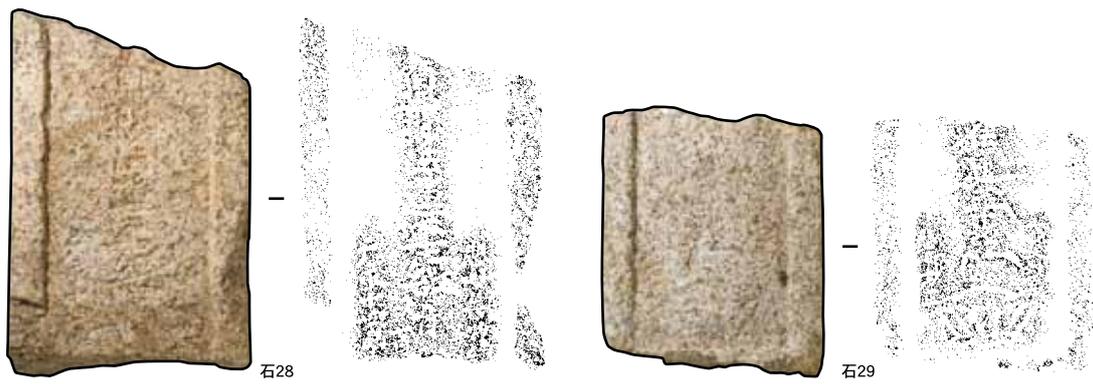
土製品画像・実測図（7）

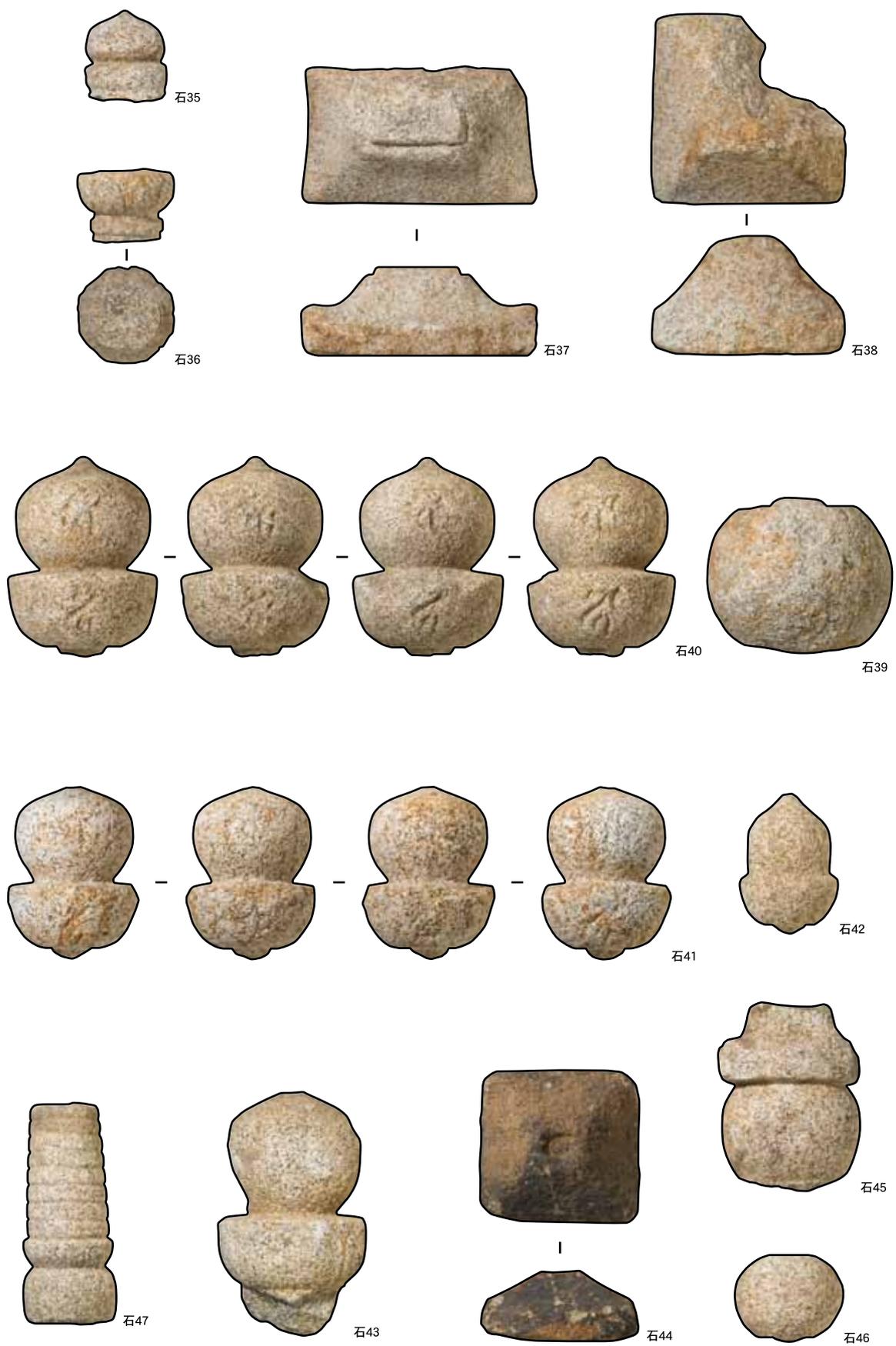


土製品画像・実測図 (8)

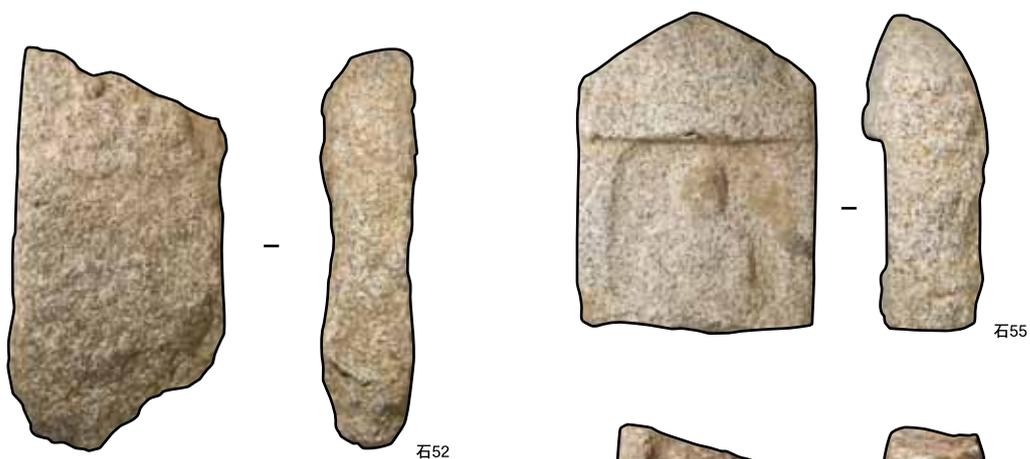
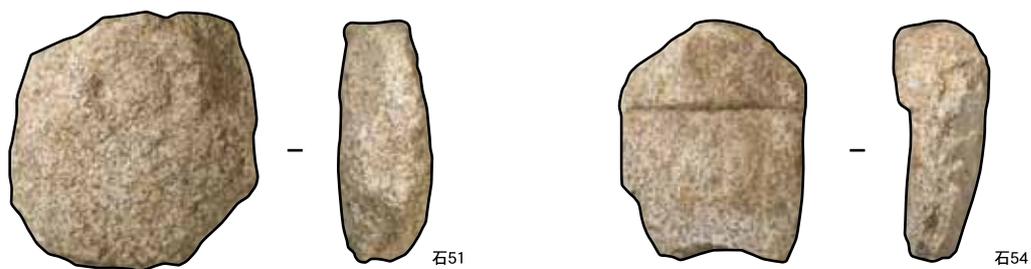
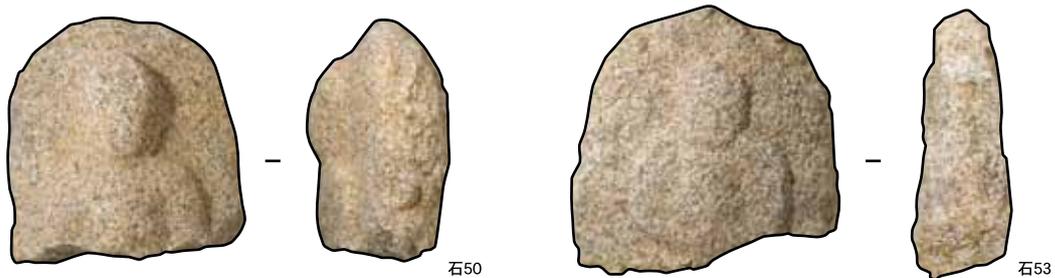
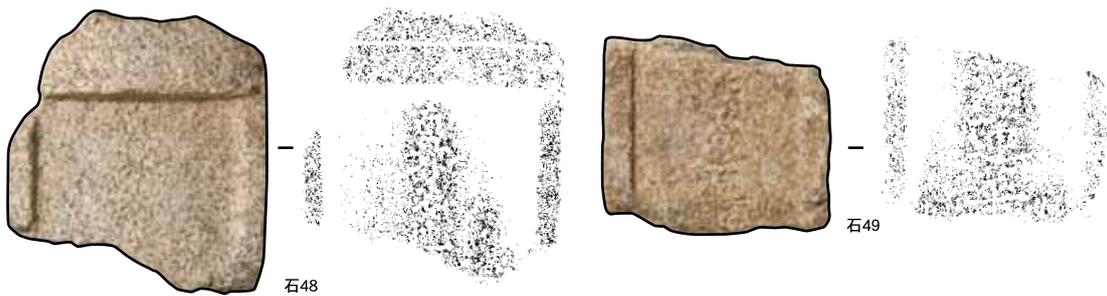


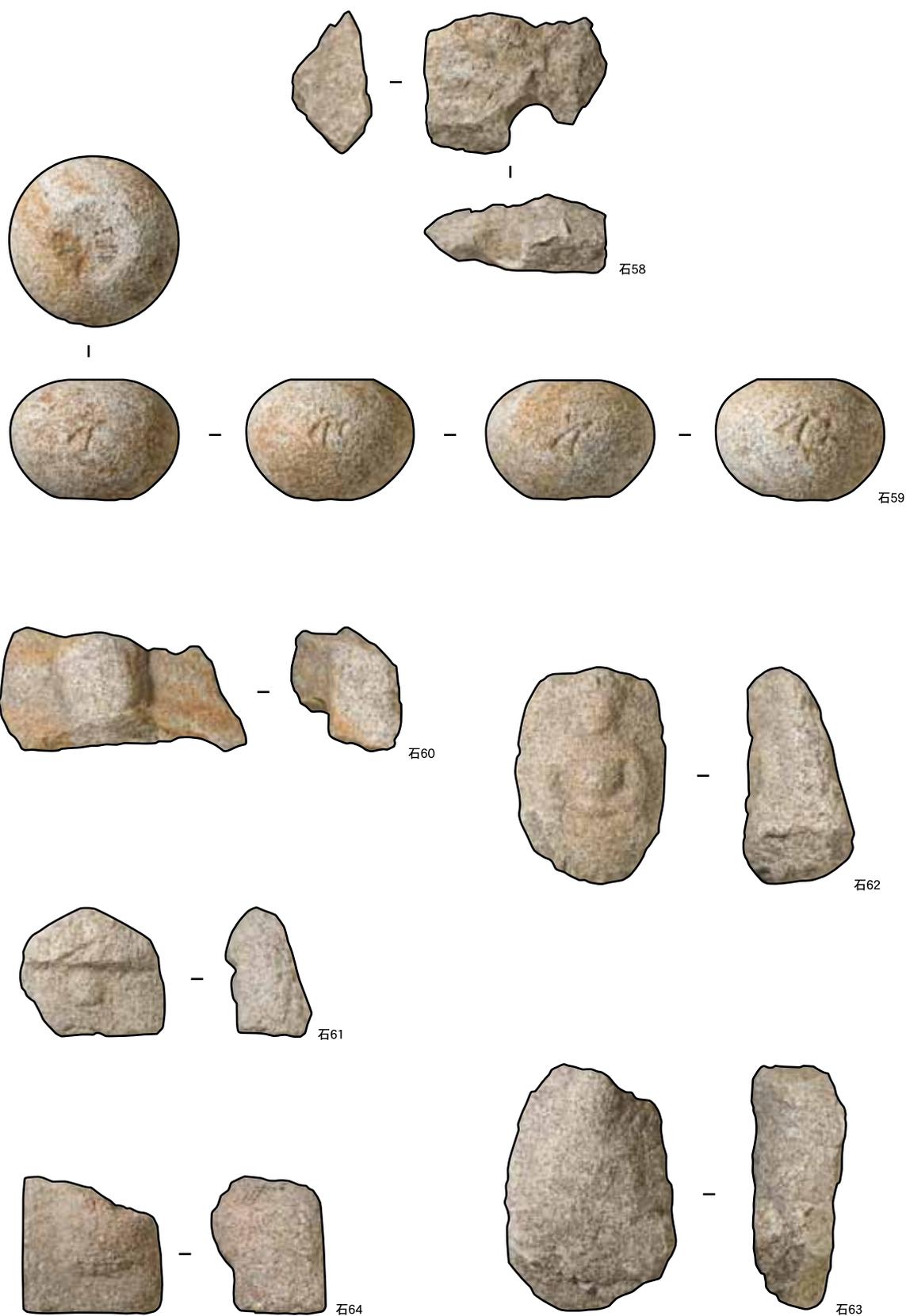






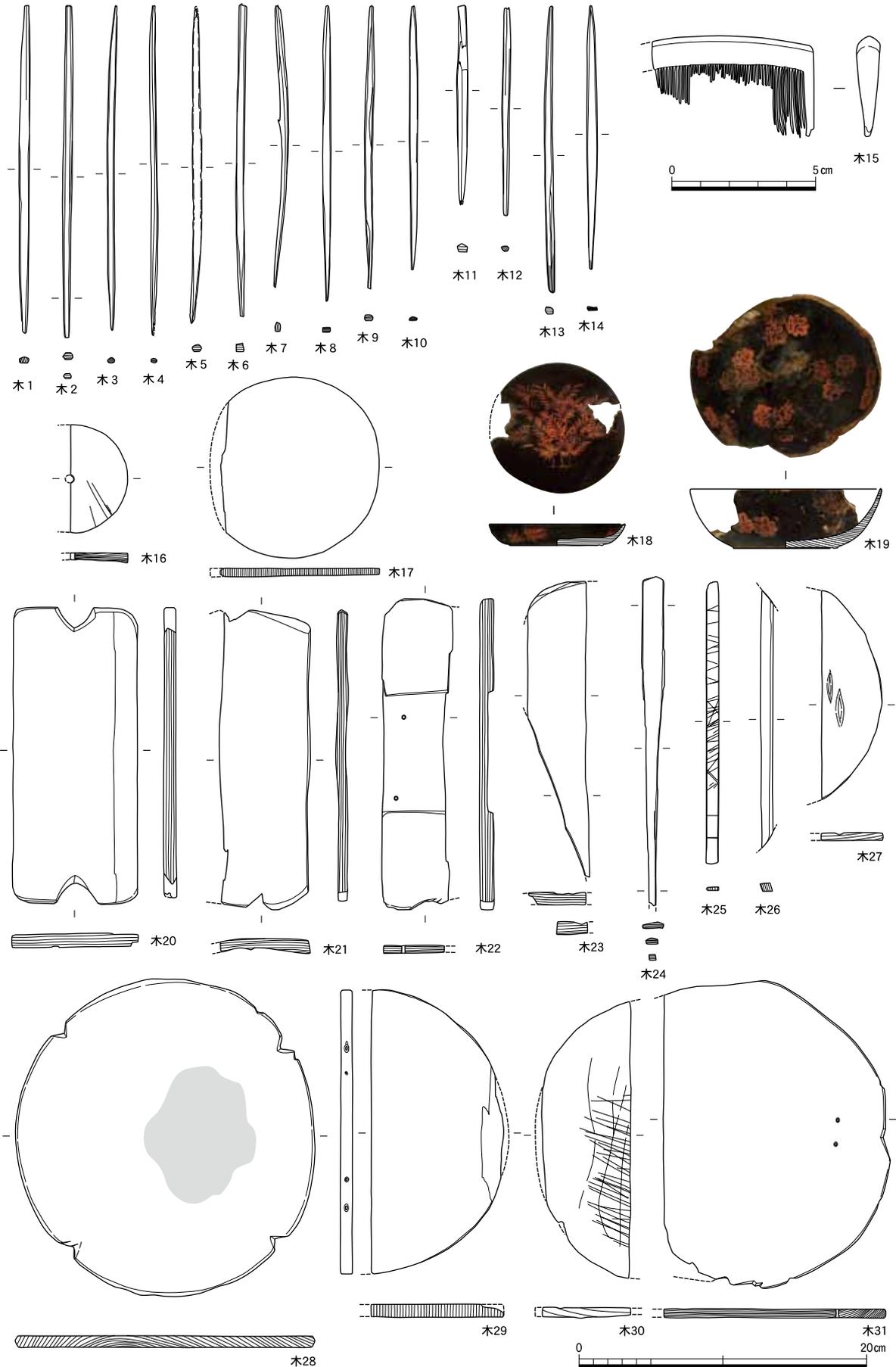
石製品画像・実測図（4）





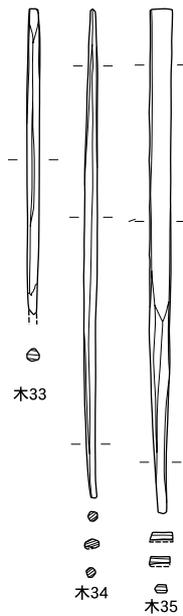
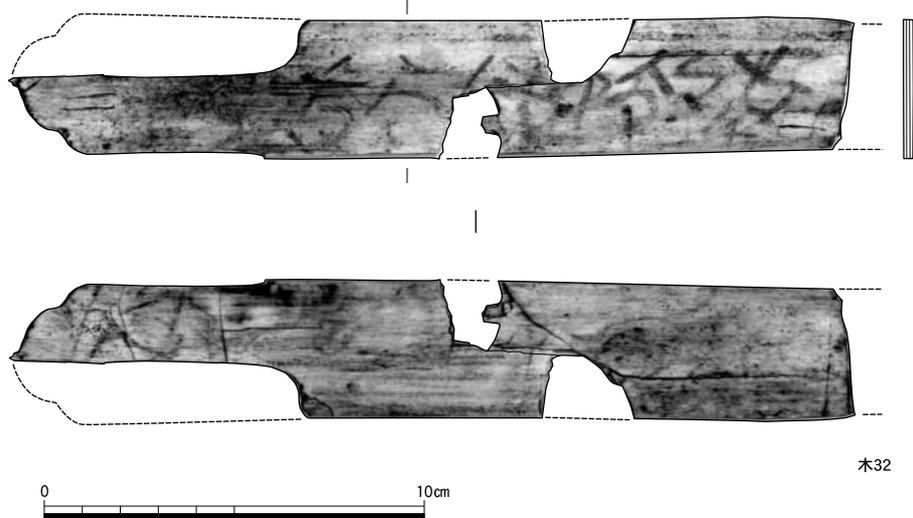
図版 64
遺物

井戸4-250

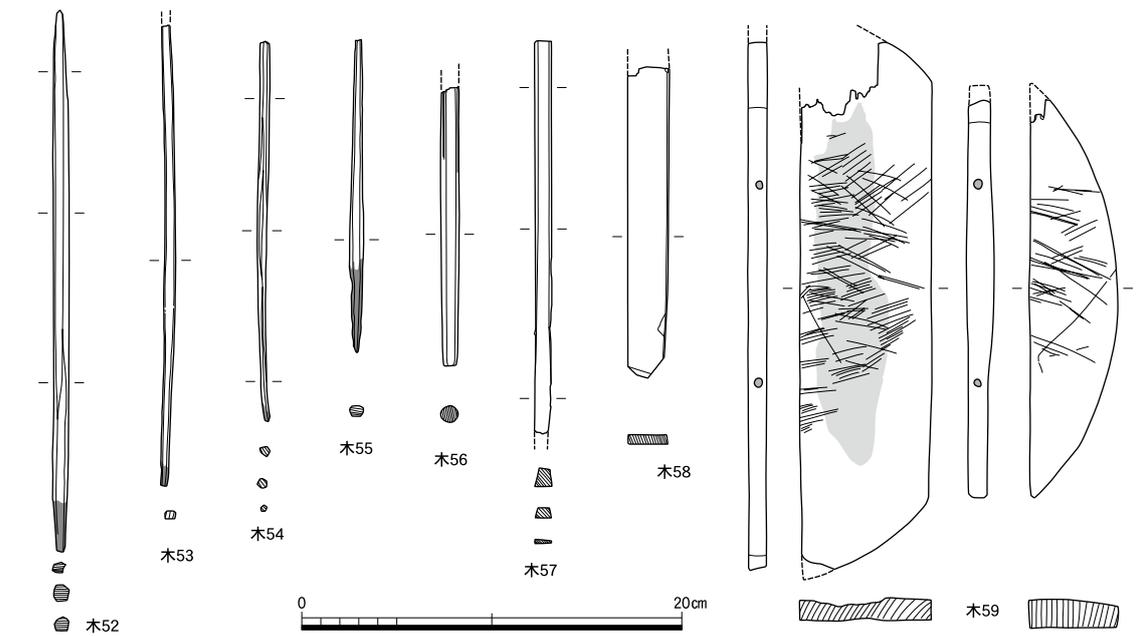
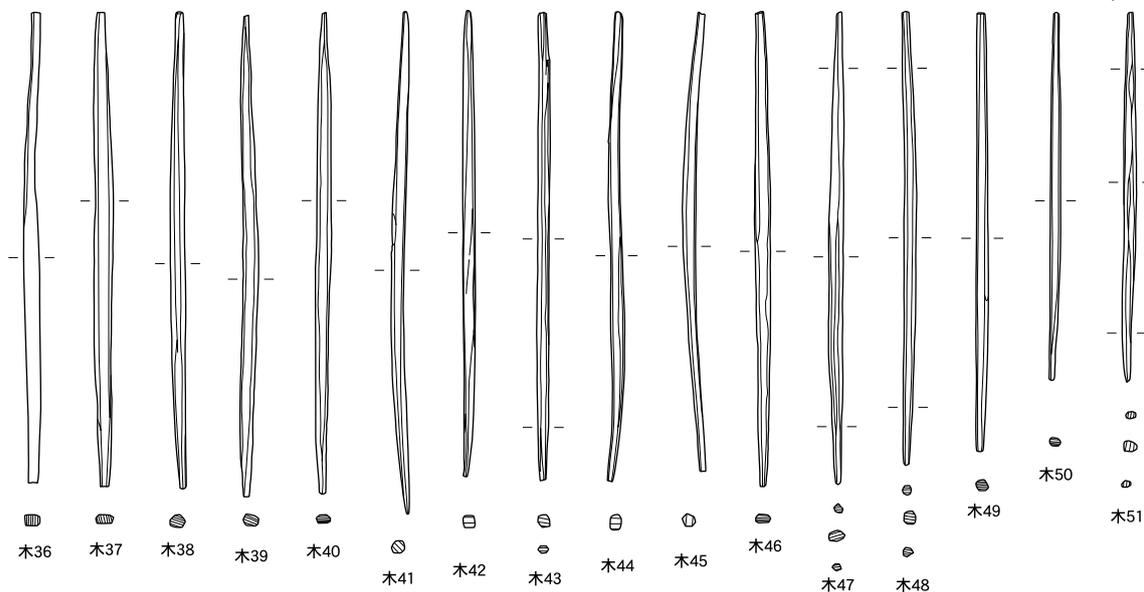


木製品実測図 (1)

堀状遺構4-145



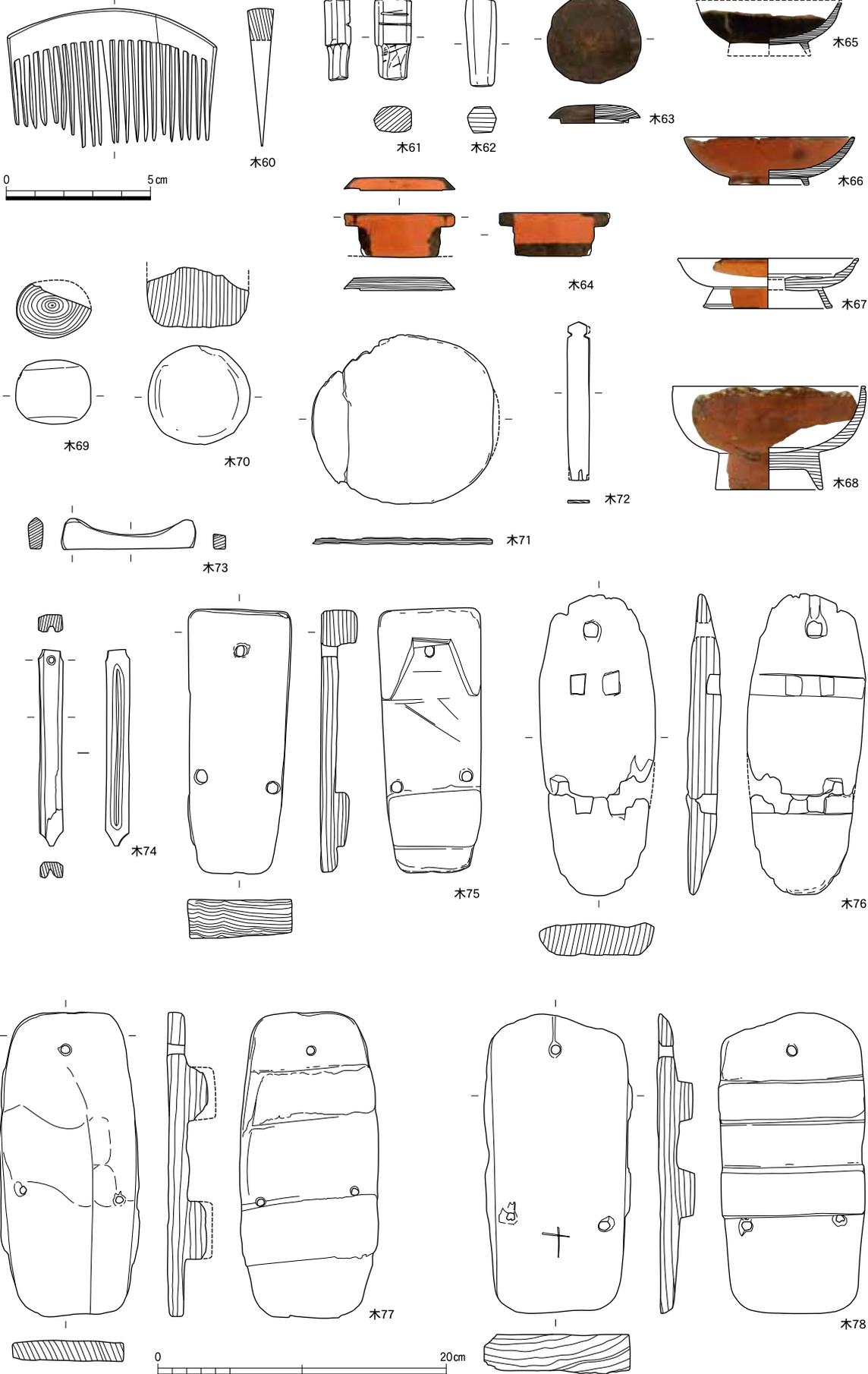
4-10区腐植土層



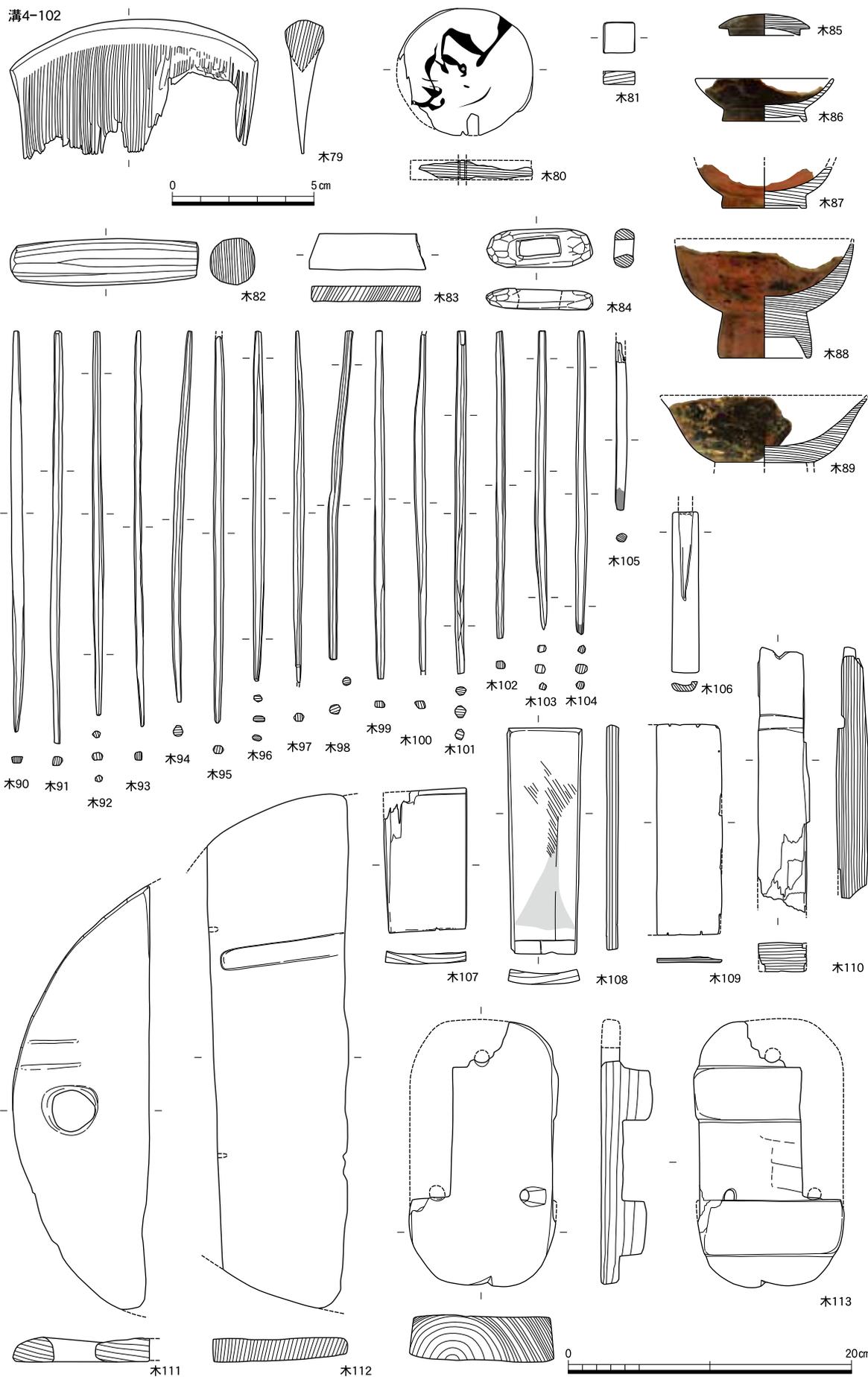
木製品実測図 (2)

図版 66
遺物

4-10区腐植土層

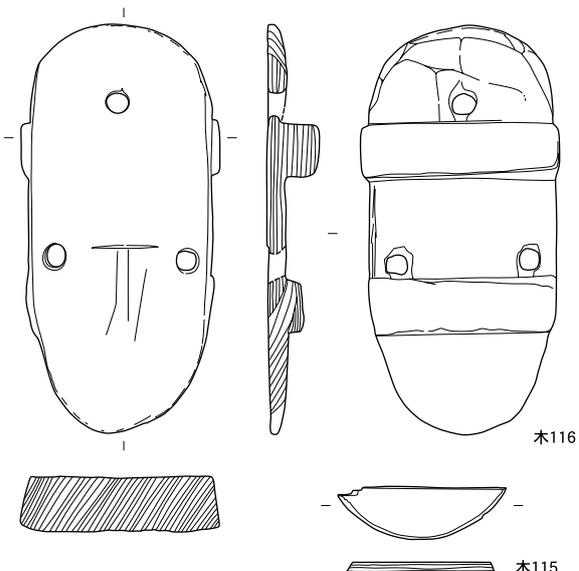


木製品実測図 (3)

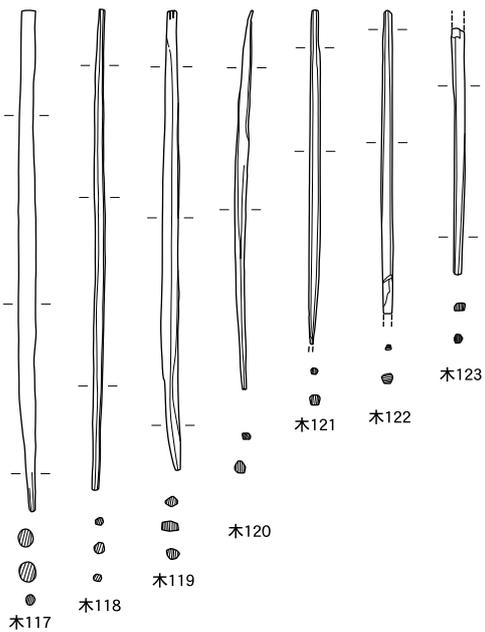


木製品実測図 (4)

溝4-124



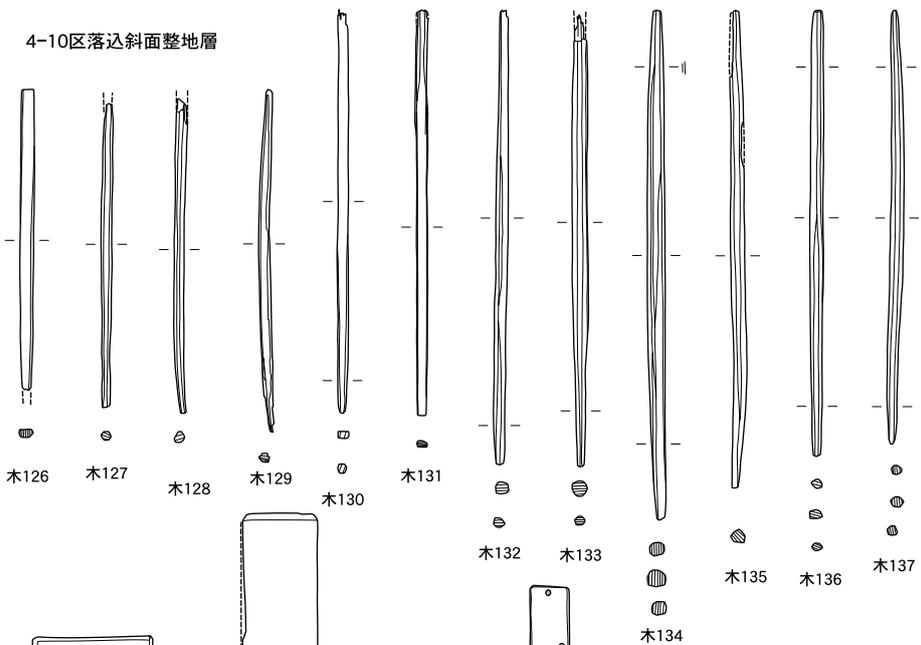
4-10区褐灰色砂泥層



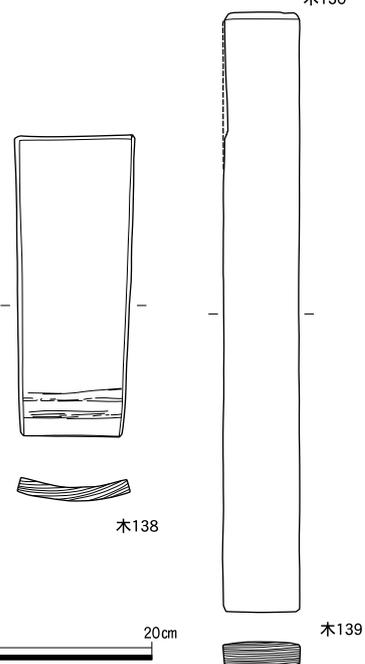
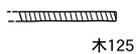
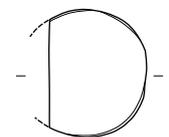
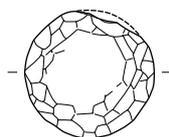
柱穴4-129



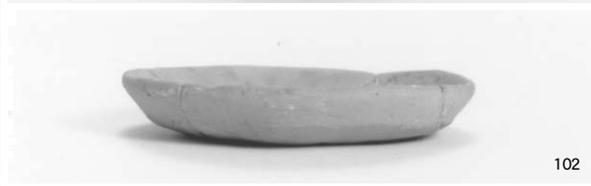
4-10区落込斜面整地層



4-10区褐灰色砂泥層

















瓦43



瓦44



瓦47



瓦45



瓦46



瓦48



瓦49



瓦51



瓦52





瓦68



瓦75



瓦66



瓦77



瓦72



瓦79



瓦73



瓦81



瓦86



瓦87



瓦83



瓦88

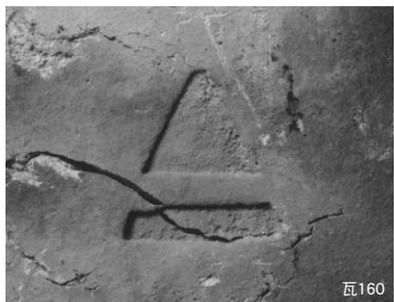


瓦85

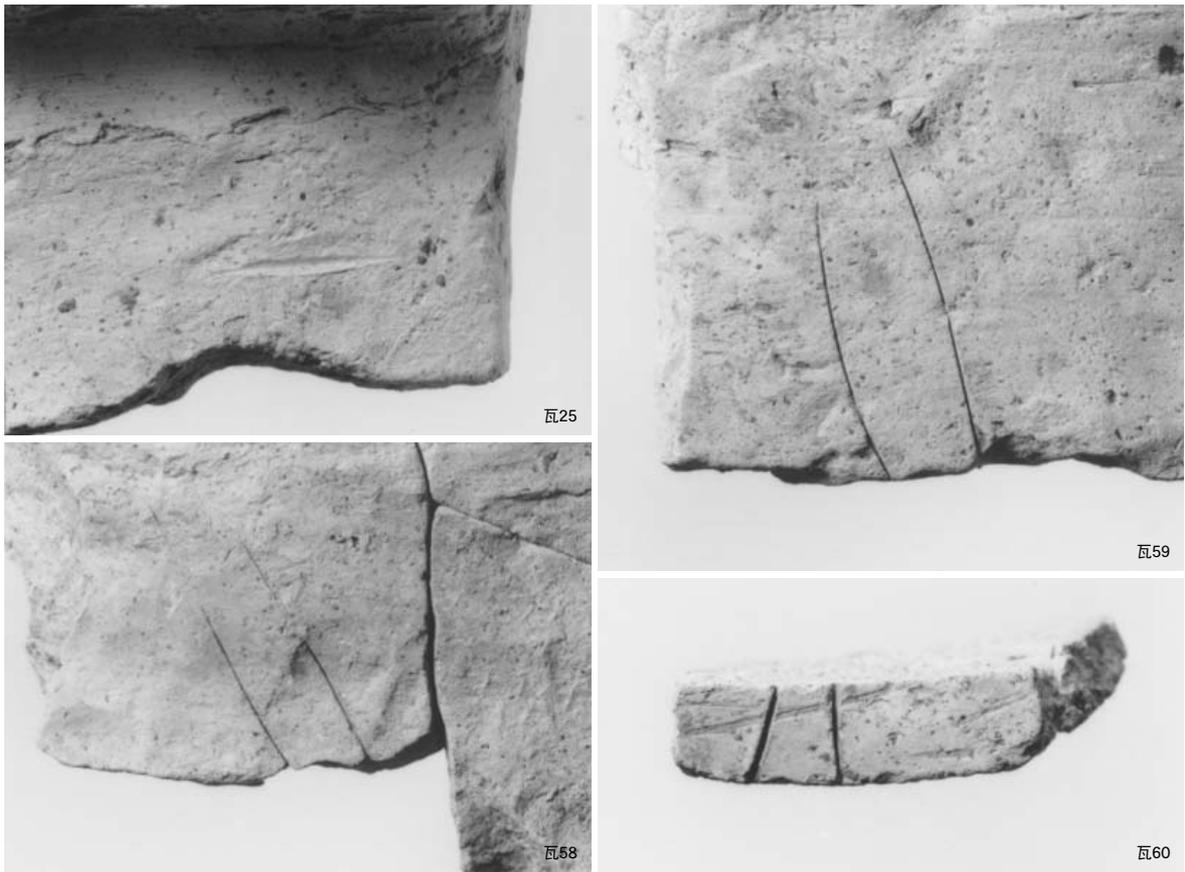


瓦89

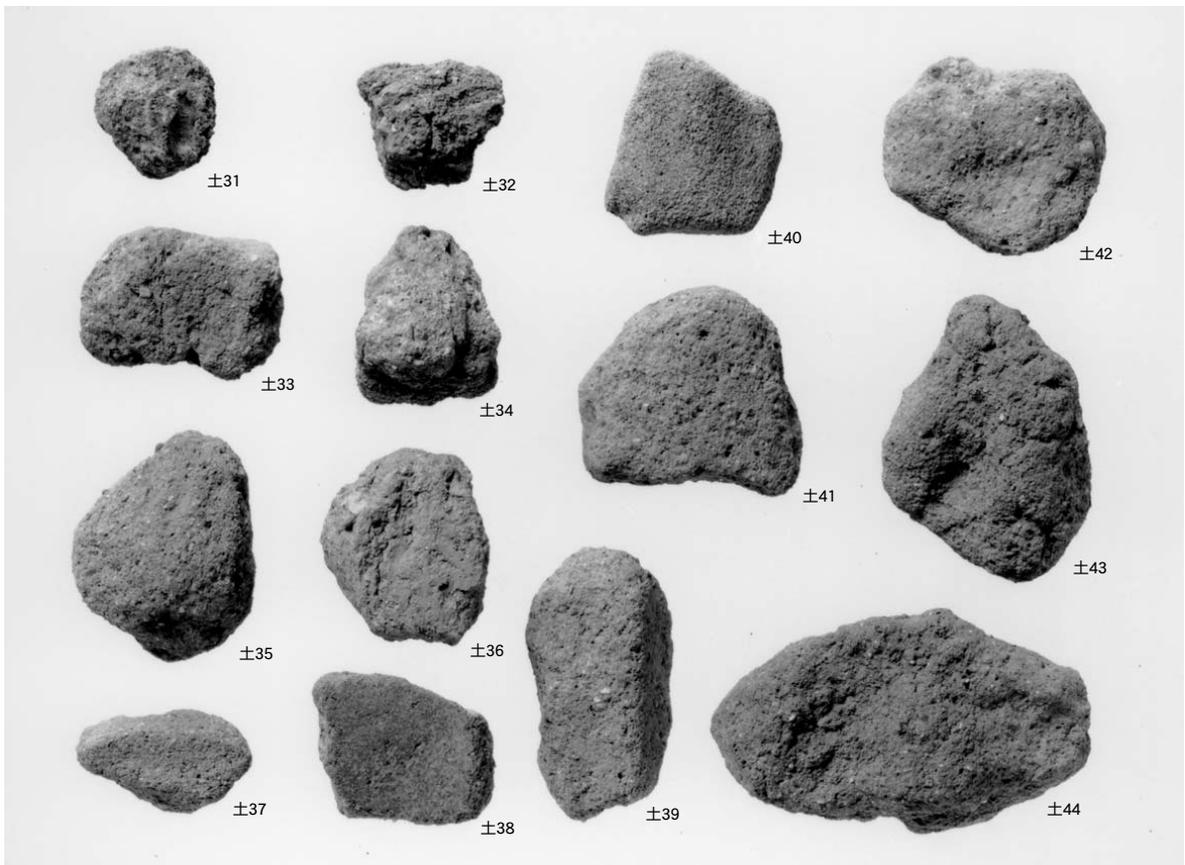




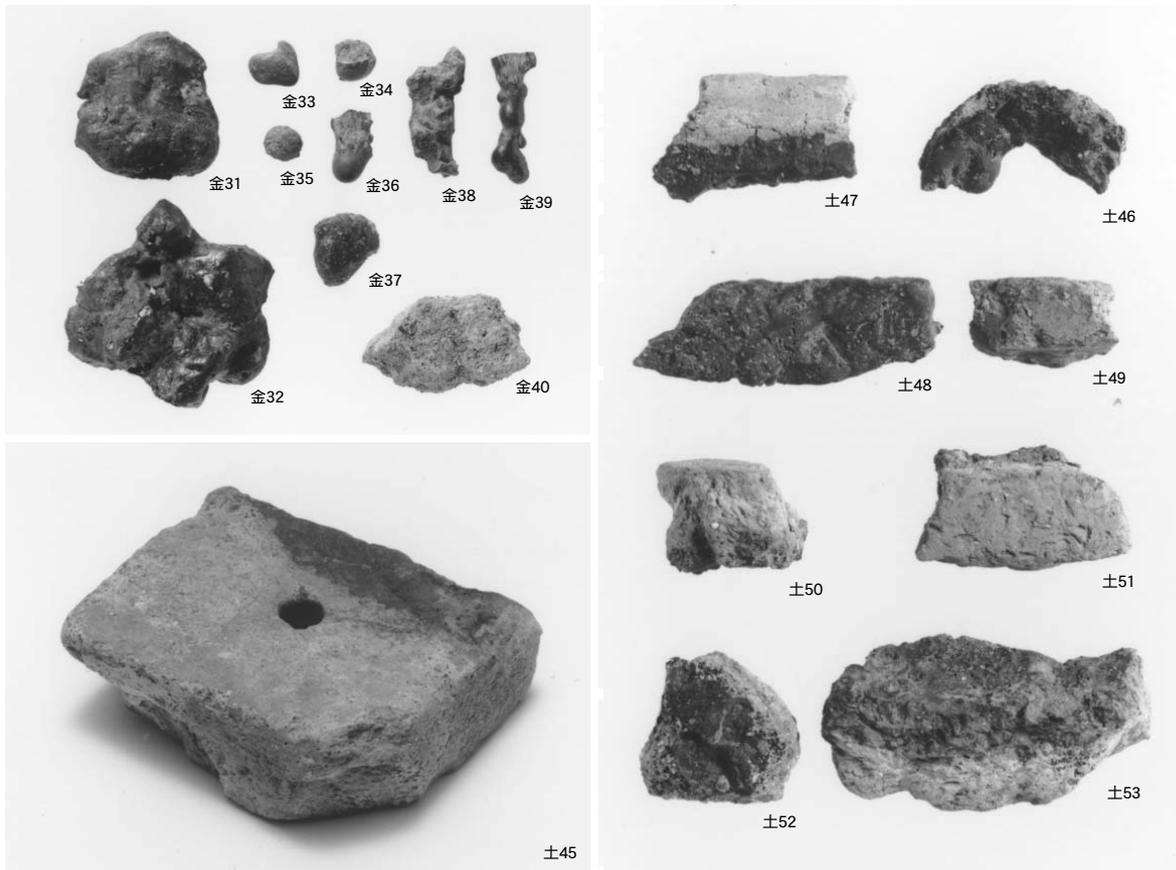
瓦刻印



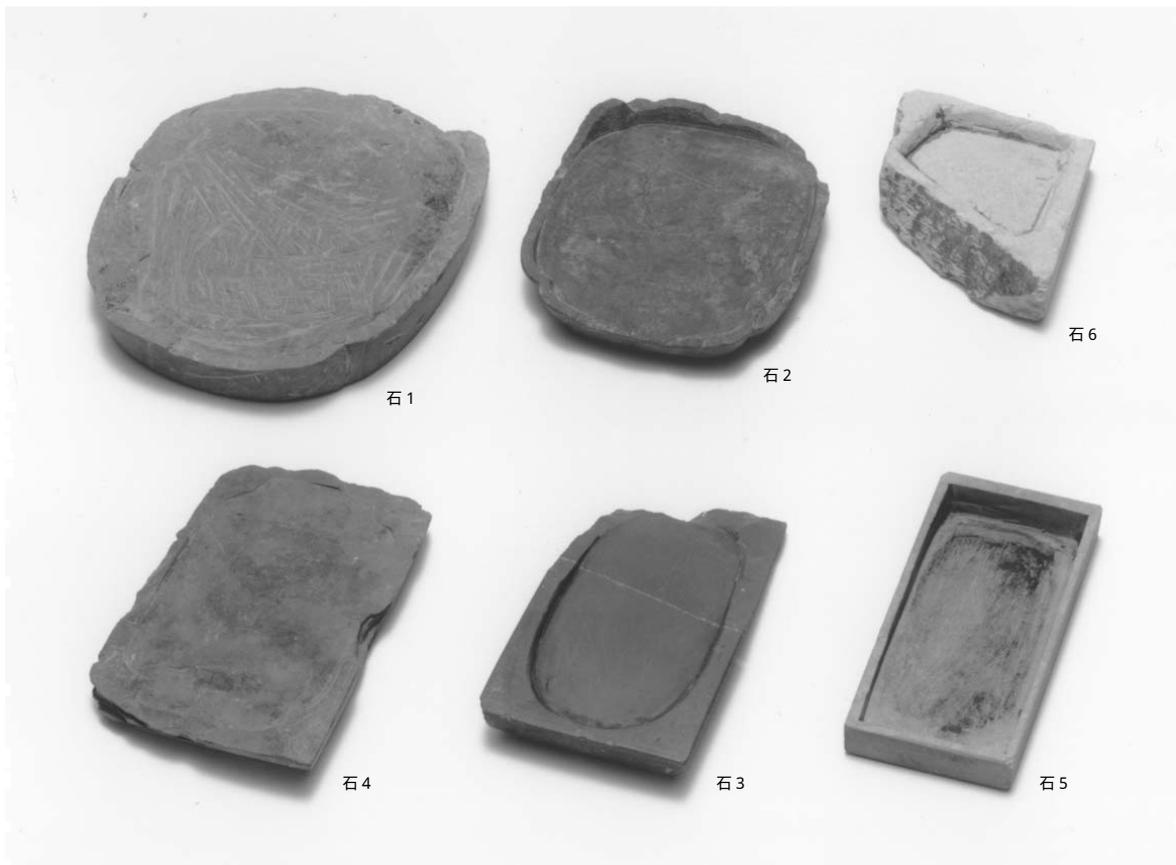
1 瓦ヘラ記号



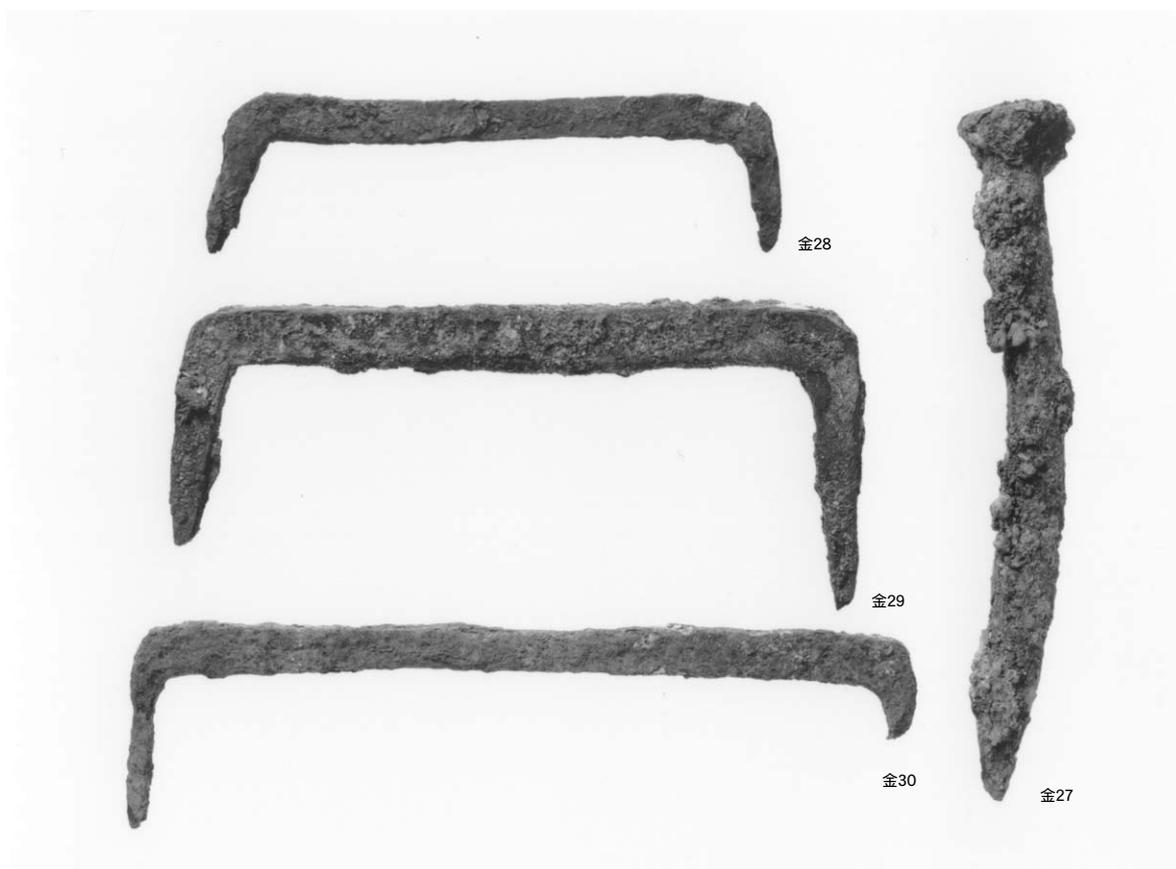
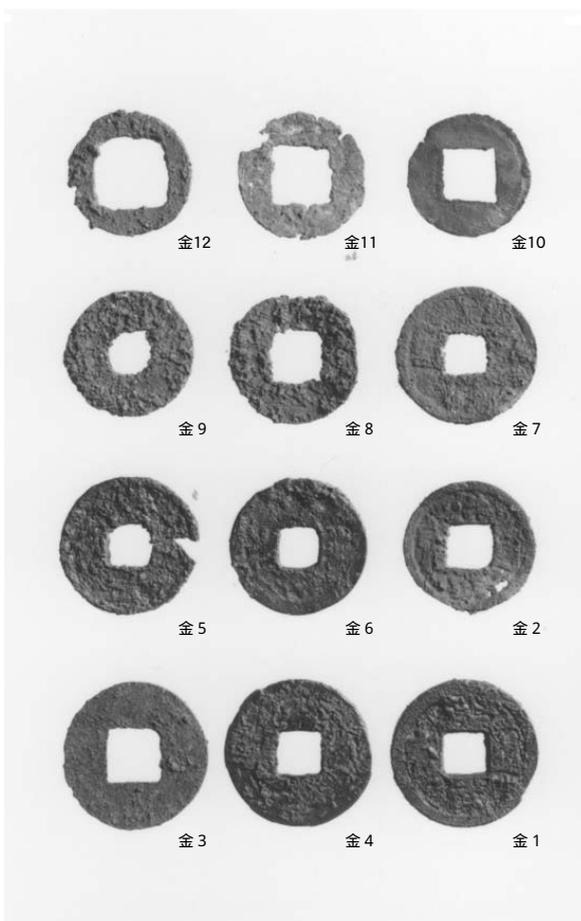
2 土製品(1)



1 土製品(2)・金属滓



2 石製品





木1 - 木12



木20



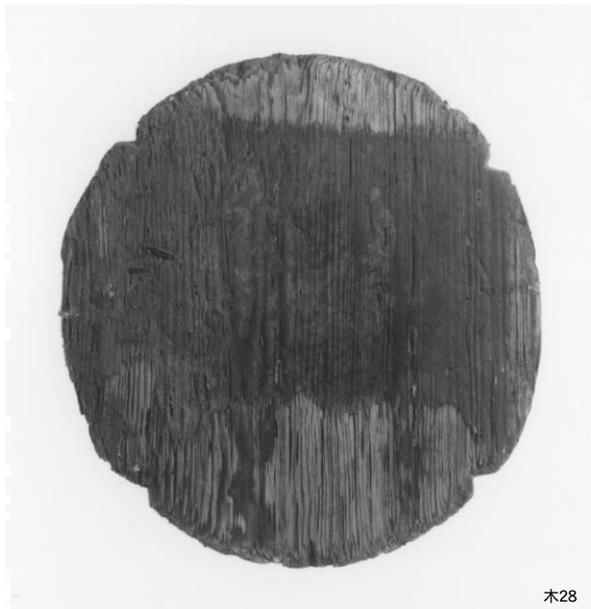
木15



木21



木16



木28



木36～木51



木52～木55



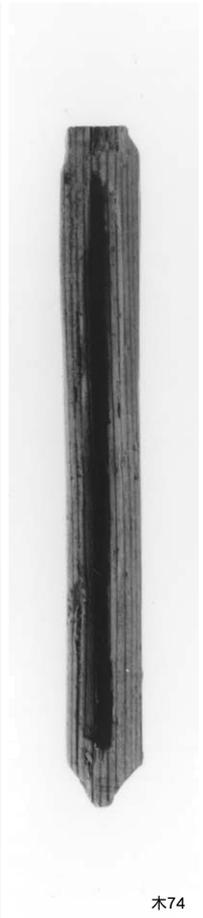
木59



木58



木72



木74





木79



木84



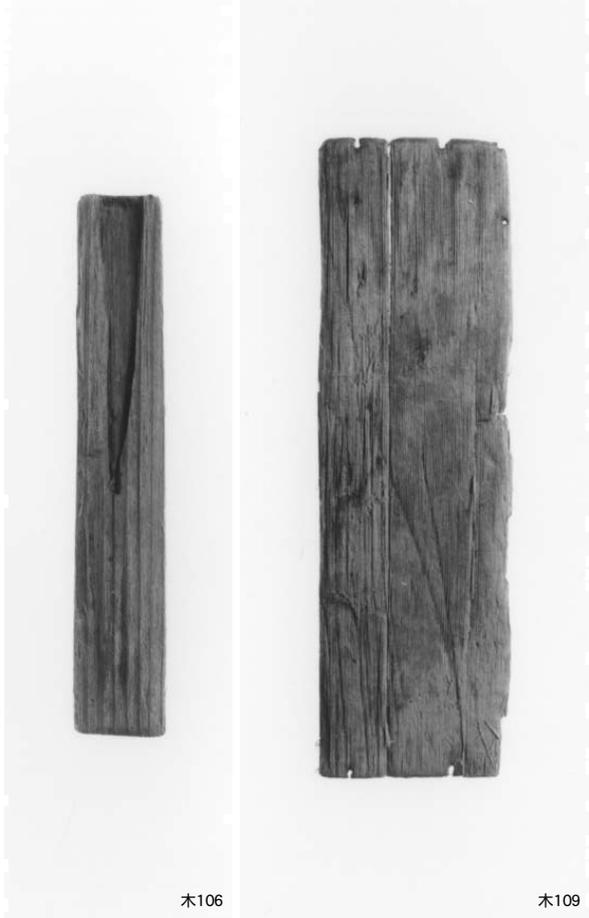
木85



木82



木113



木106

木109



木111



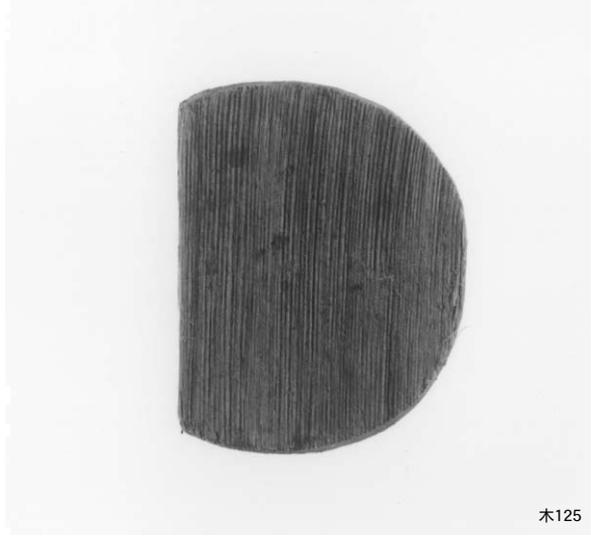
木114



木124



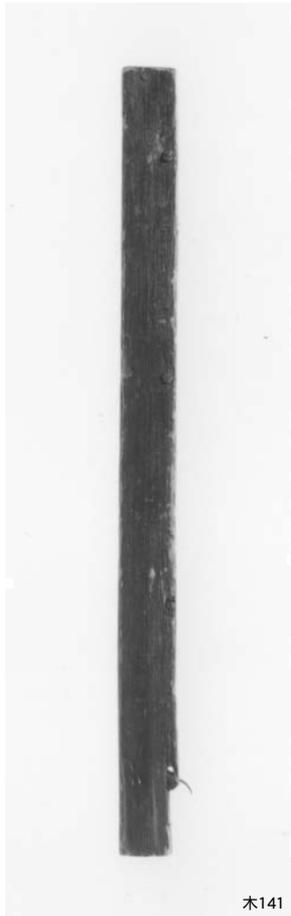
木116



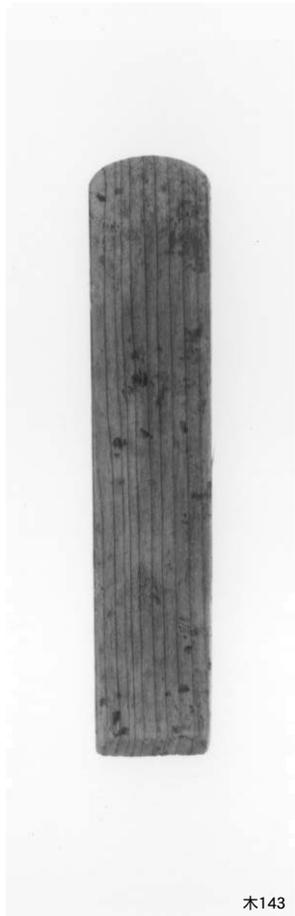
木125



木130～木137・木191



木141



木143

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとこくりつはくぶつかんこうないはくつちようさほうこくしよ ーほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあとー							
書名	京都国立博物館構内発掘調査報告書 ー法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡ー							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所調査報告							
シリーズ番号	第23冊							
編著者名	網 伸也・田中利津子・山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡 ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡 ほうこうじあと 方広寺跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ちややまち 茶屋町527番地	26100	546 540 541	34度 59分 25秒	135度 46分 21秒	1994年2月 ～ 2008年3月		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	弥生時代 ～奈良時代		弥生土器、 土師器・須恵器		方広寺の南門・回廊、石塁を検出した。桃山時代の良好な土器類・瓦類を採集した。		
六波羅政庁跡	都城跡 邸宅跡	平安時代	路面、溝、井戸、 埋納遺構、土坑	土器類、瓦類、木製品				
方広寺跡	寺院跡	鎌倉時代～ 室町時代	路面、建物、溝、 堀状遺構、井戸、 土坑、落込	土器類、瓦類、石製品、 金属製品、木製品				
		桃山時代～ 江戸時代前期	方広寺南門・回廊、 石塁、石垣、路面、 築地、建物、柱穴 列、溝、土坑	土器類、瓦類、土製品、 石製品、金属製品、木 製品				
		江戸時代中期 以降	溝、瓦窯、土坑	土器類、瓦類				

京都国立博物館構内発掘調査報告書
- 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 -
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊

発行日 2009年3月19日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961